

栃木県埋蔵文化財調査報告第 417 集

篠崎遺跡

- 県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査 -

2024.3

栃 木 県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

しの ざき い せき
篠 崎 遺 跡

- 県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査 -

2024.3

栃 木 県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



第 64 号竖穴建物跡出土 銅製銚帶

序

篠崎遺跡は、栃木県南部の下野市薬師寺地内に位置しています。この地域は東に筑波山、西に男体山を仰ぐ豊かな田園地帯であるとともに、日本三戒壇の一つである薬師寺が建立されるなど、古来より開けた地でもあります。

この度、栃木県農政部による薬師寺・柴地区農地整備事業に先立ち、整備地内に所在する遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を実施いたしました。

発掘調査では、縄文時代から中世に至る遺構や遺物が確認できました。縄文時代早期の土器・石器は県内屈指の出土量であり、また、古代の銚帯は県内最多の7個が出土するなど、地域の歴史を解明する貴重な成果が得られました。

本報告書は、令和4年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして、郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました下野市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに地権者の皆様など関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和6(2024)年3月

栃 木 県

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

例 言

- 1 本書は、栃木県下野市薬師寺地内に所在する篠崎遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、令和4（2022）年度および令和5（2023）年度農地整備事業のうち、県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する記録調査である。
- 3 調査は、栃木県より公益財団法人とちぎ未来づくり財団へ業務委託され、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが、栃木県生活文化スポーツ部文化振興課（旧教育委員会事務局文化財課）の指導のもと、実施したものである。

- 4 本遺跡の現地調査及び整理報告書作業期間は以下の通りである。

平成29（2017）年度 確認調査

期 間 平成29（2017）年4月3日～平成30（2018）年3月29日

担当者 整理課副主幹兼課長 津野 仁

令和4（2022）年度 発掘調査

期 間 令和4（2022）年9月1日～令和5（2023）年3月30日

担当者 調査課副主幹 篠原 浩恵

調査課嘱託調査員 関口 正明

令和5（2023）年度 整理・報告

期 間 令和5（2023）年4月3日～令和6（2024）年3月28日

担当者 整理課副主幹 篠原 浩恵

- 5 本書の執筆・報告書作成は篠原浩恵が行った。
- 6 篠崎遺跡の調査にあたり、以下の事業を委託した。

令和4（2022）年度 基準点測量及び基準杭設定・航空写真撮影：株式会社シン技術コンサル

自然科学分析（テフラ分析）：株式会社火山灰考古学研究所

遺物洗浄・石器実測：株式会社シン技術コンサル

令和5（2023）年度 石器実測：株式会社シン技術コンサル

銚帯保存処理：有限会社武蔵野文化財修復研究所

遺物写真撮影：株式会社松井ピ・テ・オ・印刷

（銚帯）小川忠博

石材肉眼鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社

委託した出土遺物の詳細は以下のとおりである。

石器実測・・・第69図～第81図

銚帯写真・・・巻頭カラー・図版三〇

遺物写真・・・図版一九～二九

- 7 発掘調査中における遺構の写真撮影は各担当者が行った。
- 8 発掘調査・報告書作成にあたっては、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの職員その他、次の方々から御指導・御協力をいただいた。

下野市教育委員会 南河内土地改良区 すずき内科・循環器科（下野市） 芹沢清八 中村信博

山口耕一 領塚正浩

9 発掘調査の参加者は、次の通りである。

青柳茂樹 伊藤千景 岩上愛純 宇田川勉 宇都宮剛 大澤利男 大関東太 小平誠治 大塚 明
大橋春夫 片柳耕一郎 川名子正美 坂田文宣 関口翔太 高木文男 高橋麻佐美 直井正行
広澤文雄 柳 秀晴 山内愛子 山口朋子 山中富美夫 吉川聡行 米澤浩一

10 整理・報告書作成作業の参加者は次の通りである。

佐藤 愛 塚田幸枝 野中美帆

11 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書をもって正式報告とする。

12 本遺跡の出土遺物・図面写真等資料等については、栃木県が保有し、栃木県埋蔵文化財センターに保管、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが管理している。

凡 例

1 遺跡

(1) 遺跡の略号は SM-SN (ShiMotukeshi-ShiNozaki) である。

2 遺構

(1) 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所が用いる SA (塀・柵列)・SB (建物)・AC (回廊)・SD (溝)・SE (井戸)・SI (住居)・SK (土坑)・SZ (古墳)・SX (性格不明遺構)・P (ピット) に準拠する。また、自然地形等については事実記載の便宜上「S」を付して記述した。

(2) 遺構図の縮尺は原則として 1/80、カマドは 1/40 を用いる。挿図中にスケールで示す。

(3) セクション図中の「L.H.」は線上が標高を示す。

(4) 方位は国家座標に拠っている。

(5) 土層堆積図の番号は原則堆積の順序を示すが、異なる場合もある。

(6) 遺構図中の点線は推定ラインを示す。

3 遺物

(1) 実測図の縮尺は原則として 1/4、陶磁器については 1/3 を用いる。挿図中にスケールで示す。

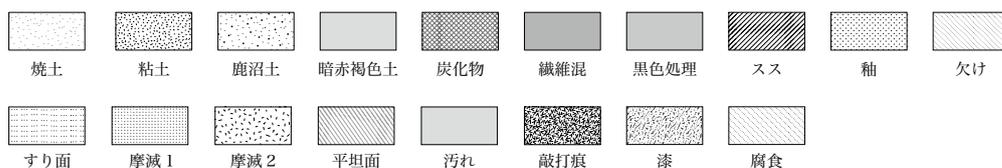
(2) 挿図中の遺物番号は、遺構毎の出土番号及び遺物観察表並びに写真図版の番号に対応する。

(3) 縄文土器の断面図に網掛けしたものは、胎土中に繊維を含む。

(4) 須恵器の断面図は黒塗りで示す。

(5) 施釉の範囲はトーンおよび下端を実線で示す。

(6) 土器実測図のスクリーントーンは以下を示す。



- (7) 縄文土器実測図・拓影図で内外面を示したものは、左側に外面、右側に内面を基本に表示した。
- (8) 須恵器実測図・拓影図で内外面を示したものは、左側に外面、右側に内面を基本に表示した。
- (9) 石器・礫の左右面は任意であり、観察表中の表面は左面、裏面は右面を指すが、使用状況を示すものではない。
- (10) 土師器以外の酸化焰焼成の土器は土師質土器とした。
- (11) 図版・観察表および本文中の番号は一致する。
- (12) 事実記載及び観察表中の（ ）付き数値は残存値、[]付き数値は推定値を示したものである。
- (13) 胎土の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 1996年版）を参照した。
- (14) 陶磁器の色調は『マンセルシステムによる色彩の定規 拡充版』（一般財団法人日本色彩研究所監修 日本色研事業株式会社発行 2008）を参照した。

目次

序	
例言	i
凡例	ii
第1章 調査にいたる経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 調査の方法	4
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 確認された遺構と遺物	16
第1節 調査の概要	16
(1) 基本土層	16
(2) 調査の概要	25
第2節 確認調査	29
第3節 竪穴建物跡	31
(1) 調査の概要	31
(2) 竪穴建物跡	31
第4節 土坑	74
(1) 調査の概要	74
(2) 土坑	74
第5節 ピット	85
(1) 調査の概要	85
(2) ピット	85
第6節 溝状遺構	88
(1) 調査の概要	88
(2) 溝状遺構	88
第4章 遺構外の出土遺物	94
第1節 調査の概要	94
第2節 縄文時代の出土遺物	94
(1) 調査の概要	94
(2) 縄文土器	94
(3) 石器	105

第3節 弥生時代の出土遺物	133
(1) 調査の概要	133
第4節 古墳時代～古代の出土遺物	133
(1) 調査の概要	133
第5節 中・近世以降の出土遺物	143
(1) 調査の概要	143
(2) 中・近世以降の出土遺物	143
第6節 土玉・小礫・粘土塊等	145
(1) 調査の概要	145
第5章 総括	146
第1節 調査の概要	146
第2節 縄文時代	147
第3節 古墳時代～古代	148
(1) 竪穴建物跡	148
(2) 出土遺物	150
(3) 集落の変遷	152
第4節 中世以降	155
(1) 土坑・溝状遺構	155
(2) 出土遺物	155
附章 自然科学分析	157
第1部 篠崎遺跡発掘調査に係る自然科学分析	157
第2部 篠崎遺跡発掘調査に係る出土石器等岩石肉眼鑑定	170

挿図目次

<p>第 1 図 篠崎遺跡位置図 1</p> <p>第 2 図 篠崎遺跡調査区図 5</p> <p>第 3 図 栃木県地形区分図 8</p> <p>第 4 図 篠崎遺跡 周辺地形区分図 9</p> <p>第 5 図 篠崎遺跡周辺の主な遺跡分布図 10</p> <p>第 6 図 周辺の主な遺跡分布図 13</p> <p>第 7 図 調査区全体図・グリッド配置図 18</p> <p>第 8 図 A 区トレンチ等位置図 19</p> <p>第 9 図 A 区トレンチセクション図 (1) 20</p> <p>第 10 図 A 区トレンチセクション図 (2) 21</p> <p>第 11 図 A 区調査区壁セクション図 22</p> <p>第 12 図 B 区トレンチセクション図 23</p> <p>第 13 図 C 区トレンチセクション図 24</p> <p>第 14 図 D 区トレンチセクション図 25</p> <p>第 15 図 A 区地形復元模式図 26</p> <p>第 16 図 A 区遺構配置図 27</p> <p>第 17 図 トレンチ 7 出土遺物実測図 29</p> <p>第 18 図 確認調査トレンチ配置図 30</p> <p>第 19 図 第 4 号竪穴建物跡出土遺物実測図 31</p> <p>第 20 図 第 4 号竪穴建物跡実測図 32</p> <p>第 21 図 第 8 号竪穴建物跡実測図 (1) 33</p> <p>第 22 図 第 8 号竪穴建物跡実測図 (2) 34</p> <p>第 23 図 第 8 号竪穴建物跡実測図 (3) 35</p> <p>第 24 図 第 8 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 36</p> <p>第 25 図 第 8 号竪穴建物跡出土遺物実測図 37</p> <p>第 26 図 第 9 号竪穴建物跡・第 11 号ピット実測 図 42</p> <p>第 27 図 第 12 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 43</p> <p>第 28 図 第 12・93 号竪穴建物跡・第 21 号土坑 実測図 44</p> <p>第 29 図 第 12 号竪穴建物跡出土遺物実測図 45</p> <p>第 30 図 第 15 号竪穴建物跡実測図 46</p> <p>第 31 図 第 15 号竪穴建物跡出土遺物実測図 47</p> <p>第 32 図 第 19 号竪穴建物跡実測図 (1) 48</p> <p>第 33 図 第 19 号竪穴建物跡実測図 (2) 49</p> <p>第 34 図 第 19 号竪穴建物跡出土遺物実測図 49</p> <p>第 35 図 第 58 号竪穴建物跡実測図 (1) 51</p> <p>第 36 図 第 58 号竪穴建物跡実測図 (2) 52</p> <p>第 37 図 第 58 号竪穴建物跡実測図 (3) 53</p> <p>第 38 図 第 58 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 54</p>	<p>第 39 図 第 58 号竪穴建物跡出土遺物実測図 55</p> <p>第 40 図 第 62 号竪穴建物跡出土遺物実測図 58</p> <p>第 41 図 第 62 号竪穴建物跡実測図 59</p> <p>第 42 図 第 64 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 (1) 61</p> <p>第 43 図 第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況図 61</p> <p>第 44 図 第 64 号竪穴建物跡実測図 62</p> <p>第 45 図 第 64 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 (2) 63</p> <p>第 46 図 第 64 号竪穴建物跡出土遺物実測図 64</p> <p>第 47 図 第 79 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 69</p> <p>第 48 図 第 79 号竪穴建物跡実測図 70</p> <p>第 49 図 第 79・80 号竪穴建物跡出土遺物実測図 71</p> <p>第 50 図 第 5・6・14・18・81 号土坑実測図 75</p> <p>第 51 図 第 14 号土坑出土遺物実測図 76</p> <p>第 52 図 第 16・17・23・45・46・50・51・ 52・56・57 号土坑実測図 77</p> <p>第 53 図 第 47・48・49・53・54・82・83・84 号土坑実測図 79</p> <p>第 54 図 第 66・73・74・86・87・88・89・ 90・100・101 号土坑実測図 81</p> <p>第 55 図 第 72・92・94・95・96・97 号土坑実 測図 82</p> <p>第 56 図 第 7・24・25・28・29・31・33・55・ 65・68・69・70・71・98・99 号ピット実測図 86</p> <p>第 57 図 第 59 号溝状遺構実測図 (1) 89</p> <p>第 58 図 第 59 号溝状遺構実測図 (2) 90</p> <p>第 59 図 第 59 号溝状遺構出土遺物実測図 90</p> <p>第 60 図 第 67 号溝状遺構実測図 92</p> <p>第 61 図 第 85 号溝状遺構実測図 92</p> <p>第 62 図 第 91 号溝状遺構実測図 93</p> <p>第 63 図 グリッド遺物出土状況図 95</p> <p>第 64 図 グリッド遺物出土層位図 (1) 96</p> <p>第 65 図 グリッド遺物出土層位図 (2) 97</p> <p>第 66 図 グリッド遺物出土層位図 (3) 98</p> <p>第 67 図 縄文土器実測図 (1) 103</p> <p>第 68 図 縄文土器実測図 (2) 104</p> <p>第 69 図 石器実測図 (1) 107</p> <p>第 70 図 石器実測図 (2) 108</p>
--	--

第 71 図	石器実測図 (3)	109	第 78 図	石器実測図 (10)	116
第 72 図	石器実測図 (4)	110	第 79 図	石器実測図 (11)	117
第 73 図	石器実測図 (5)	111	第 80 図	石器実測図 (12)	118
第 74 図	石器実測図 (6)	112	第 81 図	石器実測図 (13)	119
第 75 図	石器実測図 (7)	113	第 82 図	遺構外の出土遺物実測図 (1)	134
第 76 図	石器実測図 (8)	114	第 83 図	遺構外の出土遺物実測図 (2)	142
第 77 図	石器実測図 (9)	115	第 84 図	A 区全体図	149

表目次

第 1 表	遺構一覧表	28	第 13 表	第 80 号竪穴建物跡出土遺物観察表	73
第 2 表	確認調査の遺構・遺物	29	第 14 表	第 14 号土坑出土遺物観察表	76
第 3 表	トレンチ 7 出土遺物観察表	29	第 15 表	第 59 号溝状遺構出土遺物観察表	90
第 4 表	第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表	31	第 16 表	縄文土器 形式別出土個数一覧	106
第 5 表	第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表	37	第 17 表	石器観察表 (1)	120
第 6 表	第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表	45	第 18 表	石器観察表 (2)	132
第 7 表	第 15 号竪穴建物跡出土遺物観察表	47	第 19 表	遺構外出土遺物観察表 (1)	134
第 8 表	第 19 号竪穴建物跡出土遺物観察表	49	第 20 表	遺構外出土遺物観察表 (2)	142
第 9 表	第 58 号竪穴建物跡出土遺物観察表	55	第 21 表	本調査区及び周辺諸遺跡 竪穴建物跡一 覧	153
第 10 表	第 62 号竪穴建物跡出土遺物観察表	58	第 22 表	気候変動表 (1)	154
第 11 表	第 64 号竪穴建物跡出土遺物観察表	65	第 23 表	気候変動表 (2)	154
第 12 表	第 79 号竪穴建物跡出土遺物観察表	72			

図版目次

図版一	遺構 調査区全景	図版三	遺構 A 区 M-9 付近 (北西から)
図版二	遺構 調査区全景 (南西から) 調査区全景 (東から) 調査区全景 (西から) 調査区全景 (北東から) A 区北西端部から (北西から) A 区南東端部から (南東から) A 区西壁中央部付近から (西から) A 区 M-9 付近 (南東から)		第 4 号竪穴建物跡全景 (南西から) 第 8 号竪穴建物跡全景 (南東から) 第 8 号竪穴建物跡全景 (北東から) 第 8 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から) 第 8 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南西から) 第 8 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から) 第 8 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
		図版四	遺構 第 8 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から) 第 8 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)

- 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p1 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p2 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p3 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p4 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p5 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p6 (南東から)
- 図版五 遺構
 第 8 号竪穴建物跡カマド (東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド掘り方 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド掘り方 (東から)
 第 9 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 9 号竪穴建物跡全景 (南西から)
- 図版六 遺構
 第 12・93 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 12・93 号竪穴建物跡全景 (南西から)
 第 12 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (西から)
 第 12 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 (南から)
 第 15 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 15 号竪穴建物跡全景 (南西から)
 第 15 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)
 第 15 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北東から)
- 図版七 遺構
 第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘 (北東から)
 第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘 (南東から)
 第 19 号竪穴建物跡全景 (手前) (南西から)
 第 19 号竪穴建物跡全景 (南から)
 第 64 号竪穴建物跡全景 (南西から)
 第 64 号竪穴建物跡全景 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北東から)

- 図版八 遺構
 第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
 第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
 第 64 号竪穴建物跡 銚帯出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 銚帯出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 銚帯 (23・24) 出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 銚帯 (25・26) 出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 銚帯 (27・28・29) 出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡掘り方 (南東から)
- 図版九 遺構
 第 64 号竪穴建物跡掘り方 (北東から)
 第 64 号竪穴建物跡カマド (北から)
 第 64 号竪穴建物跡カマド掘り方 (北から)
 第 79 号竪穴建物跡付近遺物出土状況 (南東から)
 第 79 号竪穴建物跡カマド確認状況 (北西から)
 第 79 号竪穴建物跡カマド (北西から)
 第 79 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南西から)
 第 79 号竪穴建物跡カマド (南西から)
- 図版一〇 遺構
 第 58 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡全景 (北東から)
 第 58 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡掘り方 (南から)
 第 58 号竪穴建物跡掘り方 (西から)
 第 58 号竪穴建物跡作業風景 (北西から)
 第 58 号竪穴建物跡作業風景 (南東から)
- 図版一一 遺構
 第 58 号竪穴建物跡カマド (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡カマド (北東から)

- 第 58 号竪穴建物跡カマド材散布状況（南から）
- 第 58 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（南東から）
- 第 58 号竪穴建物跡カマド遺物(第 39 図 8) 出土状況（南東から）
- 第 58 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況(北東から)
- 第 58 号竪穴建物跡カマド掘り方（南東から）
- 第 58 号竪穴建物跡カマド掘り方（東から）
- 図版一二 遺構
- 第 62 号竪穴建物跡全景（北西から）
- 第 62 号竪穴建物跡カマド（北西から）
- 第 5 号土坑全景（南東から）
- 第 6 号土坑全景（南から）
- 第 14 号土坑全景（南西から）
- 第 21 号土坑全景（東から）
- 第 21 号土坑土層堆積状況（東から）
- 第 21 号土坑土層堆積状況（西から）
- 図版一三 遺構
- 第 45 号土坑全景（西から）
- 第 46 号土坑全景（東から）
- 第 47 号土坑全景（南東から）
- 第 48 号土坑土層堆積状況（南東から）
- 第 50 号土坑全景（南東から）
- 第 54 号土坑全景（東から）
- 第 81 号土坑全景（南東から）
- 第 82・83 号土坑全景（南西から）
- 図版一四 遺構
- 第 84 号土坑全景（南東から）
- 第 86 号（奥）・87 号（手前）土坑全景（南東から）
- 第 92 号土坑全景（北西から）
- 第 92 号土坑作業風景（北西から）
- 第 94 号土坑土層堆積状況（南東から）
- 第 95 号土坑土層堆積状況（南西から）
- 第 96 号土坑全景（南東から）
- 第 97 号土坑全景（東から）
- 図版一五 遺構
- 第 7 号ピット全景（東から）
- 第 11 号ピット全景（南西から）
- 第 59 号溝状遺構（南西から）
- 第 59 号溝状遺構（北から）
- 第 59 号溝状遺構（南東から）
- 第 85 号溝状遺構（北東から）
- 第 14 号土坑作業風景（北から）
- A 区調査作業風景（南東から）
- 図版一六 遺構
- A 西区全景（南から）
- B 区全景（北東から）
- B 区全景（南から）
- C 区全景（東から）
- D 区全景（南東から）
- D 区全景（西から）
- D 東区全景（南から）
- D 南区全景（東から）
- 図版一七 遺構
- A 区トレンチ 1（南東から）
- A 区トレンチ 2・第 54 号土坑土層堆積状況（南西から）
- A 区トレンチ 3（南から）
- A 区トレンチ 4 北面（南西から）
- A 区トレンチ 5 西面（南東から）
- A 区トレンチ 6 南面（北東から）
- A 区トレンチ 7（南東から）
- A 区トレンチ 11（南西から）
- 図版一八 遺構
- B 区トレンチ 13（南西から）
- C 区トレンチ 15-C・D（南東から）
- D 区トレンチ 19（西から）
- D 区トレンチ 22（東から）
- D 区トレンチ 23（北から）
- A 区グリッド（南から）
- A 区グリッド調査作業風景（北西から）
- A 区作業風景（南西から）
- 図版一九 遺物
- SI-8 3・4・8・9・13・14・18・19
- SI-12 1
- SI-15 1
- SI-58 1・6・7・10・11
- SI-64 1～3

図版二〇 遺物

SI-64 4・8・10・14・17・19・21

SI-79 4・5・7・8・10

図版二一 遺物

SI-79 12・13・15

SK-14 1

SK-88

P-11

SD-59 2～11

図版二二 遺物

第1群～第7群

図版二三 遺物

第7群～第12群

図版二四 遺物

第12群～第14群

図版二五 遺物

第15群～第17群

図版二六 遺物

第17群・第18群

第20群・第21群

図版二七 遺物

第17群

第21群～第28群

図版二八 遺物

241～261・263

図版二九 遺物

262・264～269

M-11 1

N-8 1・2

N-9 3

N-10 3

O-9

遺構外 4～7

図版三〇 遺物

銚子 23～29

図版三一 自然科学分析 野外調査(一)

図版三二 自然科学分析 野外調査(二)

図版三三 自然科学分析 テフラ分析

図版三四 自然科学分析 岩石・鉱物

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯

篠崎遺跡の発掘調査は、栃木県農政部の行う「県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区」に伴い実施した。農地整備にあたっては、調査区を南北に分断する市道が予定されており、これに伴う現農道の付け替え、農地区画の再整備が予定されている。

農地整備事業にあたっては、平成28（2016）年12月12日に下都賀農業振興事務所の立会のもと、栃木県教育委員会文化財課（以下、「県文化財課」現栃木県生活文化スポーツ部文化振興課）が遺跡の所在調査を行い、確認調査の実施および確認調査に基づく遺跡取り扱いについての協議の必要性を報告している。これにより、平成29（2017）年に県文化財課から委託を受けた（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が確認調査を行い、平成30（2018）年4月19日付け文財第57号「農地整備事業「下稲葉地区」「小泉地区」「薬師寺・柴地区」「笹原田地区」地内遺跡の確認調査結果及び取り扱いについて」にて、文化財課長から農地整備課長宛て、確認調査の結果の報告がなされている。これを受けて、令和4（2022）年6月1日付け農整第328号「埋蔵文化財の発掘調査費用について（依頼）」において、農政部長から教育委員会教育長宛て、発掘調査の依頼及び調査費用の積算がなされ、同日付け文財第218号「埋蔵文化財調査について（回答）」にて、教育委員会教育長から農政部長宛て、発掘調査の実施の回答がなされた。同日付け農整第422号「埋蔵文化財の発掘調査費用について（依頼）」にて、農政部長か



第1図 篠崎遺跡位置図

第1章 調査にいたる経緯と経過

ら教育委員会教育長宛て、調査費用に係る積算書の提出が依頼され、同日付け文財第406号「埋蔵文化財の発掘調査費用について（回答）」にて、教育委員会教育長から農政部長宛て、積算書の提出がなされた。また、同日付け農整第328号の依頼を受けて、文財第442号「農地整備事業薬師寺・柴地区の発掘調査費用の配当替えについて（依頼）」にて、配当替えの依頼がなされた。同日付け農整第642号「埋蔵文化財調査費用負担に係る協定書の締結について（依頼）」にて、農政部長から教育委員会教育長宛て、協議の依頼があり、同日付け文財第447号「埋蔵文化財調査費用負担に係る協定書の締結について（回答）」にて、教育委員会教育長から農政部長宛て、異存のない旨の回答がなされた。

現地調査については、令和4年9月1日付け文財号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（依頼）」にて、文化財課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、調査費用の見積書提出依頼がなされ、同日付けとち埋文号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化財課長宛て、見積書の提出がなされた。同日付け文財号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について」にて、文化財課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、委託契約締結の依頼がなされ、同日付けとち埋文号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化財課長宛て、契約受諾の回答がなされた。これを受けて、同日付け「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」にて、栃木県知事と（公財）とちぎ未来づくり財団理事長との間で委託契約が取り交わされ、委託業務の契約が締結された。

令和5（2023）年度については、令和5（2023）年4月3日付け農整第94号「埋蔵文化財調査について（依頼）」にて、農政部長から生活文化スポーツ部長宛て、埋蔵文化財の調査依頼がなされ、同日付け文振第98号「埋蔵文化財調査について（回答）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、実施する旨の回答がなされた。同日付け農整第140号「埋蔵文化財調査費用について（依頼）」にて、農政部長から生活文化スポーツ部長宛て、調査費用積算書の提出依頼がなされ、同日付け文振第114号「埋蔵文化財調査費用について（回答）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、回答がなされた。同日付け農整第211号「埋蔵文化財の発掘調査に係る費用負担について」にて、農政部長から生活文化スポーツ部長宛て、協定書締結の依頼がなされ、同日付け文振第163号「埋蔵文化財調査費用負担に係る協定書の締結について（回答）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、回答がなされ、協定書が締結された。また、同日付け文振第163号「農地整備事業に係る発掘調査費用の配当替えについて（依頼）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、農整第94号に係る調査費用の配当替えについて依頼がなされている。

整理作業・報告書作成作業については、令和5年4月3日付け文振号外「令和5（2023）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（依頼）」にて、文化振興課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、調査費用の見積書提出依頼がなされ、同日付けとち埋文号外「令和5（2023）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化振興課長宛て、見積書の提出がなされた。同日付け文財号外「令和5（2023）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について」にて、文化振興課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、委託契約締結の依頼がなされ、同日付けとち埋文号外「令和5（2023）年度農地

整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化振興課長宛て、契約受諾の回答がなされた。これを受けて、同日付け「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」にて、栃木県知事と（公財）とちぎ未来づくり財団理事長との間で委託契約が取り交わされ、委託業務の契約が締結された。

以上の契約を執行し、令和6（2024）年3月28日に本書が上梓され、篠崎遺跡農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区）は終了した。なお、整理作業・報告書作成作業中の令和5年9月18日～11月19日には栃木県埋蔵文化財センターの「令和5（2023）年度秋の企画展栃木の遺跡 & 発掘調査」展にて縄文時代早期の土器片の展示を行った。また、10月15日には、これに伴う「発掘調査報告会」を栃木県埋蔵文化財センターで行った。特に、第64号竪穴建物跡から出土した古代の鍔帯7点については、発掘調査報告会の新聞記事に写真とともに掲載された。

第2節 調査の経過

篠崎遺跡発掘調査は、令和4（2022）年度に現地調査を行い、令和5（2023）年度に整理作業・報告書作成作業を行った。以下に概略を記す。

令和4（2022）年度 現地調査

調査範囲 7,226 m²

A区 2,123 m²・B区 2,196 m²・C区 725 m²・D区 2,182 m²

調査費用 31,000,000 円（うち消費税及び地方消費税の額 2,818,181 円）

契約期間 令和4（2022）年9月1日～令和5（2023）年3月30日の間の6ヶ月間

調査期間 令和4（2022）年10月1日～令和5（2023）年3月30日

調査の経緯 令和4（2022）年7月12日 栃木県下都賀農業振興事務所、栃木県教育委員会文化財課と
事前協議および現地確認

令和4（2022）年10月1日～11月4日 打ち合わせ、諸準備

令和4（2022）年11月7日～11月15日 重機による表土除去（A・D区）

令和4（2022）年11月16日～令和5（2023）年3月17日

発掘作業員による遺構等掘削作業・遺構精査・諸記録

令和4（2022）年11月28日～11月29日 重機による表土除去（C区）

令和4（2022）年12月13日～12月14日 重機による客土除去（A区）

令和5（2023）年1月13日 自然科学分析野外調査（テフラ分析）

令和5（2023）年1月27日 航空写真撮影（A・C・D区）

令和5（2023）年2月1日～2月3日 重機による埋め戻し（C区）

令和5（2023）年2月4日～2月8日 重機による表土除去（B区）

令和5（2023）年3月10日 航空写真撮影（A・B区）

令和5（2023）年3月15日 重機による埋め戻し（B区）

令和5（2023）年3月16日～3月17日 重機による埋め戻し（D区）

令和5（2023）年3月18日～3月24日 重機による埋め戻し（A区）

令和5（2023）年3月20日 栃木県下都賀農業振興事務所、栃木県教育委員会文化財課、
南河内土地改良区立ち会いのもと、調査区引き渡し

第1章 調査にいたる経緯と経過

令和5（2023）年度 整理作業・報告書作成作業

調査費用	18,000,000 円（うち消費税及び地方消費税の額 1,636,363 円）
契約期間	令和5（2023）年4月3日～令和6（2024）年3月28日の間の9ヶ月間
調査期間	令和5（2023）年4月3日～11月30日・令和6（2024）年3月1日～3月28日
調査の経過	令和5（2023）年4月3日～11月30日・令和6（2024）年3月1日～3月28日 栃木県埋蔵文化財センターにて実施 令和6（2024）年3月28日 栃木県埋蔵文化財調査報告第417集 『篠崎遺跡 - 県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査』刊行

第3節 調査の方法

【現地調査】

発掘調査地は畑作を中心とする農地である。現道および農地区画により調査区が分断される状況であるため、便宜的にA～D区の呼称を用いた（第2図）。

調査開始時の現況は休耕地と耕作地である。休耕地はA・C・D（南側を除く）区、耕作地はB区およびD区南側である。このため、栃木農業振興事務所・県文化財課との協議の結果、休耕地であるA・C・D区から調査に着手することとなった。耕作中のD区南側については収穫後速やかに、B区については収穫予定の1月を目途に調査に着手することとした。現道については、農作業用車両等の通行のため調査の着手を見合わせ、調査状況を鑑み、必要に応じて調査を行うこととした。また、A区東端部から約2.0mの範囲については、調査区東側に設けられた農業用水路工事のため調査を見送ることとした。

現地事務所は調査区内における用地の確保が困難であることから、調査区南側に隣接する個人所有の休耕地を借地し、これらに充当した。掘削土置き場は、調査区と耕作区画を同じくする休耕地をあてることとした。

新型コロナウイルス予防については、政府・栃木県の指標のもと、作業時、休憩時等の作業員間の距離の確保、マスクの使用、毎日の健康観察、消毒等を行った。

遺構・遺物の調査は、以下の手順・手法で行った。

[A・B区]

1 表土除去後、遺構確認作業および国家座標に基づくグリッド杭建植。

グリッド杭は10m四方とし、端数にあたる地区にはメートル単位で杭を建植。

A区北西部については、高压電線の架設があり、東京電力からの注意喚起があったため、重機の容量を小さくし、対応した。

2 遺構・遺物については、以下を基本に行った。

① 遺構の中央に土層観察用ベルト（セクションベルト）を設定、これを残し、覆土の除去。

この間に出土した遺物については、原位置での記録を試みたが、作業の効率等を考慮し、底面に近いレベルから出土するものを優先して原位置で記録した。また、出土層位の判別が可能なものは堆積層を記録した。

② 覆土除去後、土層堆積状況を記録（セクション図作成）・写真撮影。

③ セクションベルト除去後、出土遺物の位置・高さを記録（遺物出土状況図作成）。

写真撮影後、遺物取り上げ。

第1章 調査にいたる経緯と経過

- ④ 遺構全体の平面図作成・レベリング（遺構内の高さを記録）および写真撮影。
- ⑤ 平面図・遺物出土状況図は平板測量を用いて行った。
- ⑥ 諸作図については、1/20の縮尺を基本に行ったが、カマド図については1/10の縮尺を用いた。

[C区]

- 1 先に行ったC・D区の調査結果を鑑み、トレンチによる遺構・遺物の確認を行った。
重機によるトレンチ掘削後、遺構確認作業および国家座標に基づくグリッド杭建植。
グリッド杭は10m四方とし、トレンチ周辺に建植。端数にあたる地区にはメートル単位で杭を建植。
- 2 遺構・遺物については、A区と同様に調査を行った。

[D区]

- 1 確認調査の成果をもとに重機による表土除去を行った。表土除去の過程で、確認調査時の遺構確認面は客土層上面の誤認であると判断し、表土除去後、トレンチを設定し、遺構確認面の把握および基本土層を記録した。

トレンチ掘削後、遺構確認作業および国家座標に基づくグリッド杭建植。

グリッド杭はトレンチ周辺に建植。

D区の取り扱いについては、県文化財課と協議の結果、今回の農地整備事業においては掘削を伴う工事の施行がないことを確認し、現状の記録を行い、調査を終了することとした。これに伴い、耕作中のため、表土を除去しなかった南側についても、同様の扱いとした。

- 2 遺構・遺物については、A区と同様に調査を行った。

埋め戻しは、現状の耕作地に近い状態に復元し、栃木農業振興事務所、県文化財課、南河内土地改良区の立ち会いのもと、調査区の引き渡しを行った。

【整理作業】

整理作業は栃木県埋蔵文化財センターで行った。

現地作成の実測図は、事実確認後、第二原図を作成、センターにおいてデジタルトレースで図版化し、報告書作成時に修正・補正を行った。

出土遺物の一部は洗浄作業を委託した。洗浄作業後、注記作業、接合作業を行った。欠失部分については、必要に応じて、クレイテックスを充填し、復元および補強した。遺物は実測図を作成し図化、浄書（トレース）し、デジタルデータで図版化した。

上記の作業に併行し、遺構・遺物の事実記載等の原稿執筆、遺物観察表等の表作成・執筆を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。

【報告書作成作業】

報告書刊行に必要な実調査以外の原稿執筆・図版作成を行い、遺構・遺物図版、原稿等と併せ割付し、印刷・校正後、刊行となった。

本報告書に係る遺物、遺構・遺物の実測図・写真、空中写真等の成果品、各種台帳の整理を行い、収蔵庫・記録保管室に収納し、篠崎遺跡発掘調査の全ての作業を完了した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

篠崎遺跡は栃木県下野市薬師寺地内に所在する。

栃木県は関東平野の最北にあり、東は茨城県、西は群馬県、南は埼玉県、北は福島県に隣接する内陸県である。下野市は、県庁所在地である宇都宮市から南方向約12kmに位置する。平成18(2006)年に隣接する南河内郡南河内町・国分寺町・石橋町が合併し、人口約6万人(令和5(2023)年11月末日現在)の市となった。本遺跡は旧南河内町に所在する。現在の遺跡周辺は、台地では畑地、低地部では水田・畑地が広がる鷹揚な田園地帯である。しかし、近年の開発により自治医科大学および付属病院と自治医大駅周辺を中心とする宅地造成が遺跡西側の台地まで広がっている。また、遺跡の北東約2.7kmには「道の駅しもつけ」があるなど、近年の開発は著しい。

本遺跡の原況は畑地・休耕地である。

【位置】

栃木県は関東平野の北端に位置する。県土を大別すると、東・西・北を囲う山塊である東部山地・西部山地と、中央に開けた南北に長い中央部平地とからなる。東部山地はいわゆる八溝山地であり、福島県・茨城県との県境に沿って北から八溝山塊・鷲子山塊・鶏足山塊が南北に連なる。西部山地は下野山地と足尾山地とからなり、福島県・群馬県との県境に沿って北から那須岳・高原山・帝釈山・男体山・足尾山と連なる。中央部平地は北から高久丘陵、那須野が原、喜連川丘陵、鬼怒川流域の中南部の台地・低地からなり、南半は関東平野の北限となる。本遺跡は祇園原台地に所在する。祇園原台地は姿川と田川台地に挟まれた南北に長い丘陵であり、本遺跡は台地を細かく開析する小支谷に挟まれた舌状部の突端に位置する。

中央部平地は洪積台地とそれを開析する河川が形成する沖積台地とからなる。河川の南流に伴い、台地は概ね平坦で南北に延び、且つ、南に向かって緩やかに傾斜する。台地の縁辺部は崖線を形成するものの、台地と低地の高低差は少なく、斜面は緩やかである。本遺跡周辺の地形もこれに類するものであるが、各調査区における基本土層(第3章第1節)の観察結果からは台地は単調に南北帯状方向に延びるのではなく、小さな起伏や浅い埋没谷が複雑に入り組む地形であったことが想定された。本遺跡の位置する台地の東・西側の低位部分については、「谷」の呼称を用いる。

本調査区の遺構確認面の標高は、台地頂部(A西区)で55.55mである。これより東側は、谷の落ち際とみられる第58 堅穴建物跡付近55.55m、A区東端部(谷部)55.55mである。台地西端部付近(C区西側)55.55m、台地南端部(B区南部)55.55mである。調査区東側の低地面の標高は約55.55m・比高約11.1m、西側の標高は約55.55m・比高約11.1mである。

【地質】

中央部平地は、主として台地と低地から構成される。台地は河成段丘面(古期のものから宝積寺段丘礫層・宝木段丘礫層・田原段丘礫層)と火山灰層の堆積(いわゆる関東ローム層で古期のものから宝積寺ローム・宝木ローム・田原ローム)とによって形成されるが、これらが継続して行われた結果、台地面の高度、侵食度、表部を覆う火山灰層の層序関係を基準に、宝積寺面(上位面)-宝木面(中位面)-田原面(下位面)-低地に区分される。本遺跡は、段丘礫層の上位に火山灰層(田原・宝木ローム)を堆積する宝木面(中位面)に載る。東・西側の小支谷は礫・砂・泥からなる谷底平野堆積物である。

表層の土壌堆積状況は多湿黒ボク土鹿畑統・石本統である。鹿畑統は表層腐植層であり、非固結火成岩お

第2章 遺跡の環境

よび非固結堆積岩を母材とする水積の水田土壌であり、土性は壤質から砂質とされる。石本統は粘性が強い表層腐植質で水積の水田土壌である。

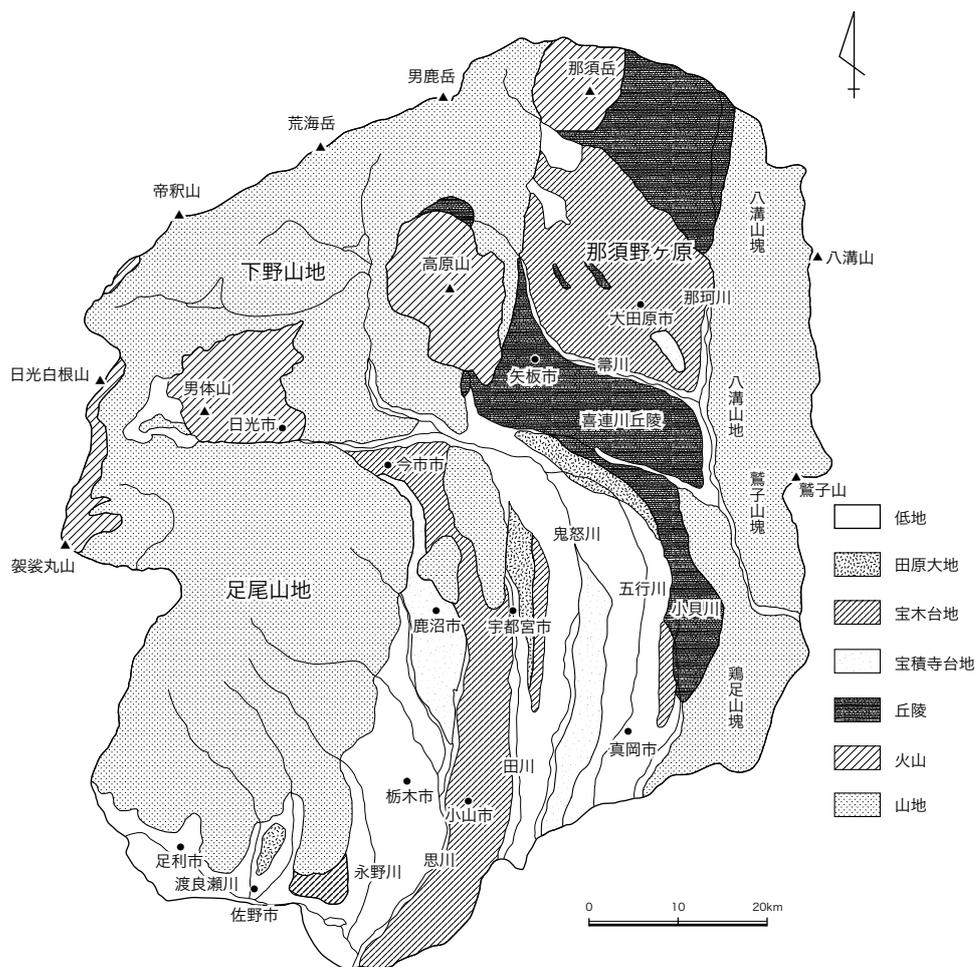
【参考文献】

- 1991年 栃木県企画部資源対策課『土地分類基本調査 壬生』栃木県
- 2010年 下野市教育委員会『下野市内遺跡発掘調査報告書』下野市埋蔵文化財調査報告第8集
- 2018年 下野市教育委員会『落内遺跡第3次調査』下野市埋蔵文化財調査報告第13集

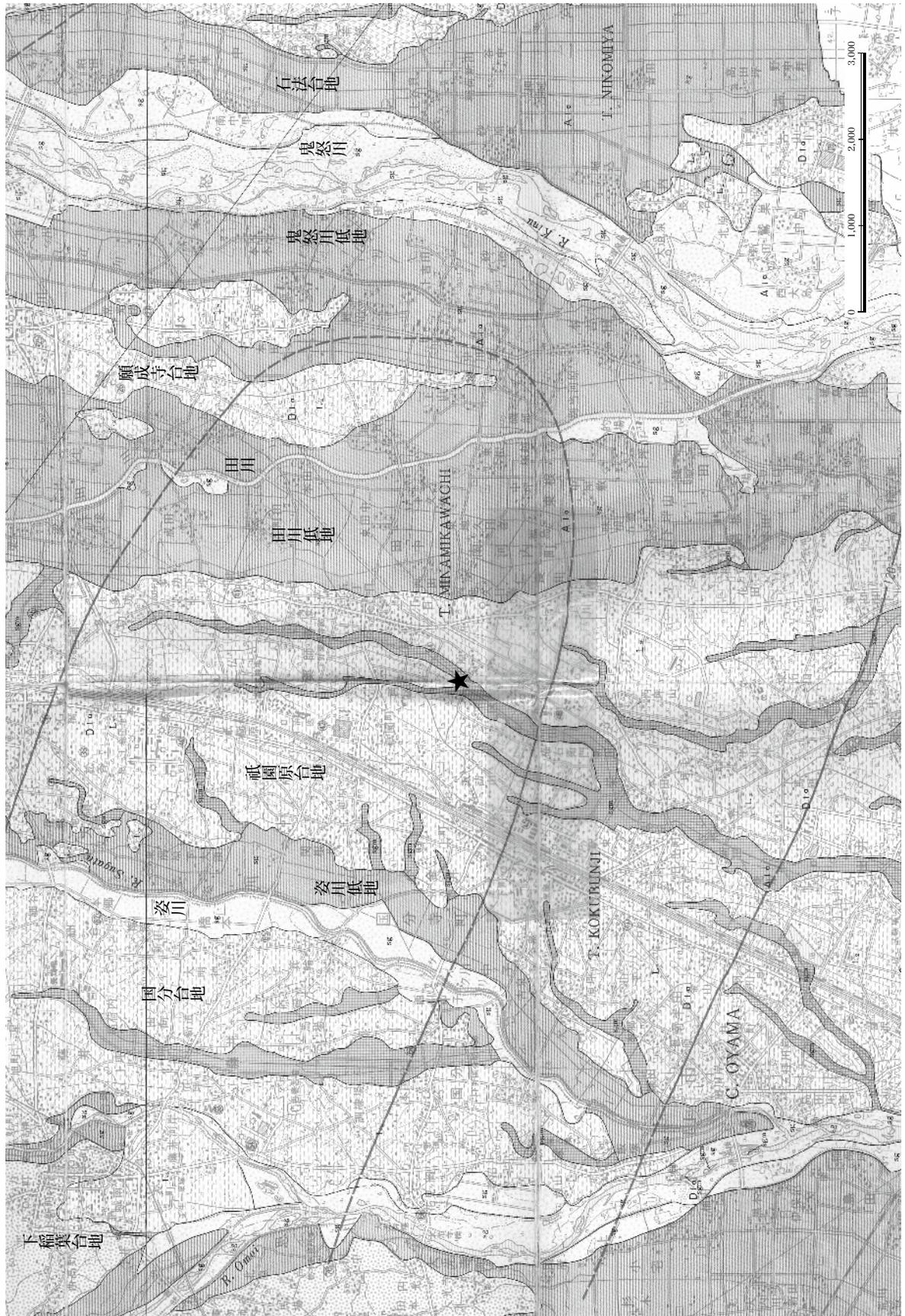
第2節 歴史的環境

篠崎遺跡からは、縄文時代草創期～後期、古墳時代終末期～平安時代、中世以降近代までの遺物の出土が確認されている。また、調査区の至近には下野薬師寺跡が位置する。テフラ分析からは旧石器時代の堆積層の存在の可能性が指摘されており、その時代幅は長期に亘る。

本遺跡周辺の遺跡の様相は、昭和53(1978)年～平成2(1990)年に確認調査・現地調査が実施された自治医科大学周辺地区遺跡群の発掘調査によるところが大きい。また、下野市内の埋蔵文化財包蔵地の分布状況については、『下野市遺跡分布調査報告』(2007年)にて、詳細な調査が行われている。本遺跡周辺の歴史的動向については、下野市教育委員会発行の『下野市内遺跡発掘調査報告書』および『落内遺跡第3次



第3図 栃木県地形区分図



第4図 篠崎遺跡 周辺地形区分図

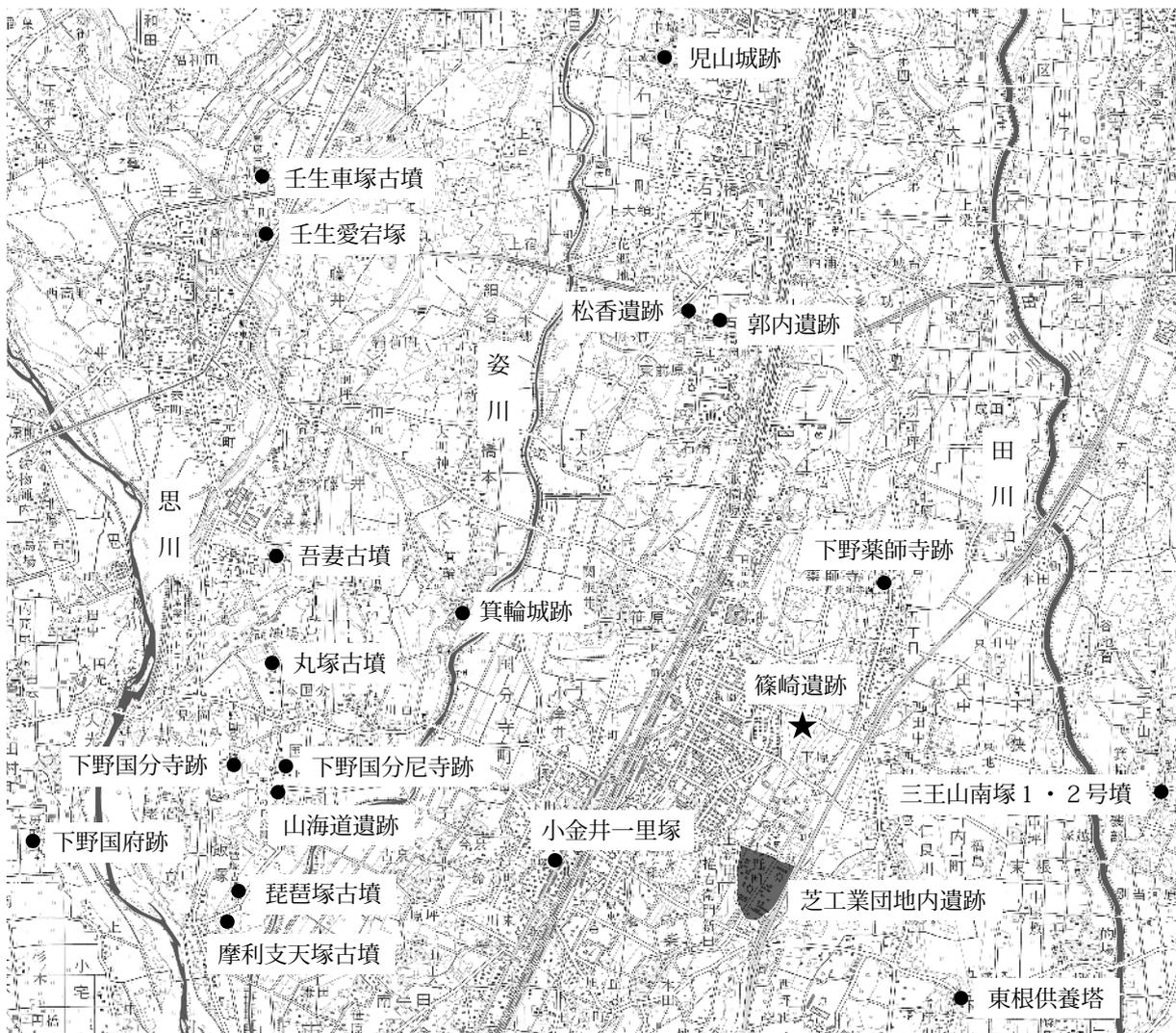
調査』に緻密な分析のもと詳細な記述がなされており、本節はこれらを参考に記述する。

【旧石器時代】

自治医科大学周辺地区遺跡群のうち、三ノ谷東遺跡、谷館野東遺跡、諏訪山遺跡、烏森遺跡において確認されている。特に、三ノ谷東遺跡は、本調査区と小支谷を挟む西側の丘陵に位置する。ハードローム層下位・中位・ソフトローム層上位～漸移層下位の3面の文化層が確認されている。このうち、ハードローム層中位の文化層は角錐状石器、ナイフ形石器、搔器、礫群などが出土した。本遺跡における旧石器時代の遺構・遺物の確認はないが、C区トレンチ（第3章第1節基本土層参照）の遺物包含層の可能性が指摘されている。谷館野東遺跡では、ソフトローム層下部からハードローム層上部に遺物集中地点8ヶ所が確認され、ナイフ形石器や彫器などの遺物が出土する。諏訪山遺跡では調査区内からナイフ形石器が出土する。烏森遺跡ではナイフ形石器や剥片の散布が確認されている。多功南原遺跡では石器集中地点13地点などが確認されている。高原山系黒曜石によるナイフ形石器の製作と信州系黒曜石による尖頭器の製作跡が確認された。砂川期の集団の関与が想定されている。

【縄文時代】

草創期は、薬師寺稲荷台遺跡の調査（平成19年度）において、土坑4基、土坑内から爪形文土器、石鏃・石核・



第5図 篠崎遺跡周辺の主な遺跡分布図

剥片等が出土する。早期・前期は、自治医科大学周辺地区遺跡群のうち、烏森遺跡から早期・前期（浮島式・諸磯式等）・中期（加曾利E式）・晩期（大洞A'式）の土器片が確認されている。後期は三ノ谷東遺跡で竪穴建物跡1軒が確認されている。自治医科大学周辺地区遺跡群では、二ノ谷遺跡・三ノ谷遺跡・三ノ谷東遺跡・諏訪山遺跡・諏訪山北遺跡などで、草創期後半～早期初頭の陥穴状土坑が多数確認されており、総数は80基を超える。茂木町登谷遺跡群で確認された同規模、同形状の土坑に類似する。集落跡等の確認は、自治医科大学周辺地区遺跡群のような広範囲に亘る調査においても少なく、本遺跡において一定量の土器およびこれらと同時期とみられる石器・剥片等が確認されたことは、その出土量とともに特筆される事例といえる。

遺跡西側の姿川周辺では、下野国分寺跡（第5図）において中期末葉から後期前半の埋甕や陥穴状土坑、中期末葉の袋状土坑が確認されている。出土遺物は前期から後期の土器片、打製石斧が出土する。

【弥生時代】

柴工業団地内遺跡（第5図）では中期の再葬墓6基、後期の竪穴建物跡3軒が確認されている。自治医科大学周辺地区遺跡群では、中期末葉～後期前半の竪穴建物跡が烏森遺跡で4軒、谷館野北遺跡で2軒、谷館野東遺跡・上芝遺跡で1軒が確認されている。谷館野東遺跡では多量に剥片、碎片が出土しており、石器製作の一端を示す好資料である。諏訪山遺跡では土器棺とみられる壺埋納土坑が確認される。姿川付近では、山海道2号遺跡（第5図）で後期の小型壺、箕輪城遺跡（第5図）では竪穴建物跡4軒および二軒屋式土器や十王台系土器、南関東系土器、樽式系土器が出土するほか、土師器との共伴が確認されている。分布調査の成果からは、姿川付近の箕輪地区、国分地区で遺物の分布が確認されている。

【古墳時代】

古墳時代になると遺跡数の増加がみられる。

集落跡は、前期では柴工業団地内遺跡（第5図）、自治医科大学周辺地区遺跡群（烏森遺跡・谷館野北遺跡）、薬師寺南遺跡、大坂遺跡がある。中期では自治医科大学周辺地区遺跡群（烏森遺跡・二ノ谷遺跡・谷館野北遺跡）がある。自治医科大学周辺地区遺跡群では後期の集落跡の確認はない。下野市の文化財を統括する下野市教育委員会は「この地域の弥生時代後期から古墳時代前・中期にかけての集落の様相は、台地を幾つかに分割する小支谷を農業生産基盤として活用し、その台地上に非常に小さな単位（5軒前後）の集落を営んでいる。この低地の生産基盤の広がりや集落域が1つのセットとなり、この幾筋かの低地に集落が散在的に分布していることがこれまでの研究によっても指摘されている。」とする（山口2010・2018）。

古墳は、古墳時代の早い段階から、数多くの古墳、かつ、大型の古墳が築造されるが、本遺跡の位置する薬師寺地区の古墳の築造は少ない。早い段階で築造されるのは、本遺跡東方の田川・鬼怒川に挟まれた台地上の三王山南塚1・2号墳（第5図）等の前方後方墳である。3世紀代とみられる2号墳の周溝からは弥生時代後期の二軒屋式土器と古式土師器の共伴が確認されており、県内でも最古級の古墳である。本遺跡西方の思川・姿川に挟まれた地域では5世紀末葉～7世紀前半にかけて大形の前方後円墳が築造される。5世紀末葉～6世紀前半の摩利支天塚古墳（第5図）、琵琶塚古墳（第5図）、6世紀後半の吾妻古墳（第5図）、壬生愛宕塚古墳（第5図）などである。吾妻古墳（第5図）は栃木県最大の前方後円墳であることが確認されている。思川左岸の台地上には後期になると群集墳が形成され、終末期には丸塚古墳（第5図）、壬生車塚古墳（第5図）など切石積の横穴式石室を持つ大形円墳が築造される。本遺跡北方の多功南原遺跡では、終末期に多功大塚山古墳、多功南原1号墳などの方墳が築造される。

本遺跡周辺の古墳は道鏡塚古墳、二月堂古墳、薬師寺南遺跡内の円墳が築造される程度であり、姿川周辺に比べて疎らな状況にある。

【奈良・平安時代】

本遺跡周辺での集落については、集落の時間的な継続と集落規模の安定性が確認できる遺跡と確認できない遺跡に二分される傾向が指摘されている。集落規模の拡大がみられない遺跡としては、本遺跡北方の石橋地区に位置する郭内・松香遺跡（第5図）があげられる。道路幅部分の調査であるため詳細は不明であるが、7世紀中葉の竪穴建物跡3～5軒が1単位となるが、これ以上に集落の規模が大きくなることが指摘されている。また、存続期間の短い集落跡としては、自治医科大学周辺地区遺跡群のうち谷館野北遺跡・三ノ谷遺跡・三ノ谷東遺跡・二ノ谷遺跡・谷館野東遺跡などがあげられる。これらの遺跡は竪穴建物跡2～7軒程度で、遺物の出土量が少ない傾向にあるが本遺跡も同様の傾向がみられる。集落の時間的な継続と安定性が確認できる遺跡としては薬師寺南遺跡があげられる。7世紀後半～9世紀後半にかけてを中心とする集落跡である。30年単位の時期区分による集落の構成単位の検討からは、8世紀後葉～9世紀前半はやや疎らになるものの、各時期20～25軒の規模の集落の継続が確認されている。約200年間、同一規模の集落が継続した要因として下野薬師寺跡との関連が指摘されている。

本遺跡周辺の9世紀中葉～10世紀代の集落跡は、柴工業団地内遺跡（第5図）や上芝遺跡などがあげられる。上芝遺跡は大形の掘立柱建物跡と数棟の竪穴建物跡により構成されている。同時期の集落跡としては、北方の多功南原遺跡などがある。多功南原遺跡は7世紀中葉～9世紀第3四半期の集落跡であり、大形掘立柱建物跡の配置などから、「役所に関わる一族に関連する集落跡」との見解がある。また、「千」字を記した墨書土器が約100点出土するが、9世紀中葉前後の遺跡については、墨書土器や身分を表象するような遺物の出土が特徴的にみられる。「千」字を記した墨書土器は三仏遺跡からも出土が確認されている。下野薬師寺跡に近接する落内遺跡は7世紀前半～10世紀の集落跡である。100軒を超える竪穴建物跡や氷室とされる円形有段遺構が確認され下野薬師寺跡に先行する居宅あるいは官衙的施設を有する集落跡とみられる。これらの集落跡の特徴として、弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡と同様、台地を幾つかに分割する小支谷を農業生産基盤とし、集落が展開することがあげられる。本遺跡や、本遺跡東側の谷を挟んで位置する大坂遺跡は竪穴建物跡の主軸は谷の方向を意識したことを示すものであろう。狭小ではあるが肥沃な低地の開発に成功し、富豪層へと成長していった集落跡の可能性から集落の階層性も指摘されている。これらの集落跡については下野薬師寺跡の推移に連動する傾向があることが指摘されている。

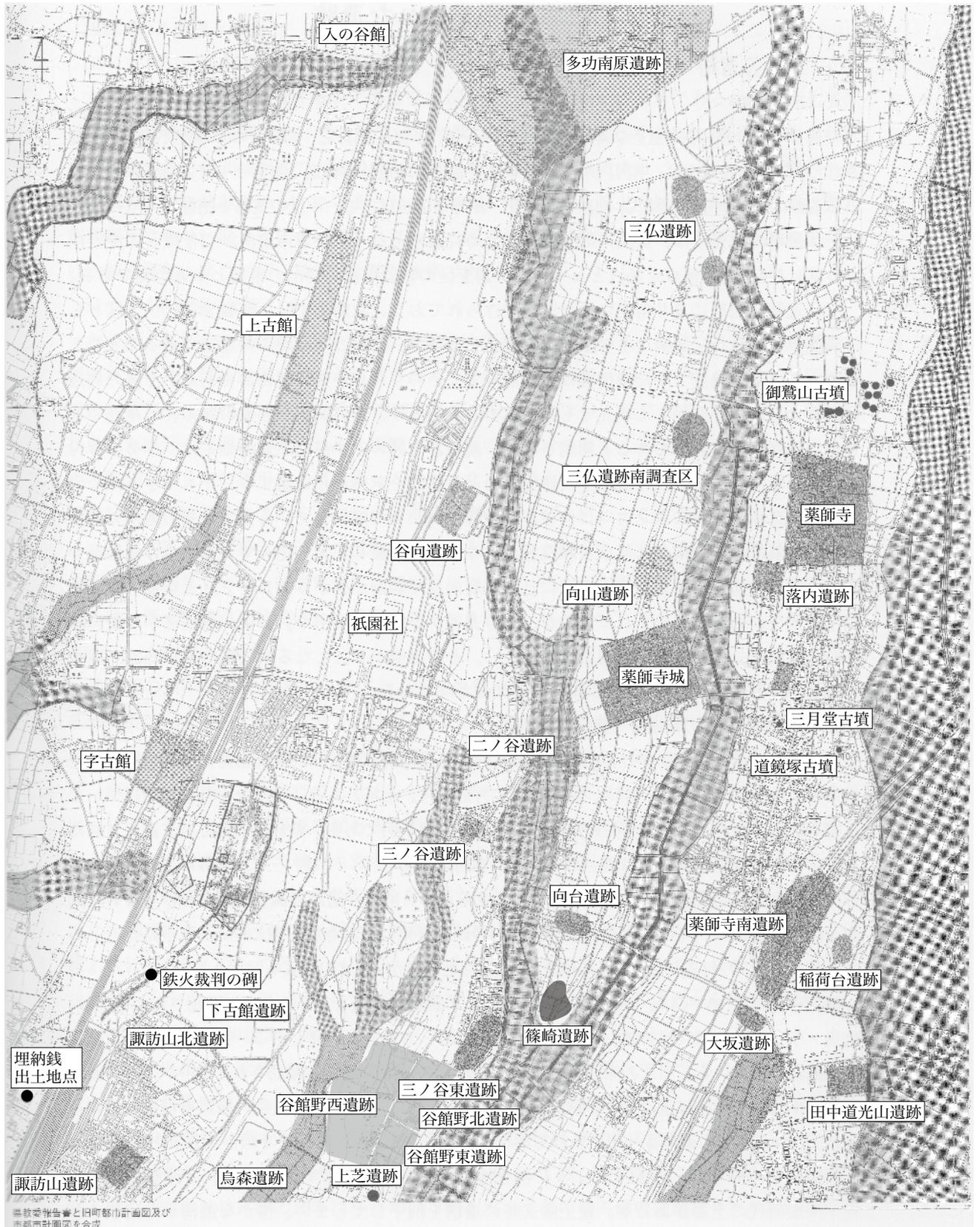
本遺跡の所在する下野市の北隣に位置する上三川町には、官衙的性格が想定される多功遺跡、上神主・茂原遺跡が所在する。

本遺跡西方の姿川西岸には下野国分寺跡（第5図）・下野国分尼寺跡（第5図）が建立される。国分二寺、下野薬師寺跡周辺の集落の様相に共通する特徴として、7世紀末葉～8世紀前半の遺構が少なく、9世紀後半～10世紀後半にかけての遺構の確認が多いことが指摘されている。国分二寺周辺では8世紀中葉以後、9世紀前半～中葉の遺構が多いことが明らかとなっており、本遺跡や自治医科大学周辺地区遺跡群の状況と同様である点、留意される。

【中世】

本遺跡周辺は、中世においては福田郷・平塚郷などからなる薬師寺荘に含まれ、小山氏の一族である薬師寺氏の勢力下にあったと推定されている。本遺跡北方の至近する薬師寺城は薬師寺氏の居館とされ、寛喜年間(1229～1231年)創建の伝承がある。その北方には、多功城や上三川城など宇都宮氏の居館が築造される。

自治医科大学周辺地区遺跡群内の下古館遺跡は、周囲を溝状遺構に囲われ、中心部を南北に道（うしみち）が貫通する。溝状遺構は上幅約4.7m・深さ約2.0mの薬研堀、範囲は東西約175m・南北約480mで南北に長い。



第6図 周辺の主な遺跡分布図

第2章 遺跡の環境

溝状遺構の内部には掘立柱建物跡や土坑がエリアを形成する。また堂宇とみられる掘立柱建物跡、青磁碗の出土が確認されている。井戸跡から出土した「烏帽子」は国内でも屈指の残存状況である。これらの遺構は14世紀には成立していた可能性が高い。遺跡の性格は判然としないが、「奥大道」に面し「市」の機能を備えた「宿」の可能性が指摘されている。

この他、出土銭の確認がある。昭和39年に小金井地内で確認された渡来銭16,000枚（第6図）、平成2年に国分地内で確認された渡来銭12,000枚、上芝遺跡から97枚、65枚の出土銭である。これらが埋納銭であるのか、備蓄銭であるのかは判然としないが、これだけの銭を収集できるだけの勢力基盤があったことが読み取れる。また、本遺跡東方の田川東岸には、県指定文化財に登録されている東根供養塔（第5図）が造立される。凝灰岩製の宝塔で、銘文によると元久元（1204）年に佐伯伴行と妻に藤原氏が、亡父と在世の母の菩提のために造立したことがわかる。佐伯氏についての詳細は不詳であるが、これだけの規模の造塔を行える勢力を保持した一族と考えられ、小山氏・結城氏との関係が伺われている。

【近世】

日光道中の整備に伴い、現在の国道4号沿いに江戸から88番目の一里塚（第5図）が築造される。現道の西側に沿う。また、日光道中から分かれて、薬師寺村、仁良川村を経て結城に至る関宿通多功道などが整備された。古記録等によると本遺跡西方の姿川の氾濫原の低地部（現在の川中子地区周辺）から日光道中沿線に集住地区の移動があったことが明らかとなっている。「日光道中は幕府や諸藩、朝廷や日光山関係の役人・僧侶の日光への登下山や参勤交代をはじめとする大名・旗本往来、それに付随する物資の輸送を目的とする公用通路としての性格が強い。これに対して、「細道筋」や「中道筋」は江戸廻米や江戸入用物資の輸送のために新たに開発された交通路であり、領主的商品流通路としての性格が強い」との指摘がある。

また、下古館遺跡北側には鉄火裁判の碑（第6図）が残る。江戸時代初期に起こった小金井宿と薬師寺村の入会地を巡る論争に小金井村が勝利した事を記す、後世に造立された顕彰碑である。

明治時代以降には、鉄道の開通により、現国道4号を中心とする旧宿場町の景観から駅を中心とする町並みへと変貌する。

【参考文献】

「別願院文書」『栃木県史資料編・中世二』 栃木県 昭和50（1975）年

「薬師寺南遺跡」『栃木県文化財報告第23集』 栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興財団 昭和54（1979）年

「柴工業団地内遺跡調査報告」『栃木県文化財報告第43集』 栃木県教育委員会編（財）栃木県文化振興財団
昭和56（1981）年

「郭内遺跡 松香遺跡」『栃木県文化財報告第943集』 栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興財団
昭和63（1988）年

自治医科大学周辺地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書

住宅・都市整備公団・栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

「烏森遺跡発掘調査概報」『栃木県埋蔵文化財調査報告第47集』 昭和61（1986）年

「三ノ谷遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第87集』 昭和62（1987）年

「二ノ谷遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第97集』 昭和63（1988）年

「三ノ谷東・谷館野北遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第112集』 平成2（1990）年

「谷館野東・谷館野西・上芝遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第137集』 平成5（1993）年

- 「諏訪山・諏訪山北遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 147 集』平成 6（1994）年
- 「下古館遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 166 集』平成 7（1995）年
- 「多功南原遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 222 集』栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興財団
平成 11（1999）年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 41 平成 29（2017）年度」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 392 集』
栃木県教育委員会 平成 31（2019）年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 42 平成 30（2018）年度」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 395 集』
栃木県教育委員会 令和 2（2020）年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 43 平成 31・令和元（2019）年」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 404 集』
栃木県教育委員会 令和 3（2021）年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 44 令和 2（2020）年」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 404 集』
栃木県教育委員会 令和 4（2022）年
- 「大坂遺跡・向台遺跡」『下野市埋蔵文化財調査報告第 4 集』下野市教育委員会 平成元（1989）年
- 「落内遺跡第 3 次調査 史跡下野薬師寺跡関連調査」『下野市埋蔵文化財調査報告第 13 集』下野市教育委員会
平成 30（2018）年
- 「下野市内遺跡発掘調査報告書 三仏遺跡・館野前遺跡・薬師寺城」『下野市埋蔵文化財調査報告第 8 集』
下野市教育委員会 令和 2（2010）年

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 調査の概要

(1) 基本土層 (第2章参照)

基本土層の確認から、第2章第1節地理的環境に記載したとおり、調査区の現況は、土地の改変に伴う削平、客土により、本来の地形と大きく異なっていることが明らかとなった。基本土層は、A区調査区端部の遺構確認面までの土層、および、各区に設定したトレンチの土層により確認した。C区については、調査区全面に亘る表土除去を実施していないため、遺構確認のためのトレンチで基本土層の確認を行った。主な堆積層は黒色土層および鹿沼軽石層、鹿沼軽石層下の黄色粘土層である。遺構の土層注記に表記する「ローム」は、鹿沼軽石層下の黄色粘土層に相当する可能性が高い。

以下に報告するA～D区の基本土層の確認から、調査区およびその周辺は、削平・盛り土による地形の改変が行われたことが明らかである。客土層下位が水平な堆積であることや、確認調査(D区トレンチ10)にキャタピラ痕が確認されていることから、重機を使用した改変である可能性も考えられよう。

本来の地形は、第15図の模式図に示したような、台地(山)と低地(谷)が近接する地形であったと考えられる。遺構の確認されたA区L-10・M-9グリッド付近は台地部と谷部に挟まれた狭量な平坦面あるいは緩斜面であった可能性が考えられる。7世紀代とみられる第8・58号竪穴建物跡は谷部の向きに合わせて建てられた可能性があり、両建物跡の主軸の差異は谷の形状を示すものかも知れない。B・C区は南側および西側へ傾斜する。B区南側は調査区の載る台地の東・西側の低地の合流点であることに起因しよう。丘陵の頂部はA区北西部-C区東端部-D区T22付近であったと想定される。D区以北の状況は明らかではないが、D区トレンチ21・22の高低差や確認調査トレンチ16に客土が確認されていることなどから、大小の起伏が想定される。調査区および調査区周辺は起伏と小さな谷が入り組む地形であった可能性もあろう。

【A区】

A区では、表土除去後の遺構確認面に、鹿沼軽石層の露出するJ・K・L-9・10・11グリッドを中心とする範囲と黒色土の範囲とが確認された。A西区は調査区内全面に鹿沼軽石層が確認された。トレンチ(以下T)はA区にT1～6・10・11、A区西にT7～9を設定し、基本土層の確認を行った。

T1は遺構確認面に鹿沼軽石層の露出するK-9グリッドに設定した。最大深さ0.84mまでの掘り下げ、鹿沼軽石の単一層を確認した。鹿沼軽石層上にはハードロームやソフトロームなどの複数のローム層、黒色土層の堆積が想定でき、改変前の地表面は現状の地面より数m上位にあったと推定できる。

T2は調査区北端K-12・13グリッドに設定した。トレンチ北西部にSK-54を確認したため、後日、北側に拡張したが、図示したセクション図は拡張以前の堆積層を示す。表土下に客土層が堆積し、最も深い部分で表土下0.6mに達する。地山となる黒色土は、旧地形の傾斜に沿った谷部に向かう斜方向の堆積であろう。T2-24層はローム層とみられる。T2-24層上面のレベルは丘陵側の西壁で52.6m付近、谷側の東壁で52.3m付近である。トレンチ掘削底面下に堆積すると想定される鹿沼軽石層上面のレベルやT1付近のT2-24層に相当するレベルは測りかねないが、T1・2の標高差は2.0m以上と推定される。

T3は調査区北東端L-14グリッドに設定した。谷部にあたる。ローム層とみられるT2-24層の堆積はなく、地山の黒色土と水分量の多い白色粘土が堆積する。テフラ分析の結果、T3-2層に榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA 6世紀初頭)、T3-4層に鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah 約7300年前)、T3-5層に浅間板鼻黄色軽石(As-YP 約1.5～1.65万年前)が検出された。T3-5層はT4-14層に対応するとみられる。

T4は調査区北半中央部L-11・12グリッドに設定した。谷部にあたる。上層の1～6層は客土である。客土は複数層で各層の特徴は異なる。T4-8層はT3-7層に対応すると考えられる。T4-7層はT4-8層上位の谷部に堆積する黒色土であろう。

T5は調査区中央部M-10・N-11に設定した。谷部にあたる。T5-1～5層は客土である。T4同様、複数層で各層の特徴は異なる。地山最上層T5-14層はテフラ分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah 約7300年前)が検出されている。T3-5層に対応する層とみられる。縄文時代早期末葉と考えられる。鬼界アカホヤ火山灰が検出されたT5-14層上面のレベルは52.2m付近、T3-5層上面のレベルは51.7m付近であり、谷部の傾斜が看取される。

T6は調査区南西端部P-8グリッドに設定した。確認面はローム層である。テフラ分析の結果、T6-10層に榛名八崎軽石(Hr-HP)が検出されるため、赤城鹿沼軽石(Ag-KP)以下の土層と分析されている。

T7・8・9はA西区調査区西端部K・L・M-8グリッドに設定した。T7・8・9は同一層とみられる。T9からはテフラ分析によって赤城鹿沼軽石(As-PP)が検出された。

T10・11は第80号竪穴建物跡の遺構の可否を判断するため設定した(第8図・SI-79平面)。堆積層は遺構覆土ではなく自然堆積層、かつ、トレンチ底面で観察された粘土質面と黒色面の境を谷部への落ち込みと判断した。第80号竪穴建物跡の取り扱いについては第3章第3節に記載した。

この他、第15号竪穴建物跡壁面となる地層については、テフラ分析から赤城鹿沼軽石(Ag-KP)下位と判断されている。

A区調査区端部の堆積層をみると、北側(SP-A)の表土直下は鹿沼軽石層である。西側では客土下に鹿沼軽石層(SP-C:3層)の西側に向けての立ち上がりが見て取れる。東側(SP-B)は谷の最下部に面する位置にある。複数層に亘る厚い客土下に谷部の堆積層がみられる。現地調査の所見では、客土と谷部堆積層(8層)の間に僅かに残る7層に古代の層である可能性が指摘されている。

A区は、トレンチ調査および調査区端部の土層の堆積、竪穴建物跡壁面の地山の観察、遺構確認面の観察から、第15図のとおり、調査区北西部・南西部は台地部、遺構確認面のコンタ図52.4m付近より下位(太線)は谷部であることが明らかである。第58号竪穴建物跡西半部から第19号竪穴建物跡南西隅部にかけては平坦面あるいは緩斜面であったと考えられる。

【B区】

B区は、調査区東・西側の谷部がB区南側で合流する位置にあり、遺跡の載る丘陵の末端部となる。表土に鹿沼軽石層および粘質土層が確認される。北東部から谷の合流点となる南西部に向けて傾斜する。

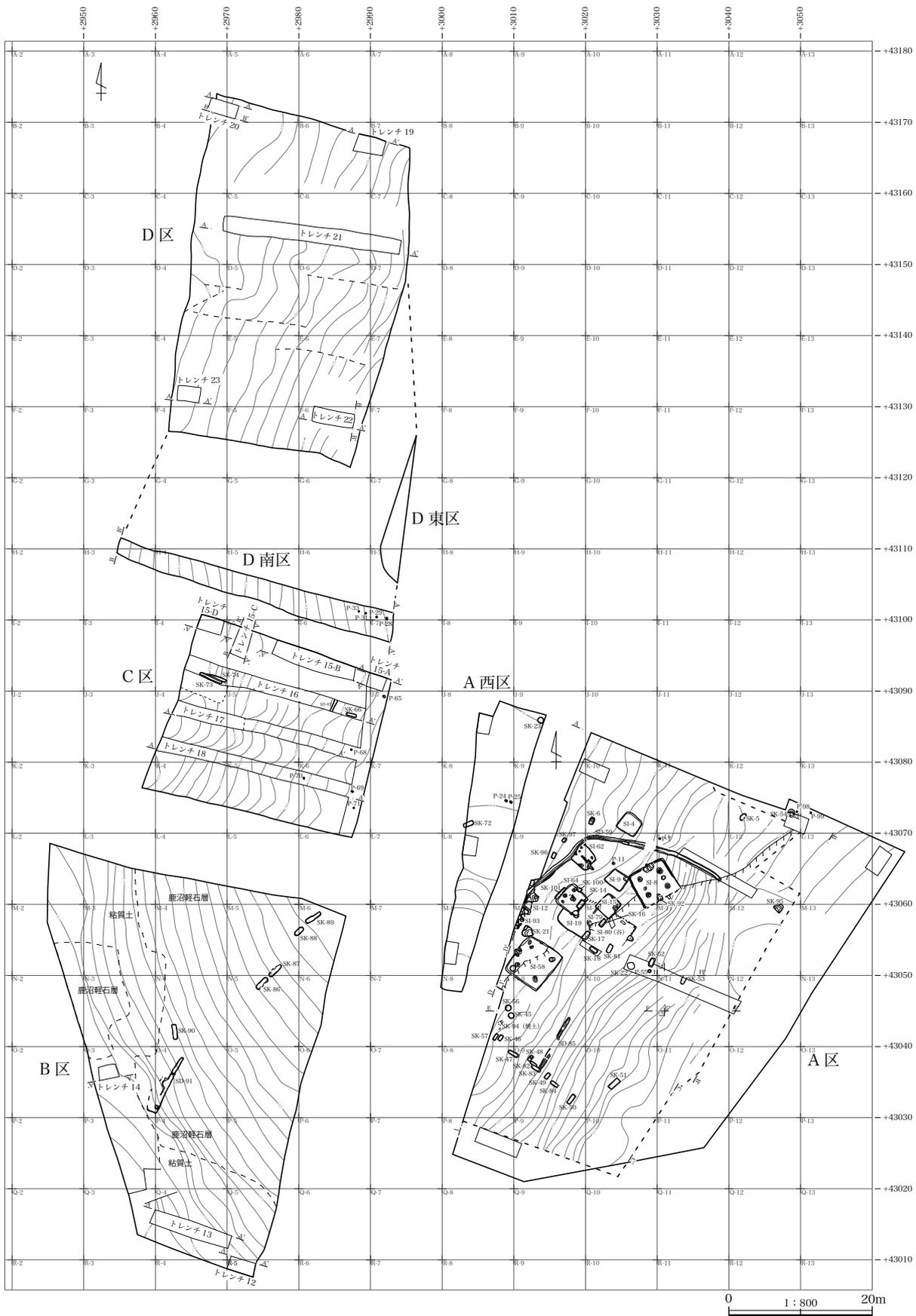
トレンチは12～14をR-5グリッド、Q-4・5グリッド、O-3グリッドに設定した。T12・13でテフラ分析を行った。

【C区】

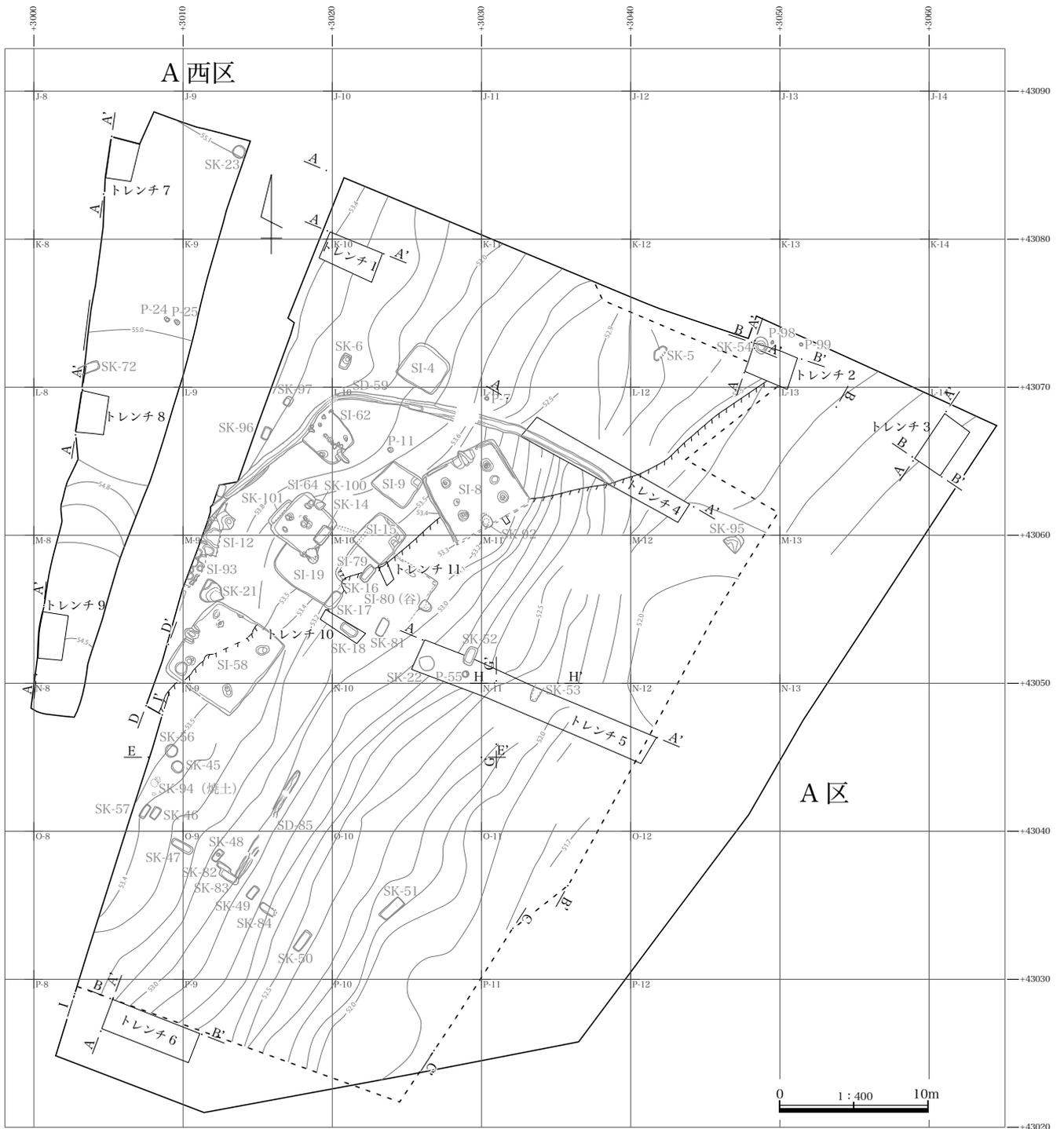
C区は先に調査を行ったA・D区の状況を鑑み、トレンチ(T15～18)による調査を行った。基本土層はこの調査トレンチにおいて確認した。

T15は調査区北壁に沿ってA～Dを設定した。東側のT15-Aは丘陵の上位、西側のT15-Dは調査区西側の谷に面する位置にある。A15-A・B・C東壁付近は表土直下に鹿沼軽石層、C西壁付近より西側・Dは地山となる暗褐色土層を挟み粘質土層・鹿沼軽石層に至る。鹿沼軽石層の堆積状況をみると、T15-Aは現在よりも高い標高で、A区T1に準ずる高さであると判断される。A区T1～C区T15-A付近が丘陵の頂部であったと推定できよう。T15-BからDは調査区西側の谷に向かう斜面地であり、T15-C付近が谷の落ち際であ

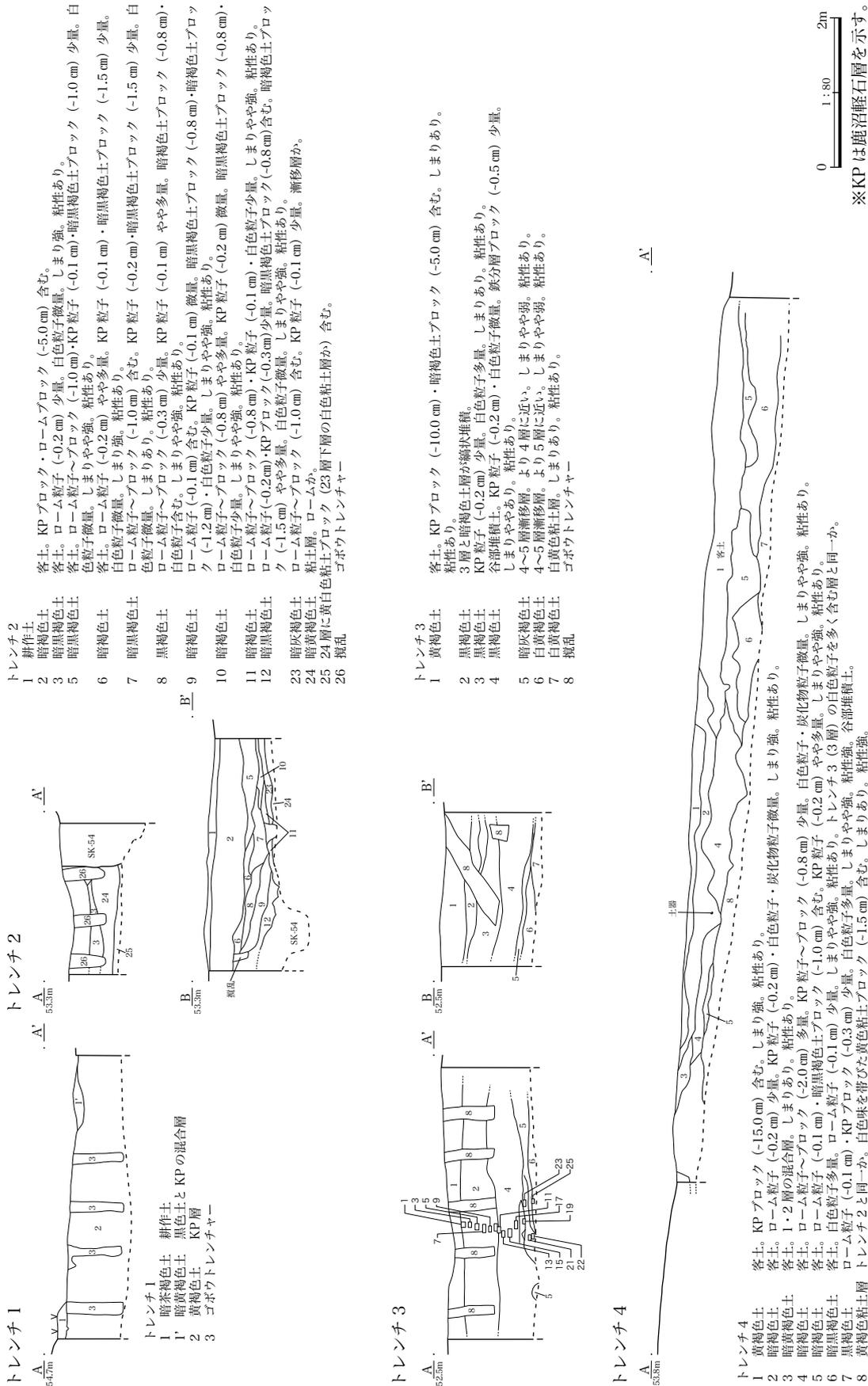
第3章 確認された遺構と遺物



第7図 調査区全体図・グリッド配置図

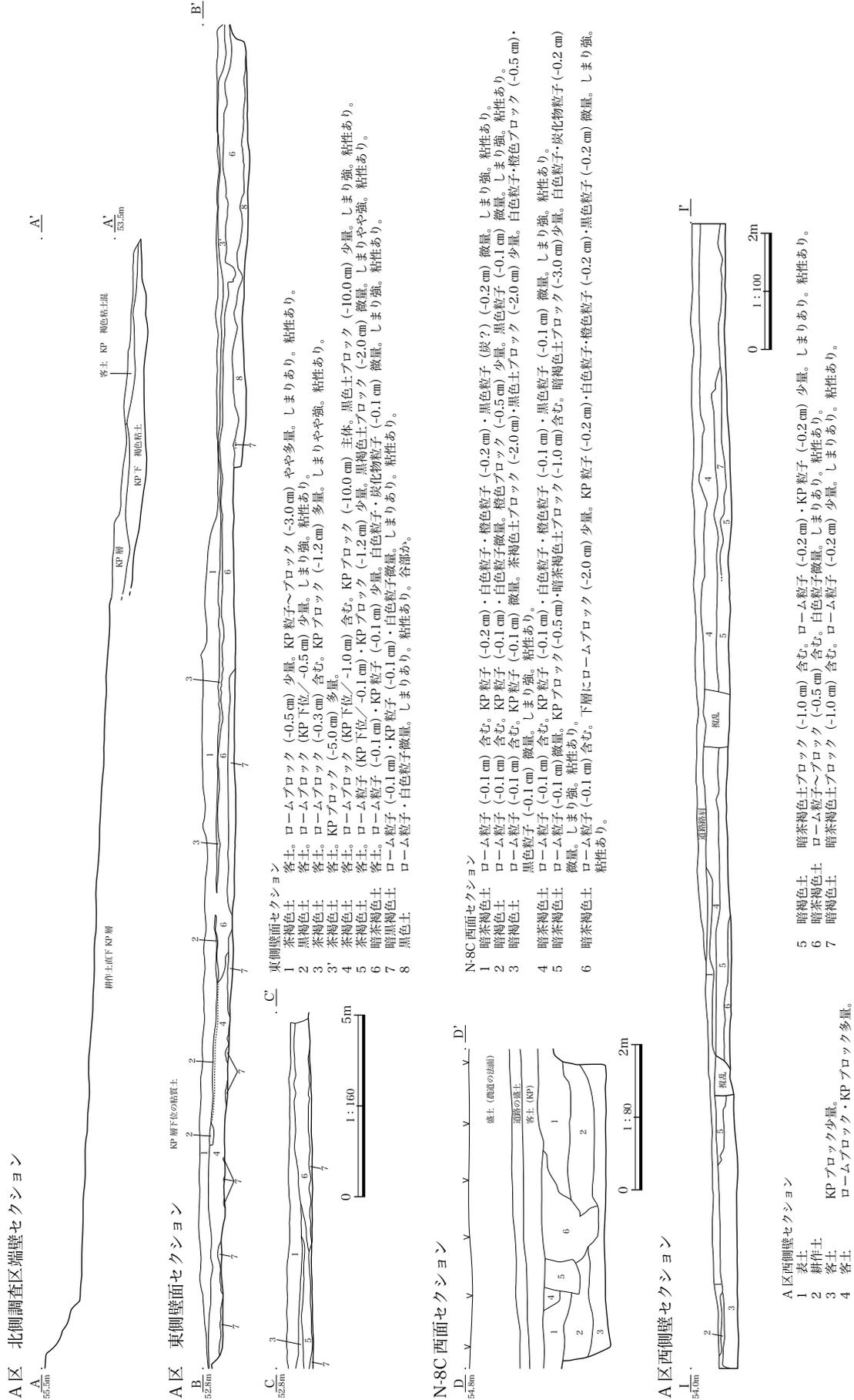


第8図 A区トレンチ等位置図

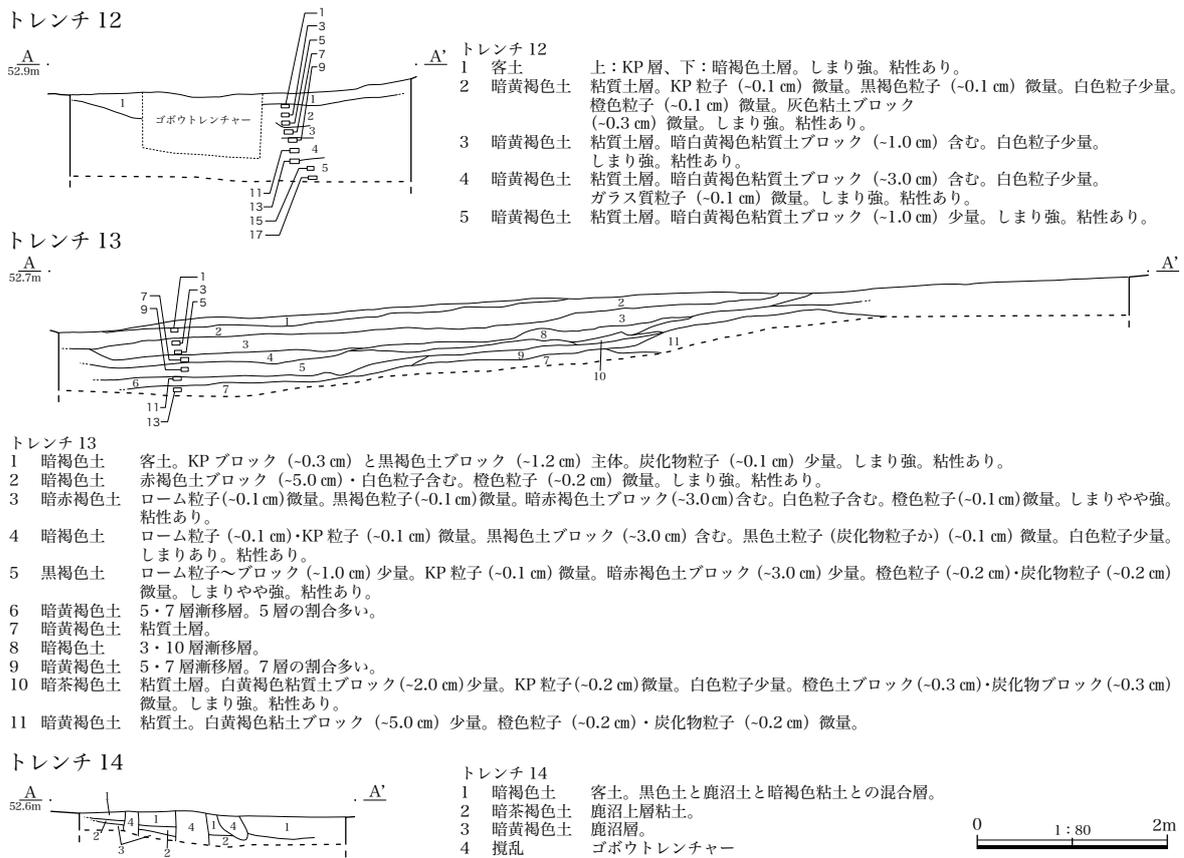


※KP は鹿沼軽石層を示す。

第9図 A区トレンチセクション図 (1)



第11図 A区調査区壁セクション図



第12図 B区トレンチセクション図

たと推定できる。T15-Aは、テフラ分析を行うあたり、第13図よりも掘り下げ、標高53.3mまで赤城鹿沼軽石(Ag-KP)の堆積を確認した。T15-Bはテフラ分析の結果、旧石器時代の堆積層である可能性が指摘されている。T15-Cはトレンチ西側で基本土層の確認を行った。テフラ分析の結果、暗褐色土の堆積層の上位から浅間Bテフラ(As-B)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、浅間C軽石(As-C)が検出されている。T15-Dにおいても、T15-Cと同様、テフラ分析の結果、暗褐色土の堆積層の上位から浅間Bテフラ(As-B)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)が検出されている。

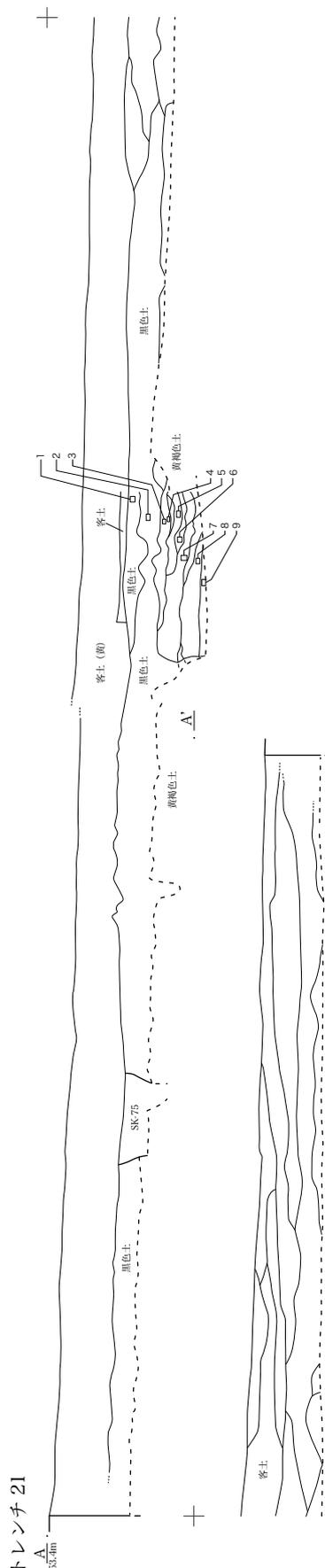
T16～18の堆積状況においても、T15同様の地形、堆積状況が観察される。T18については、南側への傾斜があった可能性を考え得る。

【D区】

D区は表土下に客土が確認される。トレンチは客土面を上面としてT19～23を設定した。

客土は確認調査において、ローム面と誤認した黄褐色土層であり、D区全面に及ぶ。最大厚は約0.6mである。西側の谷部に近いT20・21西側では黄褐色土と黒色土が混在する箇所もあるが、個別の土層は記録していない。第14図の破線は客土を盛った際の段差である。旧地割の可能性を考え図示する。黄褐色土客土下には黒色土が堆積する。最大厚は約0.4mである。T22のテフラ分析の結果、上層に浅間Bテフラ(As-B)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、浅間C軽石(As-C)が検出されている。T21よりもT22が高い地形であった可能性が考えられる。

D南区は表土下に暗褐色土層が観察され、調査区西側の谷へ向けた斜面地となる。D東区は表土下に暗褐色土層が観察され、概ね平坦である。



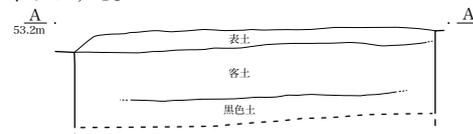
D区は、本来、T22付近までA区から続く丘陵の頂部であり、西側は谷部へ傾斜する地形であったと推定される。T22以北は、T21・22の高低差では判然としないが、起伏のある地形であったことが推定される。しかし、現状の地形では、調査区よりも調査区北側の標高が高いことなどから、複雑な起伏の地形であったと予想される。客土の堆積は、このような地形を簡約化するため、A区から続く丘陵の頂部を削平し盛り土を行ったためと考えられよう。

(2) 調査の概要 (第15・16図 第1表)

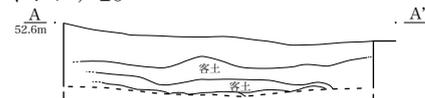
本調査区は、農地整備事業内に位置し、畦などの農地区画、現道、今後敷設が予定されている下野市道範囲などによって、調査区が分断されている。このため、現状に則して、便宜的に調査範囲をA・A西・B・C・D・D東・D南区に区分した。

調査区は、第2章第1節地理的環境や本章第1節基本土層のとおり、削平・客土による地形の改変が行われており、遺跡の載る丘陵の東・西側の低地部へ向けての傾斜地にある。確認した遺構は竪穴建物跡11軒、土坑43基、ピット12基、溝状遺構4条である。多くがA区にあ

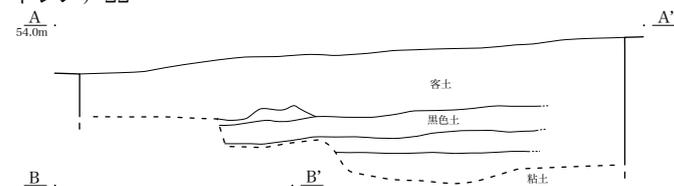
トレンチ 19



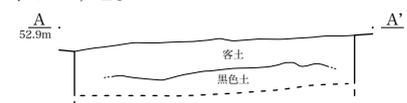
トレンチ 20



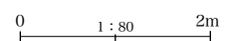
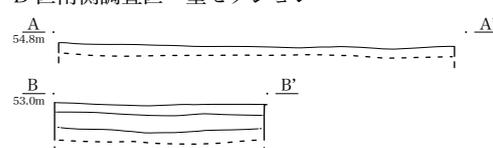
トレンチ 22



トレンチ 23



D区南側調査区 壁セクション

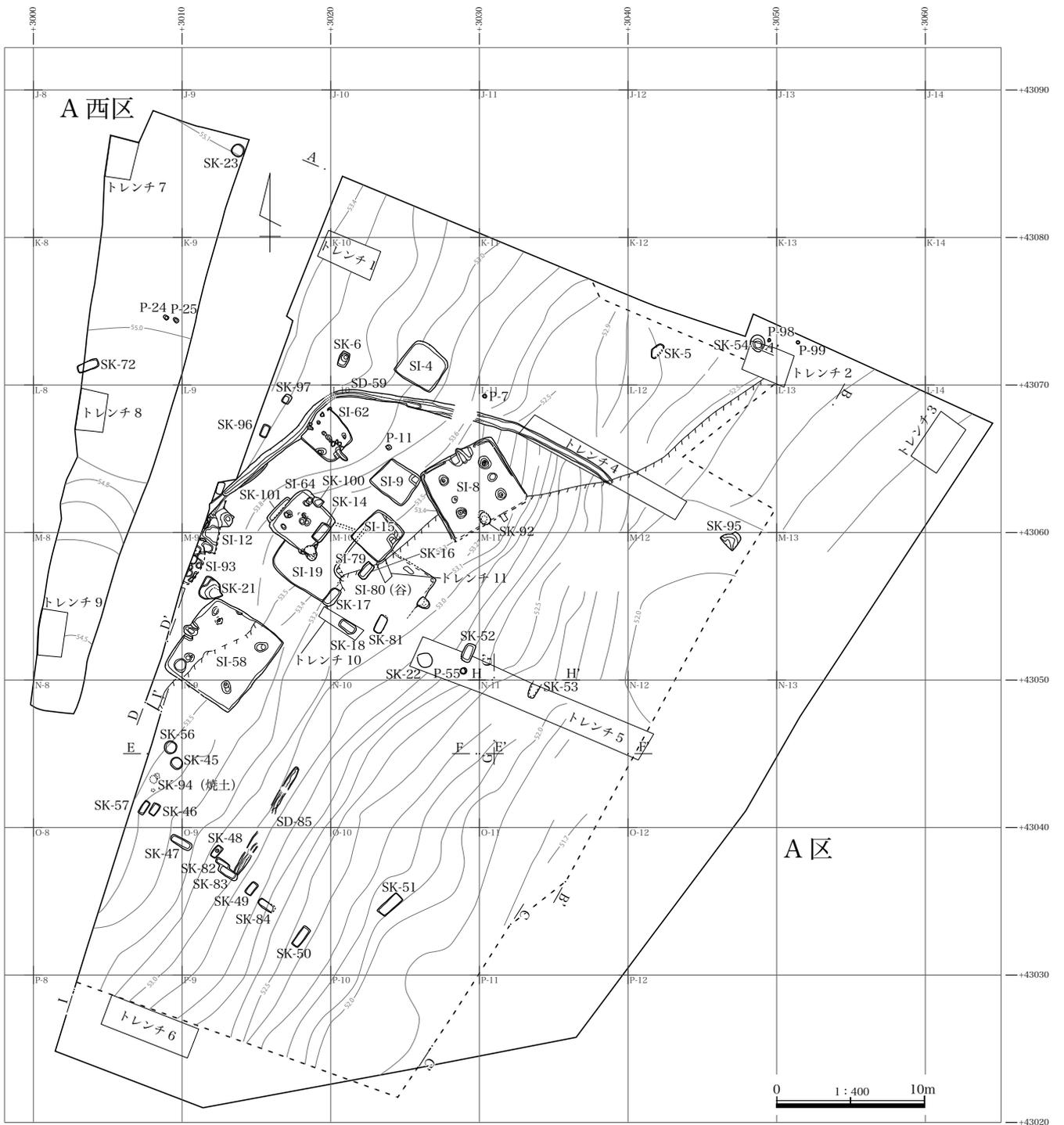


第14図 D区トレンチセクション図

第3章 確認された遺構と遺物



第15図 A区地形復元模式図



第16図 A区遺構配置図

第3章 確認された遺構と遺物

り、台地と谷に挟まれた狭量な平坦面あるいは緩斜面を選地した結果と考えられる。

出土遺物は、縄文土器・石器、土師器、須恵器、陶磁器、銚帯など遺物収納箱（35 × 55 × 10cm）約48箱を数える。遺構に伴う出土遺物のほか、遺構確認時の精査に伴うものやグリット調査に伴うものが多い。遺構の覆土中からは明らかに遺構の年代と異なる遺物の出土があるが、これらについても、遺構外出土遺物として時代ごとに報告する。

B・C・D区の調査については、第1章第3節調査の方法、本章第1節基本土層の記載のとおり、地形が改変されている。このため、遺跡の様相は不明であるが、集落地などは既に失われた可能性があろう。遺構・遺物の確認もあるが、改変以降の所産、混入とみられる。

第1表 遺構一覧表

欠番	1			欠番	35			P	69	C	
欠番	2			欠番	36			P	70	C	
欠番	3			欠番	37			P	71	C	
SI	4	A		欠番	38			SK	72	A西	
SK	5	A		欠番	39			SK	73	C	
SK	6	A		欠番	40			SK	74	C	
P	7	A		欠番	41			SK	75	D	
SI	8	A		欠番	42			欠番	76		
SI	9	A		欠番	43			欠番	77		
欠番	10			欠番	44			欠番	78		
P	11	A		SK	45	A		SI	79	A	
SI	12	A		SK	46	A		(SI)	80	A	谷部落ち込みライン
欠番	13			SK	47	A		SK	81	A	
SK	14	A		SK	48	A		SK	82	A	
SI	15	A		SK	49	A		SK	83	A	
欠番	16			SK	50	A		SK	84	A	
SK	17	A		SK	51	A		SD	85	A	
SK	18	A		SK	52	A		SK	86	B	
SI	19	A		SK	53	A		SK	87	B	
欠番	20			SK	54	A		SK	88	B	
SK	21	A	SI-93に記載	P	55	A		SK	89	B	
SK	22	A		SK	56	A		SK	90	B	
SK	23	A西		SK	57	A		SD	91	B	
P	24	A西		SI	58	A		SK	92	A	
P	25	A西		SD	59	A		SI	93	A	
欠番	26			欠番	60			SK	94	A	
欠番	27			欠番	61			SK	95	A	
SK	28	D南		SI	62	A		SK	96	A	
SK	29	D南		欠番	63			SK	97	A	
欠番	30			SI	64	A		P	98	A	
SK	31	D南		P	65	C		P	99	A	
欠番	32			SK	66	C		SK	100	A	
SK	33	D南		SD	67	C		SK	101	A	
欠番	34			P	68	C					

第2節 確認調査

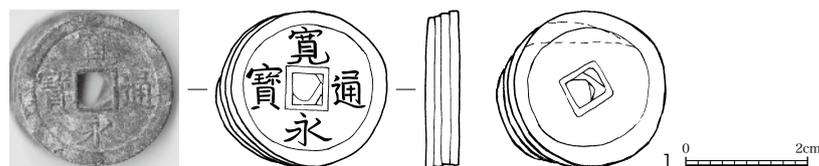
発掘調査に先立ち、平成29(2017)年度に確認調査を行った。農地整備事業地内に幅1.5m・長さ3.0～10mのトレンチ16本を設定し、遺構・遺物の状況を確認した。確認された遺構は第2表に記す。表中、時期や用途の判別が可能であったものは明記した。出土遺物のうち土師器坏の記号は第5章に記載する。

トレンチ8で確認された竪穴建物跡はA区第8号竪穴建物跡、溝状遺構は第59号溝状遺構とみられる。トレンチ8出土遺物が第59号溝状遺構出土2・不掲載の小片に接合する。また、3と同じ文様・大きさの中丸碗が出土する。土坑1基は現地調査において特定できなかった。トレンチ9で確認された土坑1基・性格不明遺構1基は現地調査において確認できなかった。トレンチ11・12は谷部にあたる。トレンチ11の出土遺物は東側の丘陵部からの転落等によるものと考えられる。トレンチ4・5・10はD区にあたるが、確認調査において遺構確認面とした黄褐色土層は、当該調査に伴う基本土層の確認から、地形改変に伴う客土層をロームと誤認したことが明らかとなった。トレンチ4・5からの出土遺物は地形改変時に混入したものと判断される。

この結果に基づき、A区はトレンチ8、C区はトレンチ6、D区はトレンチ4・5・10 D南区はトレンチ9に相当する。B区にかかるトレンチの設定はない。これ以外の区域については、調整に結果、農地整備事業の施行に伴い立会調査等を行う予定である。

第2表 確認調査の遺構・遺物

T	遺構	遺物
1	なし	
2	なし	土師器片8片72.14g 胎土に金雲母を含む体部1片3.77g
3	なし	
4	暗渠	土師器体部1片8.11g 陶器皿類(内面無釉・外面透明釉)体部1片9.95g(外面スス付着顕著)
5	なし	石皿1片(266に似る)安山岩製
6	なし	
7	小穴1基	内耳土器底部1片7.18g(胎土に金雲母混入) 古銭4枚圧着
8	竪穴建物跡1基(7世紀代)・土坑1基・溝状遺構	土師器坏口縁部1片①a・体部1片7.91g 土師器とみられる細片8片23.31g
9	土坑1基・性格不明遺構1基	
10	なし 確認面にキタビラ痕	
11	なし	土師器碗(ロクロ使用・ウルシ塗布)1片1.72g 須恵器坏1片7.69g(灯明皿転用か)
12	なし	
13	なし	
14	土坑2基・攪乱1基	
15	土坑2基	
16	なし 盛り土確認	

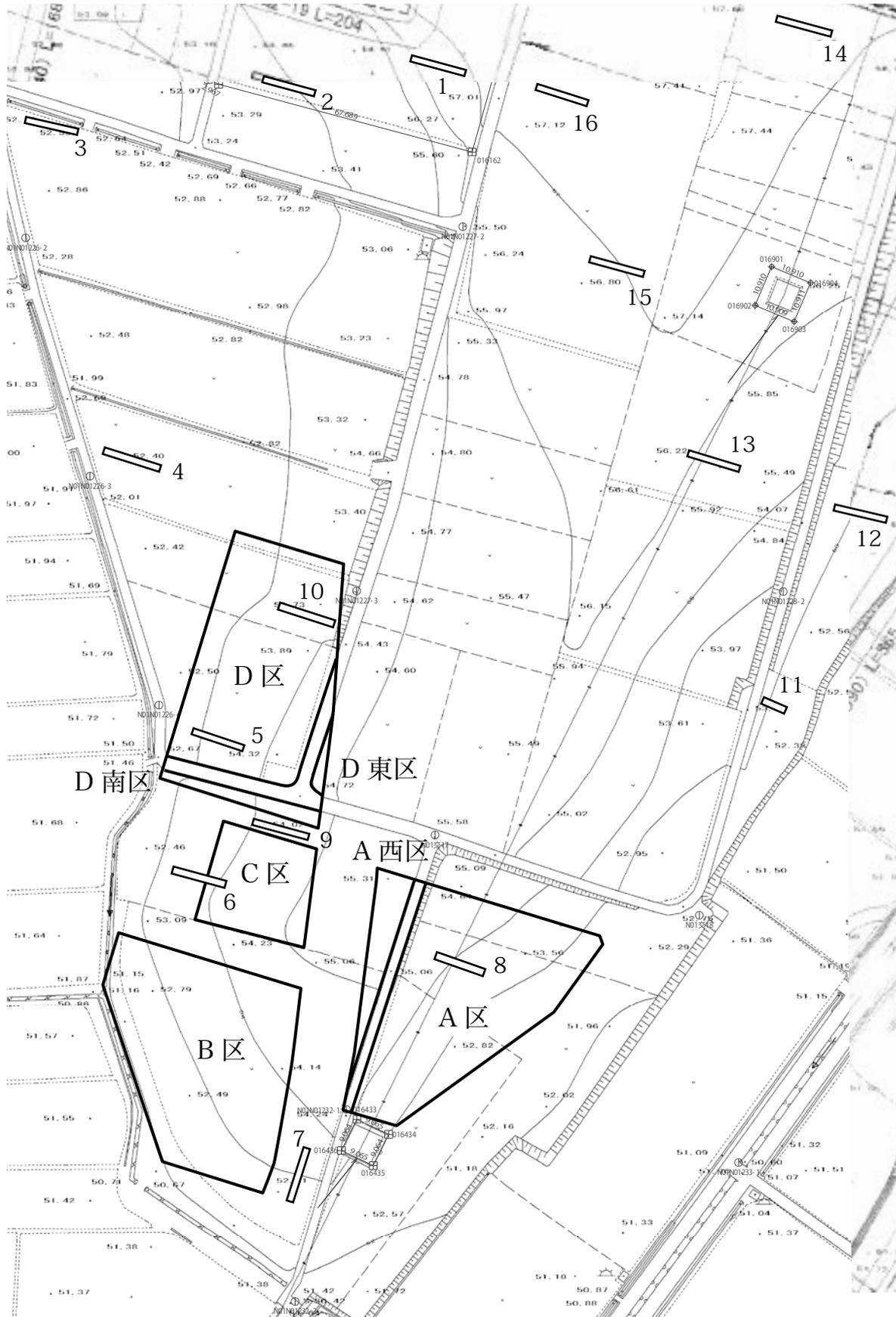


第17図 トレンチ7出土遺物実測図

第3表 トレンチ7出土遺物観察表

(単位:cm・g)

番号 器種	特徴	出土状況 残存状況
1 古銭	寛永通宝 4枚圧着 長:2.6 幅:2.8 厚:0.5 重:13.5	薬師寺7トレ No.1



第18図 確認調査トレンチ配置図

第3節 竪穴建物跡

(1) 調査の概要

A区に10軒が確認される。第8・58・64号竪穴建物跡はカマドを付設し、住居跡と判断できる。カマドの付設がなく、壁際に階段状の施設が確認される第9・15号竪穴建物跡については、遺構の用途を特定し得ない。

竪穴建物跡は、現状で、東側の谷に続く斜面地に位置する。遺構の主軸は磁北ではなく、概ね、現状の谷に沿う。第3章基本土層の記載のとおり、谷に面した狭小な緩斜面あるいは平坦地が選地されたと考えられる。第4・62号竪穴建物跡は大きく削平されるが掘り方面が鹿沼軽石層であることから、選地面より上側の斜面も利用されたと判断される。

第80号竪穴建物跡については、第79号竪穴建物跡床面に確認される堆積層から遺構番号を付して調査を行ったが、四壁を確認し得なかったことやトレンチ10・11から、谷部への落ち込みと判断し、欠番とした。第79号竪穴建物跡については、第80号竪穴建物跡と同様に谷部への落ち込みである可能性が考えられたが、竪穴建物跡として調査を行った。第79・80号竪穴建物跡にかかるSP-Bのテフラ分析（附章参照）では、本調査区で確認される竪穴建物跡の年代感にそぐう、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA 6世紀初頭）より上位で浅間Bテフラ（As-B 1108年）より下位の可能性が指摘されている。また、カマドについては、床面と火床レベルが相対的であることから第79号竪穴建物跡に付随すると判断した。しかし、平面プラン、堆積層中の遺構の立ち上がり不明瞭であること、カマドの位置や重複する第15号竪穴建物跡のステップ状施設の位置などの物理的要因から、現地調査においては遺構の範囲を把握しきれなかった。整理作業の過程における記録類の精査から、第80号竪穴建物跡同様、谷部への落ち込みである可能性が強いと判断されるが、出土遺物を第79号竪穴建物跡として取り上げたことなどから、便宜的に遺構番号を残し、報告を行うこととする。カマドについてはカマドに似た土層堆積ではあるが、谷部に散見される焼土に類する堆積の可能性も残る。また、散見される焼土塊も同様である。

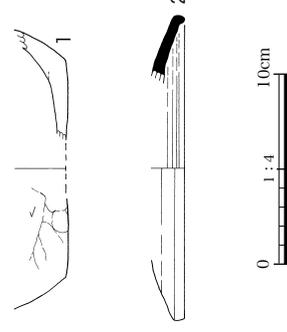
(2) 竪穴建物跡

第4号竪穴建物跡（SI-4）（第19・20図 第4表写真図版三）

位置 A区K・L-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模 削平により建物跡の壁・床面は失われ、掘り方底面に近い状況といえる。

平面形状・規模 方形であるが、谷に向けてやや窄まる。東西2.8～2.96m・南北2.55～2.74m、深さは0.2m前後である。主軸 N-37°-Eである。床面 鹿沼

第19図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図



第4表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 鉢か 鉢か	口：一 底：(11.4) 高：[2.7]	内部：ヨコナデ 外部：指ナデ→ナデ 体下端はナデが施されない部分があり、指頭痕・指ナデが残る 底部ヘラケズリ（不規則） 32.13g かえりなし	内外：10R5/8 赤	白色粒子・黒色ガラ 又質粒子少量 良	A区SI-4 底部1/8残存
2 須恵器 蓋	口：[15.8] 底：一 高：(1.7)		内外：10Y5/1 灰	白色粒子少量、ガラ 又質粒子微量 良	A区SI-4 口縁部1/12残存

(単位：cm)

第3章 確認された遺構と遺物

軽石層は底面とする。掘り方底面の可能性が高い。概ね平坦である。覆土 3層を確認した。何れも鹿沼軽石を多量に含む。

附属施設 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から、土師器鉢類 1、須恵器蓋 2 が出土する。接合しないが同一個体の可能性がある破片が出土する。胎土に白針の混入は観察されないが、南那須産の可能性が考えられる。8世紀第4四半期の可能性が考えられるが、小片であり判断としない。

火処 確認されなかった。

第8号竪穴建物跡 (SI-8) (第21～25図)

第5表 写真図版三～五・一九

位置 A区L・M-10・11に位置する。現

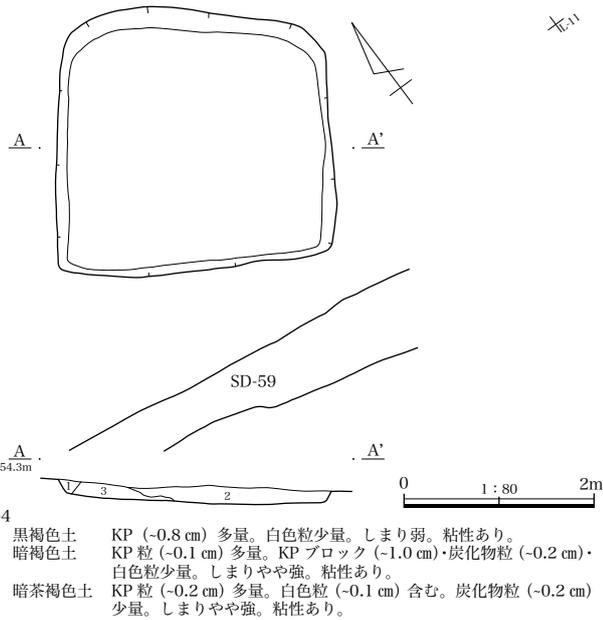
状で東に向けた斜面に立地する。重複関係 SK-92と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 方形であるが、南壁は埋没谷堆積層中にありサブトレンチの立ち上がりで確認した。東西5.7m前後・南北(5.2)m、深さは確認面の斜度により0.5～0.3mである。主軸 N-32° -Wである。

床面 鹿沼軽石層下の粘土層および埋没谷堆積層を床面とする。南東隅部から西壁中央部付近にかけては谷部堆積層が床面となる。床面覆土と谷部堆積層の見分けが難しく、南壁はサブトレンチでの立ち上がりで確認した。柱穴の配置などから2時期以上が推定できるが、調査時の床面の痕跡は廃絶時とみられる一時期分である。廃絶時期の床面をa期、これ以前の床面をb期として報告する。床面レベルは52.9m前後、カマド前付近から東壁付近は約52.95mである。

覆土 99層を確認した。1～49層は床面、50～59層は掘り方、60～99層は柱穴の覆土である。

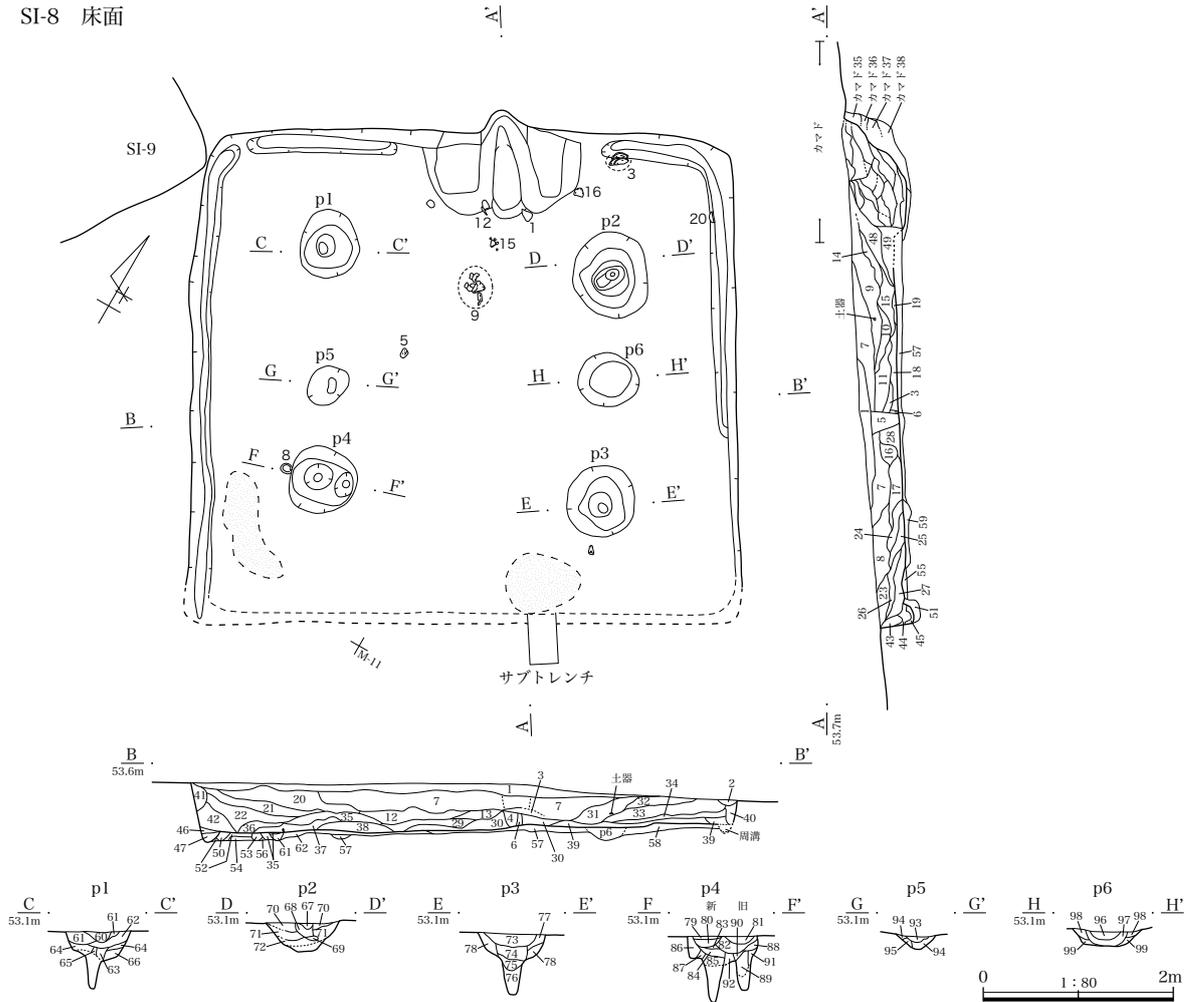
床面は、東・西壁寄りの中央部付近の黒色土層35～39層(A群)が堆積後、壁寄りにロームを含む20～30層(C群)、カマド前から中央部付近に粒径に小さなロームを少量含む12～19層(D群)が堆積する。31～34層(B群)は土器片を含むがロームの大きさや30層下にあることからC群に類する堆積層であろう。A～D群の堆積によって床面は周溝部分を除き被覆される。48・49層はカマドを被覆する堆積土で、49層はカマド7層に対応する。後述するが、カマド7層はカマドを壊した後のカマド埋土とみられ、この上に堆積する48層はカマドを被覆する堆積土とみられる。カマド上にB・C群を挟まずD群が堆積することなどから、A～D群の堆積をカマド被覆後の建物跡の埋め戻しに関わる堆積層と考えておきたい。周溝付近に堆積する40～49層は40層の堆積状況から床面が被覆されるまで使用状況を留めていた可能性を考え得る。中央部に堆積する7～11層(E群)は茶褐色ブロックを含むことから近世以降の堆積とも考えられたが、不掲載の土師器坏片の中に7層(E群)と18層(D群)の接合が認められたことや5の接合関係から覆土最上層と判断したい。ピット状に堆積する3～6層はE群堆積後の掘り込みであろう。最上層の1・2層は、確認面直上が客土であることから近・現代の堆積層の可能性はある。

掘り方は周溝付近と床面の掘り方が観察できる。55～59層で床を作出、52～55層で周溝付近、51層で周溝を作出する。



第20図 第4号竪穴建物跡実測図

SI-8 床面



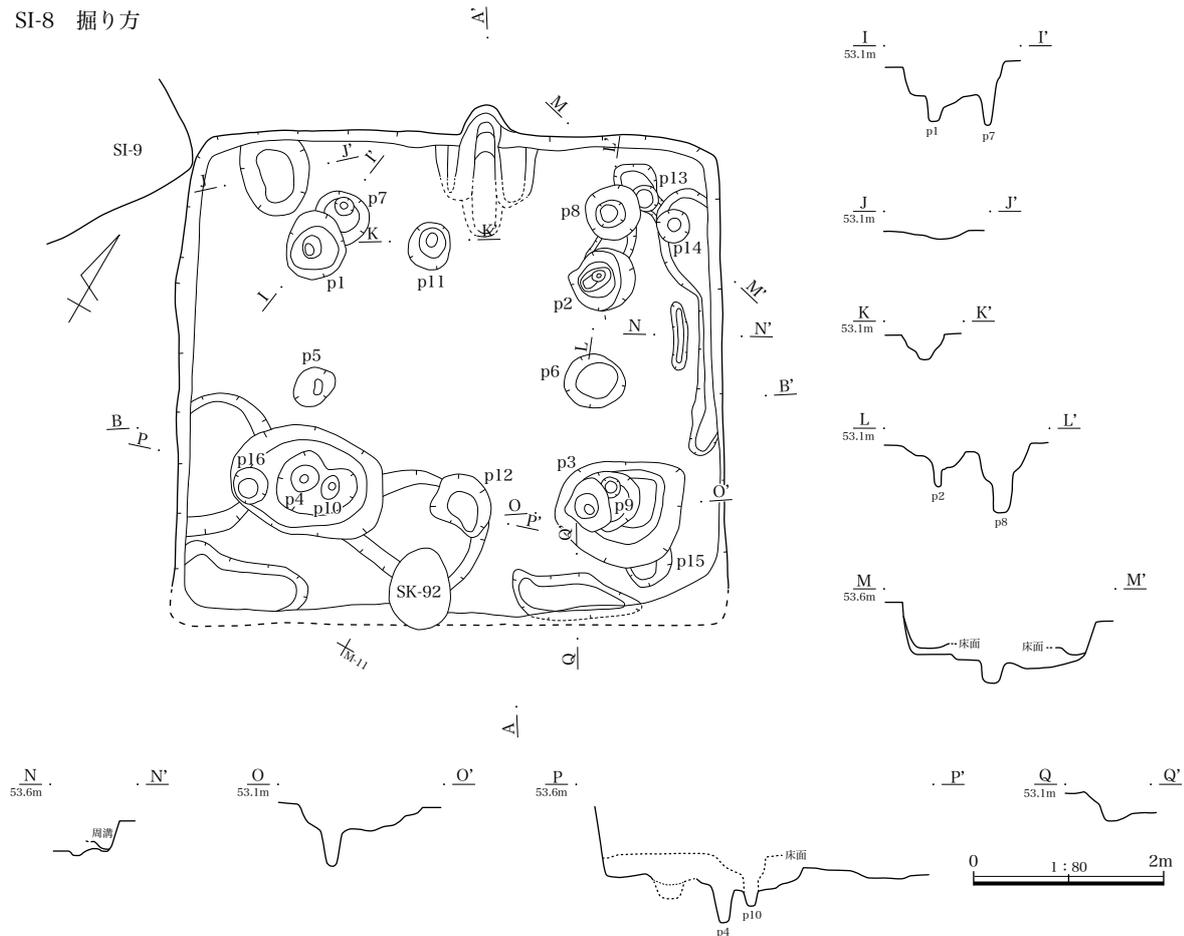
SI-8

- | | |
|--------------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm) 若干。白色粒子 (-0.05 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。しまり強。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (0.1 cm) 少量。黒色土ブロック (1.0 cm) 含む。白色粒子少量。しまりやや弱い。粘性あり。 |
| 5 暗黒褐色土 | ローム粒子 (-0.05 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。茶褐色土ブロック (2.0 cm) 含む。炭化物粒子ごく微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子微量。白色粒子少量。しまり強。粘性あり。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm) 若干。KP ブロック (-0.3 cm)・茶褐色土ブロック (-1.0 cm)・白色粒子 (-0.05 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 8 28層に似る | |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm)・茶褐色土ブロック (-1.2 cm) 含む。暗黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子含む。しまりやや強。粘性あり。 |
| 10 暗茶褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP ブロック (-0.3 cm) 少量。茶褐色土ブロック (-1.5 cm) 含む。暗黒褐色土粒子 (-0.2 cm) 微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 11 暗茶褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 12 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒色土ブロック (-0.5 cm) 微量。白色粒子少量。しまり強。粘性あり。 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒色土ブロック (-0.3 cm) 微量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。 |
| 15 暗茶褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm)・ロームブロック (-1.5 cm)・KP ブロック (-0.5 cm)・茶褐色土ブロック (-1.5 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。 |
| 16 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm)・KP ブロック (-0.3 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 17 暗褐色土 | ローム粒子〜ブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 18 暗茶褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.2 cm) やや多い。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。 |
| 19 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土ブロック (-0.3 cm) 少量。焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 20 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 21 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-1.0 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm)・茶褐色ロームブロック (-1.0 cm)・白色粒子 (-0.05 cm) 少量。炭化物ブロック (-0.5 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 22 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。炭化物ブロック (-0.3 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 23 暗褐色土 | 26層よりロームが少ない。 |
| 24 暗褐色土 | ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。 |
| 25 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・焼土粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 26 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 27 暗褐色土 | ローム粒子〜ブロック (-0.5 cm) 含む。焼土ブロック (-0.3 cm) 微量。炭化物ブロック (-0.3 cm) 少量。(付近に焼土堆積あり)しまりやや強。粘性あり。 |
| 28 暗黄褐色土 | ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。炭化物粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 29 暗褐色土 | ローム粒子〜ブロック (-1.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。黒色土ブロック (-0.3 cm) 微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 30 暗褐色土 | ローム粒子含む。ロームブロック (-1.2 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・黒色粒子 (-0.1 cm)・白色粒子・焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| カマド 35 暗褐色土 | ローム粒子〜ブロック (-0.8 cm) 少量。KP 粒〜ブロック (-0.8 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| カマド 36 暗褐色土 | KP ブロック (-1.0 cm) 多量。焼土 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| カマド 37 暗茶褐色土 | 粘土層。KP・ローム粒子 (-0.2 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| カマド 38 暗茶褐色土 | 粘土層。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。 |

第21図 第8号竪穴建物跡実測図(1)

第3章 確認された遺構と遺物

SI-8 掘り方



- SI-8
- 31 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.8 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒色土ブロック (-0.3 cm) 微量。白色粒子少量。橙色粒子 (土器か) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 32 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.3 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・茶褐色土ブロック (-1.2 cm)・白色粒子少量。焼土粒子 (土器か) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 33 暗褐色土 32層に焼土粒子・土器片多量。黒色土ブロックなし。
 - 34 暗褐色土 33層に土器片少量。
 - 35 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.5 cm)少量。KP 粒子 (-0.2 cm)多量。KP ブロック (-0.8 cm)微量。白色粒子少量。炭化物粒子 (-0.2 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 36 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
 - 37 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-1.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子微量。固くしまる。粘性あり。
 - 38 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm)含む。ロームブロック (-1.5 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)少量。黒色土ブロック (-0.3 cm)微量。白色粒子少量。しまり強。粘性あり。
 - 39 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.8 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子・橙色粒子 (-0.1 cm/土器か) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 40 暗黄褐色土 ローム粒子含む。ロームブロック (-2.0 cm)・KP ブロック (-0.3 cm)・白色粒子・土器粒子少量。しまりあり。粘性あり。
 - 41 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
 - 42 暗黒褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.1 cm)・茶褐色土ブロック (-1.0 cm)・白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
 - 43 暗褐色土 ローム粒子・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 44 暗黒褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。暗褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む。焼土粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 45 暗黒褐色土 44層のローム粒子・ロームブロック (-0.5 cm) 少量。
 - 46 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 47 暗茶褐色土 ロームブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 48 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm)・茶褐色土ブロック (-1.2 cm)・白色粒子少量。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。白色粘土ブロック (-1.5 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 49 暗白褐色土 白色粘土粒子~ブロック (-1.0 cm) 主体の48層。しまりやや強。粘性あり。
 - 50 暗茶褐色土 ロームブロック (-0.5 cm) 多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。黒褐色土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 51 暗黒褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。暗褐色土ブロック (-1.0 cm) やや多量。炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
 - 52 暗黄褐色土 ローム粒子~ロームブロック (-1.0 cm) 主体。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。焼土粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 53 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm)・ロームブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 54 暗褐色土 ローム粒子~ロームブロック (-0.3 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 55 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。焼土ブロック (-1.0 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
 - 56 暗褐色土 ロームブロック (-1.5 cm) と暗黒褐色土の混合層。
 - 57 暗黄褐色土 ローム主体。上面に暗褐色土が被る。しまり強。粘性あり。
 - 58 暗黄褐色土 ロームブロック主体。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-1.5 cm) 含む。白色粒子・橙色粒子 (-0.1 cm)・ガラス質粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 59 暗褐色土 ロームブロック (-5.0 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
- SI-8 柱穴
- 60 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm) 含む。茶褐色土ブロック (-1.2 cm)・白色粒子少量。白色粘土粒子~ブロック (-0.5 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
 - 61 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・茶褐色土ブロック (-1.2 cm)・黒褐色土ブロック (-1.0 cm)・白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。

第22図 第8号竪穴建物跡実測図(2)

62	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-2.0 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。白色粘土粒子～ブロック (-0.3 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.3 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
63	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粘土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
64	暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm)・ロームブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・黒褐色土ブロック (-0.5 cm) 微量。白色粘土ブロック (-0.5 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。
65	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
66	暗黄褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.0 cm) 主体。しまりやや強。粘性あり。
67	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子～ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子・橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。白色粘土粒子 (-0.2 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
68	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土粒子～ブロック (-0.3 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
69	暗褐色土	68層の白色粘土少量の層。
70	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。白色粘土粒子～ブロック (-0.8 cm) 多量。炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。土器微細片含む。しまりやや強。粘性あり。
71	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。白色粘土粒子～ブロック (-1.0 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.3 cm) 微量。土器微細片少量。しまりやや強。粘性あり。
72	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
73	暗茶褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。炭化物粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
74	暗茶褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。ロームブロック (-0.8 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
75	暗茶褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。橙色粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
76	暗茶褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.5 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。炭化物粒子含む。しまりやや弱。粘性あり。
77	暗茶褐色土	ロームブロック (-0.3 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。土器微細片少量。しまりあり。粘性あり。
78	暗茶褐色土	ロームブロック (-0.4 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
79	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・黒褐色土ブロック (-0.3 cm) 少量。白色粒子・橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
80	暗黄褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。黒褐色土ブロック (-0.3 cm) 少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
81	暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) やや多量。KP 粒子～ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子少量。黒褐色粒子 (-0.2 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
82	暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。橙色粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
83	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
84	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-0.5 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。黒土ブロック (-0.3 cm)・白色粒子・炭化物粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
85	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.8 cm) 含む。KP ブロック (-0.3 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
86	暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
87	暗黄褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.2 cm) 主体。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
88	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
89	暗褐色土	ロームブロック (-0.3 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
90	暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP ブロック (-0.3 cm)・白色粒子・炭化物粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
91	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.8 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒褐色粒子 (-0.2 cm)・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
92	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
93	暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。黒褐色粒子 (-0.2 cm)・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
94	暗茶褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。黒褐色粒子 (-0.2 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
95	暗黄褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
96	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.5 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm)・黒褐色粒子 (-0.2 cm)・白色粒子微量。土器細片少量。しまりやや強。粘性あり。
97	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.3 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。黒褐色粒子～ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
98	暗褐色土	ローム粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・黒色ブロック (-0.3 cm)・土器微細片微量。しまりやや強。粘性あり。
99	暗黄褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.2 cm) 多量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
SI-8	カマド	
1	暗褐色土	建物跡覆土か。
2	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。赤色変化した白色粘土粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
3	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 微量。白色粒子少量。白色粘土粒子 (-0.2 cm) やや多量。焼土ブロック (-0.3 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。
4	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粘土粒子～ブロック (-0.5 cm) 多量。焼土粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.1 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
5	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。白色粘土ブロック (-0.3 cm)・焼土粒子 (-0.2 cm) 少量。炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
6	暗赤灰褐色土	18層に似る。
7	灰暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。焼土粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
8	暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土ブロック (-0.3 cm) やや多量。焼土粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
9	灰暗褐色土	白色粘土粒子主体。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粘土ブロック (-1.0 cm) 含む。焼土ブロック (-0.3 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
10	灰暗褐色土	白色粘土粒子主体。白色粘土ブロック (-0.8 cm) 含む。ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子・焼土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
11	白灰褐色土	13層より白色粘土粒子～ブロック多量。
12	白灰褐色土	白色粘土粒子～ブロック (-1.0 cm) 主体。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
13	白灰褐色土	12層+KP ブロック (-0.3 cm) 微量。焼土ブロック (-0.3 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。
14	暗赤灰褐色土	KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。被熱して薄赤色に変色した白色粘土ブロック (-5.0 cm) 多量。白色粘土ブロック (-5.0 cm)・焼土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。層全体が薄赤色。
15	14層のブロックが小さい層。	
16	暗赤灰褐色土	KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。被熱して薄赤色に変色した白色粘土ブロック (-1.0 cm) 多量。白褐色粘土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
17	16層より薄赤色強い。	
18	暗赤褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm)・白色粒子微量。白色粘土粒子 (-0.2 cm) 含む。焼土粒子～ブロック (-3.0 cm) 多量。しまり強。粘性あり。
19	灰白褐色土	白色粘土粒子～ブロック主体。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。焼土粒子～ブロック (-0.5 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
20	暗灰褐色土	灰白色土 (灰か) 主体。焼土ブロック (-0.3 cm) 多量。しまりあり。粘性あり。
21	暗灰褐色土	白色粘土粒子～ブロック (-1.0 cm) 主体。焼土ブロック (-0.5 cm) 少量。炭化物ブロック (-1.0 cm) 多量。しまり強。粘性あり。
22	黒褐色土	焼土ブロック (-0.8 cm) 多量。火床に近い。
23	暗褐色土	ロームブロック (-0.8 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm)・白色土ブロック (-0.8 cm) 少量。
24	灰白褐色土	白色粘土ブロック主体。白色粘土の純層ではないので、ソデ外側に貼り付けたものか。
25	28層と灰褐色粘土混合層。	
26	暗灰褐色土	KP ブロック (-0.3 cm)・暗灰褐色粘土ブロック微量。白色粘土ブロック (-1.0 cm)・炭化物粒子 (-0.2 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
27	暗灰褐色土	ロームブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土ブロック (-1.0 cm) 含む。焼土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
28	暗黄褐色土	ロームあるいはKP下粘質土。
29	暗灰褐色土	27層の底層の炭化物層。しまり強。粘性あり。
30	暗黄褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.0 cm) 主体層。KP 粒子 (-0.2 cm)・34層の暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。焼土ブロック (-0.3 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
31	30層と同様か。	
32	暗黄褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.0 cm) 多量。KP 粒子 (-0.2 cm)・黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 少量。焼土ブロック (-0.3 cm) 微量。炭化物粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
33	暗白黄褐色土	KP ブロック (-0.5 cm) 主体層。下層の暗黄褐色土の上部に貼ったものか。しまり強。粘性あり。
34	黒褐色土	ローム粒子～ブロック (-1.0 cm) 含む。KP ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
35～38	第21図に記載	

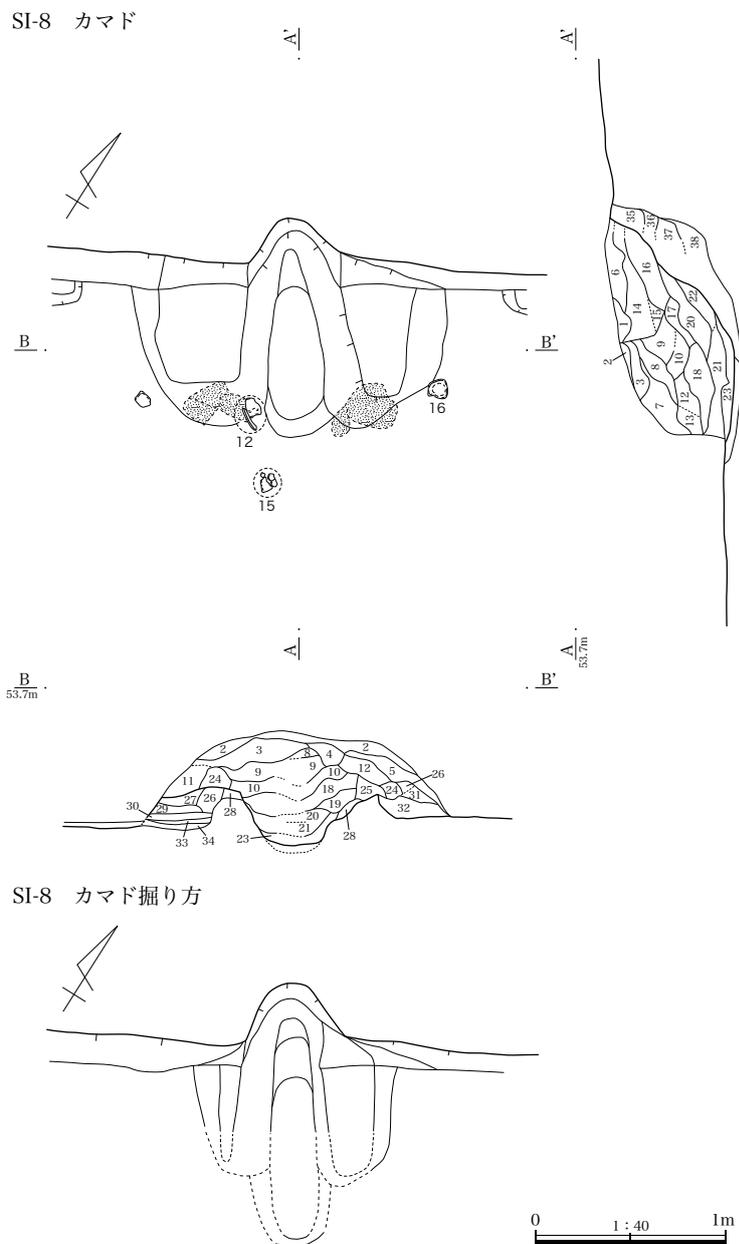
第23図 第8号竪穴建物跡実測図(3)

柱穴は可能性のあるものを含めて p1 ~ 16 を確認した。各柱穴の堆積土は似るが、土層の斉一性は観察できない。p1 は 60 ~ 62 層が抜き穴痕、63 層が柱痕あるいは抜き穴、64 ~ 66 層が掘り方、p2 は 67 ~ 69 層が柱痕、70 ~ 72 層が掘り方、p3 は 1 層が抜き穴、74 ~ 76 層が柱痕、77・78 層が掘り方とみられる。p4 は新・旧 2 穴が切り合う。79 ~ 89 層は新しい柱穴の堆積とみられ、79 ~ 82 層は抜き穴、83 ~ 85 層は柱痕、86・87 層は掘り方であろう。88 ~ 92 層は古い柱穴の堆積とみられ、88 層は抜き穴、89 層は柱痕、91・92 層は掘り方であろう。

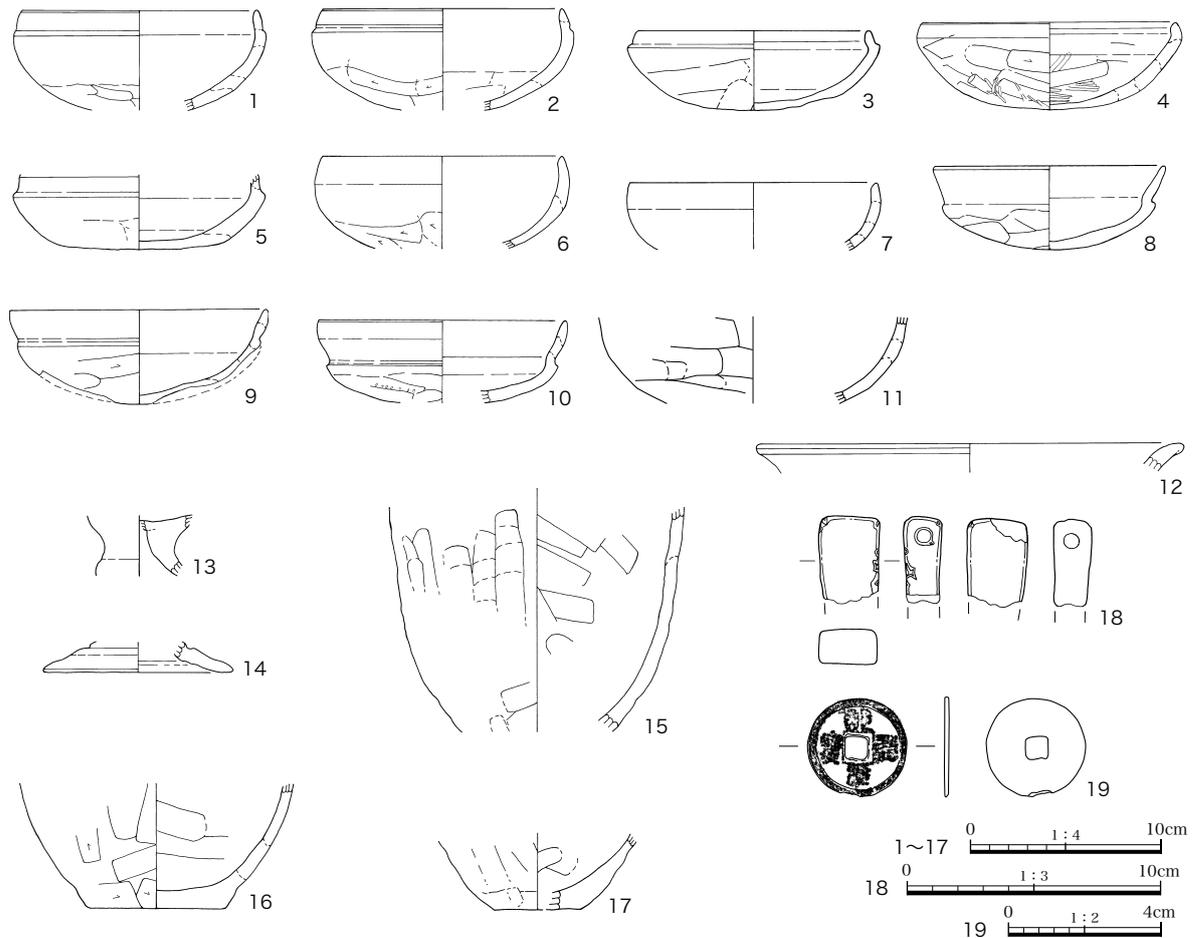
南壁寄りに焼土の堆積が確認される。堆積レベルは、南西隅部付近で 52.895m, 南壁中央部付近で 52.92m であり、カマド前付近の堆積土層 A 群と同様である。

柱穴 前述のとおり p1 ~ 16 を付した。p1 ~ 4 は a 期、重複する p7 ~ 10 は b 期の支柱穴であろう。

p4・10 は床面精査の際に 2 穴を確認し、覆土を除去したため、両穴とも平面図に図示した。底面のレベル・現状の床面からの深さは、p1:52.3m・64.5cm、p2:52.51m・44.0cm、p3:52.22m・66.5cm、p4:52.14m・69.5cm、p7:52.27m・66.0cm、p8:52.25m・76.5cm、p9:52.3m・54.0cm、p10:52.23m・55.0cm である。北列は b 期が深く、南列は a 期が深い。柱穴間の距離は、a 期では、p1-2:3.0m、p2-3:2.46m、p3-4:3.0m、p4-1:2.44m である。東西 3.0m 前後・南北 2.44 ~ 2.46m であり、東西が長く、南北が短い建物跡の規模に物理的に合う。b 期では、p7-8:2.8m、p8-9:2.9m、p9-10:2.95m、p10-7:2.95m である。柱間と壁までの距離は、残存する a 期で約 120cm である。b 期では、EP-6・10 の掘り込みを壁溝などの床面施設とした場合、70 ~ 80cm である。平面図に図示した p5・6、掘り方図に図示した p11・12 の帰属は明確にできなかった。p12 については柱穴であるか判然としない。底面のレベル・現状の床面からの深さは、p5:52.705m・18.5cm、p6:52.76m・13.0cm、



第24図 第8号竪穴建物跡（カマド）実測図



第25図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5表 第8号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口:[12.5] 底:— 高:(5.2)	内:口~体ヨコナデ 外:底ヘラケズリ 体ヒビ(焼成前に乾かし過ぎたか) 口~口稜下ヨコナデ	内:10YR7/3 にぶい 黄橙 外:10YR6/1 褐灰	緻密 白色粒子・黒色粒子・ガラス質粒子 やや良	A区SI-8 No.4 口~体部 1/6 残存
2 土師器 杯	口:[12.6] 底: 高:(5.3)	内:体ヘラナデ→口~体上ヨコナデ 口~体ウルシ仕上げ 口一部を除きすでに剥げていて器面が薄黒い程度 外:体ヘラケズリ(ヨコ)→体上ナデ→口ヨコナデ	割れ口:10YR8/3 浅黄橙 内:10YR5/2 灰黄褐 外:10YR4/1 褐灰	白色粒子・黒色ガラス質粒子少量 良	A区SI-8 北西, 北東, 2層 口~体部 1/3 残存
3 土師器 杯	口:12.4 底:— 高:4.2	内外面被熱により劣化 外面底部は顕著な発泡状の剥離 この為器面には小さな凹凸が顕著に残る 内面体部も底部を中心に発泡状の剥離 この為仕上げの痕跡は不明瞭 内:ヨコナデ 焼成時とみられる黒斑がみられるため不明瞭であるが一部漆が残るか 外:口ヨコナデ 体ヘラケズリ(ヨコ)が一部残る	内外:5YR7/6 橙	白色粒子・黒色粒子・透明ガラス質粒子 良	A区SI-8 No.5 完存
4 土師器 杯	口:13.4 底:— 高:4.6	内:磨滅 体ヘラナデか→口ヨコナデ 被熱により赤色変化する部分もあるが、ウルシ仕上げのように黒い 体:体ヘラケズリ 口ヨコナデ	内外:10YR7/4 にぶい黄橙	緻密 白色粒子・黒雲母粒子少量、赤色粒子微量 やや良	A区SI-8 No.5, カマド 口~体部 2/3 欠損
5 土師器 杯	口:[12.5] 底:— 高:(3.9)	口:内傾か直立 横楕形 底:やや扁平気味 内:ヨコナデ 底磨滅 体下~底 発泡状剥離少量 外:体~底 発泡状剥離 特に底部に顕著 体ヘラケズリ 口ヨコナデ	内外:10YR8/3 浅黄橙	緻密 白色粒子・赤色粒子・黒色ガラス質粒子微量 やや良	A区SI-8 No.2, 2層SB, 南西 口~体部 1/3 残存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
6 土師器 坏	口:[12.6] 底:— 高:(4.8)	内:口~体ヨコナデ 外:体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 体上にヒビ 成形時の乾燥によるものか 内~外(口) ウルシ仕上げ ほぼ剥がれており、器面が薄黒い程度	割れ口:10YR8/3 浅黄橙 内外:10YR5/1 褐灰	やや緻密 白色粒子・黒色ガラス質粒子少量、砂粒微量 良	A区SI-8 2層 口~体部 1/4 残存
7 土師器 坏	口:(13.0) 底:— 高:[3.5]	稜不明瞭 内:口~体ヨコナデ 口端の一部に漆が残る 外:口ヨコナデ 体 成形時の乾燥によるヒビか 口端の一部にウルシが残る	内外:10YR7/4 にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子微量 良	A区SI-8 北西 口縁部 1/6 残存
8 土師器 坏	口:12.2 底:— 高:4.4	外面口~内 ウルシ処理 内:口~体ヨコナデ→ウルシ処理 底部は凹状に小さくくぼむ 外:口ヨコナデ 体ヘラケズリ後 口下をナデか 体部ウルシ処理は主にナデ部分に施されるがヘラケズリ上位にも部分的に観察される 口と口直下の体ナデ部を目安に施されたものか 口ヨコナデは稜直上をヨコナデした際に薄目に入り込み凹状となる	内外:10YR8/3 浅黄橙	白色粒子・黒色ガラス質粒子少量 良	A区SI-8 No.1 口縁部一部欠損
9 土師器 坏	口:13.4 底:— 高:5.0	内:磨滅 底ヒビ 体ナデか→口ヨコナデ 外:体剥落顕著 体ヘラケズリ→口ヨコナデ・体上ナデか	内外:5YR6/6 橙	緻密 白色粒子・黒色粒子・ガラス質粒子(微粒) 良	A区SI-8 No.3, 北西 1/2 残存
10 土師器 坏	口:[13.2] 底:— 高:(4.3)	内:ナデか→口~体ヨコナデ 外:体ヘラケズリ→体稜下ナデ→口ヨコナデ ヘラケズリの深さが不規則で、厚さ2.5mmほどの部分もある 体上位に金属製品によるとみられる刃跡状の痕跡 内~外(口上位) ウルシ仕上げ 内底部のウルシは剥がれているか	内外:10YR7/3 にぶい黄橙	やや緻密 黒色粒子少量、黒色ガラス質粒子微量 良	A区SI-8 北東 1/3 残存
11 土師器 坏	口:— 底:— 高:(5.7)	最大径:(16.3) ウルシ仕上げ 内:磨滅 外:磨滅 体ヘラケズリ(ヨコ)か	内外:10YR8/3 浅黄橙	黒色ガラス質粒子少量、白色粒子微量 良	A区SI-8 カマド No.4, 南西 体部 1/4 残存
12 土師器 甕	口:[22.0] 底:— 高:(1.5)	頸部がゆるやかな「く」になると思われるので、7世紀代(7世紀前葉)の可能性が高い	内外:10YR7/4 にぶい黄橙	白色粒子・赤色粒子少量、砂粒・黒色ガラス質粒子微量 良	A区SI-8 カマド No.3 口縁部 1/6 残存
13 土師器 高坏	口:— 底:— 高:(3.2)	坏脚接合部 坏 内:底ヘラナデ→口~体ヨコナデ 痕跡薄い 外:剥落のため不明 脚 内:ヨコナデ 外:接合部 ヘラケズリ(タテ)	内外:10YR7/4 にぶい黄橙	やや緻密 白色粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区SI-8 2層 脚部 1/2 残存
14 土師器 高坏	口:— 底:[10.0] 高:(1.6)	脚裾部 内:裾ヨコナデ 外:裾ヨコナデ 脚部は僅かに残る 仕上げ不明だが、深く入り込んだ跡が残るため、ヘラケズリの可能性が考えられる 仕上げは器面の充分な乾燥によるとみえるヒビが見られる	内外:2.5Y7/2 灰黄	やや緻密 白色粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区SI-8 P2 底部 1/6 残存
15 土師器 甕	口:— 底:— 高:(12.0)	最大径:(15.6) 体:砲弾型 16と同一個体か 内:ヘラケズリ→ナデか ヘラケズリの痕跡が僅かに残る 発泡状の剥離顕著 外:ヘラケズリ 体タテ 体下ヨコ タテのヘラケズリは胎土に工具が引っかかった痕跡あり 粘土の乾燥によるためか	内:7.5YR7/6 橙 外:5YR6/6 橙	粗 砂粒多量・黒色ガラス質粒子微量 良	A区SI-8 カマド, カマド2, カマド3, 南東 体部 1/3 残存
16 土師器 甕	口:— 底:7.0 高:(6.6)	最大径:(7.2) 底部からの立ち上がりに丸味がある 内:磨滅 剥離 ヘラケズリ(ヨコ)にみえる 外:体ヘラケズリ(タテ)→底周ヘラケズリ(ヨコ) 底:ヘラケズリ 概ね一方向	内:10YR8/3 浅黄橙 外:10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 白色粒子少量、砂粒多量、黒色ガラス質粒子微量 やや良	A区SI-8 カマド No.1 底部完存
17 土師器 甕	口:— 底:[4.5] 高:(4.0)	15と同一個体の可能性あり	内:7.5YR7/6 橙 外:5YR6/6 橙	粗 砂粒多量、白色粒子少量、黒色ガラス質粒子微量 良	A区SI-8 カマド, 19層 底部 1/3 残存
18 石製品 砥石	長:3.3 幅:2.3 厚:1.4	最大長:3.5 最大幅:2.45 20.78g 破砕面以外全面磨滅 欠損部に向けて窄まる形状かつ器厚が薄くなるため、欠損部付近が個体の中央部とみられる 図上の裏面の磨滅が著しく、主砥面であろう もしくは図上表面の右から左側面に向けた片面穿孔とみられる			A区SI-8 床下 下半部欠損
19 古銭	長:2.6 幅:2.6 厚:0.1	明道元寶 重:2.76g			A区SI-8 北東隅 一部欠損

p11:52.61m・38.0cm、p12:52.6m・26.0cmである。東西列・南北列の底面のレベルはほぼ同様である。主柱穴に比べ浅いが、柱の配置はa期のラインに沿う。p13～16は柱穴であるか判然としない。p13・14は第22図に図示、p15・16の底面レベルは52.75m・52.54m、周辺の掘り方面からの深さは2.0cm・11.0cmである。

壁溝 南・南東壁を除き確認した。谷部にあたり把握しきれなかった可能性が残る。貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から1527.66gが出土する。特に、覆土33層を主体とする西壁付近の堆積層31～34層は土師器の小片を包含する。第21図に示した遺物20は不掲載であるが便宜上番号を付した。

推定できる出土層序は、堆積土A群:3・4・8・39層中から土師器坏(1片1.37g)・土師器甕(1片28.88g)、堆積土B群:33層中から土師器坏口縁部a(蓋模倣1片・体部1片12.08g)、粘土塊24.17g、堆積土C群:20層中から土師器坏a(口縁部身模倣1片)2.64g・土師器甕(1片4.27g)、21層中から土師器坏a(1片3.84g)、土師器甕(1片5.24g)、堆積土C・D群:9、堆積土D群:18層中から土師器坏a(1片18.96g 7層中から出土の小片と接合)堆積土E群:5・6・7層中から土師器坏b(口縁部身模倣1片5.24g)、土師器坏高环坏脚接合部(1片12.72g)・土師器甕(1片12.02g)・土師器微細片(3.74g)土師器とみられる破片(1片8.13g)、粘土塊2.24gである。

床面直上からは土師器坏b口縁部片(蓋模倣)が出土する。A～D群からの出土とみられる。

柱穴からは、p1:土師器坏a口縁部片(身模倣1片3.86g)、p2:土師器坏b口縁部(蓋模倣)1片・体部b2片・d1片22.34g、粘土塊11.29g、p3:土師器坏b口縁部(蓋模倣)1片・a体部1片6.22g、土師器甕体部1片6.56g、p6:土師器坏d体部2片4.03gが出土する。

覆土からの出土遺物は、セクションベルトを基準に4区画から取り上げた。南東部からは、土師器坏11片(a5片・b2片・c4片)59.81g、土師器甕(薄手)2片5.18g、土師器甕13片191.34g、土師器鉢類1片20.39g、土師器微細片1.63gが出土する。南西部からは、土師器坏類21片(a10片・b8片・不明3片)148.8g、土師器甕(薄手)10片51.37g、土師器甕5片52.47g、土師器甕(常総形)1片5.42g、土師器微細片4.31g、須恵器甕2片16.42g、粘土塊2片5.6gが出土する。不掲載の土師器坏aは北西部・北東部の破片が接合、5は北西部・南西部の破片が接合する。北東部からは4・7・8・10の他、土師器坏42片(a口縁部身模倣5片12.65g・体部10片76.58g d口縁部身模倣8片44.96g・蓋模倣3片13.44g・体部16片81.76g)・土師器高环脚部片1片4.7g・土師器甕類20片153.24g・土師器微細片7片1.46g・粘土塊7片36.7gが出土する。北西部から土師器坏8・9の他、土師器坏25片(a10片28.19g・b1片2.49g・d11片33.37g・e1片0.73g・不明2片6.52g)、土師器鉢類4片27.18g、土師器甕(薄手)5片12.94g、土師器甕8片55.75g、土師器甕(常総型)1片2.85g、土師器微細片26.4g、粘土塊15.01gが出土する。

この他、覆土中から土師器甕体部2片6.52gが出土する。第21図20は土師器長胴甕小片である。

掘り方からは、土師器坏4片16.5g(a2片・b2片)、土師器甕体部8片84.38g、須恵器坏口縁部1片(益子産)2.14g、砥石18、粘土塊3片8.58gが出土する。

堆積土E群については、7層・床面2～3cm上(5)、E群・18層(不掲載)が接合したため、廃絶に関わる埋め戻し土である可能性を留意したい。

なお、土師器坏7は何れも極めて小さい破片であり、図に復元した大きさに誤差が伴う可能性があるが、時期を判別するため掲載した。

出土遺物 須恵器坏1片、須恵器甕2片、図示した土師器坏の他、112片602.43g、土師器高坏13・

14の他2片 17.423g、土師器鉢類5片 57.57g、土師器甕類80片 678.34g、器種不明の土師器片4片 12.21g、土師器微細片37.54g、粘土塊103.59gが出土する。北東部からの出土が多い。出土する平面的な位置や高さ、接合状況、器種の出土比からは建物跡に伴う遺物は廃絶時に建物跡外に持ち出された可能性が考えられる。

須恵器は掘り方から坏1片が出土する。口縁部の小片で寸法・時期は判然としない。益子産とみられる。

土師器坏は寸法や時期の特定が困難な小片も多いが、何れも模倣坏とみられる。概ね、内面～外面口縁部をヨコナデ、外面はヘラケズリを施す。外面稜下はヘラケズリの痕跡が薄くナデが施されたとみられる。また、ナデとみられる部分にヒビが観察される個体があり、整形前の乾燥による可能性も考えられる。口縁端部に剥落がみられる個体、片口状の欠け口が観察される個体がある。器面の様子は、9が緻密な胎土で色調が赤色である以外は、やや緻密な胎土で色調が橙色・白色である。ウルシ処理を施すものは内面から外面口縁部にかけて観察される。このうち、器面が橙色の個体:9他11片、橙色でウルシ処理の個体:30片、白色の個体:5他16片、白色で推定を含めウルシ処理の個体:1・7・8・10・11他46片である。

本遺構の時期は概ね7世紀前葉と考えられるが、掘り方から出土する小片は6世紀末葉～7世紀前葉の可能性がある。南西部からの出土遺物には常陸型の甕1片、須恵器甕2片を含む。常陸型の甕片は口縁端部を摘み上げる小片、甕片はタテ方向に平行たたきが施される。8世紀以降の破片とみられ、混入した可能性が考えられる。また、北東隅から北宋銭19「明道元寶」が出土する。層序は未確認であるが40層に相当する位置にある。後世の混入遺物の可能性が考えられる。

火処 カマドを火処とする。北壁中央部付近に位置する。煙道は北壁を掘り込み建物跡外へ延びる。覆土の堆積状況から2時期以上が推定される。現状のカマドはa期に伴うが、構築時期は定かではない。覆土は39層を確認した。1層はカマド被覆土あるいは攪乱層、2～5層は焼土・白色粘土を含む。カマドの被覆層であろう。6～11層も白色粘土・焼土を含む。7層は床面覆土48層から続く層であろう。カマドの埋土とみられる。12～15層は全体的に被熱する。12・13層は壊れたカマド材、14・15層は天井部あるいは崩落したカマド材と考えられる。16～19・22層は焼土、20・21層は灰とみられる覆土、23層はロームを含む。16～19・22層は焚き口に近いほど堆積する焼土の量が多い。火床に関連する堆積と判断できる。24～34層はソデの構築層、35～39層は掘り方層であろう。覆土の堆積状況からは、廃絶時に火床を浚い、浚った土である23層（ロームを含む）→20・21層（灰・焼土を含む）→16～19・22層（焼土を含む）で火床を埋め戻し、焚き口付近のカマド前方部を破壊、12～15層堆積後、6～11層でカマドを埋めた可能性を指摘できる。6～11層は床面覆土48層下にあることからカマド部分のみの埋土と判断できる。カマド最上層部の2～5層は床面覆土48・49層上に堆積することから、床面と並行してカマドを埋め戻した、建物被覆層と考えられる。また、床面の項目で記述した南壁付近の焼土は床面覆土最下層となるA群のレベルに相当する層である。火床を浚った際の焼土であるとすれば、6～11層でカマドを埋め戻した後、床面の埋め戻しが始まり、建物が埋没した可能性が考えられる。

ソデは、地山の粘土層をソデ芯として掘り残す。ソデは、下層の29～34層と上層の24～27層に大別できる。下層の29～34層を見ると、右ソデは粘土を多く含む31・32層（ローム主体層）が上下に堆積し、左ソデは34層（ロームを含む）・33層（KP主体層）・30層（ローム主体層）・29層（炭化物主体層）が薄く水平に堆積する。左右のソデとも水平な堆積であるが、左ソデの方が密な堆積であり、左右のソデの堆積には相違がある。作業の手間数が多い造りを構築時と仮定するならば、左ソデはカマド古段階、右ソデはa期の床面に伴う可能性が考えられる。左ソデ構築土に含まれる炭化物が旧カマドに由来するものであるとす

れば、右ソデはカマド構築時、左ソデはa期の床面に伴う可能性が考えられる。28層はソデ芯上に堆積し、粘土の量が多い点は左右ソデに共通する。a期の床面に伴う構築であろう。上層の24～27は左右で堆積順が異なるが同一層であり、a期の床面に伴う構築層と考えられる。

掘り方は35～39層を確認した。39層は38層と大過ないとの現地所見がある。火床下部から奥壁を粘土層(37～39層)で、カマド上部をロームや鹿沼軽石層などの地山層(35・36層)を構築する。

本カマドは、a期に伴い、右ソデ及び左ソデ芯上部までを壊し作り替えたものと判断できる。

遺物出土状況 覆土中から135.91gが出土する。土師器坏は1・11の他5片43.4g(a2片・b身模倣1片・体部2片)、土師器甕は12・15・16・17他4片73.27g及び被熱の著しい微細片16.21g、土師器高坏1片3.03gが出土する。土師器甕のうち1片は掘り方出土の破片と接合する。

1はカマド7層・床面48層に相当する高さから出土する。11はカマド12層と床面南西部から出土する破片が接合する。12・15・16はカマド前面から出土する。15は床面49層に相当する高さでカマドから出土する破片が接合する。16は床上6.0cm上から出土する。17は床面39層(A群)とカマド内から出土する破片が接合する。床面49層・カマド12・13層に相当する左右ソデ前方には構築材とみられる粘土塊が出土する。何れもカマド埋土中のものであろう。後述のとおり、カマドと床面出土の接合片があり、遺物は散在する状況にある。本遺構の遺物は覆土の堆積に伴う遺物と考えられ、廃絶にあたって遺物は建物外に持ち出されたと推測される。カマドと掘り方出土の接合については床面直上の堆積土と掘り方埋土を見誤った可能性が残る。

出土遺物 不掲載の土師器坏は床面出土の坏と同じ特徴が観察される。口縁部片は2片で何れも口縁部の形状は②で口縁部は丸みを持って内傾する。器面の色調は白色である。体部～底部は4片で、色調は白色、ウルシ仕上げが観察される個体は2片、観察されない個体は2片である。土師器高坏は裾部の小片である。13・床面出土の不掲載小片と似るが接合しない。

土師器甕12・15は近接して出土するが同一個体であるかは判然としない。15・17は胎土・焼成が極めて似ており、同一個体の可能性が高い。また、15・17と似た体部片がカマド内2片、北東部1片、掘り方1片ある。この他の甕類は、カマドと掘り方からの体部接合片、この体部接合片と似た体部片1片、頸部片2片、被熱し赤色変化する小片12片16.21gが出土する。

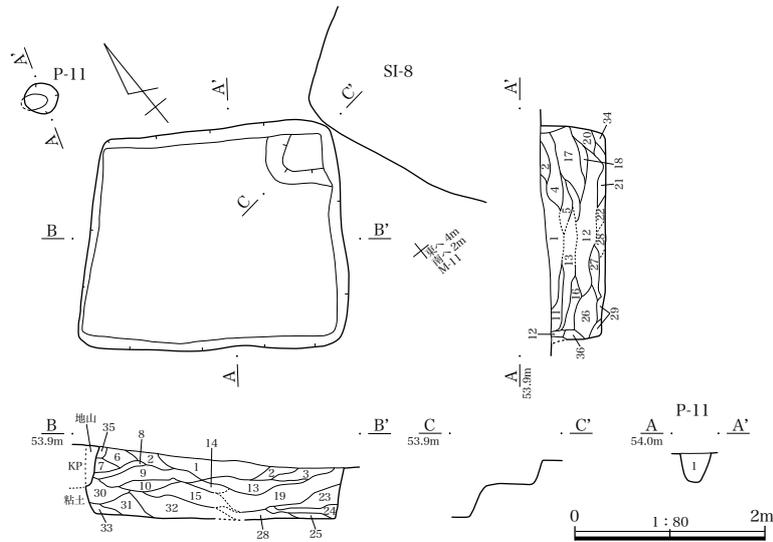
土師器高坏は裾部の小片である。

第9号竪穴建物跡(SI-9)(第26図 写真図版五)

位置 A区L-10に位置する。現状で東側の谷に向けた斜面地にある。東側の谷に並行し、磁北には沿っていない。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模 方形状であるが、谷に向けてやや広がっている。一辺の長さは、東西2.46～2.82m、南北2.25～2.44mである。深さは谷部への傾斜のため、丘陵側0.72m・谷側0.53mである。確認面のレベルは丘陵側53.78m・谷側53.55mである。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。N-37°-Eである。床面 鹿沼軽石層下の粘土層を床面とする。掘り方は確認されない。壁は確認面から地山-鹿沼軽石層-鹿沼軽石層下の粘土層に至る。床面のレベルは概ね53.0mである。谷部へ向かう傾斜等は確認されないが、西隅部付近の床面レベルは53.05mであり、やや高い。東隅部の確認されたステップ状の掘り残しの対角にあたる。床面中央部に炭化物が確認される。火熱の痕跡は認められない。

覆土 36層を確認した。35・36層は壁の崩落層であろう。SP-A・Bでは土層の特徴は似るが、交点以外の土層の異同については判じ得なかった。このため、交点の土層に先に番号を付し、SP-A・Bごとに付番した。

第3章 確認された遺構と遺物



SI-9

- 1 暗褐色土 ローム粒〜ロームブロック (-1.0 cm)・KP ブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒 (-0.2 cm)・暗茶褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子・暗黒褐色ブロック (-0.5 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
- 2 暗褐色土 1層より濃色。ローム粒・ロームブロック (-1.0 cm)・KP 粒〜ブロック (-1.0 cm)・暗褐色ブロック (-0.8 cm) 含む。暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粘土ブロック (-0.8 cm)・白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒 (-0.3 cm)・白色粒子微量。暗褐色ブロック (-1.2 cm) 多量。KP 粒 (-0.2 cm) 少量。しまりややあり。粘性あり。
- 4 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒〜ブロック (-1.2 cm) やや多量。暗褐色ブロック (-1.0 cm)・黒褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 5 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・KP 粒〜ブロック (-0.5 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。暗褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒 (-0.2 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。
- 7 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。暗黒褐色ブロック (-0.8 cm)・KP 粒 (-0.2 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 8 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.8 cm)・暗褐色ブロック (-0.8 cm) 含む。KP 粒〜ブロック (-0.8 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 9 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・KP 粒〜ブロック (-1.0 cm) 少量。暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 含む。白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。
- 10 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒〜ブロック (-1.2 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。
- 11 暗黄褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm) 多量。KP 粒 (-0.5 cm) 含む。暗黒褐色ブロック (-1.2 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 12 暗茶褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・KP 粒 (-0.2 cm) 少量。炭化物粒・白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 少量。暗褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒〜ブロック (-1.2 cm) 多量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 14 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.3 cm)・KP 粒〜ブロック (-0.8 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒微量。しまりあり。粘性あり。
- 15 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・KP 粒 (-0.2 cm) 少量。暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 16 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.8 cm)・KP 粒〜ブロック (-1.0 cm) 含む。暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 17 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm)・KP 粒・暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 含む。KP ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 18 暗黒褐色土 ローム粒 (-0.2 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒 (-0.3 cm) 含む。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。KP など黄色粒多く、暗黄褐色に近い。
- 19 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.2 cm)・KP 粒 (-0.2 cm) 多量。白色粘土粒〜ブロック (-0.5 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.5 cm) 少量。暗褐色ブロック (-3.0 cm) 含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 20 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.2 cm) 含む。KP 粒〜ブロック (-1.0 cm) やや多量。暗褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりやや弱。粘性あり。
- 21 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.3 cm)・KP 粒〜ブロック (-0.8 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm)・炭化物粒 (-0.5 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 22 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.8 cm)・KP 粒〜ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒 (-0.3 cm) 微量。しまりややあり。粘性あり。
- 23 暗褐色土 ローム粒 (-0.3 cm) 多量。KP 粒〜ブロック (-1.2 cm) 含む。暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。
- 24 暗黄褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.2 cm) 多量。KP 粒 (-0.2 cm) 少量。しまりややあり。粘性ややあり。
- 25 暗黒褐色土 ローム粒・KP 粒少量。しまりあり。粘性あり。
- 26 暗黄褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm) 多量。KP 粒〜ブロック (-0.8 cm) 含む。暗黒褐色ブロック (-1.5 cm) 少量。しまりややあり。粘性あり。
- 27 暗黄褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 28 暗黄褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm)・KP 粒 (-0.2 cm) 多量。暗黒褐色ブロック (-1.2 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
- 29 暗黄褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm) やや多量。白色粒子微量。しまりやや弱。粘性あり。
- 30 暗黒褐色土 ローム粒 (-0.2 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒 (-0.3 cm) 多量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 31 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・暗褐色ブロック (-1.5 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒〜ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 32 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒 (-0.2 cm)・KP ブロック (-2.0 cm) 少量。暗褐色ブロック (-1.0 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 33 暗黒褐色土 ローム粒〜ブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒〜ブロック (-0.5 cm)・暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 34 暗黒褐色土 ローム粒 (-0.3 cm)・KP 粒〜ブロック (-1.2 cm) 少量。暗黒褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。
- 35 暗黒褐色土 KP 粒 (-0.2 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
- 36 暗褐色土 ローム粒〜ブロック (-0.5 cm)・KP 粒 (-0.1 cm) 含む。暗黒褐色ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子微量。しまりややあり。粘性あり。

P-11

- 1 黒褐色土 KP 粒 (-0.2 cm) やや多量。白色粒子微量。炭化物粒 (-0.2 cm) 少量。しまりやや弱。粘性あり。

第26図 第9号竪穴建物跡・第11号ピット実測図

覆土は混入物によってA～G群に分別が可能である。最上層はA群(1～5層)で暗褐色土および暗茶褐色土、B群(6～11層)は黒褐色土、C群(13・14・19・21・22層)は白色粘土や炭化物、D群(15～18層)はローム・鹿沼軽石・暗褐色土および暗茶褐色土・黒褐色土、E群(23・24・26～29層)はローム、F群(20・30～32層)は鹿沼軽石、G群(25・33・34層)はローム・鹿沼軽石を含む。最下層付近に混入物の少ないG群が堆積後、SP-AではF・E群、SP-BではE・F群の間にC群、追って、D群、C群が堆積する。建物跡埋土と考えられる下層のC～G群と上層のA・B群とで覆土は大別が可能と判断される。

付属施設 東隅部にステップ状の部分が掘り残される。遺構確認面からの深さ約0.27m、床面からの高さ約0.35mである。ステップ部のレベルは壁際35.36m、床面側35.35mでほぼ平坦である。

壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝は確認し得なかった。

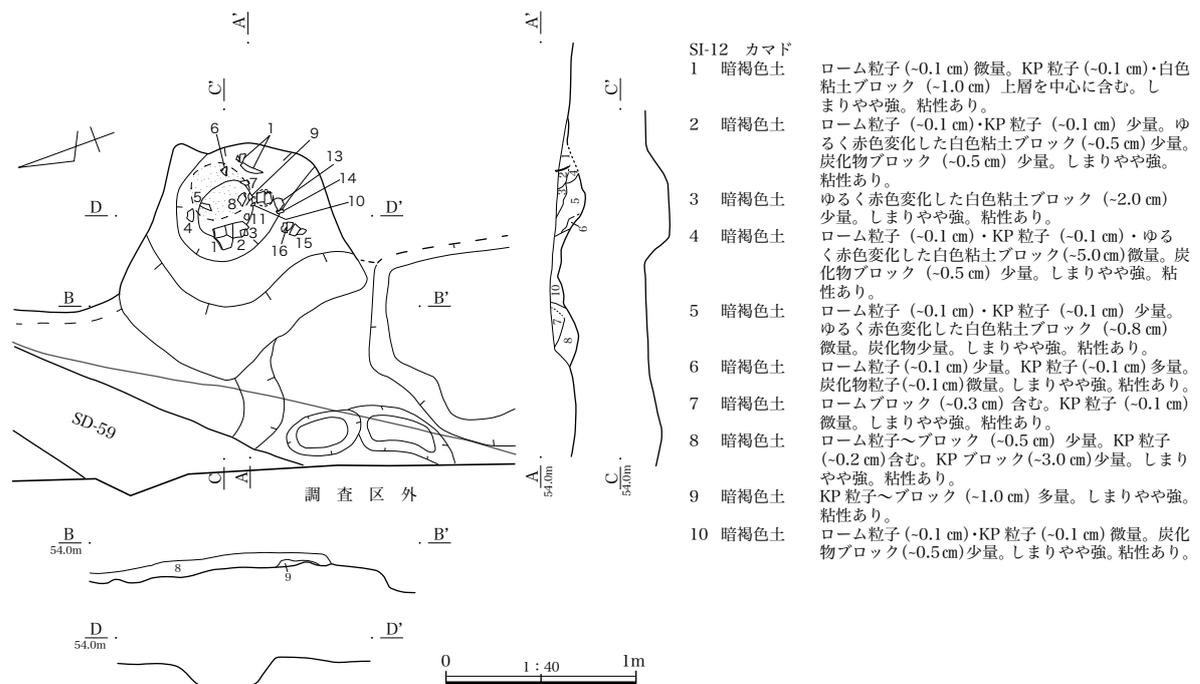
遺物出土状況 覆土中から18片89.88gが出土する。出土位置は明らかではない。

出土遺物 何れも小片で、図示し得なかった。土師器甕は7片41.85g、土師器甕(常総型)2片16.83g、土師器微細片7片12.25g、須恵器甕1片11.56g、須恵器瓶類1片7.39gが出土する。土師器甕(常総型)は胎土に金雲母を含み、外面にタテ方向のヘラミガキを施す。須恵器甕は外面にタテ方向の平行叩きを施す。産地は判然としないが、新治産の可能性が残る。9世紀代の可能性が考えられる。須恵器瓶類は益子産とみられ、内面に水挽き痕が観察できる。器壁は7.0mmである。

火処 確認されなかった。

第12号竪穴建物跡(SI-12)(第27～29図 第6表 写真図版六・一九)

位置 A区L・M-9に位置する。A区西端にあり、遺構の2/3は調査区外にある。平坦面にあるが、削平による可能性もあろう。重複関係 SI-93重複し、本遺構が新しい。SD-59と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 削平により建物跡の壁・床面は失われ、掘り方底面に近い状況といえる。掘り方は凹凸が著しく、細かな凹凸は図化し得なかった。このため、調査区西壁の土層の堆積状況から確認した南壁を基



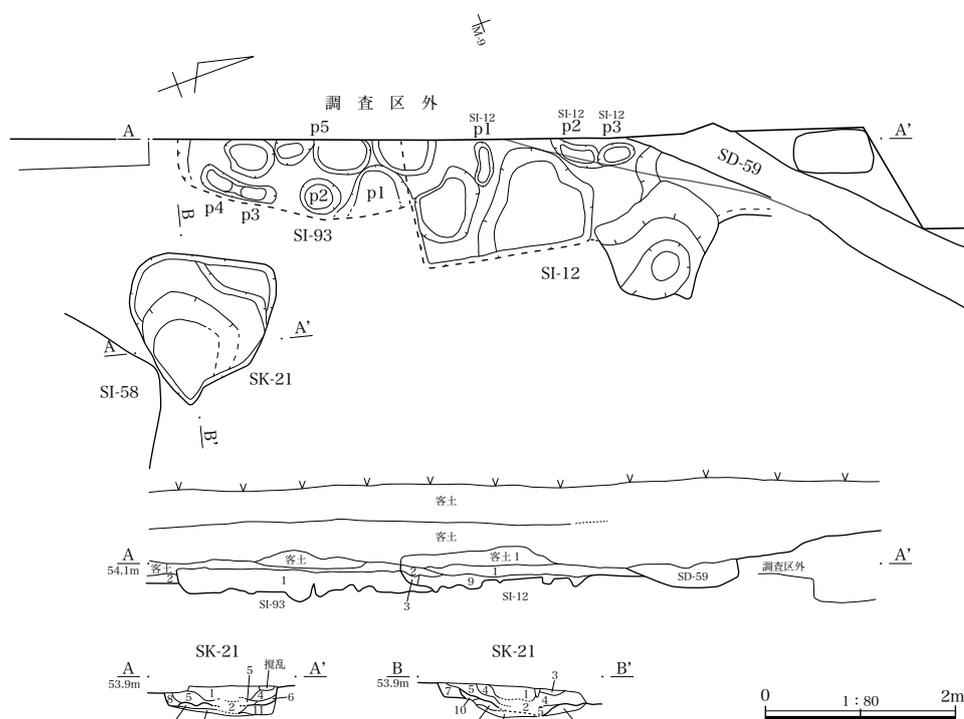
第27図 第12号竪穴建物跡(カマド)実測図

第3章 確認された遺構と遺物

準に掘り方の凹凸によって平面形を推定した。推定される平面形状は方形である。南側に重複する SI-93 との新旧関係は調査区西壁の掘り方面の土層の堆積で確認した。現状での規模は、最大値で東西 1.36m・南北 (2.4) m である。カマドが東壁中央部であったとすれば、5m ほどの規模と推定できる。掘り方底面の凹凸の深さは何れも 15.0cm 前後、p1 とした掘り込みは 11.0cm、p2 は 4.5cm、p3 は 6.0cm である。主軸 N-13° -E である。床面 鹿沼軽石層を掘り方面とする。遺構確認面の標高は 53.85m。付近にある SI-59 の床面レベルより低い。覆土 客土下に掘り方埋土 4 層を確認した。総じてブロック状の混入物が少なく、貼床状の堆積も確認されない。覆土最上層は床面直下ではなく、床面は更に上位にあったものと判断される。

柱穴 掘り方面に痕跡は見られない。位置的にも調査区外にあると判断される。柱穴・壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。



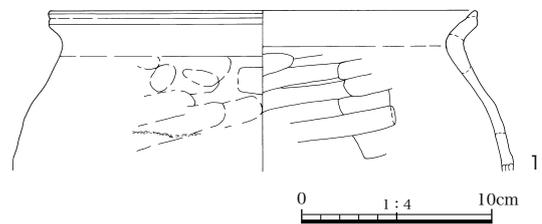
- SI-12
- 1 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm)・KP ブロック (-0.3 cm) 含む。KP ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子・黒色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP ブロック (-0.3 cm) 含む。KP ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。KP ブロック (-3.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
 - 9 暗黄褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 多量。KP ブロック (-2.0 cm) 含む。白色粒子・黒色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 客土1 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 含む。白色粒子・焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。炭化物粒子 (-0.2 cm) 少量。炭化物ブロック (-2.5 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
- SI-93
- 1 暗黄褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP ブロック (-0.5 cm) 含む。KP ブロック (-3.0 cm) 多量。黒色土ブロック (-1.0 cm) 微量。白色粒子・黒色粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。茶褐色土ブロック (-3.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- SK-21
- 1 暗赤褐色土 焼土主体。ローム粒子〜ブロック (-1.2 cm) 多量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 2 暗赤褐色土 ローム粒子〜ブロック (-1.2 cm) 含む。白色粒子微量。焼土多量。炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 3 暗赤褐色土 KP 粒子 (-0.1 cm) 含む。焼土多量。しまり強。粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック (-1.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・焼土粒子微量。しまり強。粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
 - 9 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 10 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 多量。しまり強。粘性あり。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 含む。KP ブロック (-0.3 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 12 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 含む。KP ブロック (-1.0 cm) 少量。しまり強。粘性あり。

第28図 第12・93号竪穴建物跡・第21号土坑実測図

火処 カマドを火処とする。東壁に位置する。煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。削平により火床・ソデ芯などカマド構築物は失われており、掘り方面が残る。火床下部とみられる位置には深さ 15.0cm ほどの掘り込みがある。掘り込み上層に土器片、焼土、被熱により赤色変化したカマド材とみられる粘土片が散材する。覆土は 10 層を確認した。1～6 層は火床下部とみられる掘り込みに堆積する。1 層はカマド材とみられる白色粘土、3・5 層は被熱により赤色変化したカマド材を含む。出土する土器片・カマド材は 3・5 層に伴う。7～9 層はロームや鹿沼軽石など地山土を含み、カマド前の床面作出土と考えられる。10 層は掘り方埋土と判断される。堆積状況から、カマドは建物跡廃絶時に火床を浚い、土器やカマド材を含みつつ埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 覆土中から 72.43g が出土する。土師器甕（常陸形）1・No.1～16 は火床下部の掘り込み上層から出土する。出土レベル 52.825～52.914m の 10cm 弱でカマド材とともに確認される。

出土遺物 土師器甕 1 と同一個体とみられる No.1～16 及びカマド出土の小片 28 片 44.40g がある。また、1 とは別個体の土師器甕微細片 8.19g、粘土塊 2 個体 15.02g、鉄製品 4 片が出土する。鉄製品は径約 3mm の円或いは隅丸形状で、付着物を含む重さは 4.82g である。



第 29 図 第 12 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 6 表 第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 常陸甕	口: [22.4] 底:— 高: (8.5)	口端内面受口状 内:ヘラケズリ(ヨコ) 痕跡は薄い ナデか摩滅か 外:ヘラケズリ(ヨコ)→ナデ(指頭痕)→口ヨコナデ	内外:5YR6/8 橙	白色粒子・黒色ガラス質粒子多量、透明ガラス質粒子微量 良	A 区 SI-12 カマド No.7, カマド No.8 口縁部 1/5 残存

(単位:cm)

第 15 号竪穴建物跡 (SI-15) (第 30・31 図 第 7 表 写真図版六・一九)

位置 A 区 L・M-10 に位置する。現状で東側の谷に向けた斜面地にある。東側の谷に並行し、磁北には沿っていない。重複関係 SI-19・79 と重複する。本遺構が新しい。平面形状・規模 方形状である。一辺約 2.65～2.8m で、谷に直交する向きが若干長い。確認面からの深さは 0.85m である。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。N-46° -E である。床面 鹿沼軽石層下の粘土層を床面とする。掘り方は確認されない。建物跡壁は確認面から地山-鹿沼軽石層-鹿沼軽石層下の粘土層に至る。床面のレベルは 53.55m 前後であり、谷部へ向かう傾斜等は確認されない。床面中央部に炭化物が確認される。火熱の痕跡は認められない。

覆土 44 層を確認した。SP-A・B では土層の特徴は似るが、交点以外の土層の異同については判じ得なかった。このため、交点の土層に先に番号を付し、SP-A・B ごとに付番した。堆積土はロームの混入量が多い下層 (B 群) と上層 (A 群) に大別できる。さらに、A・B 群は黒褐色土・暗褐色土の有無により、① (黒褐色土・暗褐色土を含む)、②・⑤ (黒褐色土を含む)、③・⑥ (暗褐色土を含む)、④・⑦ (黒褐色土・暗褐色土を含まない) に細別が可能である。詳細な層序は不明であるが、上層から、SP-A 堆積土 A 群: <交点① (1 層)> →④ (4 層) → <交点② (2 層)> →④ (5・6 層) - ③ (7 層) → <交点③ (3 層)> →③ (8 層) → 堆積土 B 群⑦ (17・18 層) → <交点⑥ (14・15 層)> →⑤ 19～23 層 - <交点 (16 層)>・(24～30 層) - (31 層)

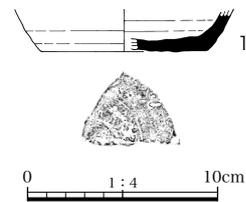
→⑦(32層)、SP-B堆積土A群:〈交点①(1層)〉→②(9層)→③(10層)→④(11層)→〈交点⑥(14・15層)〉→〈交点⑤(16層)〉・(39・41層)→⑥(42層)→⑦(43・44層)である。最下層に⑦が堆積し、A群①～④、B群⑤～⑦が交互に堆積することが確認できる。本遺構は廃絶に際し、埋め戻された可能性が指摘できる。

付属施設 北壁から北東隅部にかけてはテラス状、および、これに続くステップ状の部分が掘り残される。テラス状の部分の幅はテラス中央となる平面形の隅部(以下、隅部)で約0.3mから徐々に狭くなり端部では0.12m前後である。遺構確認面からの深さは隅部で0.425m、レベルは隅部52.98m、北壁側端部53.0m、東壁側端部53.07mである。東側端部とステップ状の部分には傾斜があるが、本来は平坦であったと判断できる。ステップ状の部分はテラス状の部分より0.1mほど床面に張り出す。幅0.2m、遺構確認面からの深さは壁際で0.4m、先端部で0.56mで、床面に向かい傾斜する。壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝は確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から34片153.95gが出土する。何れも小片である。出土位置の明らかな遺物は2片ある。何れも不掲載の小片である。1片5.14gは2層から出土する土師器甕体部片で胎土に金雲母を含む。1片16.28gは18層から出土する土師器甕は常総型の口縁部である。9世紀代であろう。

出土遺物 須恵器杯1は8世紀第4四半期の益子産とみられる。

図示し得なかった遺物は、前述の層中から出土する土師器甕片2片のほか、土師器杯5片41.27g、土師器甕16片62.3g、土師器甕(常総型)3片12.3g、土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)1片4.68g、須恵器杯1片2.63g、粘土塊6片9.35gが出土する。土師器杯は7世紀代の模倣杯とみられウルシ処理を施す。橙色の器面1片、白色の器面4片である。本建物跡の時期の判別は難しいが、9世紀前半以降と捉えておきたい。



第31図 第15号竪穴建物跡出土遺物実測図

火処 確認されなかった。

第7表 第15号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 須恵器 杯	口:— 底:[8.8] 高:(2.2)	ロクロ成形 益子産 内:底スス付着 灯明皿転用か 外:底部回転ヘラケズリ	内外:5Y5/1 灰	白色粒子・黒色粒子 良	A区SI-15 底部1/6残存

(単位:cm)

第19号竪穴建物跡(SI-19)(第32～34図 第8表 写真図版七)

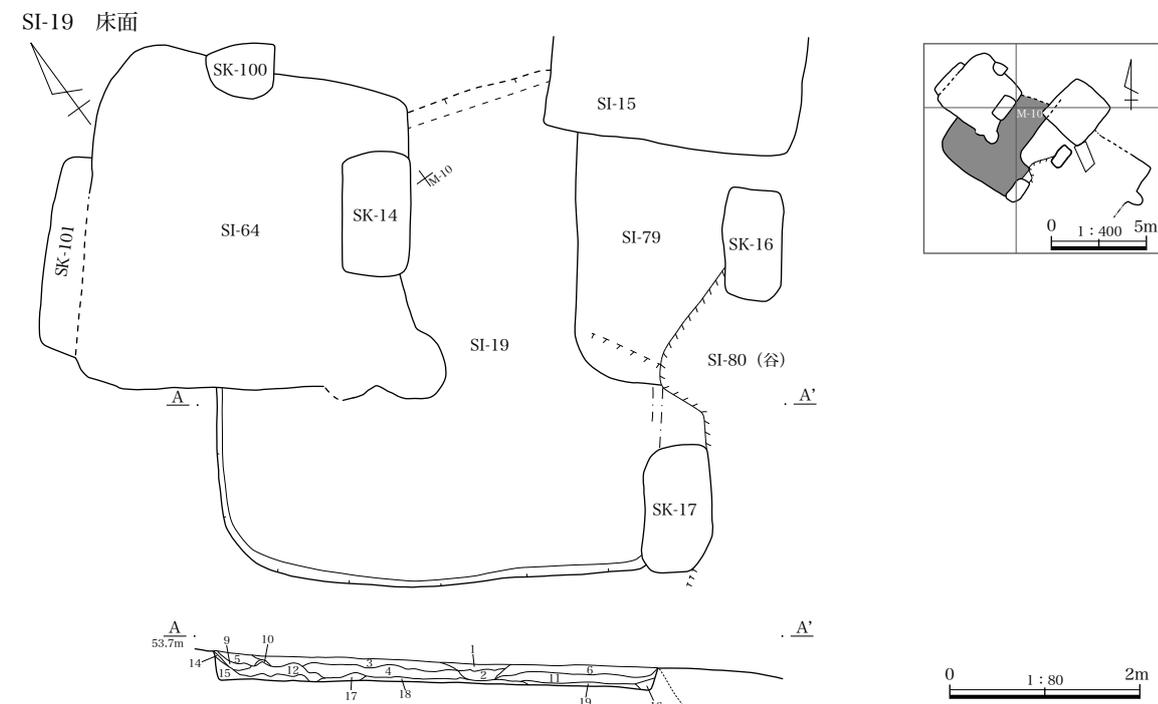
位置 A区M-9・10に位置する。現状で東側の谷に向けた斜面地にある。重複関係 SI-64・79と重複する。本遺構が古い。平面形状・規模 方形状であるが、重複等で判然としない。壁の立ち上がりを確認できるSP-Aで一辺約4.7m、東西は現地調査の所見では5.0m前後である。SI-64との重複によりカマドは失われたと判断される。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。SP-Aに直交するラインではN-36°-Eである。

床面 建物跡西壁からSI-64カマド前付近までは鹿沼軽石層下の粘土層へ至る漸移層、これより以東は鹿沼軽石層下の粘土層を床面とする。南壁も同様である。床面のレベルは53.2m前後である。谷部側53.14m、反対側53.24mで、谷部に向けての傾斜がみられる。床面下の掘り込みは部分的で、鹿沼軽石層をそのまま床面とする割合が多い。

第3章 確認された遺構と遺物

覆土 21層を確認した。1～20層は床面、21層は掘り方である。床面最下層20層(A群)はロームブロックと鹿沼軽石ブロックの混合層である。この後、微～少量の焼土や炭化物を含むB～F群、焼土や炭化物を含まない(A群)が堆積する、17～19層(F群)は鹿沼軽石・炭化物を含む層とローム層・焼土を含む層が交互に堆積する。13～16層は壁際の堆積層である。15・16層(E群)は焼土を含む。13・14層(D群)は鹿沼軽石を含み、焼土や炭化物は観察されない。9～12層(C群)は焼土と炭化物を含む。6～8層(B群)は、6層はローム粒子と焼土、7・8層は鹿沼軽石と炭化物を含む。堆積順は不明である。3～5層(A群)は鹿沼軽石を含む。ローム粒子と焼土(6・18層)、鹿沼軽石層と炭化物(7・8・17・19層)の層が認められる。F群の堆積順序からは西壁側から埋め戻された可能性を指摘できる。1・2層は後世の掘り込みの可能性がらう。

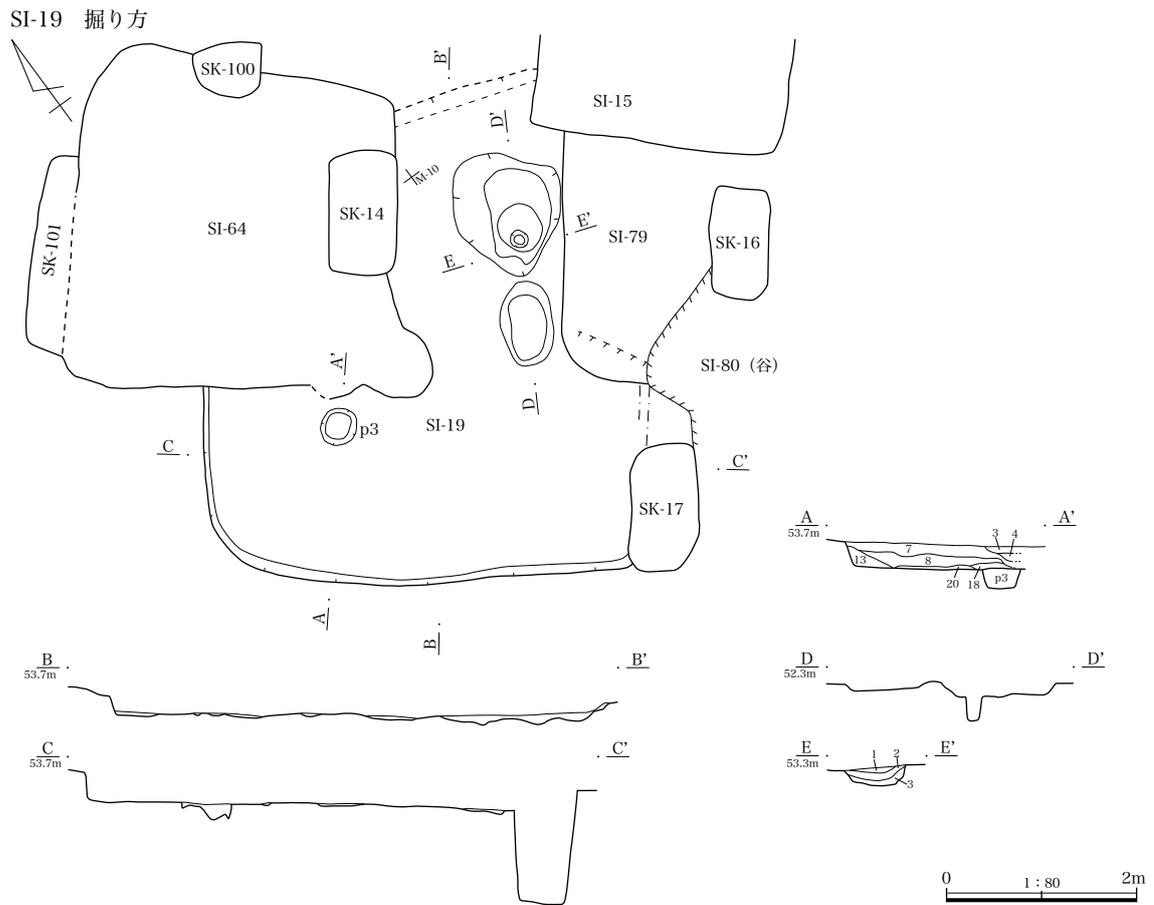
掘り方の覆土は焼土を含む層と炭化物を含む層が交互に堆積する。



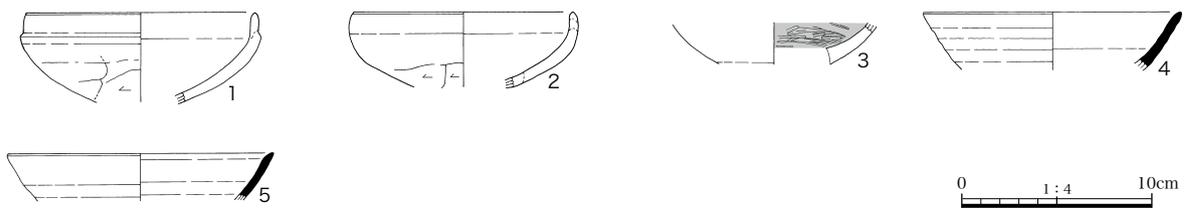
SI-19

- | | |
|----------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子・KP ブロック (-1.0 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子・焼土粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。KP ブロック (-1.0 cm) 少量。茶褐色土ブロック (-0.5 cm) 微量。黒褐色土ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量。ロームブロック (-1.0 cm) 微量。KP ブロック (-0.3 cm) 含む。白色粒子少量。しまり強。粘性あり。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (-0.5 cm)・KP 粒子・白色粒子・焼土粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP ブロック (-0.3 cm) 含む。茶褐色土ブロック (-0.8 cm) 微量。白色粒子含む。炭化物粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 含む。茶褐色土ブロック (-1.0 cm)・白色粒子・炭化物粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子・KP ブロック (-0.3 cm)・白色粒子少量。焼土粒子 (-0.2 cm)・炭化物粒子微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子・白色粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (-0.5 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 12 暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (-4.0 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・焼土粒子微量。炭化物粒子 (-0.2 cm) 少量。しまり強。粘性あり。 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm)・KP ブロック (-1.2 cm) 少量。茶褐色土ブロック (-0.5 cm)・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子微量。ロームブロック (-0.8 cm) 含む。KP ブロック (-0.5 cm) 少量。白色粒子・炭化物粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 15 暗褐色土 | ローム粒子含む。ロームブロック (-0.8 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm)・KP ブロック (-4.0 cm) 含む。白色粒子微量。焼土ブロック (-0.3 cm) 少量。炭化物粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 16 暗褐色土 | ローム粒子微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・焼土ブロック (-0.5 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 17 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP ブロック (-0.3 cm) 含む。茶褐色土ブロック (-0.8 cm) 微量。白色粒子含む。炭化物粒子少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 18 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm)・ロームブロック (-0.3 cm) 少量。KP 粒子・茶褐色土ブロック (-0.5 cm) 微量。白色粒子・焼土粒子 (-0.2 cm) 少量。しまり強。粘性あり。 |
| 19 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (-0.8 cm) 微量。KP ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子・炭化物ブロック (-0.5 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 20 暗茶褐色土 | ローム粒子微量。ロームブロック (-0.8 cm) 少量。KP 粒子微量。KP ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。 |

第32図 第19号竪穴建物跡実測図(1)



第33図 第19号竪穴建物跡実測図(2)



第34図 第19号竪穴建物跡出土遺物実測図

第8表 第19号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口:[12.6] 底:— 高:(4.7)	体中〜下ヘラケズリ 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内〜外(口)ウルシ仕上げ	内外:10YR6/3 にぶ い黄橙	白色粒子・砂粒・透 明ガラス質粒子微量 良	A区SI-19 口〜体部1/8 残 存
2 土師器 杯	口:[12.0] 底:[5.2] 高:(3.9)	体下ヘラミガキ 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ(ヨコ)→体上ナデ→口ヨコナデ 内〜外(口)ウルシ仕上げ	内外:10YR7/3 にぶ い黄橙	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子微量 良	A区SI-19 口縁部1/6 残存
3 土師器 杯	口:[10.8] 底:[6.0] 高:(2.2)	口クロ使用 内面黒色処理 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ(ヨコ)→体上ナデ→口ヨコナデ 内〜外(口)ウルシ仕上げ	内:N1.5/0 黒 外:10YR5/3 にぶ い黄褐	白色粒子少量・砂粒・ 透明ガラス質粒子微 量 良	A区SI-19 体部1/4 残存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
4 須恵器 坏	口:[13.6] 底:— 高:(3.0)	ロクロ成形 益子産?	内外:2.5Y6/2 灰黄	白色粒子・黒色粒子 やや良	A区 SI-19,SB 口縁部 1/6 残存
5 須恵器 坏	口:[14.0] 底:— 高:(2.5)	ロクロ成形 益子産	内外:2.5Y6/2 灰黄	白色粒子・黒色粒子・ 砂礫 やや良	SI-19 口縁部 1/7 残存

柱穴 確認し得なかった。掘り方面に図示した p1・3 の可能性が考えられるが判然としない。床面からの深さ・底面のレベルは p1:0.2m・53.04m、p3:0.54m・52.74m である。

壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から 24 片 302.84g が出土する。何れも小片である。層位やレベルの明らかな遺物はない。出土量は少ないが 7 世紀前葉から 9 世紀前半の遺物が混在する。掘り方からは土師器甕体部 1 片 35.43g が出土する。

出土遺物 土師器坏 1・2 は 7 世前葉・中葉、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）3 は 9 世紀中葉、須恵器坏 4・5 は 9 世紀前後・9 世紀前半とみられる。

図示し得なかった遺物は、土師器坏 5 片 96.39g、土師器甕 10 片 57.91g、土師器甕（常総型）3 片 18.17g、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）2 片 8.01g、須恵器 1 片 35.61g、瓦 1 片 49.55g、陶器 1 片 1.77g である。土師器坏は 1 と似た口縁部片、模倣坏口縁部 2 片、内面ヨコナデ後ウルシ仕上げの体・底部である。何れも 7 世紀代と考えられる。土師器甕は緻密な胎土の破片が 3 片あり鉢類の可能性もあろう。常総型と判断した破片は口縁端部を摘み上げる小片と金雲母を含む体部 2 片である。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）片は内面にヨコ方向にミガキを施し黒色処理を施す。須恵器坏は回転糸切りの底部である。推定される底径は 6.0～6.4 cm。産地は不明であるが三叢産の可能性が考えられる。瓦は焼成不良の男瓦あるいは女瓦の端部小片である。布目痕が観察される。陶器は近世以降の灰釉の微細片である。図示し得なかった出土遺物も、掲載遺物と同様、7 世紀代・9 世紀代と判断される。陶器片が近世以降とみられるため、本建物跡の時期を推察するのは難しいが、9 世紀中葉と判断した SI-64 に先行すること、想定されるカマドの位置から 7 世紀代である可能性を指摘しておきたい。

火処 確認し得なかった。出土遺物の時期、また、SI-8・58 などの覆土の堆積状況から、床面覆土中への焼土や炭化物はカマドに由来する可能性が指摘できることから、カマドが設えられていた可能性が高いと考えられる。想定されるカマドの位置は、建物跡西側に焼土や炭化物の堆積がみられることから、SI-64 カマドに相当する東壁南寄りより、SI-8・58 同様の北カマドの可能性が合理的と判断される。カマドの埋没については、床面 F 群の堆積順序から西壁（カマド）側から埋め戻された可能性が指摘でき、カマド→床面の順に埋め戻しが行われたと判断しておきたい。床面直上覆土の焼土や炭化物が少量であることは、大方が先に埋め戻されたカマドに使われた可能性が考慮されよう。

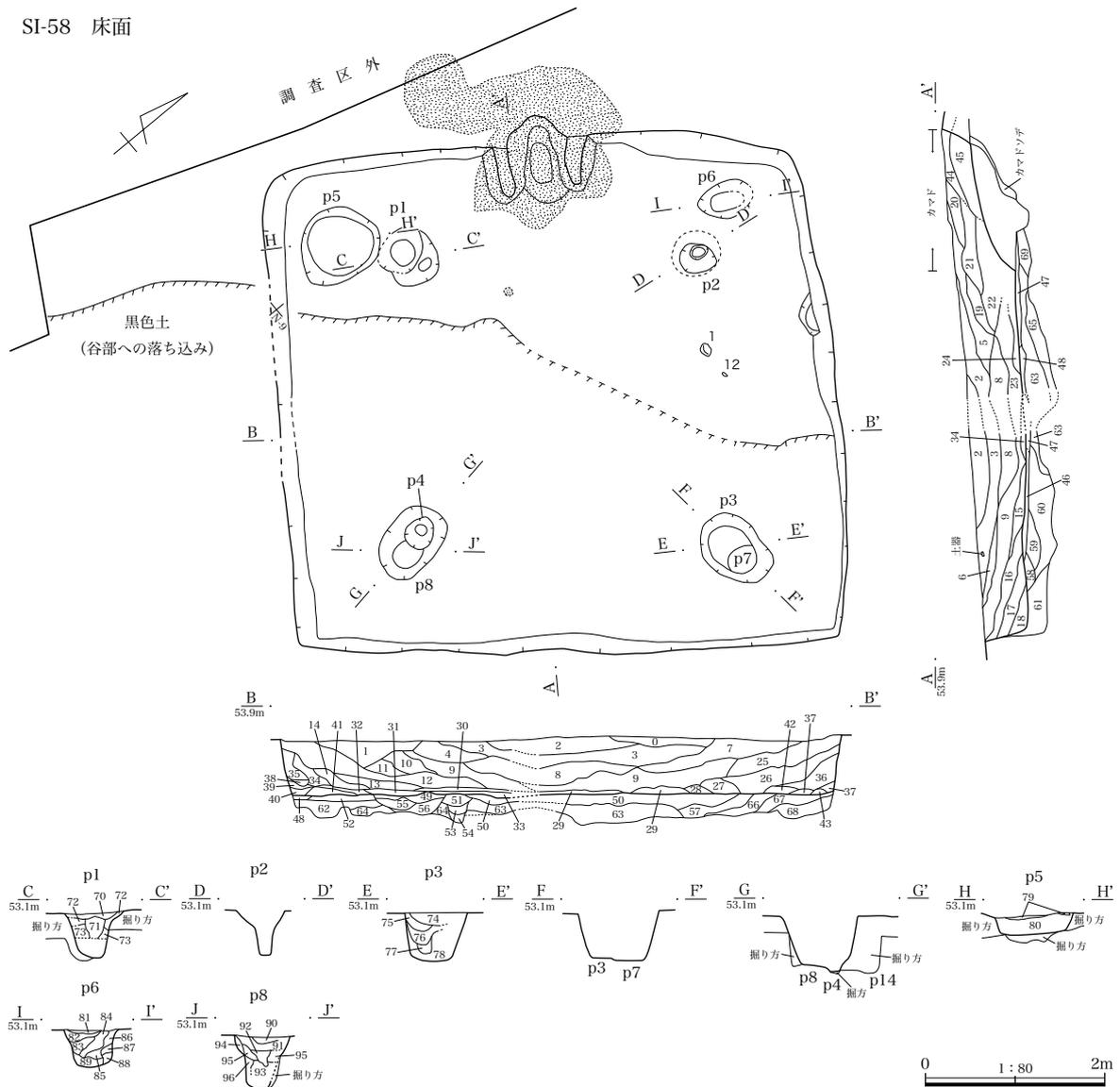
遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。

第 58 号竪穴建物跡（SI-58）（第 35～39・80 図 第 9・18 表 写真図版一〇・一一・一九・二八）

位置 A 区 M-8・9 に位置する。現状で東に向けた斜面地に立地する。重複関係 重複する遺構はない。

平面形状・規模 方形で、カマドは北西辺に設けられる。推定される地形的条件から、カマドの設置は北辺を意図した可能性が考えられるため、方位の記載はカマドのある辺を北とする。南壁は埋没谷堆積層中にありサブトレンチの立ち上がりで確認した。サブトレンチを設定したセクションラインでの規模は、東西 6.29m・南北 5.6m、深さは南側 0.5m～北側 0.7m であり、確認面の傾斜による相違は見られる。カマド付

SI-58 床面



SI-58

- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色土</p> <p>2 暗褐色土</p> <p>3 暗褐色土</p> <p>4 暗褐色土</p> <p>5 暗褐色土</p> <p>6 暗褐色土</p> <p>7 暗褐色土</p> <p>8 暗褐色土</p> <p>9 暗褐色土</p> <p>10 暗褐色土</p> <p>11 暗褐色土</p> <p>12 暗褐色土</p> <p>13 暗褐色土</p> <p>14 暗褐色土</p> <p>15 暗褐色土</p> <p>16 暗褐色土</p> <p>17 暗褐色土</p> <p>18 暗褐色土</p> <p>19 暗褐色土</p> <p>20 暗褐色土</p> | <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.0 cm)・黒褐色土ブロック(-0.8 cm)含む。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)少量。黒褐色土ブロック(-5.0 cm)・白色粒子含む。白色粘土ブロック(-0.8 cm)・焼土粒子(-0.1 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子~ブロック(-0.3 cm)含む。KP 粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色土ブロック(-0.8 cm)含む。黒褐色土ブロック(-1.0 cm)少量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.2 cm)・白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)・炭化物ブロック(-0.3 cm)微量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.0 cm)微量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)少量。暗褐色土ブロック(-0.5 cm)微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)・白色粒子少量。橙色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量。黒褐色土ブロック(-0.8 cm)含む。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量。黒褐色土ブロック(-0.5 cm)微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.1 cm)・黒褐色土ブロック(-0.5 cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.3 cm)少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)・白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.2 cm)多量。ロームブロック(-0.5 cm)少量。KP 粒子(-0.1 cm)含む。白色粒子少量。橙色粒子(-0.1 cm)微量。白色粘土ブロック(-0.3 cm)少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.1 cm)少量。黒褐色土ブロック(-1.2 cm)含む。白色粒子少量。白色粘土粒子(-0.2 cm)微量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.3 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.2 cm)含む。ロームブロック(-0.6 cm)微量。KP 粒子(-0.1 cm)・白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.3 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量。黒褐色土ブロック(-0.8 cm)微量。白色粒子少量。橙色粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>他層より黒い。ローム粒子(-0.2 cm)・KP 粒子(-0.1 cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.5 cm)少量。しまりあり。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.1 cm)やや多量。KP 粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量。白色粒子含む。炭化物粒子(-0.2 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。</p> <p>ローム粒子(-0.2 cm)少量。KP 粒子(-0.3 cm)含む。21 層ブロック部分的(-0.3 cm)。白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。</p> |
|--|--|

第35図 第58号竪穴建物跡実測図(1)

第3章 確認された遺構と遺物

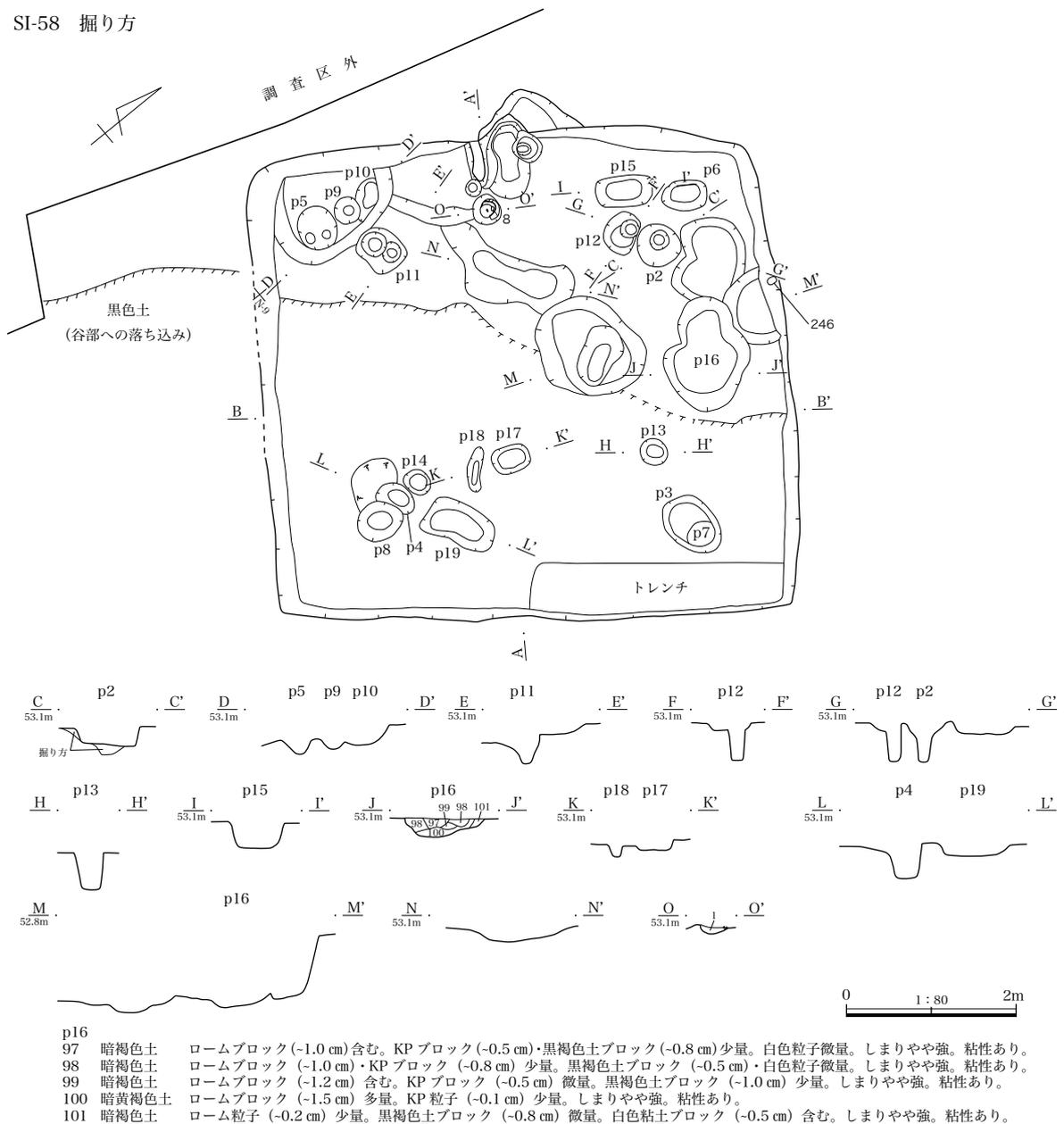
21 暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 含む。白色粒子・白色粘土粒子〜ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
22 暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm)・白色粘土粒子〜ブロック (-0.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm)・白色粒子少量。橙色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
23 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-0.3 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.5 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 微量。白色粒子少量。白色粘土ブロック (-0.3 cm) 少量。炭化物粒子微量。しまりあり。粘性あり。
24 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・ロームブロック (-0.3 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm)・黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや弱。粘性やや強。
25 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) やや多量。ロームブロック (-0.3 cm) 微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-1.2 cm)・白色粒子含む。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
26 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-0.5 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 含む。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
27 暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 多量。ロームブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。白色粒子少量。下層に白色粘土ブロック (-0.5 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
28 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・ロームブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
29 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・ロームブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒子・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
30 暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。しまり強。粘性あり。
31 暗黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。しまり強。粘性あり。
32 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 多量。黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
33 暗褐色土	32層のロームブロック (-0.8 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
34 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
35 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-2.0 cm) 含む。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
36 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。茶褐色土ブロック (-1.5 cm)・白色粒子含む。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
37 暗茶褐色土	ロームブロック (-0.3 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・黒褐色土ブロック (-1.2 cm)・白色粒子 (-0.1 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
38 35層の茶褐色土ブロックのない層。	
39 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
40 暗褐色土	38層に白色粘土ブロック (-0.5 cm) 微量。
41 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
42 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-0.5 cm) 微量。KP 粒子少量。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 微量。白色粒子少量。白色粘土ブロック (-0.5 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
43 37層にロームブロック (-0.5 cm) 多量。	
44 暗褐色土	21層に45層混じる。茶褐色土ブロック (-1.0 cm)・炭化物ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
45 暗褐色土	44層の白色粘土ブロック (-0.6 cm) 多量。
46 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm)・白色粒子・橙色土ブロック (-0.5 cm) 微量。ロームブロックは31層よりは泥状。しまりややあり。粘性あり。
47 暗褐色土	黒褐色土ブロック (-1.2 cm) 含む。
48 暗褐色土	ローム粒子 (-0.2 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。暗茶褐色土ブロック (-1.5 cm) 含む。黒褐色土ブロック (-0.5 cm)・橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
49 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-3.0 cm) 含む。KP 粒子〜ブロック (-0.3 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-1.5 cm) 含む。白色粒子少量。橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
50 暗黄褐色土	ロームブロック主体。KP 粒子 (-0.2 cm)・KP ブロック (-0.3 cm) 少量。黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
51 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。白色粒子少量。しまり強。粘性あり。
52 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。炭化物粒子 (-0.1 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
53 暗褐色土	51層に茶褐色土ブロック (-1.5 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。
54 暗褐色土	53層の黒褐色土ブロック (-1.5 cm) : 茶褐色土ブロック (-1.5 cm) = 6 : 4。
55 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-2.0 cm)・黒褐色土ブロック (-2.0 cm) 含む。白色粒子少量。しまり強。粘性あり。
56 暗褐色土	22層の黒褐色土ブロック : 茶褐色土ブロック = 7 : 3。
57 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。暗茶褐色土ブロック (-1.2 cm) : 黒褐色土ブロック (-1.2 cm) = 5 : 5。橙色土ブロック (-0.3 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
58 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・橙色粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
59 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 含む。ロームブロック (-1.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。黒褐色土粒子〜ブロック (-0.8 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
60 暗黄褐色土	ローム粒子〜ブロック (-5.0 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。橙色粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
61 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) やや多量。ロームブロック (-0.8 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。橙色粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりややあり。粘性あり。6層の方が暗色。62層に似る。
62 暗褐色土	48層の暗褐色土ブロックを含まない層。
63 暗褐色土	暗茶褐色土ブロック (-1.5 cm) : 黒褐色土ブロック (-1.5 cm) = 6 : 4。
64 暗褐色土	63層+黒褐色土ブロック (-1.5 cm) やや多量。橙色土ブロック (-0.5 cm) 微量。17層に対応か。
65 暗茶褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.2 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.1 cm)・橙色粒子 (-0.2 cm) 少量。炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
66 暗黄褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.5 cm) 主体。KP 粒子〜ブロック (-0.5 cm) 微量。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 少量。橙色粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
67 暗黄褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.5 cm) 多量。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。橙色土ブロック (-0.3 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
68 66層に似るが、ロームブロック (-3.0 cm) がより主体的。	
69 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.2 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。しまり強。粘性あり。
70 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-0.8 cm)・白色粘土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
71 暗褐色土	ロームブロック (-0.5 cm) 含む。白色粘土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
72 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.5 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
73 暗褐色土	ロームブロック (-0.3 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
74 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。上層に黒褐色土ブロック (-0.5 cm) 少量。床面か。白色粒子・橙色粒子微量。上面(深さ2.0 cmまで)しまりやや強。以下しまりあり。粘性あり。
75 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm)・橙色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
76 黒褐色土	75層+ロームブロック (-1.0 cm) 少量。上から流れ込むように堆積。しまりあり。粘性あり。
77 黒褐色土	75層に似る。ロームブロック (-0.3 cm) まで。しまりあり。粘性あり。
78 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量か。しまりやや強。粘性あり。
79 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-0.3 cm) 少量。
80 暗褐色土	ロームブロック (-10.0 cm) 多量。
81 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-0.5 cm) やや多量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・白色粘土粒子 (-0.2 cm)・焼土粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
82 暗褐色土	ローム粒子含む。ロームブロック (-0.5 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。白色粒子・焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
83 暗褐色土	焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
84 暗褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土粒子〜ブロック (-0.5 cm) 含む。焼土粒子 (-0.1 cm)・炭化物ブロック (-0.3 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
85 暗褐色土	81層の白色粘土を含まない層。しまりやや強。粘性あり。
86 暗褐色土	ローム粒子含む。ロームブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子・白色粘土粒子 (-0.1 cm)・炭化物粒子 (-0.1 cm)・焼土粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
87 暗褐色土	ロームブロック (-0.3 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
88 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm)・橙色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
89 暗褐色土	ローム粒子〜ブロック (-5.0 cm) 多量。しまりやや強。粘性あり。
90 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm)・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
91 黒褐色土	ローム粒子〜ブロック (-0.5 cm) 少量。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
92 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
93 黒褐色土	81層より茶褐色土ブロック少量。しまりあり。粘性あり。
94 黒褐色土	ローム粒子〜ブロック (-5.0 cm) 含む。KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
95 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
96 黒褐色土	ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。しまり強。粘性あり。

第36図 第58号竪穴建物跡実測図(2)

近はカマドの廃絶の際の被覆層の厚さにより約0.8mである。 主軸 N-33° -Wである。

床面 鹿沼軽石層下の粘土層（以下ローム層）および埋没谷堆積層を床面とする。東辺中央部付近と西辺北西隅部寄りを結ぶライン以南は谷部堆積層の床面となる。床面覆土と谷部堆積層の見分けが難しく、北壁以外はサブトレンチでの立ち上がりで確認した。柱穴の配置などから3時期以上が推定でき、廃絶時をa期、これ以前をb・c期として報告する。後述する覆土や柱穴の堆積状況などから、廃絶時の床面はa・b期の床面と判断される。c期の柱穴が床面下で確認され、掘り方埋土にc期の床面の痕跡を確認し得なかったため、c期の床面を作り直してa・b期の床面が作出されたと考えられる。掘り方は、谷部の黒色土と掘り方埋土の特徴が似ており、南西部を掘り過ぎている。廃絶時の床面レベルは52.9m前後、カマド前付近から東壁付近は約53.0mである。

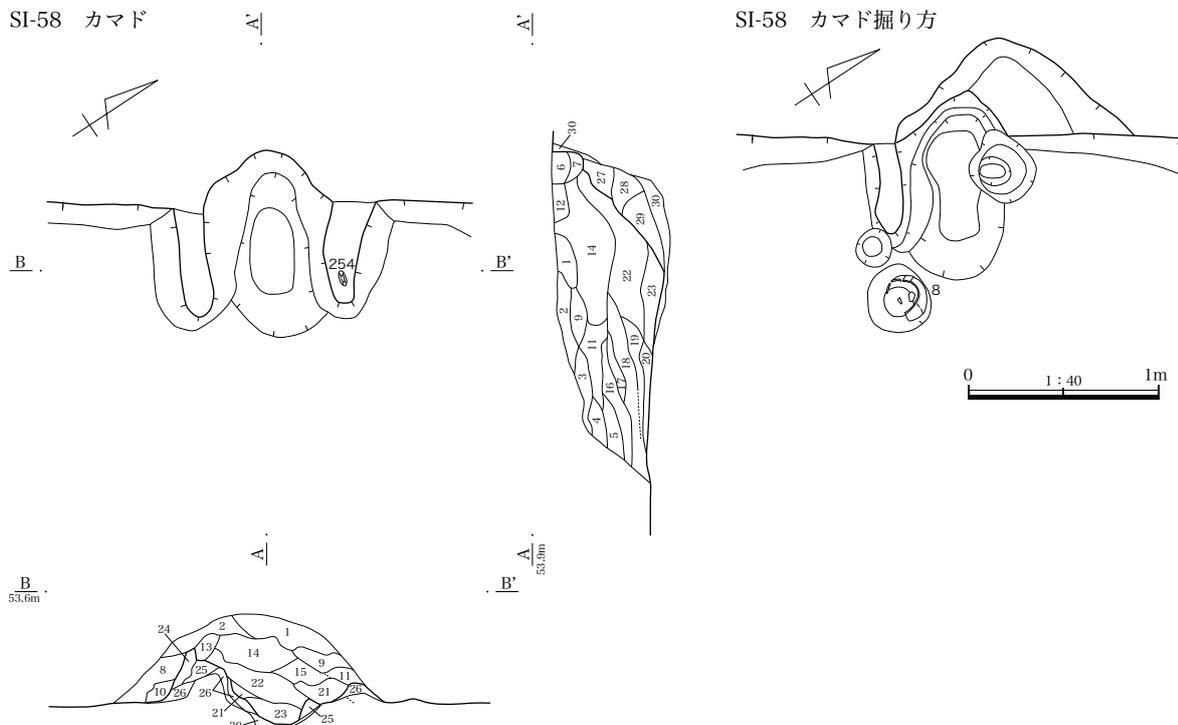
SI-58 掘り方



第37図 第58号竪穴建物跡実測図(3)

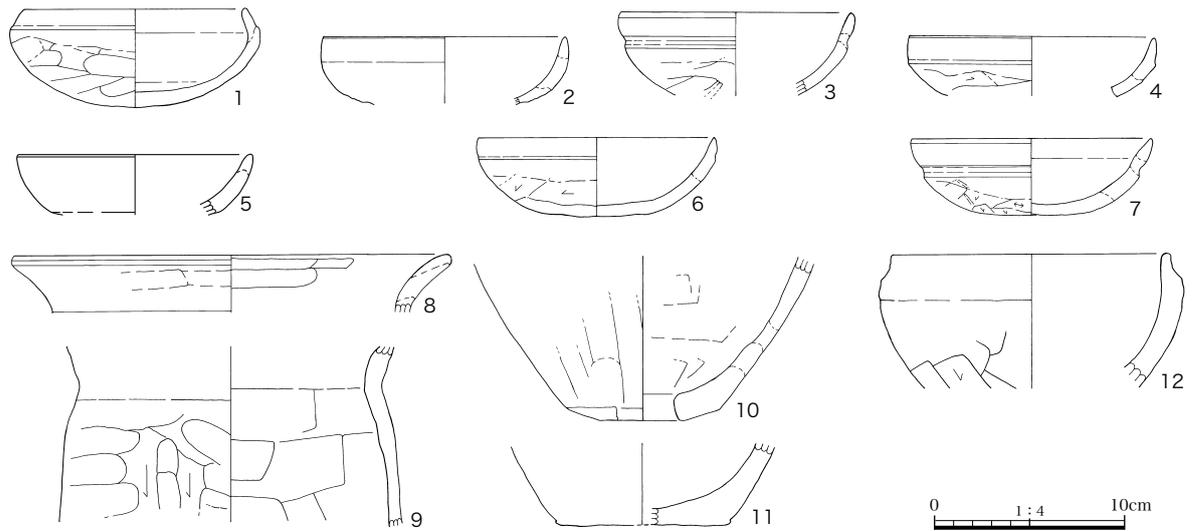
第3章 確認された遺構と遺物

覆土 101層を確認した。1～45層は床面、46～69層は掘り方、70～101層は柱穴及び掘り込みの覆土である。床面は、まず、建物壁際の37～43層が堆積する。周溝関連の堆積層と判断されるが、周溝付近の掘り方土の可能性がある37・40～43層(A群)、周溝とみられる38・39層(B群)、黒色土・ロームを含む34～36層(C群)に大別できる。床面上にはロームを含む25～33層(D群)が床面中央部付近



- SI-58 カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子微量。白色粘土粒子〜ブロック(-1.5 cm)多量。焼土ブロック(-0.3 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.3 cm) やや多量。白色粘土ブロック(-1.0 cm) 少量。焼土ブロック(-0.4 cm) 含む。しまり強。粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック(-0.3 cm)少量。KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)多量。焼土粒子(-0.2 cm)微量。しまりあり。粘性あり。
 - 4 暗褐色土 3層+白色粘土ブロック(-1.2 cm)・茶褐色粘土粒子(ロームか) (-0.1 cm) 少量。炭化物粒子(-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
 - 5 暗褐色土 3層+白色粘土ブロック(-1.5 cm) 含む。焼土ブロック(-0.5 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
 - 6 暗褐色土 白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm) やや多量。焼土ブロック(-0.3 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
 - 7 暗褐色土 白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm) 含む。焼土ブロック(-0.3 cm) やや多量。焼土ブロック(-1.0 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm) 含む。焼土粒子(-0.1 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 9 暗褐色土 8層に対応か。焼土ブロック(-0.8 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
 - 10 暗褐色土 8層+焼土少量。白色粘土やや多量。しまりあり。粘性あり。
 - 11 暗褐色土 10層に対応か。ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子微量。白色粘土粒子(-0.2 cm) やや多量。焼土ブロック(-0.5 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 12 暗褐色土 白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.6 cm) 多量。焼土粒子(-0.2 cm) 少量。炭化物粒子(-0.2 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 13 26層に似る。天井部に続く部分。壊したカマド材の堆積か。
 - 14 暗灰褐色土 白色粒子微量。白色粘土粒子〜ブロック(-2.0 cm) 主体。焼土ブロック(-0.8 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 15 暗灰褐色土 白色粘土粒子〜ブロック(-0.4 cm) 多量。焼土ブロック(-0.3 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 16 暗灰褐色土 白色粘土粒子〜ブロック(-1.0 cm) 主体。焼土ブロック(-0.5 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 17 暗灰褐色土 灰色粘土ブロック(-1.0 cm) 主体。白色粘土ブロック(-1.0 cm) 少量。焼土粒子(-0.2 cm) 微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 18 暗灰褐色土 14層と同様。
 - 19 暗褐色土 ロームブロック(-1.0 cm) 含む。白色粘土ブロック(-0.3 cm) 少量。焼土粒子(-0.2 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
 - 20 暗黒褐色土 ロームブロック(-1.2 cm) 少量。白色粘土ブロック(-0.3 cm) 微量。焼土粒子(-0.2 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 21 暗灰褐色土 ロームブロック(-0.5 cm) 含む。ロームブロック(-1.0 cm) 少量。KP粒子(-0.2 cm) 微量。白色粘土粒子〜ブロック(-1.0 cm) 含む。焼土粒子(-0.1 cm)・炭化物粒子(-0.2 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 22 暗灰褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子微量。焼土ブロック(-0.5 cm)少量。白色粘土粒子〜ブロック(-1.0 cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 23 暗灰褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・ロームブロック(-1.0 cm)(21層のロームと同じか)少量。白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)含む。炭化物粒子(-0.1 cm)微量。焼土粒子(-0.2 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。
 - 24 暗灰褐色土 ソデ芯をくむカマド材粘質土。白色粘土ブロック(-1.0 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 25 暗黄褐色土 ローム。ソデ芯。しまり強。粘性あり。
 - 26 暗灰褐色土 ソデ芯をくむカマド材粘質土。白色粘土ブロック(-1.0 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
 - 27 暗褐色土 ロームブロック(-2.0 cm) 微量。灰色土ブロック(-1.0 cm) 少量。白色粘土ブロック(-0.5 cm) 含む。焼土ブロック(-0.5 cm) 少量。炭化物ブロック(-1.0 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
 - 28 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.5 cm) 微量。灰色土ブロック(-1.0 cm) 含む。白色粘土粒子〜ブロック(-1.0 cm) 含む。赤色変化した白色粘土ブロック(-1.0 cm)・焼土ブロック(-0.3 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 29 暗褐色土 ロームブロック(淡い)(-1.0 cm)少量。KP粒子(-0.1 cm)微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)少量。焼土ブロック(-0.5 cm)やや多量。しまりやや強。粘性あり。
 - 30 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.2 cm) 多量。上面中心に白色粘土ブロック(-0.8 cm) 含む。霜溶けのせいかしまり弱。粘性あり。

第38図 第58号竪穴建物跡(カマド)実測図



第39図 第58号竪穴建物跡出土遺物実測図

第9表 第58号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口:11.6 底:— 高:(5.8)	内:ヨコナデ 外:体ナデ→体上以外ヘラケズリ(ヨコ)→口ヨコナデ 内~外(口)ウルシ仕上げ	内外:7.5YR7/4 にぶい 橙	白色粒子・黒色粒子 含む 良	A区SI-58 No.2. 覆土 1/3欠損
2 土師器 坏	口:[12.8] 底:— 高:(3.5)	内外:磨滅顕著 口ヨコナデ ウルシ仕上げ 4・6同様の仕上げか	内外:10YR8/4 浅黄 橙	白色粒子・黒色粒子 含む 良	A区SI-58.貼床 下 口縁部1/4残存
3 土師器 坏	口:[12.2] 底:— 高:(4.3)	立ち上がり丸味強 小形 内:ヨコナデ 外:体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内~外(口)ウルシ仕上げ	内外:5YR6/6 橙	白色粒子・灰白色粒 子・黒色粒子含む 良	A区SI-58 口~体部1/4残 存
4 土師器 坏	口:[13.0] 底:— 高:(3.1)	立ち上がり丸味強 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内~外(体上)ウルシ仕上げ	割れ口:10YR8/3 浅 黄橙 内:10YR5/3 にぶい 黄褐 外:10YR6/3 にぶい 黄橙	白色粒子・黒色粒子 含む 良	A区SI-58 口縁部1/3残存
5 土師器 坏	口:[12.4] 底:— 高:(3.2)	粗製土器か 磨滅顕著 立ち上がり丸味 深目 ウルシ仕上げ 内:磨滅 外:磨滅 体下ヘラケズリ	内外:10YR8/3 浅黄 橙	白色粒子・黒色粒子 含む 良	A区SI-58 口縁部1/8残存
6 土師器 坏	口:[12.4] 底:— 高:4.1	立ち上がり丸味強 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ 口ヨコナデ 内~外(口)ウルシ仕上げ	内外:10YR8/3 浅黄 橙	白色粒子・黒色粒子 含む 良	A区SI-58 1/4残存
7 土師器 坏	口:[12.6] 底:— 高:(4.0)	内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ	内外:5YR6/6 橙	白色粒子・灰白色粒 子・黒色粒子含む 良	A区SI-58 1/4残存
8 土師器 甕	口:[22.8] 底:— 高:(3.0)	内外:ヘラケズリ→ヨコナデ ヘラケズリ残る	割れ口:2.5YR4/6 赤 褐 内外:5YR3/2 暗赤 褐	白色粒子・金雲母 粒子・礫(φ1~ 3mm)多量 やや良	A区SI-58 カマ ド2 口縁部1/2残存
9 土師器 甕	口:[17.4] 底:— 高:(9.2)	内:ヘラナデ(ヨコ) 外:ヘラケズリ(タテ)→指ナデか→口ヨコナデ 内外:部分的にスス付着	内外:7.5YR6/6 橙	白色粒子・砂粒多量、 黒色ガラス質粒子少 量 良	A区SI-58 体部1/4残存
10 土師器 甕	口:— 底:[4.6] 高:(8.7)	内:ヘラケズリ(ヨコ)→ナデか 外:ヘラケズリ(体下ヨコ→体タテ)	内:N1.5/0 黒 外:7.5YR7/4 にぶい 橙	白色粒子・砂粒(φ1 ~2mm)多量、黒色 ガラス質粒子少量 良	A区SI-58 体~底部3/4残 存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
11 土師器 甕	口:一 底:(9.0) 高:[4.3]	内:発泡状剥離 外:磨滅	内:7.5YR7/6 橙 外:10YR7/3 にぶい 黄橙	白色粒子少量、砂粒 多量、透明ガラス質 粒子微量 良	A区 SI-58 底部 1/2 残存
12 土師器 鉢	口:(14.6) 底:一 高:[7.0]	内:磨滅 ヘラナデ ヨコナデの境不明瞭 外:ヘラケズリ 体上ヨコ 体中ナナメ→口ヨコナデ 器面に水分が残る 状態で整形したとみられる	内:7.5YR6/4 にぶい 橙 外:10YR7/4 にぶい 黄橙	白色粒子少量、砂粒 多量、透明ガラス質 粒子微量 良	A区 SI-58 口縁部 1/6 残存

を中心に堆積し、順次、ローム・白色粘土を含む10～24層(F群)、茶褐色土を含む7～9層(G群)が堆積する。カマドを被覆する44・45層(E群)と実質的な床面最下層D群との層序は判然としないが、同時期のSI-8同様、カマド被覆後に床面が埋没する可能性がある。最上層である黒色土を含む2～6層(H群)は床面埋没後の堆積層、1層は近・現代の堆積層の可能性はある。

掘り方は、37・40～43層(床面A群)、46～49層(貼床)、50～52層(貼床のない部分の最上層であり床面作出層)、55～69層(掘り方埋土)である。53・54層は床面作出土に封じられたピット状の土層であり、ローム・黒色土・茶褐色土のブロックを含む。柱穴の項目で後述するc期に関わる土層の可能性が考えられる。層序から確実に53・54層以前の堆積である65・69層も同様にc期に関わる可能性がある。

柱穴は、柱穴状の掘り込みを含めp1～19を付した。掘り方に関わる掘り込みには発番していない。70～73層はp1(a期)、74～78層はp3(a期)、79・80層はp5(b期)、81～89層はp6(b期)、90～96層はp8(b期)、97～101層はp16(掘り方掘り込み)の堆積土である。p1は71層が柱痕あるいは抜き穴、72・73層は掘り方とみられる。71層以下の土層は掘り込みが狭く確認し得なかった。p3は74～77層が柱痕あるいは抜き穴、78層が掘り方、p5は79層が床面作出土、80層が掘り方埋土とみられる。p6は81層が床面作出土、82～85層が柱痕あるいは抜き穴、89層が掘り方埋土、86～88層は掘り方埋土として調査したが地山の誤認であったかもしれない。p8は90～92層が柱痕あるいは抜き穴、94～96層は掘り方埋土、93層は掘り込みが狭く、判然としない。p16は掘り方埋土とみられる97～101層を確認した。

柱穴 前述のとおりp1～19を付した。p1～4はa期、p5～10はb期、p11～14はc期の柱穴、p15～19は掘り方と考えられる。p1～8は床面上に確認できたため、第35図に図示した。谷部の黒色土を床面とする建物跡南半部は柱穴のプランや掘り込みが明確でなく、p3・7は2穴の重複が不明瞭である。p6の最上層はロームを含む81層で床面作出土と考えられる。床面覆土A群については周溝付近の掘り方埋土の可能性を指摘したが、a・b期は基本的に同じ床面を使い、柱穴や周溝などが掘り直されたと考えられる。p11はp1の覆土を除去する過程で確認したため第37図に図示したが、c期の柱穴は床面下に確認される。各柱穴の底面レベル・現状の床面からの深さは以下のとおりである。p1:52.44m・50.0cm、p2:52.48m・50.0cm、p3:52.48m・52.5cm、p4:52.295m・55.0cm、p5:52.57m・32.0cm、p6:52.757m・32.0cm、p7:52.4m・38.0cm、p8:52.33m・57.0cm、p9:52.665m・30.0cm、p10:52.64m・24.0cm、p11:52.46m・46.0cm、p12:52.49m・48.0cm、p13:52.18m・75.0cm、p14:52.27m・63.0cmである。a期の深さは50.0～55.0cm、b期の深さは30.0～57cm、c期の深さは46.0～75.0cmである。各時期で斉一性はないが、大まかな傾向は読み取れよう。柱穴間の距離は、a期では、p1-2:3.3m、p2-3:3.3m、p3-4:3.35m、p4-1:3.15m、b期では、p5-6:4.2～4.4m、p9-6:3.9m、p10-6:3.7m、p6-7:4.0m、p7-8:3.9m、p8-5:3.4～3.45m、p8-9:3.9m、p8-10:3.9mである。a期は3.3m、b期は3.9m、c期は2.8mである。厳密ではないが、東西に長い平面形に即した柱間といえる。b期の北東柱穴については、p5・9・10の3穴に可能性があるが、柱間

や床面上の位置からは p9 の可能性が高い。

壁溝 明確に確認し得なかった。床面覆土 A 群 (37・40～43 層) が掘り方埋土であれば、堆積状況から 37・40 層に壁溝の可能性を指摘できよう。37・40 層上に堆積する 38・39・36 層の下面が僅かに凹状であることに留意し、37・40 層に b 期、36・38・39 層に a 期の壁溝である可能性を考えておきたい。

貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から 8200.46g が出土する。土師器坏 1 はほぼ床面、粘土塊 12 は床面より約 10.0cm 上位から出土する。土師器坏 2 は覆土中の破片と掘り方の破片とが接合したが、現地調査の際、床面を逸した部分があるため、接合関係については不明瞭である。

出土遺物 土師器坏 3 は小片であり復元した大きさになるが、やや小形である可能性が高い。不掲載の土師器坏は 96 片が出土する。胎土が白色でウルシ仕上げ (a) を施す破片が 78 片 502.02g ある。口縁部片 25 片のうち、口縁部の形状①が 7 片、②が 7 片、③が 9 片、不明が 2 片である。胎土が白色 (b) の破片は 10 片 66.12g ある。このうち口縁部片は 6 片で、① 2 片、③ 3 片、不明 1 片である。胎土が橙色でウルシ処理 (c) を施す破片は 6 片 36.07g ある。胎土が橙色 (d) の破片は 4 片 21.53g あり、そのうち口縁部片は 2 片あり①と③である。この他、赤褐色の胎土で、赤彩の可能性のある破片が 2 片 10.11g ある。このうち 1 片は口縁部③である。

土師器高坏裾部片は 2 片ある。1 片白色の胎土で 3.43g、1 片は橙色の胎土で 1.83g である。土師器甕は粗い胎土の破片が 78 片 749.29g、薄手の器壁が 50 片 367.52g、緻密な胎土が 20 片 322.89g ある。土師器鉢類は 12 の他、体部片 8 片 176.28g ある。5 は小片であるが粗製土器と判断した。須恵器坏は 9 片が出土する。益子産 4 片、三毳産とみられる 2 片、新治産 1 片、産地不明 1 片である。三毳産の 1 片は丸底気味で比較的大きな径と推定される。7 世紀末葉～8 世紀初頭と考えられる。産地不明の 1 片は底部糸切り・体部下端にヘラケズリを施す。雲母の混入は少ない。この他、土師器微細片 31.83g、粘土塊 135.47g が出土する。

掘り方からは、土師器 (a) 5 片 (① 2 片を含む)・(c) ③ 1 片 54.02g、土師器微細片 2.53g が出土する。

本遺構の時期は床面や掘り方から出土する土師器坏から概ね 7 世紀前葉と考えられる。

火処 カマドを火処とする。北壁中央部付近にする。煙道は北壁を掘り込み建物跡外へ延びる。火床の位置は現状の落ち込み部分であるか、カマド左ソデ前から出土する土師器甕 8 をソデ芯とする位置までであるか判然としないが、土師器甕 8 は伏せた状況の口縁部のみが出土し、建物跡覆土中から体部や底部とみられる破片の出土がないことから、現状の落ち込み部と判断したい。併せて、8 を取り払った時期 (a 期) とソデ芯とする時期 (b 期以前) の 2 時期が推定できよう。現状のカマドは a 期に伴うが、構築時期は定かではない。しかし、床面と掘り方の遺物出土状況からは大きな時期差は想定されない。覆土は 30 層を確認した。1～5 層は白色粘土を含む層で、カマド被覆する最上層である。6・7 層は白色粘土や焼土を含む。煙道に関連する堆積層の可能性が考えられる。8～11 層は白色粘土を含む。カマド外側から前面に堆積する。12～15 層は白色粘土ブロックや焼土を含む。火床上部に堆積する。16～18 層の主体は白色粘土である。19・20 層ともに火床前方に堆積する。20 層は粘土の混入が少ない。21～23 層は焼土・ローム・白色粘土を含み、火床に堆積する。24 層はソデから立ち上がるカマド材、25・26 層は粘質土で作られたソデ芯である。27～30 層は掘り方埋土層である。掘り方は、現況では奥壁を中心に成形され、火床下の埋土は少ない。焼土や灰、炭化物を主体とする層は確認されておらず、火床は掘り方埋土ごと取り払われた可能性が考えられる。ソデは地山を掘り残し、同種の粘質土で成形する。24 層は天井部に繋がるカマド材とみられ、ソデ材と

第3章 確認された遺構と遺物

同種の粘質土が用いられる。覆土の堆積状況からは、火床を浚い、天井部を取り払い、埋め戻したものと考えられる。6・7層が煙道関連の堆積であれば、煙道付近の天井部は取り払われず、カマド内部を埋め戻す際に塞がれた可能性が考えられる。火床はロームを含む23層・粘土や焼土を含む22層・ロームを含む21層が交互に堆積する。この後、火床前方の19・20層までを16～18層、14・15層で埋め戻す。建物跡の埋没は、先述のとおり、カマド1層堆積後と判断される。カマド被覆する最上層1～5層については、本来、カマド埋土8～10層をすっぽり覆う状況であったと考えられる。

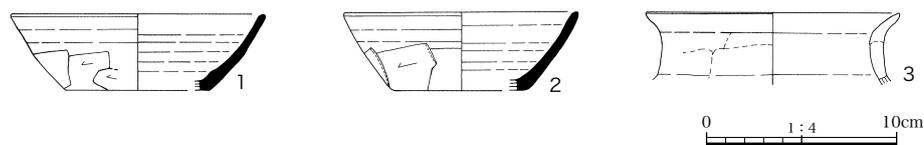
遺物出土状況 覆土中から土師器甕8、小礫254(図版二八)、粘土塊135.47gが出土する。カマド前方から出土する土師器甕8は口縁部を下に伏せた状態であることからカマドのソデ芯材であろう。口縁部のみで、同一個体の出土がないことから、現状のカマド以前の材と判断される。右ソデから長形の白色礫第80図254が長軸を立てて出土する。被熱の痕跡はない。カマド芯材とも考えられるが、小礫が単独で出土することからは芯材の役割を担えるか疑問が残る。カマド構築の際の目印、呪具や鎮魂具の可能性を指摘しておきたい。

出土遺物 図示した遺物のほか、土師器甕8の同一個体とみられる21片88.88gが出土する。

第62号竪穴建物跡(SI-62)(第40・41図 第10表 写真図版一二)

位置 A区L-9・10に位置する。現状で東に向けた斜面地に立地する。重複関係 第59号溝状遺構と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 方形で、東西[2.8]m・南北2.46～2.78mである。第59号溝状遺構との重複部付近にSP-B壁際に堆積する4層が確認できるため、西壁に近い堆積と判断できよう。削平のため床面は失われている。遺構確認面から掘り方底面の深さは0.1m前後、レベルは53.72～53.8mである。主軸 N-45°-Eである。床面 床面作出層とみられるカマド17層上面のレベルが床面と判断される。レベルは53.83mである。掘り方は鹿沼軽石層下を掘り込む。

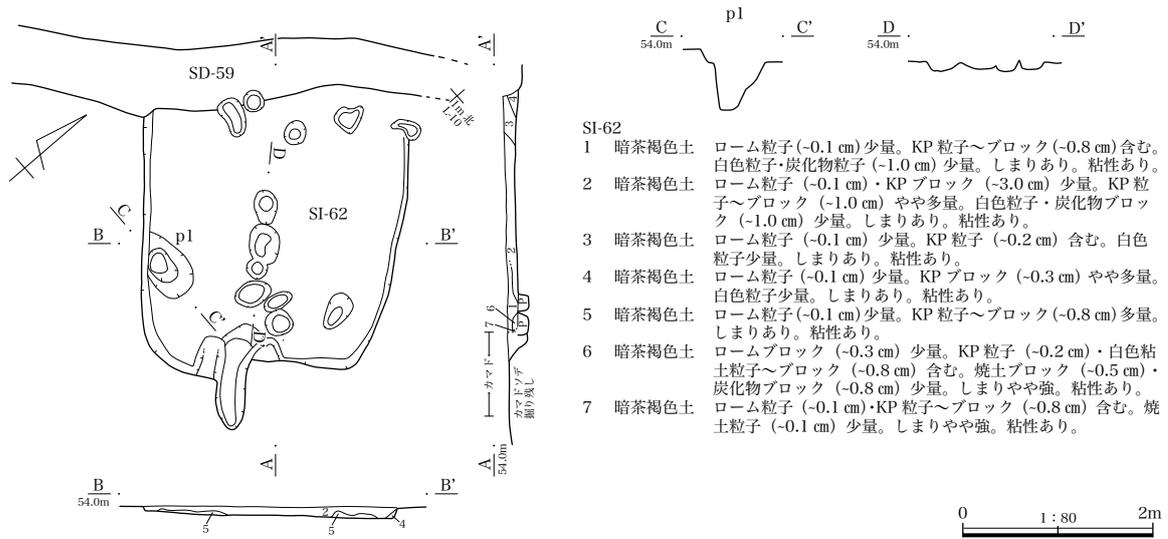
覆土 掘り方埋土とみられる7層を確認した。6層は白色粘土や焼土、炭化物を含む。後述のとおり、カマドの作り替えが指摘できるが、床面の作り替えの想定も可能であろう。柱穴 判然としない。掘り方底面には複数のピット状の凹凸が観察される。作図のないピット状の凹凸のレベルは、第59号溝状遺構沿いで53.59～53.68mでEP-2に近い。SP-B北側は53.2mである。壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。



第40図 第62号竪穴建物跡出土遺物実測図

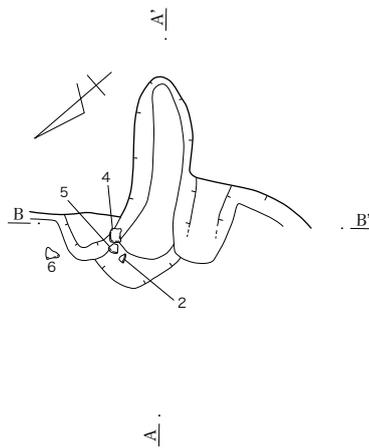
第10表 第62号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	(単位:cm) 出土状況 残存状況
1 須恵器 坏	口:[13.4] 底:[7.6] 高:4.0	ロクロ成形 三和産 ヘラケズリ幅広 外:体下ヘラケズリ(ヨコ)	内外:2.5Y7/1 灰白	白色粒子多量、黒色 粒子・砂礫 良	A区SI-62 口縁部1/4、底部 一部残存
2 須恵器 坏	口:[12.4] 底:[7.0] 高:4.1	ロクロ成形 三和産 外:体下ヘラケズリ(ヨコ)	内外:2.5Y6/1 黄灰	白色粒子多量、ガラ ス質粒子・砂礫 良	A区SI-62カマ ドNo.3、覆土、SI- 64 口～体部1/4、底 部一部残存
3 土師器 甕	口:[13.2] 底:— 高:(3.7)	台付甕か 口「コ」の字状 内:口ヨコナデ ロスス付着 外:ヘラケズリ(ヨコ)→口ヨコナデ 体上(口ヨコナデ 下)ナデ	内外:5YR4/4 にぶ い赤褐	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子少量 良	A区SI-62 口縁部1/6 残存

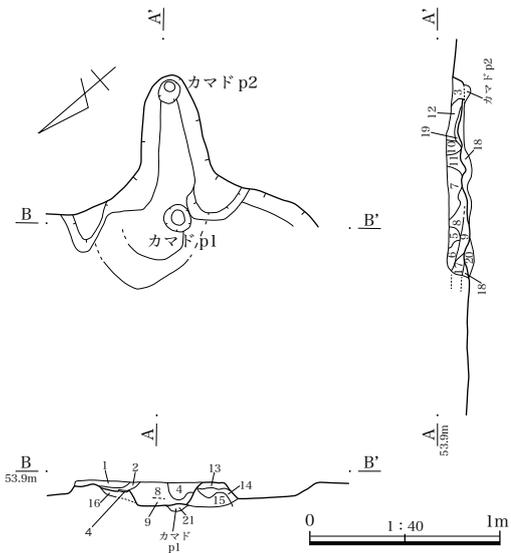


- SI-62
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子~ブロック(-0.8 cm)含む。白色粒子・炭化物粒子(-1.0 cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP ブロック(-3.0 cm)少量。KP 粒子~ブロック(-1.0 cm)やや多量。白色粒子・炭化物ブロック(-1.0 cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)含む。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
 - 4 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP ブロック(-0.3 cm)やや多量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
 - 5 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子~ブロック(-0.8 cm)多量。しまりあり。粘性あり。
 - 6 暗茶褐色土 ロームブロック(-0.3 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)・白色粘土粒子~ブロック(-0.8 cm)含む。焼土ブロック(-0.5 cm)・炭化物ブロック(-0.8 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 7 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子~ブロック(-0.8 cm)含む。焼土粒子(-0.1 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。

SI-62 カマド床面



SI-62 カマド掘り方



SI-62 カマド

- 1 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.2 cm)少量。KP ブロック(-0.3 cm)やや多量。しまりやや強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色粘土ブロック(-0.5 cm)含む。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)含む。焼土ブロック(-0.3 cm)少量。しまり強。粘性あり。
- 4 黒褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む。KP 粒子(-0.1 cm)少量。白色粒子微量。焼土粒子・炭化物粒子(-0.1 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
- 5 暗茶褐色土 KP ブロック(-1.0 cm)少量。暗茶褐色土ブロック(-1.0 cm)含む。焼土ブロック(-0.6 cm)・炭化物ブロック(-0.6 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)微量。KP 粒子(-0.1 cm)少量。白色粒子・炭化物粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
- 7 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-3.0 cm)含む。白色粒子・焼土粒子(-0.1 cm)微量。炭化物粒子(-0.2 cm)少量。しまり強。粘性あり。
- 8 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子~ブロック(-0.8 cm)含む。白色粒子微量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)少量。焼土粒子(-0.1 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。土器片あり。しまり強。粘性あり。
- 9 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子~ブロック(-1.0 cm)少量。焼土粒子(-0.2 cm)微量。炭化物ブロック(-0.3 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
- 10 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.1 cm)含む。焼土粒子(-0.2 cm)少量。炭化物粒子(0.2 cm)微量。しまり強。粘性あり。
- 11 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP ブロック(-0.8 cm)含む。黒褐色土ブロック(-0.3 cm)・白色粒子微量。焼土ブロック(-0.5 cm)少量。しまり強。粘性あり。
- 12 暗赤褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.1 cm)少量。白色粒子微量。焼土ブロック(-0.3 cm)やや多量。炭化物ブロック(-0.3 cm)少量。しまり強。粘性あり。
- 13 暗灰褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)やや多量。KP 粒子(-0.1 cm)・暗茶褐色土ブロック(-0.6 cm)・白色粒子・白灰色粘土ブロック(-0.3 cm)少量。焼土粒子(-0.2 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
- 14 暗茶褐色土 茶褐色粘土主体。白色粒子微量。白色粘土粒子~ブロック(-0.3 cm)少量。炭化物粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 15 暗茶褐色土 14層にKP 粒子~ブロック(-1.0 cm)含む。白色粘土ブロック(-0.6 cm)・焼土粒子(-0.1 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm)少量。しまり強。粘性あり。
- 16 暗褐色土 21層にKP 粒子やや多量。
- 17 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)やや多量。白色粒子・焼土粒子(-0.1 cm)微量。炭化物粒子(-0.2 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
- 18 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)微量。KP 粒子(-0.2 cm)含む。しまりやや強。粘性あり。
- 19 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)微量。KP ブロック(-0.3 cm)やや多量。焼土粒子(-0.1 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。しまり強。粘性あり。
- 20 暗褐色土 KP 粒子~ブロック(-3.0 cm)主体。しまり強。粘性あり。
- 21 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子~ブロック(-1.2 cm)含む。黒褐色粒子(-0.2 cm)・焼土粒子(-0.2 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。

第41図 第62号竪穴建物跡実測図

第3章 確認された遺構と遺物

遺物出土状況 覆土中から 472.14g が出土する。掘り方からの出土とみられるが、現地調査の所見からは概ねカマド付近からの出土である。須恵器環 2 は、第 64 号竪穴建物跡出土の 1 片と接合する。注記を誤った可能性も残るが、本遺構が新しい可能性も考えられる。小片ではあり時期は不詳であるが、須恵器環 1 に新しい要素がみられることも看過できない。p1 から須恵器環片が出土する。

出土遺物 土師器甕 3 は 9 世紀前葉～中葉、須恵器環 2 は 9 世紀中葉、須恵器環 1 は 9 世紀中葉もしくは後葉の特徴も観察できる。

図示し得なかった遺物は土師器、須恵器の小片である。p1 から出土する須恵器環は三畳産の可能性も指摘できるが、時期を含め、判然としない。灯明皿に転用されるが、煤状の付着物は本遺構以外の出土遺物と同様の特徴が観察される。須恵器環はこれ以外に 6 片が出土する。益子産とみられる破片 (12.21g) は口縁部が外反気味で 9 世紀第 2 四半期、体下位にヨコ方向のヘラズリを施す破片 (7.79g) は 9 世紀中葉の三和産とみられる。この他の破片の産地は判然としないが三畳産の可能性が考えられる。p1 出土片と併せ 33.5g である。時期の判別は難しいが、1 片は 9 世紀代であろう。土師器環はロクロ成形の 3 片 9.89g が出土する。1 片は内面にミガキを施し 9 世紀前半、1 片はミガキ後に黒色処理を施し 9 世紀前葉以降、1 片は 9 世紀中葉以降であろう。土師器甕は 38 片 127.94g が出土する。「コ」字状の口縁部とこれと同一個体とみられる体部片は 9 世紀前葉～中葉であろう。これ以外に「コ」字状の口縁部は 3 片が出土する。常総型とみられる口縁部、胎土に金雲母を含む体部片外面にタテ方向のヘラミガキを施す 13 片 (101.89g) が出土する。体部片のうち 17 片は外面にタテ方向のヘラミガキを施す。9 世紀前葉～中葉であろう。出土遺物は 9 世紀前葉～中葉が主体であるが、須恵器環 1 に後出する特徴がみられよう。この他、粘土塊 55.95g が出土する。

火処 カマドを火処とする。東壁南東隅部寄りに位置する。煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。カマド左ソデは地山を掘り残し、焼土を含まない 1 層で構築されるが、地山の掘り残しは確認されず、焼土や炭化物を含む 14 層を最下層にして構築される。カマドの作り替えが示唆される。覆土は 21 層を確認した。1・2 層は鹿沼軽石、白色粘土を含む。カマド被覆層であろう。3 層は堆積状況から煙道覆土と考えられる。4～9 層は焼土や炭化物、暗茶褐色土・白色粘土を少量ながら含む。10～12 層は煙道に堆積する焼土層である。13～16 層はカマドソデの構築層である。17・18 層は建物跡床面の構築層と判断される。19～21 層は掘り方の堆積層である。21 層はカマド p1 の覆土であるが、カマド底面を構築する 20 層との層序は不明である。カマド p2 は位置的に煙道に関連する可能性が考えられるが、層序等、不詳な点が多い。17・18 層から、カマド底面を構築後建物跡床面が作出されたと判断できる。ソデは、建物構築時には地山を掘り残し、白色粘土と鹿沼軽石 (16 層) で作られる。右ソデの作り替えを想定するならば、地山の掘り残しは壁際まで取り去り、白色粘土を主体にロームや暗茶褐色土 (13～15 層) で作出したと考えられる。火床は奥壁側には焼土 (10～12 層) が堆積するが火床部分への目立った堆積 (4～9 層) は確認されない。カマドは廃絶に伴い火床を浚い、天井部分を取り去り、カマド材や火床に堆積した焼土や炭化物で埋め戻されたと判断される。その際、奥壁部の天井部が取り払われたか否かは不明である。火床部分の埋め戻し後カマド全体を被覆したと考えられるが、21 層はカマドの被覆に伴う堆積とみられる。

遺物出土状況 覆土中から出土する。4～6 はカマド覆土 2 層に相当する高さから出土する。カマド被覆土中の遺物であろう。

出土遺物 須恵器環 2 は前述のとおり 9 世紀中葉の三和産であろう。図示し得なかったが、4 は土師器甕片で金雲母を含み外面にタテ方向のヘラミガキを施す。9 世紀前葉～中葉の常総型であろう。5 は土師器甕、6 は胎土に金雲母を含む土師器甕 (常総型) であろう。この他、4 同様の土師器甕 1 片、6 同様の土師器甕 1 片、

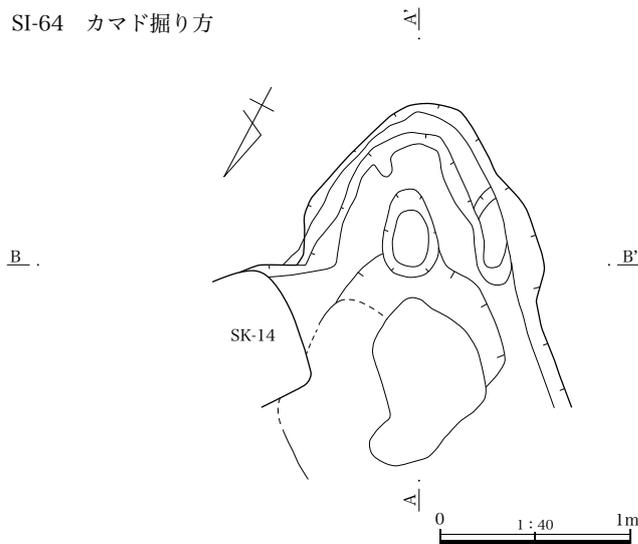
器種不明の土師器片 1 片 6.95g が出土する。土師器甕は 2.37g、土師器甕（常総型）は 5.8g である。時期的には床面出土遺物と同様である。この他、粘土塊 41.12g が出土する。

第 64 号竪穴建物跡 (SI-64) (第 42～46 図 第 11 表 写真図版七～九・一九・二〇・三〇)

位置 A 区 L・M-9 に位置する。東側の谷に向けた斜面地にある。重複関係 SI-19・79 と重複する。SI-19 より新しい。SK-14・100・101 (SK-100・101 土層注記は 81 頁に記載) と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 方形で、3.26～3.66m、深さは 0.5m である。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。カマドの位置を東壁とした場合、N-50° -E である。

床面 鹿沼軽石層下のローム層を床面とする。建物跡壁は鹿沼軽石である。柱穴と考えられる小穴の重複、

SI-64 カマド掘り方

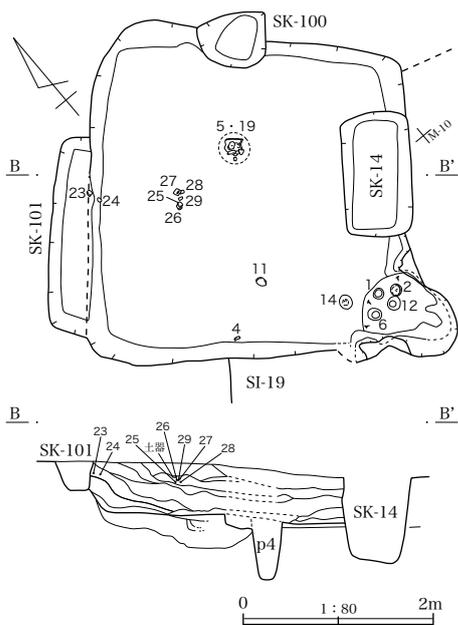


床面作出層とみられる 54 層に被覆された小穴状の 55・56 層から複数時期が想定される。床面レベルは 53.0m 前後である。西側はやや高く 53.04m、重複する SK-14 付近は低く 52.9m である。西側に堆積する 25 層は掘り方埋土ではなく床面覆土と判断した。

覆土 61 層を確認した。1～29 層は床面、30～52 層は柱穴掘り方、53～61 層は掘り方である。

床面は、ロームブロックを含む 25～28 層 (E 群) が堆積後、茶褐色土ブロックを含む 11～24 層 (D 群)、鹿沼軽石を含む 7～10 層 (C 群)、炭化物を含む黒色土 5・6 層 (B 群)、1～4 層 (A 群) が堆積する。29 層は重複する SK-14 覆土

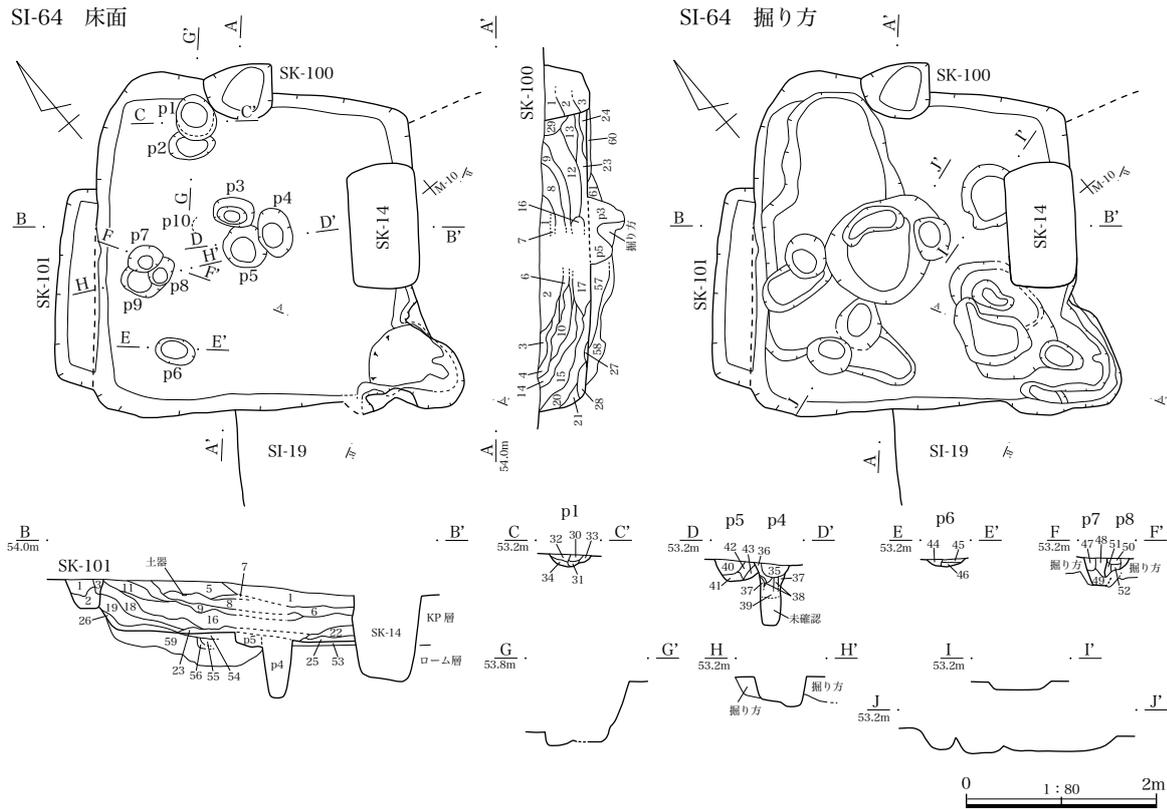
第 42 図 第 64 号竪穴建物跡 (カマド) 実測図 (1)



- | | |
|--------------------------------|--|
| 41 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子 (-0.3 cm)・白色粒子・KP ブロック (-1.0 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 42 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 43 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 44 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子微量。KP 粒子 (-0.3 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 45 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子微量。KP 粒子 (-0.2 cm)・ロームブロック (-0.8 cm) 少量。しまり強。粘性あり。 |
| 46 暗黄褐色土 | ローム粒子多量。KP 粒子 (-0.3 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 47 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子微量。KP 粒子 (-0.3 cm) 少量。しまり強。粘性あり。 |
| 48 暗茶褐色土 | ローム粒子・KP 粒子 (-0.5 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 49 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子微量。KP 粒子 (-0.2 cm)・ロームブロック (-0.8 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 50 暗茶褐色 | ローム粒子・KP 粒子 (-0.5 cm) 多量。白色粒子・黒色ブロック (-1.0 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 51 暗褐色土 | ローム粒子少量。KP 粒子 (-0.8 cm) 含む。白色粒子・黒色ブロック (-0.8 cm) 微量。しまり強。粘性あり。 |
| 52 暗褐色土 | ローム粒子・KP 粒子・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 53 床面に黒褐色土が貼り付いた層。床面 25 層と同質か。 | |
| 54 暗褐色土 | ローム粒 (-0.1 cm) 微量。KP 粒 (-0.2 cm) 多量。しまりやや強。粘性あり。p10 被覆。 |
| 55 暗褐色土 | ローム粒 (-0.1 cm) 微量。KP 粒 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 56 暗褐色土 | ローム粒 (-0.1 cm) 微量。KP 粒 (-0.2 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 57 暗黒褐色土 | ローム粒 (-0.1 cm) 微量。KP 粒～ブロック (-0.8 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 58 暗黒褐色土 | ローム粒～ブロック (-1.0 cm)・KP 粒～ブロック (-2.0 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。 |
| 59 暗茶褐色土 | ローム粒～ブロックと KP 粒～ブロック (-1.2 cm) の混合層。しまりやや強。粘性あり。 |
| 60 暗茶褐色土 | ローム粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。ロームブロック (-2.0 cm) 多量。しまり強。粘性あり。 |
| 61 暗褐色土 | ローム粒子 (-0.2 cm)・KP 粒子 (-0.5 cm)・暗褐色ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子・KP ブロック (-2.0 cm) 微量。ロームブロック (-1.0 cm) 含む。しまりやや強。粘性あり。 |

第 43 図 第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況図

第3章 確認された遺構と遺物



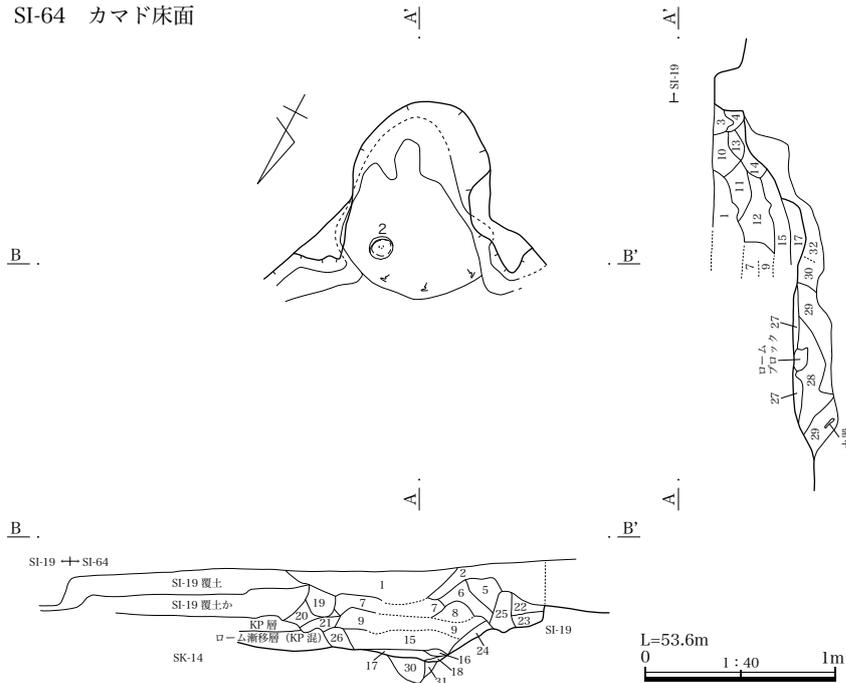
SI-64

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土
6 黒褐色土
7 黒褐色土
8 黄暗褐色土
9 暗褐色土
10 暗褐色土
11 暗褐色土
12 暗褐色土
13 暗褐色土
14 暗褐色土
15 暗褐色土
16 暗茶褐色
17 15層+炭化物粒子 (-0.2 cm) 少量。
18 暗褐色土
19 茶褐色土
20 暗褐色土
21 暗褐色土
22 暗褐色土
23 暗褐色土
24 暗褐色土
25 暗褐色土
26 暗褐色土
27 暗褐色土
28 27層のロームブロック・KPブロック主体層。
29 暗褐色土
30 暗褐色土
31 暗褐色土
32 暗褐色土
33 暗黄褐色土
34 暗褐色土
35 暗褐色土
36 暗褐色土
37 暗黄褐色土
38 暗褐色土
39 暗褐色土
40 暗褐色土</p> | <p>ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.1 cm)含む。白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.5 cm)・炭化物ブロック(-0.3 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子微量。KP粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)含む。黒褐色土粒子(-0.2 cm)微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子(-0.2 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量。白色粒子含む。炭化物粒子(-0.2 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子微量。KP粒子(-0.2 cm)含む。白色粒子微量。炭化物ブロック(-0.8 cm)含む。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・KPブロック(-0.3 cm)少量。茶褐色土ブロック(ロームに似る/-1.0 cm)微量。白色粒子少量。炭化物ブロック(-0.3 cm)微量。しまりあり。粘性あり。
KP粒子含む。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子微量。KPブロック(-0.5 cm)多量。白色粒子微量。炭化物ブロック(-0.8 cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子微量。KPブロック(-0.5 cm)含む。茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP粒子~ブロック(-5.0 cm)含む。白色粒子・炭化物ブロック(-1.0 cm)少量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.2 cm)含む。白色粒子少量。橙色粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子微量。KP粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子微量。KP粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.2 cm)含む。白色粒子・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・KPブロック(-0.3 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量。黒褐色土ブロック(-1.0 cm)・白色粒子・炭化物粒子(-0.2 cm)微量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.2 cm)含む。橙色粒子(-0.2 cm)微量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子微量。KP粒子(-0.1 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.5 cm)含む。白色粒子・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)含む。黒褐色土ブロック(-0.3 cm)微量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.5 cm)多量。黒褐色土ブロック(-0.3 cm)微量。白色粒子少量。橙色粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子(-0.2 cm)・KP粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP粒子(-0.2 cm)含む。KPブロック(-0.3 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)・白色粘土ブロック(-0.5 cm)少量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)少量。ロームブロック(-0.8 cm)微量。KP粒子(-0.2 cm)少量。KPブロック(-1.0 cm)微量。茶褐色土ブロック(-1.0 cm)含む。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子・KP粒子(-0.2 cm)微量。茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量。白色粒子・炭化物粒子(-0.1 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子微量。ロームブロック(-1.2 cm)・KPブロック(-0.3 cm)・KPブロック(-2.0 cm)少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子~ブロック(-1.2 cm)やや多量。KP粒子~ブロック(-1.0 cm)含む。黒褐色土ブロック(-1.0 cm)微量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子~ブロック(-1.0 cm)含む。KPブロック(-0.3 cm)やや多量。暗褐色土粒子(-0.2 cm)微量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子(-0.2 cm)・ロームブロック(-1.2 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・KPブロック(-1.2 cm)少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
ローム粒子微量。KP粒子(-0.2 cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.5 cm)含む。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子(-0.2 cm)少量。KP粒子(-0.8 cm)微量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
ロームブロック(-0.5 cm)微量。KPブロック(-0.5 cm)含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子(-0.2 cm)含む。ロームブロック(-1.0 cm)少量。KP粒子(-0.2 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子(-0.2 cm)少量。KP粒子(-0.1 cm)微量。黒色土ブロック(-0.8 cm)少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子・KPブロック(-0.8 cm)少量。黒色土ブロック(-0.5 cm)・白色粒子・焼土粒子(-0.2 cm)・炭化物粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子・KPブロック(-0.3 cm)・白色粒子・炭化物ブロック(-0.5 cm)・焼土粒子微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子含む。KP粒子・白色粒子・焼土粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子・KP粒子(-0.2 cm)・白色粒子・焼土粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
ローム粒子・KP粒子・白色粒子・焼土ブロック(-0.8 cm)微量。しまり強。粘性あり。
ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.2 cm)少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。</p> |
|---|--|

第44図 第64号竪穴建物跡実測図

の可能性があろう。C～E群は建物跡廃絶に関わる埋め戻し土と考えられる。A・B群は建物跡廃絶後の覆土とも判断できるが、5層に炭化物を含む点、後述するA・B群から出土する袴帯7点を考慮するならば、廃絶に伴う埋土の可能性も残る。

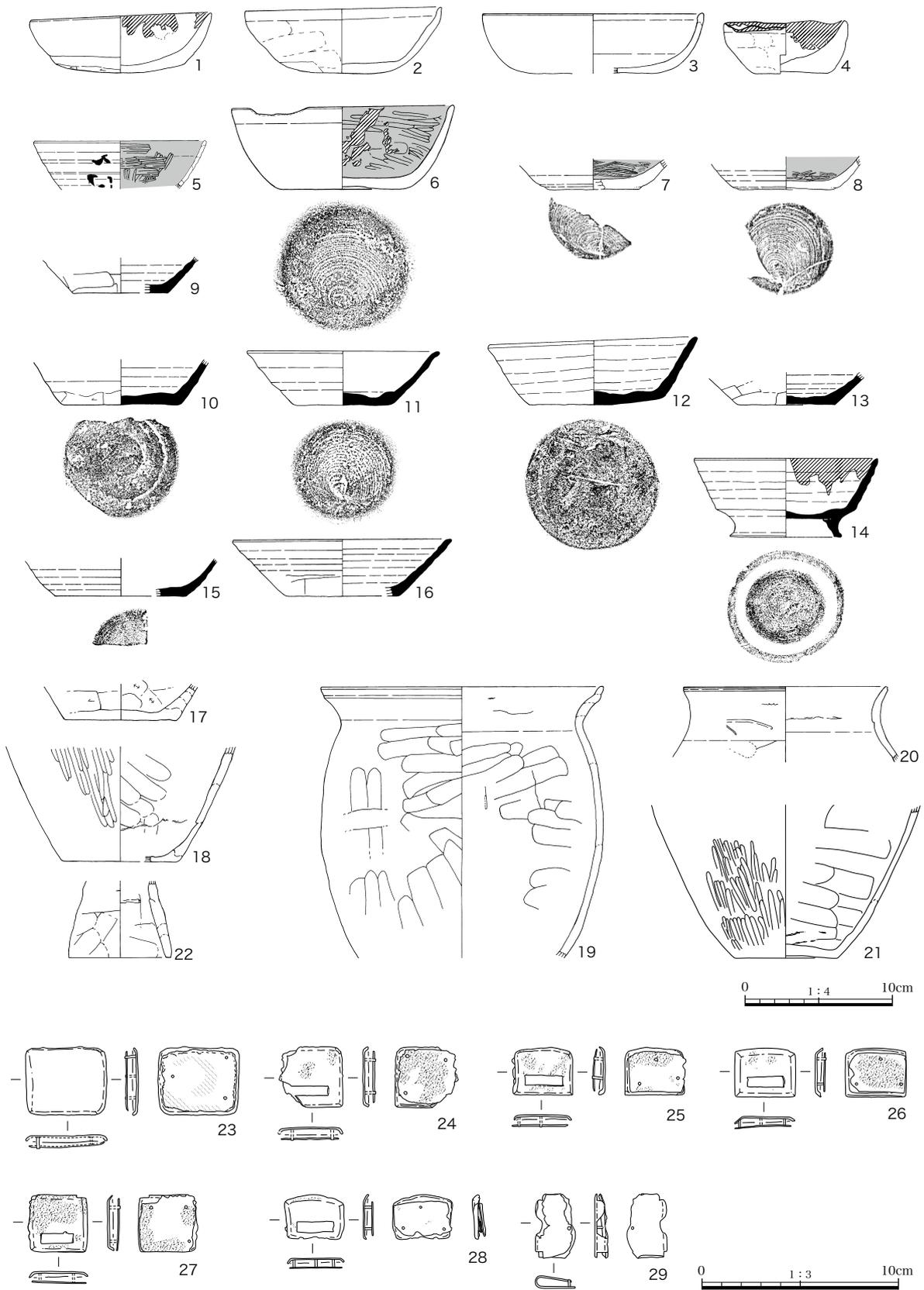
掘り方は西半部が深い。西半部はロームと鹿沼軽石の混合層59層、鹿沼軽石主体の54・57・58層が堆積する(F群)。60・61層はロームを主体とする(G群)。54・57・60・61層は床面作出層であろう。54層に被覆される55・56層が旧床面に付随する覆土である場合、F群は廃絶時の床面を作出する新期の掘り



- SI-64 カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.1cm)・白色粒子・焼土粒子(-0.3cm)・炭化物粒子微量。白色粘土粒子(0.3cm)・茶褐色ブロック(3.0cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 2 暗黄褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.2cm)・白色粒子・焼土粒子(0.3cm)・炭化物粒子(0.5cm)微量。白色粘土粒子(-0.3cm)やや多量。白色粘土ブロック(-1.0cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 3 暗褐色土 白黄粘土粒(-0.2cm)・焼土(-0.2cm)含む。炭化物(-0.1cm)少量。しまりややあり。粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒(-0.1cm)・焼土(-0.2cm)・KP(-0.1cm)少量。白色粒・炭化物粒(-0.1cm)微量。しまりややあり。粘性あり。
 - 5 暗黄褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.2cm)・白色粒子・焼土粒子(-0.3cm)・炭化物粒子微量。白色粘土粒子(-0.3cm)やや多量。白色粘土ブロック(-5.0cm)含む。しまり強。粘性あり。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子・白色粒子・炭化物粒子微量。焼土粒子(-0.5cm)少量。白色粘土粒子(-0.3cm)含む。しまり強。粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒(0.1cm)・KP粒(-0.2cm)微量。焼土粒(-0.2cm)・白色粘土粒(-0.1cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子・白色粒子・炭化物粒子微量。焼土粒子(-0.5cm)少量。白色粘土粒子(0.2cm)やや多量。しまりあり。粘性あり。
 - 9 暗褐色土 ローム粒(0.1cm)・炭化物粒(0.2cm)微量。KP粒(-0.2cm)少量。焼土(-0.4cm)やや多量。しまりやや強。粘性あり。
 - 10 暗褐色土 白黄褐色粘土(-0.3cm)含む。炭化物粒(-0.5cm)・焼土(-0.1cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 11 暗灰褐色土 白黄粘土粒〜ブロック(-1.0cm)やや多量。焼土(-0.5cm)少量。炭化物(-0.5cm)含む。しまりやや強。粘性あり。
 - 12 暗灰褐色土 白黄粘土粒〜ブロック(-1.0cm)・焼土(-0.2cm)含む。炭化物(-0.5cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 13 暗褐色土 白黄褐色粘土粒(-0.5cm)少量。焼土(-0.1cm)含む。炭化物粒(-0.1cm)微量。しまり強。粘性あり。
 - 14 暗褐色土 白黄褐色粘土(-0.1cm)・ローム粒(-0.1cm)少量。焼土(-0.5cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 15 暗赤褐色土 焼土(-0.5cm)多量。白色粘土(-0.3cm)含む。KP(-0.2cm)少量。炭化物粒(-0.2cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 16 暗褐色土 ローム粒(-0.1cm)・KP(-0.2cm)・炭化物粒(-0.1cm)微量。焼土粒(-0.2cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 17 暗褐色土 16層に白色粘土(-0.5cm)含む。
 - 18 暗褐色土 16層に焼土(-0.3cm)やや多量。
 - 19 暗褐色土 ローム粒(-0.1cm)・KP(-0.5cm)含む。炭化物(0.3cm)少量。焼土(-0.3cm)微量。しまりあり。粘性あり。
 - 20 暗褐色土 ローム粒(-0.1cm)やや多量。KP(-0.2cm)含む。焼土(-0.2cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 21 暗黄褐色土 KP粒〜ブロック(-1.0cm)主体。ローム(-0.5cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 22 暗褐色土 ローム粒(-0.3cm)含む。KP(-0.1cm)少量。焼土(-0.1cm)・炭化物(0.1cm)微量。しまり強。粘性あり。
 - 23 暗褐色土 ローム粒(-0.3cm)・KP(0.1cm)・白色粘土粒(-0.3cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 24 暗白褐色土 白色粘土ブロック(-2.0cm)主体。KP(-0.2cm)・橙色粒(-0.1cm)少量。しまりやや強。粘性あり。
 - 25 暗白褐色土 24層より白色粘土ブロック(-3.0cm)大きい。
 - 26 暗白褐色土 白色粘土粒〜ブロック(-1.0cm)主体。下層を中心に焼土(-0.3cm)少量。黒褐色ブロック(-0.2cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 27 暗褐色土 ローム粒(-0.2cm)含む。KP(-0.2cm)・炭化物(-0.1cm)少量。KPブロック(-1.0cm)微量。しまり強。粘性あり。
 - 28 暗褐色土 ローム粒〜ブロック(-0.8cm)やや多量。KP粒〜ブロック(-0.8cm)・炭化物(-0.3cm)少量。白色粒微量。しまり強。粘性あり。
 - 29 暗褐色土 ローム粒〜ブロック(-1.2cm)やや多量。KP(-0.2cm)少量。橙色粒(-0.3cm)微量。しまり強。粘性あり。
 - 30 暗褐色土 ローム粒〜ブロック(-3.0cm)含む。KP(-0.3cm)・焼土(-0.3cm)少量。炭化物(-0.2cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
 - 31 暗褐色土 焼土(-0.5cm)少量。ローム粒〜ブロック(-1.0cm)含む。黒褐色ブロック(-0.8cm)少量。白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
 - 32 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.2cm)少量。KP粒子(-0.1cm)・焼土ブロック(-0.8cm)微量。ロームブロック(-3.0cm)多量。しまり強。粘性あり。

第45図 第64号竪穴建物跡(カマド)実測図(2)

第3章 確認された遺構と遺物



第46図 第64号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11表 第64号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口:12.4 底:9.6 高:3.8	灯明皿転用 内:ヨコナデ(口→底 最後底面から口に向けてナデながら指を抜く) 外:ヘラケズリ(体→底 体ヨコ方向 直交する2方向に大別できる) スス付着(内面1ヶ所及び内口と外口一部)	内外:7.5YR7/6 橙	白色粒子・黒色ガラス質粒子少量 良	A区SI-64 No.11 完存
2 土師器 碗	口:13.3 底:5.0 高:4.5	内:ヨコナデ ウルシ仕上げ 体下～底部は既に失っている 外:ヘラケズリ(ヨコ)3段 上→下)→ナデ→口ヨコナデ 体上器面に成形の小ヒビが残る 底ヘラケズリ方向→底周に沿ってヘラケズリ	内外:10YR6/3 にぶい黄橙	白色粒子・黒色ガラス質粒子微量、黒色粒子少量 良	A区SI-64 カマド No.1 完存
3 土師器 碗	口:[15.0] 底:— 高:(4.0)	体丸味あり 内外磨滅顕著 内:器表面の剥落あり ヘラケズリ→体ヨコナデ 口端下 稜 外:器表面の剥落顕著 磨滅のため判断としないが体ヘラケズリか 底部回転ヘラケズリ	内外:10YR8/3 浅黄橙	白色粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区SI-64 1/2 残存
4 粗製土器	口:8.4 底:5.6 高:3.6	内面上位～口端スス付着 灯明皿転用 スス付着(内面1/4強) 内:(指?)ナデ→上半ヨコナデ(粗い) 口端指でつまんで整形か 外:ヘラケズリ(体上～下2段→ナデ(指か 下長め 上短め)→口ヨコナデ 底部回転糸切り 元々の面の整形が粗く凸凹あり 器面やや磨滅	内外:10YR8/3 浅黄橙	白黄色粒子・ガラス質粒子含む 良	A区SI-64 No.14 完存
5 土師器 碗	口:[15.4] 底:— 高:(4.4)	ロクロ使用 底部欠損 内:ヘラミガキ(タテ→体中位ヨコ)→口ヨコナデ 黒色処理 外:墨書あり	内:N2/0 黒 外:5YR5/6 明赤褐	白色粒子・黒色ガラス質粒子微量 良	A区SI-64 No.8 口縁部1/8 残存
6 土師器 碗	口:15.0 底:8.6 高:5.7	ロクロ使用 灯明皿転用 転用時期不明 内:ヘラケズリ→ミガキ(体ヨコ 底直交する2方向)→口端磨滅 スス付着 外:器表面磨滅 部分的に剥落 ロクロ→口ヨコナデ 底部回転糸切り 底周ヘラナデ 内～外(口)黒色処理 口端 片口状に欠ける部分1ヶ所 わずかに凹む程度の欠け3ヶ所 破面は磨滅	内:7.5YR1.7/1 黒 外:7.5YR6/6 橙	白色粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区SI-64 No.10 完存
7 土師器 碗	口:— 底:[6.0] 高:(2.0)	最大径:(5.0) ロクロ使用 内:ミガキ(底一方向→体ヨコ(幅約4cm一単位)) 外:ロクロ 底:底部円柱技法? 回転糸切り	内:N2/0 黒 外:7.5YR4/4 褐	白色粒子微量、黒色ガラス質粒子少量 良	A区SI-64 硬い 5・6・7層と同じ層 底部1/2 残存
8 土師器 碗	口:— 底:[6.4] 高:(2.2)	最大径:(5.0) ロクロ使用 内:ミガキ(底一方向→体ヨコ(幅約5cm一単位)) 外:ロクロ 底:底部円柱技法? 回転糸切り	内:N2/0 黒 外:7.5YR5/4 にぶい褐	白色粒子少量 良	A区SI-64 底部3/4 残存
9 須恵器 杯	口:— 底:[6.4] 高:(2.4)	最大径:(10.6) 三和産 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(手持ちヘラケズリ) 底:ヘラケズリ(一方向か)	内外:7.5YR6/6 橙	白色粒子多量 良	A区SI-64 No.8 底部1/4 残存
10 須恵器 杯	口:— 底:7.8 高:(3.1)	最大径:(11.8) 新治産 東城寺段階 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り	内外:2.5Y6/2 灰黄	雲母粒子多量、砂粒微量 良	A区SI-64 底部完存
11 須恵器 杯	口:[13.0] 底:6.6 高:3.6	益子産 ロクロ成形 内外磨滅 外:体下底からの粘土をナデ上げている 底部回転糸切り	内外:2.5Y6/2 灰黄	黒色粒子・砂礫良	A区SI-64 No.13 口～体部1/4 残存、底部完存
12 須恵器 杯	口:14.6 底:9.0 高:4.6	益子産 ロクロ成形 内:底中央ボタン状に突出 外:体最下位の水引強く 上段と稜を形成 底部ヘラ切り	内外:10YR7/3 にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子・砂礫 不良	A区SI-64 No.12 完存
13 須恵器 杯	口:— 底:[10.5] 高:(2.1)	最大径:(10.5) 三和産 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(手持ちヘラケズリ) 底:ヘラケズリ(一方向)	内外:2.5Y4/2 暗灰黄	白色粒子・雲母粒子・砂粒多量 やや良	A区SI-64 底部ほぼ完存
14 須恵器 高台付杯	口:12.5 底:7.7 高:5.3	益子産 灯明皿転用 ロクロ成形 内面底中央部にボタン上に盛り上がる 器形は耳皿状にひしゃげる 内面口～体下にスス付着 底部ヘラ切り	内外:5PB5/1 青灰	白色粒子・黒色粒子・砂礫良	A区SI-64 No.9 完存
15 須恵器 杯	口:— 底:[8.8] 高:(2.5)	最大径:(13.0) 益子産 ロクロ成形 内:磨滅 底部回転糸切り	内外:7.5Y5/1 灰	白色粒子少量、黒色雲母粒子微量 良	A区SI-64 13層 上面 底部1/6 残存
16 須恵器 杯	口:[14.6] 底:[7.6] 高:3.8	堀之内産 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(ヨコ)か 底部ヘラ切りか	内:2.5Y7/2 灰黄 外:2.5Y6/2 灰黄	白色粒子・黒色粒子・雲母粒子 やや良	A区SI-64 口～体部1/8、底部一部残存
17 土師器 甕	口:— 底:[7.5] 高:(2.4)	内:ヘラナデ 外:体下ヘラケズリ(ヨコ) 底部ヘラケズリ(一方向)	内:10YR4/1 褐灰 外:7.5YR6/4 にぶい橙	金雲母混入 雲母粒子・砂粒多量 良	A区SI-64 13層 上面、覆土 底部1/2 残存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
18 土師器 甕	口:— 底:[7.6] 高:(7.8)	最大径:(15.6) 常総型 内:ヘラケズリ→ヘラナデ 接合痕明瞭 外:ミガキ(タテ) スス付着 常総型と同形状のタテヘラケズリの甕か	内:7.5YR6/4 にぶい 橙 外:10YR3/2 黒褐	金雲母混入 雲母粒 子・砂粒多量 良	A区 SI-64 体下～底部 1/4 残存
19 土師器 甕	口:[19.2] 底:— 高:(18.4)	内:ヘラケズリ(ヨコ)→口ヨコナデ 外:ヘラケズリ(タテ→体上部分的にヨコ)→口ヨコナデ 磨滅あるいは 最後ナデか 工具痕不明瞭 中位粘土痕 カマド掛穴部か 内外とも粘土稜の凸凹が残る(図示した所はあまり残らない) 使用頻度少	内外:7.5YR6/6 橙	金雲母・小礫・黒色 粒子含む 良	A区 SI-64 No.8 口～体部 1/4 残 存
20 土師器 甕	口:[13.8] 底:— 高:(5.0)	武蔵型 肩部不明瞭 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ 部分的に指ナデ	内外:10YR5/4 にぶ い黄褐	白色粒子少量、雲母 粒子多量 良	A区 SI-64 No.8 口縁部 1/8 残存
21 土師器 甕	口:— 底:7.0 高:(10.5)	最大径:(18.2) 常総型か 底部から直行的に立ち上がる形状で砲弾形には見えない 内:磨滅 一部剥落 接合痕明瞭で粘土紐の凹凸残る ヘラケズリ(ヨコ) 外:ヘラケズリ(タテ)→ミガキ(タテ) 粗密あり 底:磨滅	内:7.5YR6/4 にぶい 橙 外:7.5YR3/1 黒褐	金雲母混入 白色粒 子・透明ガラス質粒 子・砂粒多量 やや良	A区 SI-64 体下部 3/4 残存、 底部完存
22 土師器 台付甕	口:— 底:[6.8] 高:(5.2)	時期不明(8世紀後葉～9世紀中葉か) 内:ヘラケズリ→ナデ 外:ヘラケズリ→ナデ 被熱により断面まで赤色変化 器面劣化	内外:2.5YR5/6 明赤 褐	金雲母混入 白色粒 子少量、雲母粒子多 量、砂粒・透明ガラ ス質粒子微量 良	A区 SI-64 脚部 1/4 残存
23 鈔帯	長:4.15 幅:3.4 厚:6.5				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
24 鈔帯	長:3.1 幅:3.25 厚:6.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
25 鈔帯	長:2.5 幅:3.1 厚:6.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
26 鈔帯	長:2.5 幅:3.1 厚:5.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
27 鈔帯	長:3.0 幅:3.0 厚:6.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
28 鈔帯	長:2.3 幅:3.0 厚:5.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
29 鈔帯	長:3.3 幅:2.0 厚:6.5				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損

方埋土、G群はこれ以前の古期の掘り方埋土の可能性が考えられる。53層は床面に貼り付いた黒色土の可能性もあろう。

柱穴は可能性のあるものを含めて p1～9 を確認した。床面 55・56層、p6 は柱穴覆土であるか不詳である。堆積状況を確認し得たのは p1・4～8 である。各柱穴の堆積土は似るが、土層の斉一性は観察できない。p1 は 30・31層が柱痕、32～34層が掘り方とみられる。p4・5 は p4 の堆積が新しい。p4 は 35・36層に抜き穴、37～39層に柱痕及び掘り方、p5 は 40・41層に柱痕、42・43層に掘り方の可能性が考えられる。p7・8 は p7 の堆積が新しい。p7 は 48層に柱痕、47・49層に掘り方の可能性が考えられる。

柱穴 前述のとおり p1～9 を付した。廃絶時の床面に伴うと判断できるのは p4・7 で、これ以外は判然としない。柱間は不詳であるが、小穴の重複からは、床面中央に 1 穴 (p3～5)、西壁中央部に 1 穴 (p7～8) が支柱穴と想定される。p4・7 の距離は約 1.4m である。延長線上に位置する柱穴が重複する SK-14 の掘り込みによって失われた可能性も否めないが、p4-7 と等間隔であれば壁に近接することとなり、p1 に似た位置取りとなる。壁からの距離を勘案すると、p2・6・9 は約 50cm で似た数値である。建物跡周囲に補助穴等は確認し得なかった。現状の床面からのレベル・深さは、p1:52.91m・9.0cm、p2:52.88m・12.0cm、

p3:52.66m・34.0cm、p4:52.32m・68.0cm、p5:52.78m・22.0cm、p6:52.67m・33.0cm、p7:52.74m・26.0cm、p8:52.7m・30.0cm、p9:52.77m・23.0cmである。

壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から1205.83gが出土する。多くは8世紀中葉～9世紀後半の土器類であるが、p4出土の土師器甕小片を含む。また、袴帯7点が近接して出土する。

土器類は層位を確認できる遺物は少ない。11は10あるいは14層、4は20あるいは21層、7は5層の出土とみられる。7は袴帯3～7に近接して出土する。17は2層の出土とみられる。5・19は1層中の出土とみられ、破片が近接して出土する。19と同位置からは土師器甕小片4片が出土する。このうちに1片は薄く、3片は微細片である。p4の掘り下げに伴い、土師器甕1片が出土する。タテ方向の粗いヘラケズリを施す小片で時期は不明である。

袴帯7点はSP8ベルト西側から出土する。1・2は1或いは2層中から、3～7は5層中から出土する。3・4は1・2の東側0.6m付近、確認面からは同様の深さで近接して、5～7は3の直下に近接して出土する。1は蛇尾、2～6は巡方であるが、3・6は2～5より小形である。7は鉸具であるが、縦向きの半分を欠する。7点は平面、高さとも近接して出土し、袴帯の1本分の可能性もあるが、1・2と3～7に約0.6mの距離があること、3～7がほぼ同位置の上下で出土することから使用状態（一本のベルト状）の出土ではないとの現地所見がある。また、各個体の表裏面が留められた状態であることから、革帯を挟んだ状態であった可能性も考えられる。その場合、袴帯は革帯に帯金具が付けられたまま切られたことも想定できよう。

出土遺物 粗製土器4は6世紀末葉～7世紀初頭とみられ、出土遺物のうちで最も古手であろう。灯明皿に転用される。須恵器坏10・15は8世紀第4四半期、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）3は8世紀後葉、土師器台付甕22は8世紀後葉～9世紀中葉、須恵器坏11は9世紀第一四半期、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）5、土師器甕19は9世紀前葉、不掲載の土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）は9世紀前葉の可能性、須恵器坏9・13・16は9世紀中葉、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）7・8、土師器甕18・21は9世紀中葉の可能性、不掲載の土師器甕は9世紀中葉～後半、土師器甕20は9世紀後半の可能性、土師器甕17・21・木葉痕は胎土に金雲母を含む。常陸型であろう。時期不明である。木葉痕は体・底部の積み上げ部に布目痕が残る。布を挟み込んだままでは底部と体部が密着しないと考えられるため、底部を成形し体部を立ち上げる際に布が被せられたとする判断が合理的であろう。現状で観察できる布目の糸は0.3mm、糸の間隔は0.1mmである。現状では細密であるが、焼成時の縮小率を考慮するならば、麻布とも考えられる。不掲載の須恵器甕は9世紀代とみられる。袴帯7点は銅製で、塗布された黒漆が部分的に残る。『養老令衣服令』に定められた六位以下の袴帯であろう。延暦5（797）年に六位以下の金属製の飾りが禁止されることから、これ以前に使用されたものと考えられる。

図示し得なかった遺物は土師器、須恵器の小片である。器種の判断の難しい破片もあり、器種は想定を含む。また、多くは時期不明である。土師器は坏5片8.41g、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）18片130.54g、高坏脚裾部1片1.74g、甕の可能性のある小片1片16.52gである。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）は内黒であり、9世紀前半以降とみられる。甕は口縁部14片94.91g、体部10片125.61g、薄手の体部33片146.71gである。常総型甕とみられる破片は口縁部2片11.32g、体下半に縦方向のミガキを施す破片26片242.03g、胎土にガラス質粒子を含む体部片40片268.95gである。タテ方向にミガキを施す破片は9世紀前葉～中葉であろう。須恵器は、益子産・三和産・産地不明の破片である。益子産は坏口縁部3片10.98g、蓋2片13.78gである。三和産は坏口縁部3片9.32g・体部3片7.32g・底部3片

30.57gである。産地不明は口縁部1片6.67g・体部1片1.23g・底部1片11.63gである。口縁部は三畳産の可能性も考えられる。底部は回転糸切りが観察できる。この他、粘土塊19片67.59gが出土する。繊維が抜けた痕跡や棒状工具、先端の鋭い棒状工具の痕跡が観察できる。

出土遺物の時期をみると、主に8世紀第4四半期から9世紀後半までの遺物が混在する状況にある。覆土の堆積状況から、本建物跡は廃絶に際して埋め戻されたと判断されることから、本建物跡の廃絶は最も新しい時期とみられる土師器甕（不掲載）から9世紀中葉から後半、あるいは、出土遺物が量的に多い9世紀中葉の可能性を考えておきたい。

土師器壺（ロクロ使用・内面黒色処理）7（9世紀中葉）は袴帯3～7と5層中から近接して出土する。また、土師器壺（ロクロ使用・内面黒色処理）5（9世紀前葉）、土師器甕17（時期不明）は袴帯1・2と同じ層からの出土とみられる。5層は炭化物を含み、1・2層はその直上に堆積する点、遺物の出土状況を考慮する上で留意される。

土師器杯1など、後述するカマド出土を含めた5個体は灯明皿に転用される。粗製土器4（6世紀末～7世紀初）、須恵器杯13（9世紀中葉）、カマド出土の土師器杯1・土師器壺（ロクロ使用・内面黒色処理）6（8世紀中葉）、須恵器高台付杯14（9世紀第2四半期）、器種・時期等ばらつきがある。付着する煤は外観の観察からは高粘度と見受けられる。土器自体の使用の痕跡は薄い。廃絶の際の祭祀に伴う可能性も考慮すべきであろう。

火処 カマドを火処とし、建物跡の南東隅部にある。東壁の南隅部への設置が意図されたと考えられる。煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。ソデの堆積状況からは作り替えの可能性も考慮し得る。覆土は33層を確認した。1・2層は建物跡覆土、3・4層は煙道覆土と考えられる。5～9層はカマド被覆土であろう。白色粘土を含む5・6層と8層が7層を挟み交互に堆積する。9層は焼土を含む。カマド後方部への堆積は確認できない。カマド前方部の天井を取り払い後に堆積する、カマド本体の被覆最下層にあたりと考えられる。10～12層は白黄色粘土を含む。カマド材とみられ、カマド前方部への堆積は確認できない。カマド後方の天井部であろう。13～18層は焼土・白色粘土を含む。炭化物や灰の堆積が確認されないことから、火床を浚い、埋め戻した火床被覆土と判断される。17層で火床を被覆後、13～15層で煙道奥壁まで埋め戻したと考えられる。19～26層はカマドソデである。基底部および火床側を白色粘土主体の24～26層で作出する。左ソデは鹿沼軽石主体の19・21層、右袖はローム主体の22・23層を用いる。左ソデには右ソデ25層に相当する層が確認できず、26層上に21層が堆積する。主要構築材が異なることも考え合わせ、ソデ左右の違いはカマドの作り替えに関わる可能性が指摘できよう。27～32層は掘り方である。ロームを主体とする同質材とみられる。ローム主体の左ソデと同時期の構築の可能性が考えられる。カマド前面に堆積する27層は床面作出土とも考えられる。28・29層はカマド前面、30・31層は火床、32層は煙道の掘り方で、奥壁側から構築されたことがわかる。26層上位のロームブロックは26層に伴うと考えられる。

カマドの構築は、地山を掘り込み後、ロームを主体に火床、煙道、白色粘土を芯にソデを作出する。左右のソデの差異から作り替えが推定されるが新旧は判然としない。

カマドの廃絶は、カマド前方のソデ～天井部を取り払い、埋め戻したと考えられる。カマド前方部を取り払うにあたっては、火床は奥壁までを浚った後、焼土と白色粘土の混合土で埋め戻したものと推定できる。カマド後方部のカマド材（10～12層）の堆積がカマド前方部を取り払ったための崩落であるのか、故意の崩落であるのかは判然としないが、煙道奥壁の埋土（13・14層）上に間層を挟まず堆積しており、火床を浚い埋め戻した後にカマド前方部を取り払ったと推測できる。この場合、火床埋土（10～18層）の焼土や

白色粘土が、カマド使用に伴う火床堆積物や取り払ったカマド材であるとも考えられよう。後方部カマド材(10～12層)の直上には建物跡覆土とみられる1・2層が堆積する。火床埋め戻し後、除去したカマドの高さ(ソデの高さ)まで被覆し、建物跡とともに埋没したと判断される。1・2層に対応する床面覆土は判然とせず、建物跡とカマドの埋没の工程の順序は不明である。

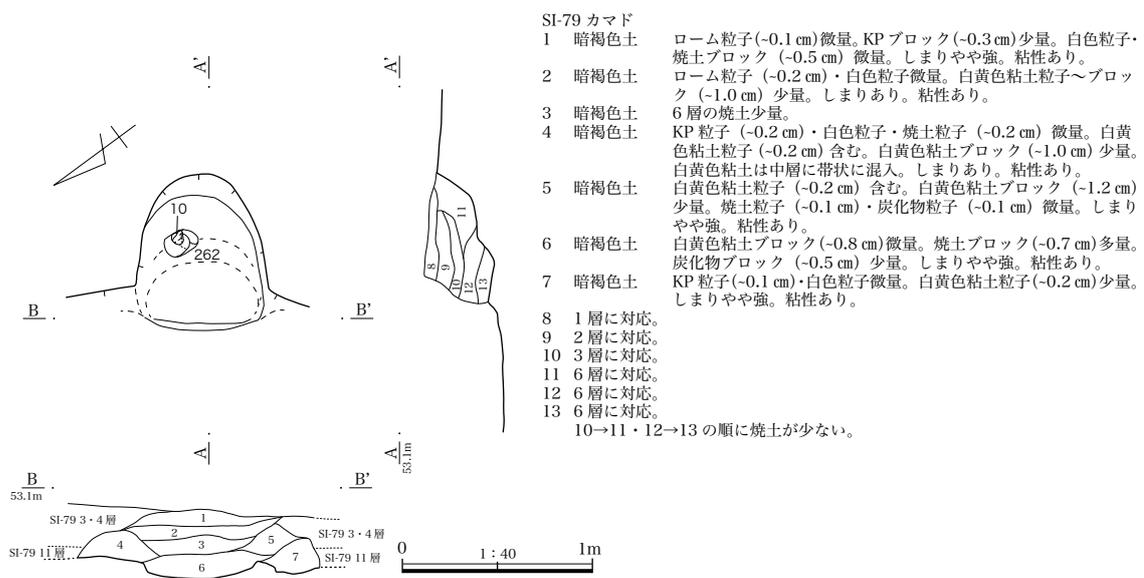
遺物出土状況 図示した遺物以外に土師器甕2片20.62gが出土する。1片は2(土師器塚)と同位置、1片は覆土から出土する。何れもタテ方向に粗いヘラケズリを施す小片で、覆土出土の方が厚手である。

土師器塚(ロクロ使用・内面黒色処理)6はカマド7層、土師器塚2・須恵器高台付坏14はカマド7・9層境付近、須恵器坏12はカマド9層、土師器坏1はカマド15層から出土する。何れもカマド廃絶に伴う遺物と考えられる。

出土遺物 土師器坏1は8世紀中葉、土師器塚(ロクロ使用・内面黒色処理)6は8世紀後葉、土師器塚は8世紀中葉～後葉、須恵器高台付坏14は9世紀第2四半期であろう。須恵器坏12は8世紀後葉の可能性があろう。8世紀中葉が主体となるが、床面出土の遺物同様、8世紀中葉～9世紀第2四半期の時期幅がある。また、土師器坏1・土師器塚(ロクロ使用・内面黒色処理)6・須恵器高台付坏14・は灯明皿に転用される。床面出土遺物同様、煤上の付着物は粘性が高く、器種・時期幅にばらつきがあり、土器自体の使用頻度も低い。カマドの廃絶、建物自体廃絶に伴う祭祀が行われた可能性も考慮すべきであろう。

第79号竪穴建物跡(SI-79)(第47～49図 第12・13表 写真図版七・九・二〇・二一)

位置 A区M-10に位置する。東側の谷に向けた斜面にあり、(1)調査の概要に記載したとおり、谷部への落ち込みである可能性が高い。重複関係 第19号竪穴建物跡・旧称第80号竪穴建物跡との間に位置する。平面形状・規模 第48図の破線は現地調査時に第79号竪穴建物跡として掘り下げた範囲である。床面までの深さは0.45m前後である。主軸 谷の落ち際とみられる西壁はN-36°-Eである。床面 鹿沼軽石層下の粘土層から黒色土層にいたる。散在する焼土塊のレベル(上部・下部)は、焼土塊①52.36m・52.2～52.26m、焼土塊②52.3m・52.55mである。谷部に散在する焼土溜まりに類する可能性が高い。覆土 18層を確認した。9～18層は掘り方埋土とみられる。谷部へ向けた堆積が確認できる。白色粘土塊を含む1～5層(A群)、白色粘土塊を含まない6～18層(B・C・D群)に大別できる。焼土・炭化物を



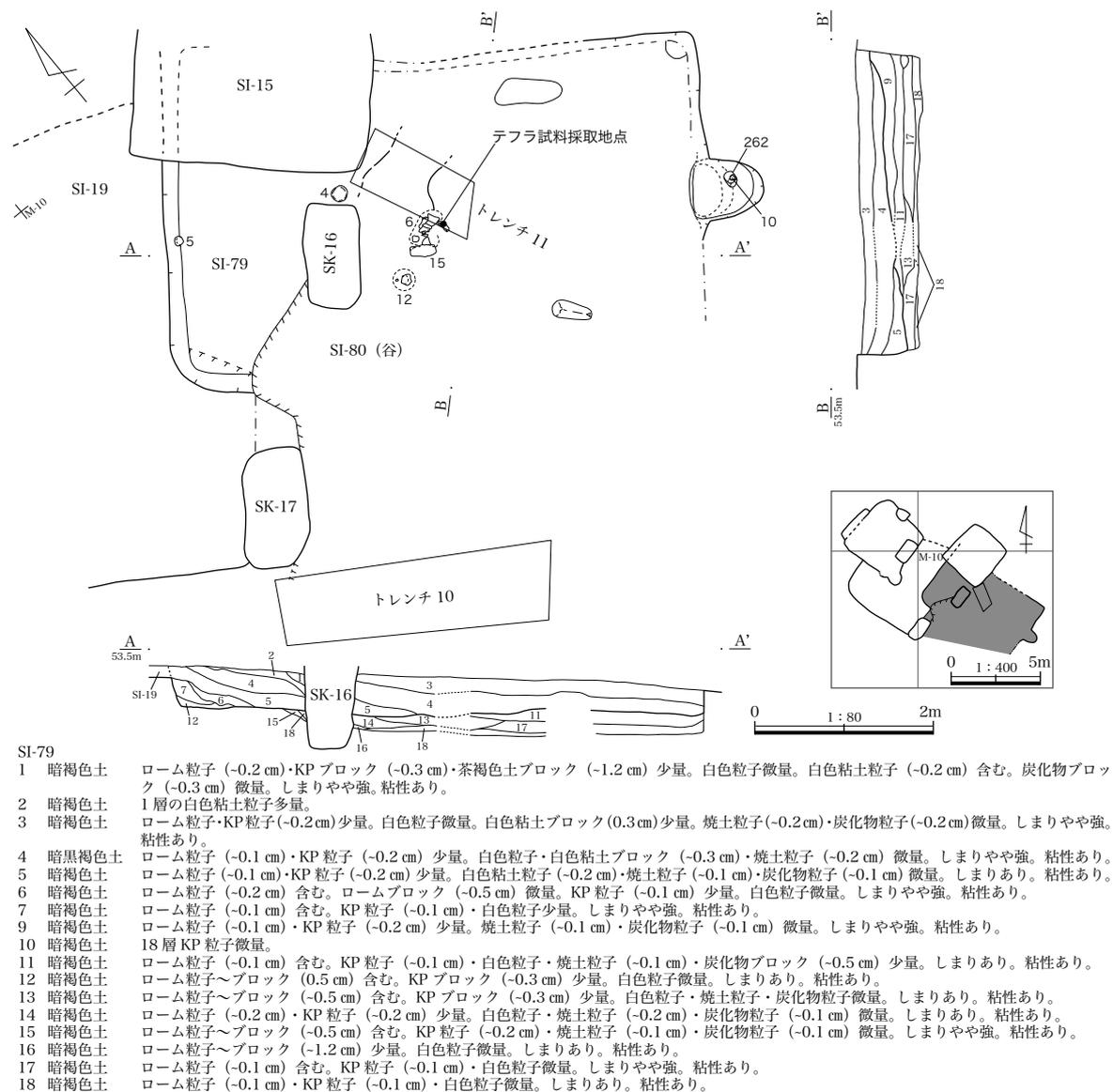
第47図 第79号竪穴建物跡(カマド)実測図

第3章 確認された遺構と遺物

含まないB群(6・7層)・D群(16～18層)とこれらに含まないC群(9～15層)が交互に堆積する。
 付属施設 確認されない。

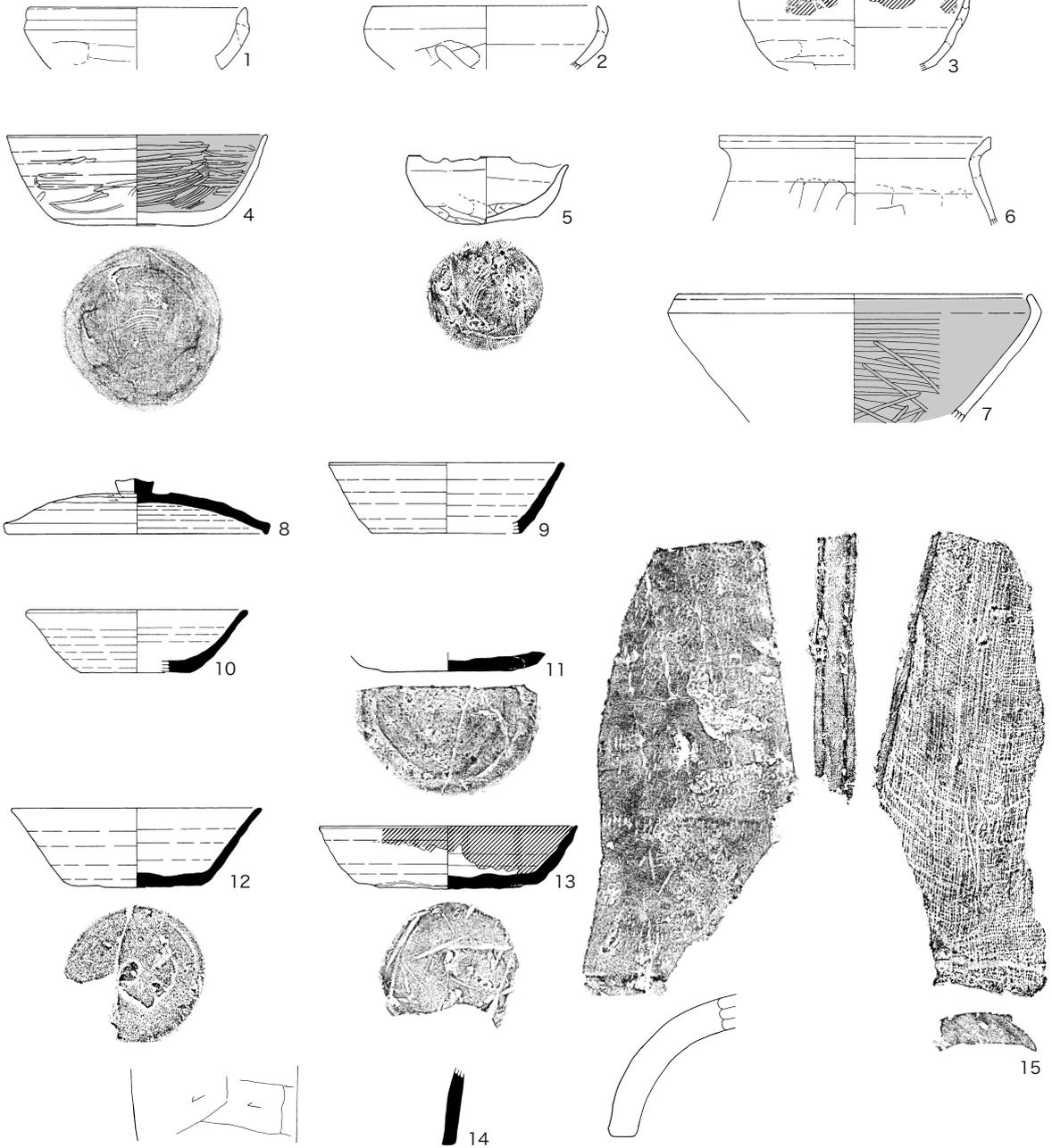
遺物出土状況 遺構確認面及び覆土中から588.86gが出土する。時期の判別が可能な破片は7世紀代、8世紀第4四半期～9世紀代に大別できる。番号を付して取り上げた遺物は覆土A群から出土する。本遺構、旧称第80号竪穴建物跡として取り上げた遺物の接合が認められる。併せて、旧称第80号竪穴建物跡として取り上げた遺物の報告を行う。

出土遺物 粗製土器5は6世紀末葉～7世紀初頭とみられ、出土遺物のうちで最も古手であろう。灯明皿に転用される。土師器杯1・2は小片であるが、7世紀中葉の可能性があろう。土師器杯3は7世紀後葉、須恵器杯12・13は8世紀第4四半期、土師器杯4は9世紀前葉、土師器甕6は9世紀中葉、須恵器杯10は9世紀第2四半期～中葉とみられる。また、同一個体とみられる須恵器甕片が本遺構、旧称第80号竪穴建物跡から1片16.31gが出土する。9世紀代であろう。須恵器14は底部を欠損しており甕あるいは甑であ

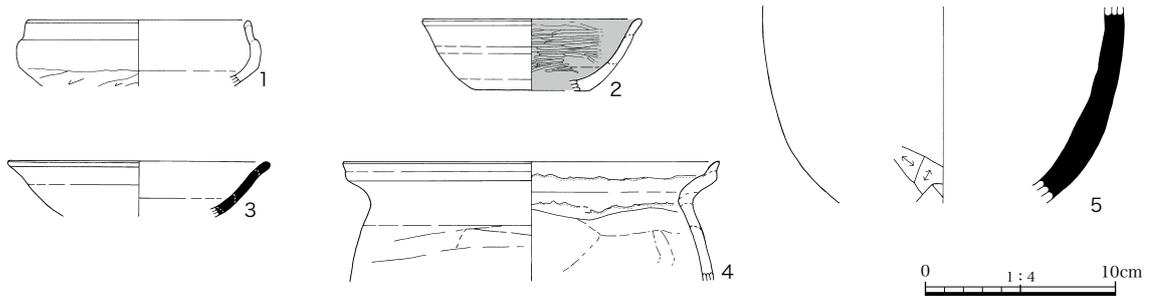


第48図 第79号竪穴建物跡実測図

SI-79



SI-80



第49図 第79・80号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3章 確認された遺構と遺物

第12表 第79号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口:[12.6] 底:— 高:(3.6)	内:ヨコナデ 外:(ナデ?) 体中～下ヘラケズリ(ヨコ) 口ヨコナデ 内～外(口) ウルシ仕上げ	割れ口:10YR7/3 に ぶい黄橙 内外:10YR8/2 灰白	黒色ガラス質粒子微 量 良	A区 SI-79 口縁部 1/8 残存
2 土師器 坏	口:[13.4] 底:— 高:(3.7)	「く」の字状 丸味を持って立ち上がる 内:ヨコナデ 外:ナデ→体中～下ヘラケズリ(ナナメ) 口ヨコナデ 内～外(口) ウルシ仕上げ	割れ口:10YR8/3 浅 黄橙 内:10YR5/3 にぶい 黄褐 外:10YR4/1 褐灰	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子・透明 粒子微量 良	A区 SI-79 口縁部 1/4 残存
3 土師器 坏	口:[13.6] 底:— 高:(4.3)	灯明皿転用 内:ヨコナデ 外:ナデ→体下ヘラケズリ(ヨコ) 口～体上ヨコナデ 内(口)～外(口) スス付着 内～外(口) ウルシカ	内外:7.5YR7/6 橙	白色粒子微量 良	A区 SI-79,SI-80B 口～体部 1/4 残 存
4 土師器 坏	口:15.4 底:7.0 高:5.3	ロクロ使用 黒色処理 内:ロクロ成形後ミガキ(ヨコ) 6単位 右→左 底ミガキ一方向 外:ロクロ成形後ミガキ 内面より粗く長い単位 剥落により判然としな いか 5～6単位 右→左	内:N2/0 黒 外:10YR6/6 明黄褐	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子少量、赤色 粒子微量 良	A区 SI-79 No.2 完存
5 粗製土器	口:[9.5] 底:6.0 高:4.1	灯明皿転用 内:体ヘラケズリ→指ナデ→口ヨコナデ 口～体上スス付着 外:体ヘラケズリ→指ナデ→口ヨコナデ ロスス付着か 底部回転糸切り 底中央部を除きヘラケズリ(底周は体下に及ぶ)	内:10YR8/3 浅黄橙 外:2.5Y7/2 灰黄	透明ガラス質粒子・ 黒色粒子微量 良	A区 SI-79 No.1 口縁部 1/2 欠損
6 土師器 甕	口:[16.0] 底:— 高:(5.2)	常総型 口端立ち上がり気味 内:ヨコナデ 外:体ヘラケズリ(タテ)→口ヨコナデ ヨコナデ下に体のヘラケズリ見 える 口(中位) スス付着	内:5YR6/6 橙 外:7.5YR6/4 にぶい 橙	金雲母混入 良	A区 SI-79 No.3, 覆土 口縁部 1/4 残存
7 土師器 鉄鉢	口:[20.8] 底:— 高:(7.6)	ロクロ使用 内:ミガキ(ヨコ)→黒色処理	内:N1.5/0 黒 外:7.5YR6/6 橙	白色粒子多量 良	A区 SI-79 口縁部 1/8 残存
8 須恵器 蓋	口:[15.4] 底:— 高:3.3	つまみ部高さ:2.3cm 益子産 カスガ入か ロクロ成形 つまみは蓋の中心軸からずれて付けられている 内:端部の一部に不熟な自然釉 外:天井部回転ヘラケズリ	内外:7.5Y6/1 灰	白色粒子・砂礫(φ1 ～3mm)少量 良	A区 SI-79 カマ ド 1/4 残存
9 須恵器 坏	口:[13.8] 底:[8.8] 高:4.1	益子産 ロクロ成形 底部ヘラ切りか	内外:5Y5/1 灰	白色粒子・白色礫(φ 1～2mm)微量 良	A区 SI-79,SI-80B 口～体部 1/4 残 存
10 須恵器 坏	口:[12.6] 底:(6.4) 高:3.65	ロクロ成形 底部回転糸切り	内外:2.5Y5/2 暗灰 黄	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子・透明ガラ ス質粒子少量 良	A区 SI-79,カマ ド No.1 1/6 残存
11 須恵器 坏	口:— 底:7.0 高:(1.1)	益子産 ロクロ成形 破面に赤色変化 破碎後散在か 底部回転糸切り後ヘラ切り	内:10YR4/1 褐灰 外:2.5Y7/3 浅黄	礫(φ1～4mm)微量、 白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子ごく微 量 良	A区 SI-79 カマ ド No.1, 覆土 底部 1/2 残存
12 須恵器 坏	口:[14.7] 底:7.7 高:4.7	ロクロ成形 外:体下位ヘラケズリが施されている可能性あり 底部回転ヘラ切り	内外:2.5Y7/1 灰白	黒色粒子・灰・橙色 小礫 やや良	A区 SI-79,SI-80B 口～体部 1/4 残 存, 底部 1/4 欠 損
13 須恵器 坏	口:[15.2] 底:[8.4] 高:3.7	灯明皿転用 ロクロ成形 内:口～体・底一部スス付着 外(口) スス付着 底:二次底部面か 回転糸切り後ヘラ切りか ヘラ記号のような線あるが 不詳	内:2.5Y6/3 にぶい 黄	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子微量、 礫(φ1～2mm) やや良	A区 SI-79 No.5, 覆土, SI-80B,C 口縁部 1/4, 底部 一部欠損
14 須恵器 不明	口:— 底:— 高:(4.5)	最大径:(19.6) ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(ヨコ) ヘラ幅は3.0cm前後か 底部の欠損は打ち欠かれた可能性がある	内:7.5YR5/4 にぶい 褐 外:10YR7/3 にぶい 黄橙	白色粒子微量、透明 ガラス質粒子・砂礫 (φ0.5～1mm)少量 良	A区 SI-79 体部 1/6 残存
15 男瓦	長:(26.8) 幅:(10.9) 厚:1.8	768.55g 粘土紐巻き上げ 産地不明 狭端縁欠損 凹面:布目痕 凸面:縄叩き後タテ方向のヘラナデ 指頭痕あり 側面・広端面:粗い面取り 特に広端面は粗い	10YR6/3 にぶい黄 橙	黒色鉱物・白色粒子 多量	A区 SI-79 No.4 1/2 残存

るのか器種が判然としない。9世紀代の新治産であろう。土師器鉄鉢形土器7は時期は不詳であるが、内面に黒色処理を施すことから9世紀代の可能性が考えられよう。

図示し得なかった遺物は土師器、須恵器の小片、粘土塊 14.34g である。土師器、須恵器の小片は器種の判断の難しい破片もあり、器種は想定を含む。また、多くは時期不明である。土師器坏は 12 片 82.12g が出土する。7 世紀中葉までとみられる 2 片、7 世紀代の 8 片を含む。何れもウルシ仕上げを施す。7 世紀代に通有する内面～外面口縁部にウルシを塗布する模倣坏であろう。胎土は白色のもの 10 片、橙色のもの 2 片である。土師器高坏裾部の可能性のある破片 1 片 11.77g、台付き甕底部片 1 片 25.78g が出土する。土師器甕は、外面にタテ方向の粗いヘラミガキを施す破片が 12 と同じ位置から 10 片 156.76g、口縁部～頸部片 5 片 25.88g、甕と判断される破片 5 片 48.0g、胎土に金雲母を含む破片 4 片 13.4g が出土する。器種は不明であるが緻密な胎土の破片 17 片 138.94g、土師器とみられる微細片 4 片 7.68g が出土する。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）2 片 3.21g、内面黒色処理を施す 2 片 11.36g が出土する。須恵器坏は新治産とみられる 2 片 12.09g、産地不明 5 片 17.16g が出土する。産地不明の 5 片は焼成が不良である。須恵器甕は益子産とみられる 1 片 7.51g が出土する。この他、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）あるいは須恵器坏の破片とみられる 4 片 11.86g が出土する。

旧称第 80 号竪穴建物跡からは土師器坏 1、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）2、土師器甕 4、須恵器坏 3、須恵器大型鉢 5 の他 124.85g が出土する。土師器甕 4 は 9 世紀前半の常総型であろう。須恵器坏 3 は詳細は不明であるが、8 世紀前葉の三叢産の可能性があろう。

図示し得なかった小片は土師器坏 8 片 29.85g・甕 15 片 19.51g・常総型 3 片 17.06g、胎土が緻密な器種不明片 3 片 17.82g、土師器碗（ロクロ使用・内面ウルシ処理）2 片 10.13g、須恵器坏 4 片 14.17g・甕 1 片 16.31g である。土師器坏は何れも胎土が白色で、ウルシ処理を施す破片が 4 片ある。須恵器坏のうち 1 片は益子産、1 片は三和産である。須恵器甕は平行叩きを施す。第 79 号・第 80 号竪穴建物跡から出土する特徴の似た須恵器甕とは別個体である。

火処 4・5・7 層をソデ、6 層を火床と考え、カマドと判断したが判然としない。床面想定した部分に散在する焼土同様、谷部の焼土溜まりである可能性は否めない。焼土を含む層（3・6 層）、白色粘土塊を含む層（2・4・5・7 層）が交互に堆積する。

第 13 表 第 80 号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口:[11.6] 底:— 高:(3.4)	内:ヨコナデ 外:ナデ→体ヘラケズリ 口ヨコナデ 内～外(口)ウルシ仕上げ	割れ口:10YR8/3 浅 黄橙 内外:10YR6/3 にぶ い黄橙	白色粒子・黒色粒子 微量 良	A 区 SI-80C 口縁部 1/6 残存
2 土師器 碗	口:[11.4] 底:— 高:(3.7)	ロクロ使用 黒色処理 内:ミガキ 底部回転糸切り	内:N2/0 黒 外:10YR4/2 灰黄褐	白色粒子・ガラス質 粒子少量 良	A 区 SI-80B 口縁部 1/4 残存
3 須恵器 坏	口:[11.6] 底:— 高:(3.6)	口外反 器高低い 三叢産か	内:7.5YR5/4 にぶい 褐 外:10YR5/3 にぶい 黄褐	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子多量 良	A 区 SI-80C 口縁部 1/6 残存
4 土師器 甕	口:[19.6] 底:— 高:(6.3)	常総型 口端つまみ上げ部 内面受口状 内:ヘラケズリ→ナデ→口ヨコナデ (ナデによりヘラケズリは薄い) 外:ヘラケズリ→(ナデか)→口ヨコナデ	内外:7.5YR6/4 にぶ い橙	雲母混入 良	A 区 SI-80C 口縁部 1/6 残存
5 須恵器 大型鉢	口:— 底:— 高:(10.3)	最大径:(19.0) 益子産 ロクロ成形 外:ヘラナデ後ロクロか ヘラナデは不規則に施される	内外:5Y5/1 灰	白色粒子・砂礫(φ1 ～3mm)少量 良	A 区 SI-80B 体部 1/8 残存

第3章 確認された遺構と遺物

遺物出土状況 不掲載ではあるが、須恵器坏片カマド1はカマド10層あるいは12層から、須恵器蓋カマド2は覆土中から出土する。

出土遺物 須恵器坏は8世紀第4四半期、須恵器蓋は9世紀第1四半期の可能性が考えられる。

第93号竪穴建物跡(SI-93)・第21号土坑(SK-21)(第28図 写真図版六・一二)

位置 A区M-9に位置する。A区西端にあり、遺構の1/2位上は調査区外にある。平坦面にあるが、削平による可能性もあろう。東約0.8mにSK-21がある。別遺構として調査を行ったが、SK-21をカマドとする建物跡である可能性があり、本項目で報告を行う。重複関係 SI-12と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 削平により建物跡の壁・床面は失われ、掘り方底面に近い状況といえる。掘り方面は凹凸が著しく、細かな凹凸は図化し得なかった。このため、調査区西壁の土層の堆積状況や掘り方の凹凸によって平面形を推定した(第28図破線)。SK-21がカマドである場合、壁は推定より南・東側にあると推定され、一辺5mほどの建物跡と想定される。底面の凹凸の深さは5.0cm前後、p1は7.5cm、p2は14.5cm、p3は10.0cm、p4は11.5cm、p5は13.0cmである。主軸 N-25°-Eほどと推定される。床面 鹿沼軽石層を掘り方方面とする。遺構確認面の標高は53.85m。SI-12と同様、付近にあるSI-59の床面レベルより低い。覆土 客土下に2層を確認した。鹿沼軽石層や茶褐色土など地山土のブロック状の混入物が多い。貼床状の堆積は確認されない。覆土最上層は床面直下ではなく、床面は更に上位にあったものと判断される。柱穴・壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

火処 明確に確認できなかったが、先述のとおり、SK-21がカマドである可能性がある。この場合、東壁に位置し、煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。削平により火床・ソデ芯などカマド構築物は失われ掘り方面が残る状況である。覆土は12層を確認した。焼土を含む1～3層、ロームを含む4～6層、鹿沼軽石層を含む10～12層が順次堆積する。SK-21の掘り込みは鹿沼軽石層には達していない。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第4節 土坑

(1) 調査の概要

総数で39基を確認した。A区30基・B区5基・C区3基・D区1基である。第14・72号土坑からは陶磁器類、第46号土坑からはビー玉の出土があることや、堆積する覆土の状況から古代以前の遺構の可能性は低いと判断される。また、古墳時代～古代の竪穴建物跡に伴う遺物が重複あるいは近接する土坑へ混入する可能性を考え、土坑から出土する古代以前の遺物については遺構外の遺物として扱うこととする。

A区丘第94・95号土坑は焼土が堆積し、周囲への焼土の散在も確認される。第94号土坑は丘陵部、第95号土坑は谷部に位置するが、谷部には遺構確認時に消滅した同種の焼土の堆積が数か所みられたことを付記する。

なお、A区第21号土坑については、近接する第93号竪穴建物跡のカマドの可能性を考慮し、第93号竪穴建物跡の項目中に記載する。

(2) 土坑

第5号土坑(SK-5)(第50図 写真図版一二)

位置 A区K-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形状で、西壁が膨らむ。確認面の規模は長軸約1.11m・短軸約0.6m、底面の規模は長軸約1.0m・短軸約0.47m、確

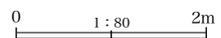
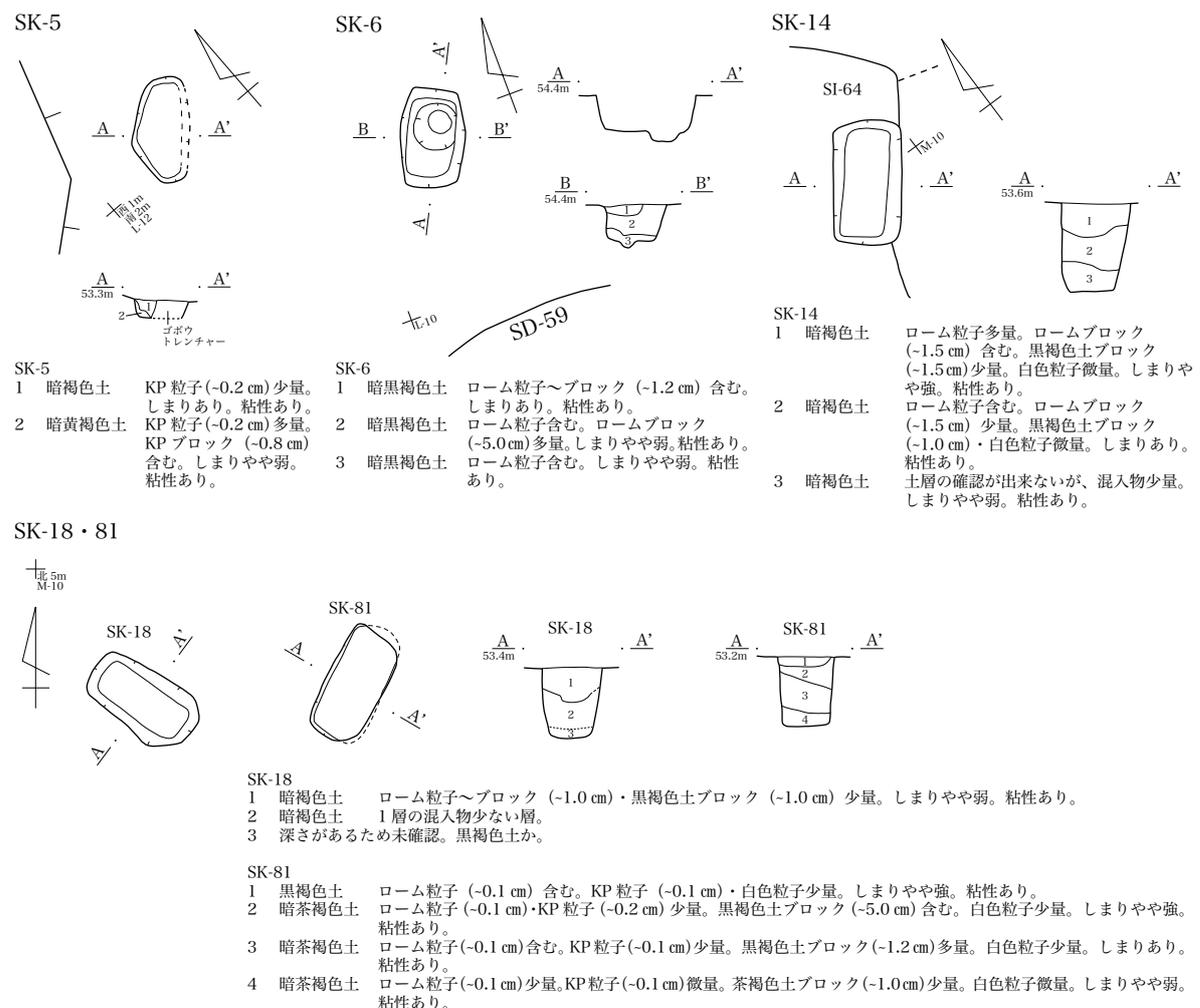
認面からの深さは約0.19m、底面のレベルは53.0mである。主軸はN-38° -Eである。覆土 西壁寄りに残る。以西は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)で失われる。2層に分層される。ロームブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第6号土坑 (SK-6) (第50図 写真図版一二)

位置 A区K-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長形状で、東・西壁がやや膨らむ。底面中央北よりにピット状の掘り込みが確認される。確認面の規模は長軸約1.05m・短軸約0.7m、底面の長軸約0.84m・短軸約0.57m、確認面からの深さは約0.4m・ピット状の掘り込みまで約0.5m、底面のレベルは53.85m・ピット状の掘り込み53.77mである。主軸はN-28° -Eである。覆土 西壁寄りに残る。以西は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)で失われる。3層に分層される。ロームブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第14号土坑 (SK-14) (第50・51図 第14表 写真図版一二・一五・二一)

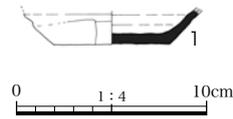
位置 A区M-10に位置する。重複関係 第64号竪穴建物跡と重複する。平面形状・規模・主軸 長形状で、長軸は谷に平行する。確認面の規模は長軸約1.3m・短軸約1.16m、底面の長軸0.72m・短軸約0.46m、確認面からの深さは約0.92m、底面のレベルは52.48mである。主軸はN-34° -Eである。



第50図 第5・6・14・18・81号土坑実測図

第3章 確認された遺構と遺物

覆土 3層に分層される。下層の3層は深さがあるため十分な観察をし得なかった。何れの層もロームブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、須恵器坏1の他、須恵器坏口縁部（益子産）1片 1.19g、体部（産地不明）1片 3.84g、土師器坏（a）1片 1.32g、埴（ロクロ使用ウルシ仕上げ）1片 1.78g、鉢類（胎土緻密）2片 54.86g、甕類4片 11.65g、甕類（常総型）2片 18.7gが出土する。須恵器坏1は9世紀中葉とみられ、重複する第64号竪穴建物跡に関わる遺物があるものと考えられる。この他、陶器片が1片 16.6gが出土する。香炉などの鉢類とみられ、外面にオリブ釉を施し、施釉下端に半菊状の文様を陰刻する。内面は無釉である。本遺構は近世以降と判断される。



第51図 第14号土坑出土遺物実測図

第14表 第14号土坑出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 須恵器 坏	口：一 底：[6.0] 高：(1.85)	新治産か ロクロ成形 外：体下ヘラケズリ（ヨコ） 底：ヘラケズリ一方向	内：N5/0 灰 外：5Y6/1 灰	白色粒子多量、砂粒・ 透明ガラス質粒子微量 良	A区 SK-14 底部 2/3 残存

(単位:cm)

第17号土坑 (SK-17) (第52図)

位置 A区 M-9・10に位置する。南東側に位置する谷部に並行する。重複関係 SI-19と重複し、本遺構が新しい。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約 1.34m・短軸約 0.7m、底面の規模は長軸約 1.18m・短軸約 0.46m、確認面からの深さは約 1.3m、底面レベル 52.09mである。主軸は N-39°-Eである。覆土 遺構が深く下半部の堆積状況は確認できなかったが、3層に分層される。ロームブロックや黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第18号土坑 (SK-18) (第51図)

位置 A区 M-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、南西部がやや歪む。確認面の規模は長軸約 1.24m・短軸約 0.44m、底面の規模は長軸約 1.0m・短軸約 0.4m、確認面からの深さは 0.78m、底面のレベルは 53.47mである。主軸は N-54°-Wである。覆土 3層に分層される。遺構が深く2・3層の分層部は確認できなかった。ロームブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器坏（a）1片 2.71g・鉢類 1片 5.88gが出土する。本遺構に伴う遺物ではないと判断される。

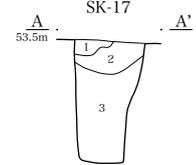
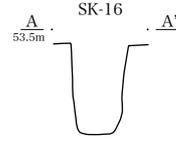
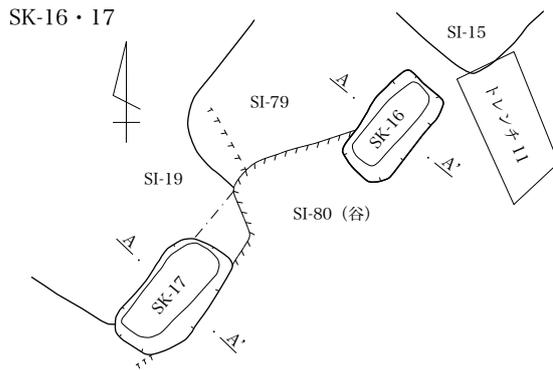
第22号土坑 (SK-22) (第16図)

位置 A区 K-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。トレンチ5北西隅部に確認し、トレンチを拡張して調査を行った。平面形状・規模・主軸 円形状で、トレンチ5底面での径約 1.0mである。遺構確認面から 1.5mほど下位にトレンチ底面での確認であるため、安全面を配慮し、覆土の除去は見合わせた。土坑としたが、形状や深さから井戸跡の可能性も残る。覆土 黒色土で粘性を帯びる。特に水分を含む等の所見はない。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第23号土坑 (SK-23) (第52図)

位置 A区西 K-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形状で、確認面の径は約 0.84m、底面の径は 0.71～0.74m、確認面からの深さは 0.67m、底面のレベルは 53.47mである。覆土 遺構が深く下半部の堆積状況は確認できなかったが、上部は3層に分層される。ロームブロックや黒褐色土ブロック、暗褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

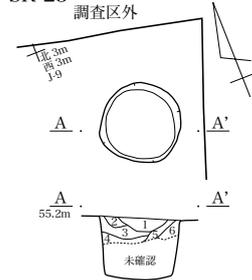
SK-16・17



SK-17

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量。ロームブロック (-1.0 cm) ・白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子含む。ロームブロック (-1.2 cm) 微量。白色粒子微量。黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む。しまりあり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 含む。ロームブロック (-3.0 cm) ・黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。

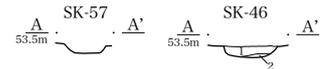
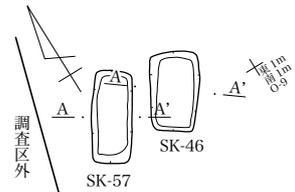
SK-23



SK-23

- 1 暗黒褐色土 ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) ・KP 粒子 (-0.2 cm) 含む。暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子〜ブロック (-1.5 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。しまり強。粘性あり。
- 3 暗黒褐色土 ローム粒子〜ブロック (-0.8 cm) ・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) やや多量。しまりやや強。粘性あり。
- 4 暗黒褐色土 ローム粒子〜ブロック (-0.5 cm) ・暗褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
- 5 暗黒褐色土 ローム粒子〜ブロック (-0.5 cm) ・KP 粒子 (-0.2 cm) 含む。暗黒褐色土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック (-1.0 cm) 含む。KP 粒子 (-0.2 cm) 少量。しまりやや強。粘性あり。

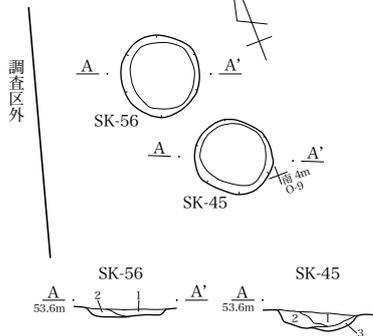
SK-46・57



SK-46

- 1 暗茶褐色土 KP ブロック (-0.3 cm) 多量。黒色土ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや弱。粘性あり。
- 2 暗黒褐色土 地山+1層。

SK-45・56



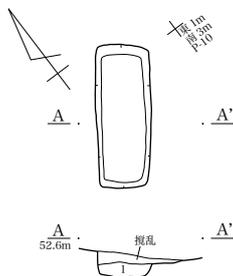
SK-45

- 1 暗黒褐色土 KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。暗茶褐色土 (地山) ブロック (-1.5 cm) 少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 2 暗褐色土 KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。暗茶褐色土 (地山) ブロック (-1.5 cm) 含む。炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
- 3 暗黒褐色土 KP 粒子 (-0.2 cm) 微量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。

SK-56

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) ・白色粒子 (-0.1 cm) 微量。しまりあり。粘性あり。
- 2 暗褐色土 1層より明色。ローム粒子 (-0.1 cm) ・白色粒子 (-0.1 cm) 微量。1層より微量。しまりあり。粘性あり。

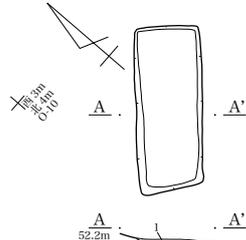
SK-50



SK-50

- 1 茶褐色土 SK-49の1層と同様。

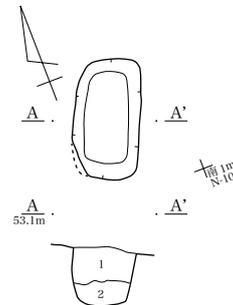
SK-51



SK-51

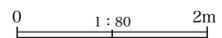
- 1 茶褐色土 SK-49と同様。SK-49・50よりKP大きい (-0.3 cm)。

SK-52



SK-52

- SK-53と同様。
- 1 茶褐色土 黒色土ブロック (-2.0 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
- 2 茶褐色土 黒色土ブロック (-2.0 cm) 多量。しまりあり。粘性あり。



第52図 第16・17・23・45・46・50・51・52・56・57号土坑実測図

第45号土坑(SK-45)(第52図 写真図版一三)

位置 A区N-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 やや東西に長い円形状で、確認面の径は東西約0.82m・南北約0.76m、底面の径は東西約0.7m・南北約0.64m、確認面からの深さ0.2m前後、底面レベル53.31mである。覆土 3層に分層される。ロームブロックや黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器坏(b)体部1片2.26gが出土する。本遺構に伴う遺物ではないと判断される。

第46号土坑(SK-46)(第52図 写真図版一三)

位置 A区N-8に位置する。南東側に位置する谷部に並行する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.46m・短軸0.3～0.32m、底面の規模は長軸約0.72m・短軸約0.38m、確認面からの深さは約0.12m、底面レベル53.28mである。主軸はN-28°-Eである。覆土 1層が堆積する。鹿沼軽石ブロックを含む。遺物出土状況 ガラス製のビー玉(径約1.2cm)が出土する。

第47号土坑(SK-47)(第53図 写真図版一三)

位置 A区O-8・9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、東壁がやや膨らむ。確認面の規模は長軸約1.57m・短軸約0.52m、底面の長軸約1.30m・短軸約0.36m、確認面からの深さは約0.53mである。主軸はN-60°-Wである。覆土 2層に分層される。暗茶褐色である。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第48号土坑(SK-48)(第53図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、底面中央部にピット状の掘り込みが確認される。確認面の規模は長軸約0.90m・短軸約0.30m、底面の長軸約0.80m・短軸約0.40m、確認面からの深さは約0.24m、底面からピット状の掘り込みまで約0.50m、底面のレベルは52.83m・ピット状の掘り込み52.77mである。主軸はN-39°-Eである。覆土 2層に分層される。第47号土坑と同様の覆土である。底面のピット状の掘り込みは覆土下層の2層が堆積する。遺物出土状況 覆土中から、土師器甕3片9.67gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第49号土坑(SK-49)(第53図)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.94m・短軸約0.32m、底面の長軸約0.83m・短軸約0.36m、確認面からの深さは約0.24m、底面のレベルは53.37mである。主軸はN-38°-Eである。覆土 2層に分層される。上面は近代以降のゴミの混入が確認される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

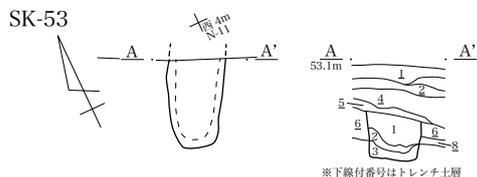
第50号土坑(SK-50)(第52図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。攪乱土下に確認される。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.51m・短軸約0.56m、底面の長軸約1.35m・短軸約0.45m、確認面からの深さは約0.26m、底面のレベルは52.00mである。主軸はN-37°-Eである。覆土 茶褐色土の1層が堆積する。遺物出土状況 覆土中から、土師器坏(a)1片2.41g、土師器碗(口クロ使用・内面黒色処理)1片2.84g、土師器微細片4片7.87gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第51号土坑(SK-51)(第52図)

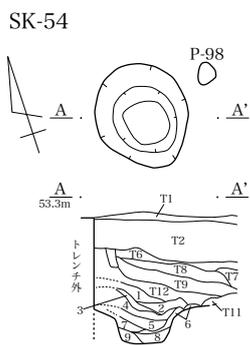
位置 A区O-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。攪乱土下に確認される。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.82m・短軸約0.71m、底面の長軸約1.65m・短軸約0.56m、確認面からの深さは約0.05m、底面のレベルは52.02mである。主軸はN-37°-Eである。覆土 茶褐色

土の1層が堆積する。遺物出土状況 覆土中から、土師器坏(c) 1片 2.12g、土師器微細片 1片 6.03g、粘土塊 1.49gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。



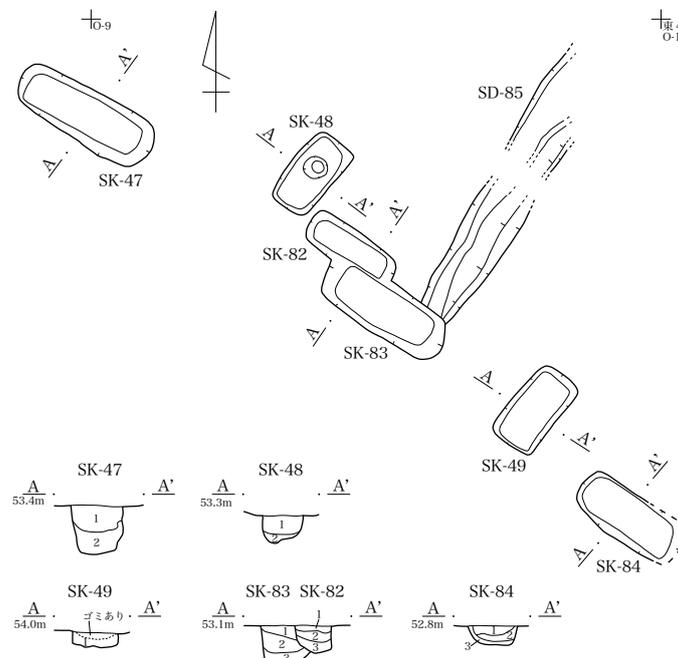
- SK-53
- 1 茶褐色土 KP粒子微量。茶褐色土ブロック(地山/-1.0cm)含む。黒色土ブロック(-1.0cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 2 1層より茶褐色土ブロック多量。しまりあり。粘性あり。
 - 3 2層より黒色土ブロック(-1.5cm)やや多量。しまりあり。粘性あり。

※下線付番号はトレンチ土層

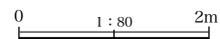


- SK-54
- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)微量。KP粒子(-0.2cm)・暗黒褐色土ブロック(-1.0cm)少量。暗褐色土ブロック(-1.2cm)やや多量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
 - 2 暗黒褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量。KP粒子(-0.2cm)・暗黒褐色土ブロック(-0.8cm)・暗褐色土ブロック(-0.8cm)・白色粒子少量。橙色粒子微量。しまりあり。
 - 3 暗黒褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む。ロームブロック(-0.8cm)・KP粒子(-0.1cm)・暗褐色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粒子・炭化物粒子微量。しまりあり。粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.8cm)微量。KP粒子(-0.2cm)・暗褐色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粒子・橙色粒子微量。しまり強。粘性あり。
 - 5 暗黒褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0cm)・KP粒子(-0.2cm)・暗褐色土ブロック(鉄分か/-1.0cm)・暗黒褐色土ブロック(-2.0cm)少量。白色粒子微量。帯状に堆積方向(下方向)に沿って堆積。しまりやや弱。粘性あり。
 - 6 暗黒褐色土 ローム粒子(-0.2cm)含む。暗黒褐色土ブロック(-2.0cm)・白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
 - 7 暗黄褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0cm)多量。暗黒褐色土ブロック(-0.8cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 8 暗黒褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0cm)やや多量。暗褐色土ブロック(-0.3cm)含む。18層同様、堆積方向に沿った帯状堆積。しまりあり。粘性あり。
 - 9 暗灰黒褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.2cm)やや多量。しまりあり。粘性あり。

SK-47・48・49・82・83・84



- SK-47
- 1 暗茶褐色土 KP微粒子含む。白色微粒子少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 2 暗茶褐色土 KP微粒子・白色微粒子少量。しまりやや弱。粘性あり。
- SK-48
- 1 暗茶褐色土 KPブロック(-0.3cm)多量。黒色土ブロック(-0.5cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 2 暗黒褐色土 地山+1層。
- SK-49
- 1 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)少量。しまり弱。粘性弱。
- SK-82
- 1 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-0.8cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 2 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-1.0cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 3 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-2.0cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
- SK-83
- 1 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-0.8cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 2 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-1.2cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
 - 3 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-1.0cm)少量。しまりやや弱。粘性あり。
- SK-84
- 1 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-1.5cm)含む。しまりやや弱。粘性あり。
 - 2 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土ブロック(-1.2cm)やや多量。しまりあり。粘性あり。
 - 3 茶褐色土 KP粒子(-0.1cm)微量。黒褐色土粒子〜ブロック(-1.0cm)多量。しまりあり。粘性あり。



第53図 第47・48・49・53・54・82・83・84号土坑実測図

第3章 確認された遺構と遺物

第52号土坑 (SK-52) (第52図)

位置 A区M-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。南半部はトレンチ4内にある。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.28m・短軸0.72m、底面の規模は長軸約0.98m・短軸約0.48m、確認面からの深さは約0.62m、底面レベル52.15mである。主軸はN-26° -Eである。覆土 2層に分層される。黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器坏(a)1片2.0g・(b)1片1.88g、土師器甕2片8.37gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第53号土坑 (SK-53) (第53図)

位置 A区N-11に位置する。重複関係 重複する遺構はない。南半部はトレンチ4内にある。平面形状・規模・主軸 北半部を確認出来なかったが長方形で、確認面の規模は長軸約0.92m以上・短軸0.6m、底面の規模は短軸約0.47m、確認面からの深さは約0.5m、底面レベル52.02mである。主軸はN-35° -Eである。

覆土 3層に分層される。茶褐色土ブロック・黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第54号土坑 (SK-54) (第53図 写真図版一三・一七)

位置 A区K-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。トレンチ2内にある。トレンチの北西角部に遺構南西部1/4を確認した。セクション図作成後、トレンチを拡張し、平面図の作成を行った。平面形状・規模・主軸 円形状で、やや南北に長い。確認面の規模は長軸約0.12m・短軸約0.97m、中間部の長軸約0.76m・短軸約0.65m、底面の長軸約0.46m・短軸約0.42mである。トレンチ底面からの深さは約0.35m、トレンチ壁面の土層で確認できる深さは、1層以下0.67mである。底面のレベルは51.71mである。覆土 覆土は遺跡周辺の地形改変に伴う盛り土層下に残存する。1～9層に分層される。1・2層は暗褐色土や暗黒褐色土、6～9層はローム層の混入が多い。遺物出土状況 覆土中から、土師器坏(a)1片22.23g、坏(b)1片5.88gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第56号土坑 (SK-56) (第52図)

位置 A区N-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形状で、確認面の径は東西約0.82m・南北約0.83m、底面の径東0.7m前後、確認面からの深さは0.08m前後、底面レベル53.44mである。覆土 2層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第57号土坑 (SK-57) (第52図)

位置 A区N-8に位置する。南東側に位置する谷部に並行する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.0m・短軸0.4～0.42m、底面の規模は長軸約0.85m・短軸約0.32m、確認面からの深さは約0.1m、底面レベル53.29mである。主軸はN-34° -Eである。覆土 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

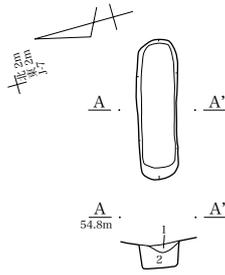
第66号土坑 (SK-66) (第54図)

位置 C区J-7に位置する。重複関係 トレンチ2内にある。重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸形状で、確認面の規模は長軸約1.5m・短軸約0.42m、底面の規模は長軸約0.32m・短軸約0.36m、確認面からの深さは約0.27m、底面レベル54.256mである。主軸はN-69° -Eである。覆土 2層に分層される。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第72号土坑 (SK-72) (第55図)

位置 A区西側K-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、北壁はややオーバーハングする。確認面の規模は長軸約1.48m・短軸0.54m、底面の規模は長軸約1.46m・

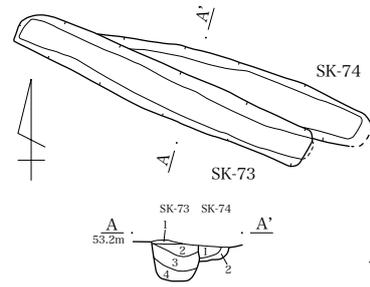
SK-66



SK-66

- 1 暗褐色土 KP 粒子~ブロック (-0.3 cm) 少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 KP 粒子~ブロック (-1.0 cm)・暗褐色土ブロック (-1.2 cm) 含む。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。

SK-73・74



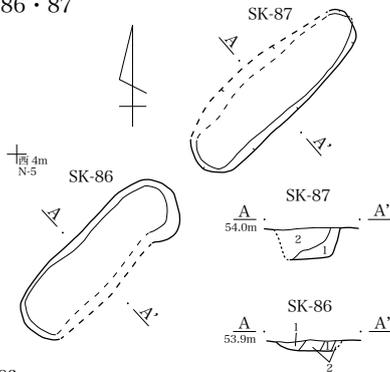
SK-73

- 1 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.6 cm) 含む。暗黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 少量。しまりやや弱。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-1.0 cm) 含む。暗黒褐色土粒子 (-0.2 cm) 少量。1・3層より明色。しまりやや弱。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-1.5 cm) やや多量。暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりやや弱。粘性あり。
- 4 暗褐色土 ロームブロック (-0.5 cm) 含む。ロームブロック (-1.5 cm) を稀に含む。しまりやや弱。粘性あり。

SK-74

- 1 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.5 cm) 含む。暗褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.5 cm) 少量。しまりやや弱。粘性あり。

SK-86・87



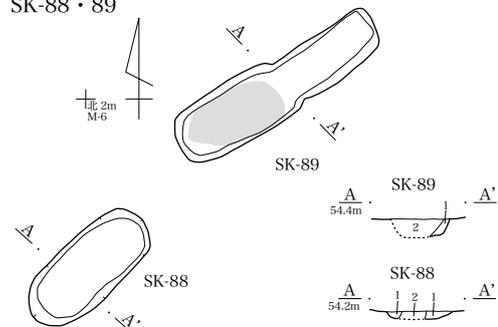
SK-86

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-0.5 cm) 微量。KP ブロック (-1.0 cm) 多量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 2 攪乱 ゴボウトレンチャー

SK-87

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量。KP ブロック (-0.5 cm) 多量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
- 2 攪乱 ゴボウトレンチャー

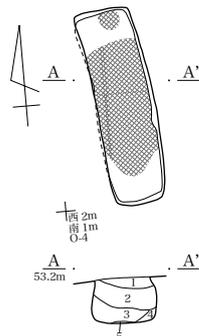
SK-88・89



SK-88・89

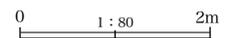
- 1 暗褐色土 ローム粒子微量。KP ブロック (-1.0 cm) 含む。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 2 攪乱 ゴボウトレンチャー。底面、暗赤褐色に変色あり。

SK-90



SK-90

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量。ロームブロック (-1.0 cm) 少量。KP ブロック (-1.0 cm) 含む。黒色土ブロック (-0.8 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量。ロームブロック (-0.5 cm) 少量。KP ブロック (-1.0 cm) 多量。KP ブロック (-7.0 cm) 少量。黒色土ブロック (-0.5 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-0.8 cm) 微量。KP ブロック (-1.0 cm)・KP ブロック (-3.0 cm) 含む。白色粒子・黒色土ブロック (-0.5 cm) 微量。しまりやや弱。粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-2.0 cm) 微量。KP ブロック (-0.8 cm) 少量。KP ブロック (-2.0 cm)・黒色土ブロック (-0.3 cm)・白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 5 黒褐色土 ローム粒子・KP ブロック (-0.3 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。



SK-100・101 (遺構実測図：第44図)

SK-100

- 1 暗褐色土 ローム粒子・KP 粒子 (-0.1 cm) 微量。茶褐色土ブロック (-1.2 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量。KP ブロック (-0.3 cm) 含む。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・KP 粒子 (-0.1 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。

SK-101

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子~ブロック (-1.0 cm) 多量。白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2 cm) 少量。KP 粒子~ブロック (-1.0 cm) やや多量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 微量。KP 粒子 (-0.1 cm) 少量。茶褐色土ブロック (-2.0 cm)・白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。

第54図 第66・73・74・86・87・88・89・90・100・101号土坑実測図

第3章 確認された遺構と遺物

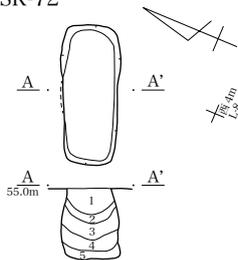
短軸約0.55m、確認面からの深さは約0.74mである。底面レベルは54.20mである。主軸はN-18°-Eである。

覆土 5層を確認した。ロームブロックが堆積する。 遺物出土状況 覆土中層から、陶器脚部裾とみられる破片が1片4.87gが出土する。外面に白濁釉を施す。内面は無釉であるが、一部にオリブ釉が残る。本遺構は近世以降と判断される。

第73号土坑 (SK-73) (第54図)

位置 C区I-4に位置する。重複関係 第74号土坑と重複する。本遺構が新しい。 平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約3.38m・短軸0.5m、底面の規模は長軸約3.25m・短軸約0.24m、

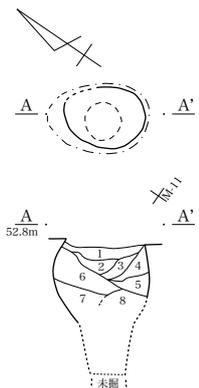
SK-72



SK-72

- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-1.0cm)少量, KP粒子へブロック(-1.2cm)やや多量。暗黒褐色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粒子微量。しまり強。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-1.0cm)少量, KP粒子へブロック(-1.0cm)含む。暗褐色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-0.8cm)・KP粒子へブロック(-1.0cm)含む。白色粒子微量。しまりやや弱。粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-1.0cm)・KP粒子へブロック(-0.5cm)少量, 白色粒子微量。しまりやや弱。粘性あり。 |
| 5 暗褐色土 | 1~4層より濃色。ローム粒子少量, KP粒子へブロック(-1.2cm)・暗褐色土ブロック(-1.5cm)含む。しまりあり。粘性あり。 |

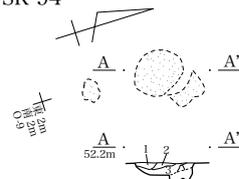
SK-92



SK-92

- | | |
|---------|--|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック(-0.3cm)少量, KP粒子(-0.1cm)微量。茶褐色土ブロック(-2.0cm)含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック(-0.5cm)少量, KP粒子(-0.2cm)・橙色土ブロック(焼土か/-0.3cm)微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック(-0.8cm)少量, KP粒子(-0.2cm)微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-0.8cm)含む。ロームブロック(-1.5cm)少量, KP粒子(-0.2cm)微量。黒褐色土ブロック(-1.0cm)少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-1.0cm)少量, KP粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.2cm)微量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子へブロック(-1.2cm)含む。KP粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.2cm)微量。しまりあり。粘性あり。 |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック(-1.0cm)含む。黒褐色土ブロック(-0.5cm)少量。しまりあり。粘性あり。 |
| 8 暗黄褐色土 | ローム粒子へブロック(-1.0cm)中央に多量。黒褐色土ブロック(-0.5cm)少量。しまりあり。粘性あり。 |

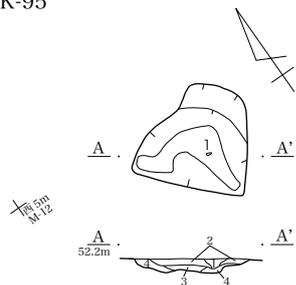
SK-94



SK-94 (焼土)

- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子(-0.1cm)含む, KP粒子(-0.1cm)・橙色粒子(焼土)少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子(-0.1cm)含む, KP粒子(-0.1cm)・焼土(-0.1cm)少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子(-0.1cm)少量, KP粒子(-0.1cm)・焼土(-0.1cm)微量。しまりやや強。粘性あり。 |

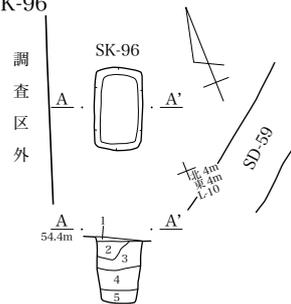
SK-95



SK-95

- | | |
|---------|--|
| 1 暗橙褐色土 | 黒褐色土ブロック(-1.0cm)微量。焼土粒子へブロック(-1.0cm)多量。炭化物粒子へブロック(-1.2cm)少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 2 暗橙褐色土 | 黒褐色土ブロック(-1.0cm)微量。焼土粒子へブロック(-0.5cm)やや多量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | 焼土ブロック(-0.3cm)少量。しまりやや強。粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 | 焼土粒子(-0.2cm)少量。しまりやや強。粘性あり。 |

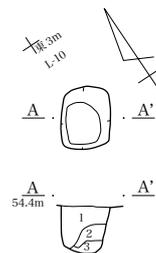
SK-96



SK-96

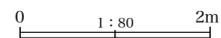
- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 耕作土。 |
| 2 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-1.0cm)やや多量。しまりあり。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-2.0cm)やや多量。しまりあり。粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-3.0cm)含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 5 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-1.0cm)少量。しまりあり。粘性あり。 |

SK-97



SK-97

- | | |
|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-10.0cm)多量。しまりややあり。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-1.0cm)含む。しまりややあり。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | KP粒子へブロック(-1.5cm)少量。しまりややあり。粘性あり。 |



第55図 第72・92・94・95・96・97号土坑実測図

確認面からの深さは約0.42mである。底面レベルは東端部で52.79m、SP-A付近52.69m、西端部52.62mで、東から西方向への傾斜がみられる。主軸はN-25°-Eである。形状や大きさは、第73号土坑・第74号土坑の特徴は共通点が多い。深さに差異があるが、同様に用途の遺構と判断される。覆土4層を確認した。ロームの堆積が観察される。遺物出土状況 第73号・第74号土坑の覆土中から、内耳土器底部片1片11.82gが出土する。胎土に金雲母を含む。本遺構に伴うか判然としない。

第74号土坑 (SK-74) (第54図)

位置 C区I-4に位置する。重複関係 第73号土坑と重複する。本遺構が古い。平面形状・規模・主軸 第73号土坑との重複のため不詳である。長方形で、確認面の規模は長軸約3.0m以上・短軸0.48m、底面の規模は長軸約2.56m・短軸約0.35m、確認面からの深さは約0.17mである。底面レベルは東端部で52.95m、中央部付近52.88m、現状での西端部52.72mで、東から西方向への傾斜がみられる。主軸はN-18°-Eである。形状や大きさは、第73号土坑・第74号土坑の特徴は共通点が多い。深さに差異があるが、同様に用途の遺構と判断される。覆土2層を確認した。ロームの堆積が観察される。遺物出土状況 第73号・第74号土坑の覆土中から、内耳土器底部片1片11.82gが出土する。胎土に金雲母を含む。この他、陶器脚部裾とみられる破片が1片4.87gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第75号土坑 (SK-75) (第14図)

位置 D区に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 トレンチ21に確認した。円形状で、A区SK-22と同種とみられる。客土下の規模は径約1.10mである。トレンチ底面までの深さ約0.9m・レベル51.2m付近までを確認した。遺物出土状況 覆土中から、土師器甕底部1片96.48gが出土する。

第81号土坑 (SK-81) (第50図 写真図版一三)

位置 A区M-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、北～東壁はオーバーハングする。確認面の規模は長軸約1.21m・短軸約0.63m、底面の規模は長軸約1.24m・短軸約0.63m、確認面からの深さは0.75m、底面レベル52.375mである。主軸はN-28°-Eである。覆土3層に分層される。黒色土ブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器甕類2片8.79gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第82号土坑 (SK-82) (第53図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 第82・83号土坑が長軸方向に平行して重複する。また、SD-53と重複する。新旧関係は不明である。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.45m・短軸約0.57m、底面の長軸約1.11m・短軸約0.40m、確認面からの深さは約0.38m、底面のレベルは52.60mである。主軸はN-57°-Wである。覆土3層に分層される。茶褐色土が堆積する。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第83号土坑 (SK-83) (第53図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 第82・83号土坑が長軸方向に平行して重複する。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.04m・短軸約0.30m、底面の長軸約0.88m・短軸約0.26m、確認面からの深さは約0.26m、底面のレベルは52.75mである。主軸はN-56°-Wである。覆土3層に分層される。茶褐色土が堆積する。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第84号土坑 (SK-84) (第53図 写真図版一四)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 南東部の上端を失うが長方形で、確認面の規模は長軸[1.24]m・短軸約0.40m、底面の長軸約1.06m・短軸約0.38m、

第3章 確認された遺構と遺物

確認面からの深さは約0.20m、底面のレベルは52.47mである。主軸はN-56°-Wである。覆土3層に分層される。茶褐色土が堆積する。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第86号土坑(SK-86)(第54図 写真図版一四)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸形状で、北壁の一部はオーバーハングするが、攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)に起因する可能性がある。また、西壁は同様の攪乱により部分的に失われている。確認面の規模は長軸約2.23m・短軸約0.72m、底面の規模は長軸約(2.16)m・短軸約(0.5)m、確認面からの深さは0.32m、底面レベル53.80mである。主軸はN-45°-Eである。覆土1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 確認されなかった。

第87号土坑(SK-87)(第54図 写真図版一四)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸形状で、北東部が膨らむ形状にある。東壁の一部は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)により部分的に失われている。確認面の規模は長軸約2.1m・短軸約0.72m、底面の規模は長軸約(0.93)m・短軸約(0.47)m、確認面からの深さは0.11m、底面レベル53.74mである。主軸はN-45°-Eである。覆土1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第88号土坑(SK-88)(第54図 写真図版二一)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸形状で、部分的に攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)により失われている。確認面の規模は長軸約1.32m・短軸約0.68m、底面の規模は長軸約1.32m・短軸約0.54m、確認面からの深さは0.1m、底面レベル53.995mである。主軸はN-45°-Eである。覆土1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 陶器1片5.3gが出土する。器種は判然としないが、緩い曲面の内側は灯明皿状の受け部を持ち、オリーブ釉を施す。曲面外側は無釉である。本遺構は近世以降と判断される。

第89号土坑(SK-89)(第54図)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 2坑が長軸方向で重複するような形状であるが、詳細は不明である。平面形状・規模・主軸 南側は隅丸形状、北側は長形状である。南側の西壁の一部は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)により部分的に失われている。長軸は確認面で長軸約2.44m・底面で約2.3mである。南側部分は長軸[1.4]m・短軸約0.68m、底面の長軸約[1.2]m・短軸約0.55m、北側部分は長軸[1.2]m・短軸約0.52m、底面の長軸約[1.1]m・短軸約0.38mである。確認面からの深さは南・北側ともに約0.2m、底面レベルは南側54.06m、北側54.08mである。主軸はN-54°-Eである。覆土 中央部の堆積を確認した。1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。南側の底面は暗赤褐色の変色が観察される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第90号土坑(SK-90)(第54図)

位置 B区N-4に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長形状である。セクション図作成時には壁～底面にオーバーハングが観察されるため、平面図作成時までには降霜等によって原形状が失われたと判断される。このため、本遺構の平面図・断面図は図面として整合させていない。確認面の規模は長軸約2.1m・短軸約0.62m、底面の規模は長軸約2.0m・短軸約0.58m、確認面からの深さは約0.48m、底面レベル52.64mである。主軸はN-7°-Wである。覆土5層が堆積する。主に鹿沼軽石を含む。底面に炭化物が散在する。北側の炭化物は床面から0.14mほど上位にあるが、これ以外は床面付近にある。

遺物出土状況 覆土中から、瓦側端部1片14.58gが出土する。内面に布目が残る。器種は判断し得ない。

また、磁器中丸碗 1片 3.75g が出土する。白磁で内外面は無文である。大正時代～昭和初期の量産品とみられる。本遺構の埋没時期と推定される。

第92号土坑 (SK-92) (第55図 写真図版一四)

位置 A区L-11に位置する。重複関係 第8号竪穴建物跡と重複する。本土坑が新しい。平面形状・規模・主軸 第8号竪穴建物跡床面で確認した。楕円形状で、オーバーハングする。深さ約1.45mまで覆土の除去を行ったが底面の確認には至らなかった。第8号竪穴建物跡床面での規模は長軸約0.84m・短軸約0.64m 確認し得た最大規模は第8号竪穴建物跡床面から約0.4m下位で長軸約1.06m・短軸約0.69mである。第55図に示した堆積層下は底面を確認するために覆土を除去した範囲であり、断面形を示すものではない。主軸はN-35°-Wである。覆土 8層を確認した。遺物出土状況 覆土中から、須恵器甕 1片 5.69g が出土する。外面に平行叩きを施す。本遺構に伴うか判然としない。

第94号土坑 (SK-94) (第55図 写真図版一四)

位置 A区N-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形状の浅い掘り込みで周囲に焼土が散在する。掘り込み部分の規模は径0.45m前後、深さ約0.48mである。覆土 4層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第95号土坑 (SK-95) (第55図 写真図版一四)

位置 A区M-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 平面形・底径とも不整な浅い掘り込みである。掘り込み部分1.1mほどの範囲で、深さ1.2mである。覆土 3層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第96号土坑 (SK-96) (第55図 写真図版一四)

位置 A区L-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.89m・短軸約0.50m、底面の長軸約0.74m・短軸約0.39m、確認面からの深さは約0.70m、底面のレベルは53.62mである。主軸はN-23°-Eである。覆土 5層に分層されるが1層は耕作土である。遺物出土状況 覆土中から、磁器中丸碗 1片 1.22g が出土する。文様は確認されない。

第97号土坑 (SK-97) (第55図 写真図版一四)

位置 A区L-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.66m・短軸約0.36m、底面の長軸約0.45m・短軸約0.35m、確認面からの深さは約0.50m、底面のレベルは53.79mである。主軸はN-32°-Eである。覆土 3層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第5節 ピット

(1) 調査の概要

総数で14基を確認した。A区5基・B区0基・C区5基・D南区4基である。何れも散在する傾向にある。径が小さく、覆土の堆積状況を記録し得たものは少ない。形状・配置等から柵列や掘立柱建物跡、建物跡などの柱穴となるものは認められなかった。

(2) ピット

第7号ピット (P-7) (第56図 写真図版一五)

位置 A区L-11に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、

第3章 確認された遺構と遺物

確認面の径約 0.30m、底面の径約 0.17m、確認面からの深さは約 0.10m、底面レベル 53.68m である。

覆土 1 層を確認した。遺物出土状況 確認されなかった。

第 11 号ピット (P-11) (第 16 図 写真図版一五)

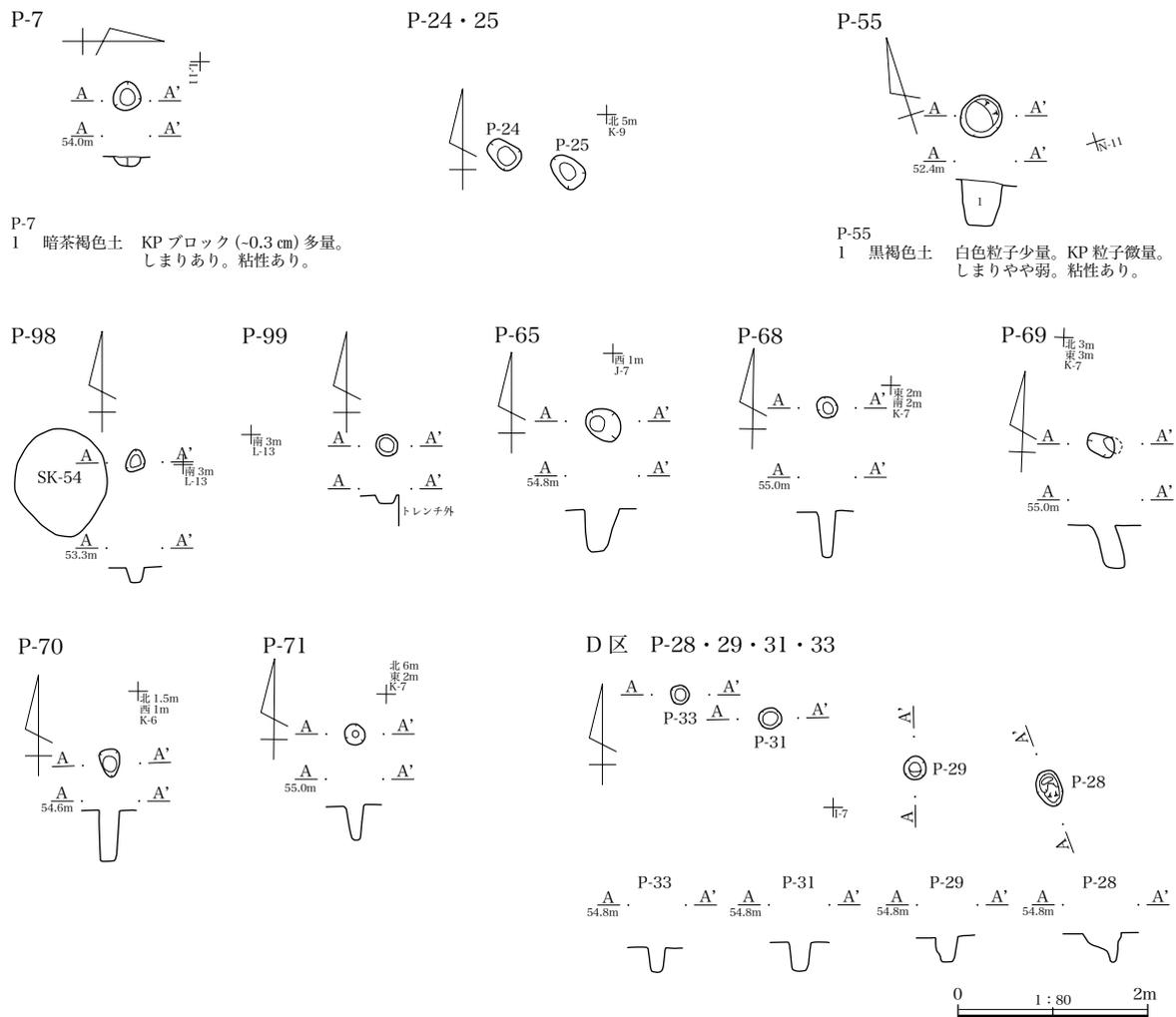
位置 A 区 L-10 に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 確認面は円形状で径 0.4m 前後、底面は西側にオーバーハングし、東西 0.3m・南北約 0.16m である。確認面からの深さは約 0.32m、底面レベル 56.48m である。覆土 1 層を確認した。遺物出土状況 確認されなかった。

第 24 号ピット (P-24) (第 56 図)

位置 A 西区 K-8 に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、確認面の長軸約 0.36m・短軸約 0.65m、底面の径約 0.16m、確認面からの深さは約 0.12m、底面レベル 54.91m である。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第 25 号ピット (P-25) (第 56 図)

位置 A 西区 K-8 に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、



第 56 図 第 7・24・25・28・29・31・33・55・65・68・69・70・71・98・99 号ピット実測図

確認面の長軸約0.36m・短軸約0.40m、底面の長軸約0.20m・短軸約0.14m、確認面からの深さは約0.85m、底面レベル54.95mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第28号ピット (P-28) (第56図)

位置 D南区H-7に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、確認面の長軸約0.4m・短軸約0.25m、確認面からの深さは約0.32m、底面レベル54.195mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第29号ピット (P-29) (第56図)

位置 D区H-7に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、確認面の長軸約0.26m・短軸約0.23m、確認面からの深さは約0.06m、底面レベル54.185mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第31号ピット (P-31) (第56図)

位置 D区H-6に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.2m、底面の径約0.1m、確認面からの深さ約0.26m、底面レベル54.075mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第33号ピット (P-30) (第56図)

位置 D区H-6に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.26m、底面の径約0.17m、確認面からの深さ約0.3m、底面レベル54.11mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第55号ピット (P-55) (第56図)

位置 A区M-10に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径0.35m前後、底面径約0.13m、確認面からの深さ約0.48m、底面レベル51.71mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第65号ピット (P-65) (第56図)

位置 C区J-7に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.22m、底面の径約0.12m、確認面からの深さ約0.54m、底面レベル54.10mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第68号ピット (P-68) (第56図)

位置 C区J-6に位置する。トレンチ3内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.22m、底面の径約0.12m、確認面からの深さ約0.48m、底面レベル54.16mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第69号ピット (P-69) (第56図)

位置 C区K-6に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 東西に長い円形で、確認面の長軸約0.29m、底面の長軸約0.22m、底面の長軸約0.22m、底面の長軸約0.16m、確認面からの深さ約0.45m、底面レベル54.27mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第70号ピット (P-70) (第56図)

位置 C区K-6に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・

第3章 確認された遺構と遺物

主軸 東西に長い円形で、確認面の長軸約 0.29m、底面の長軸約 0.22m、底面の長軸約 0.22m、底面の長軸約 0.16m、確認面からの深さ約 0.45m、底面レベル 54.27m である。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第71号ピット (P-71) (第56図)

位置 C区 K-6 に位置する。トレンチ 4 内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約 0.2m、底面の径約 0.16m、確認面からの深さ約 0.56m、底面レベル 53.96m である。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第98号ピット (P-98) (第56図)

位置 A区 K-13 に位置する。トレンチ 2 内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 不整な円形で、確認面の長軸約 0.23・短軸約 0.18m、底面の長軸約 0.13・短軸約 0.1m、確認面からの深さ約 0.16m、底面レベル 51.95m である。覆土 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第99号ピット (P-99) (第56図)

位置 A区 K-13 に位置する。トレンチ 2 内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約 0.23m、底面の径約 0.16m、確認面からの深さ約 0.09m、底面レベル 52.17m である。覆土 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第6節 溝状遺構

(1) 調査の概要

総数で4条が確認される。A区2条、B区1条、C区1条である。

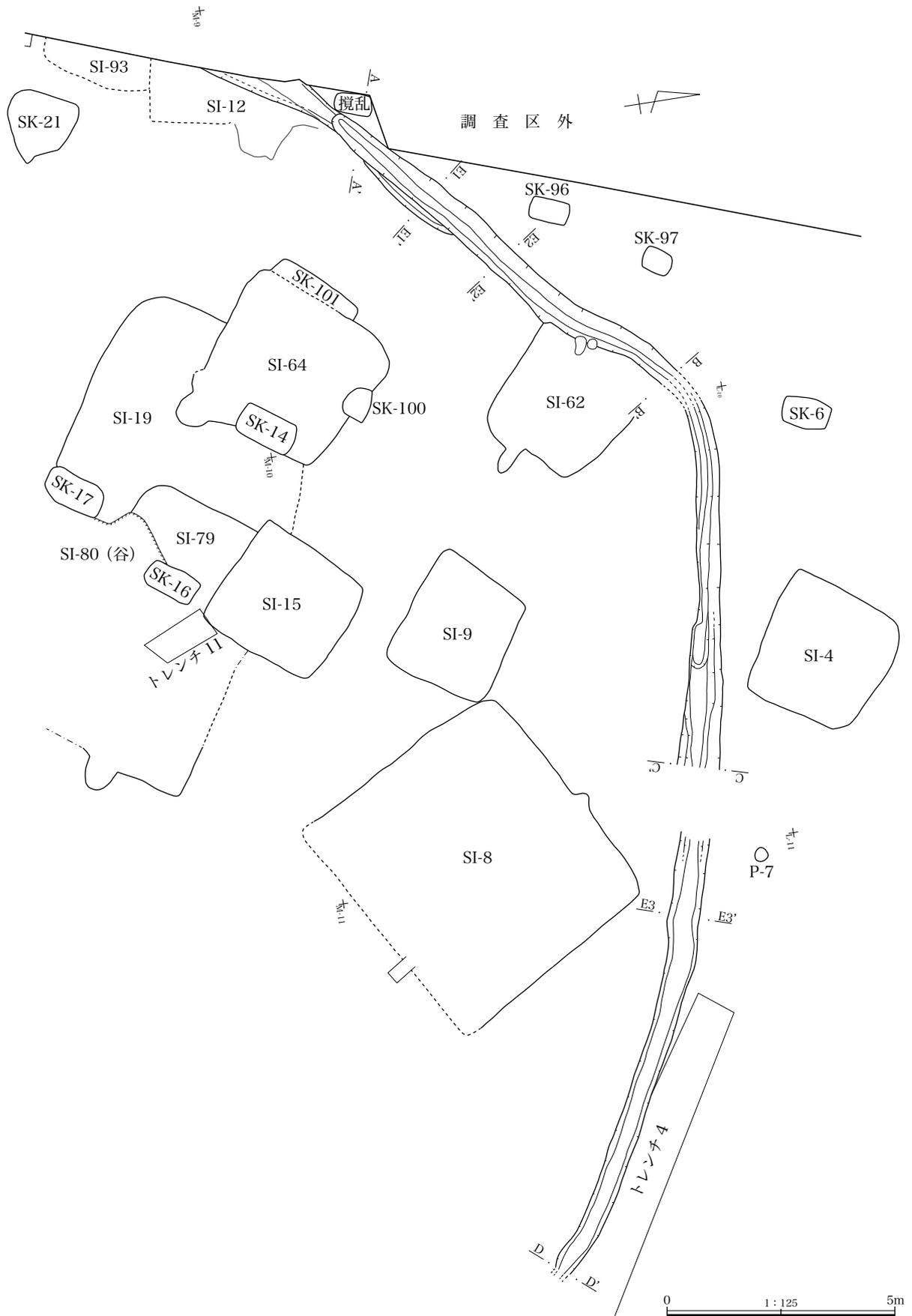
A区第85号溝状遺構はA区内の土坑の主軸と同様であるとともに、丘陵東側の谷が延びる方向に沿う。また、C区第67号溝状遺構も丘陵西側への傾斜に平行して延びる。谷の延びる方向を意識したものと考えられる。B区第91号溝状遺構は、溝であるか判然としない。C区 SD-67 は詳細は不詳であるが、主軸がB区の土坑とあう。

(2) 溝状遺構

第59号溝状遺構 (SD-59) (第57～59図 第15表 写真図版一五・二一)

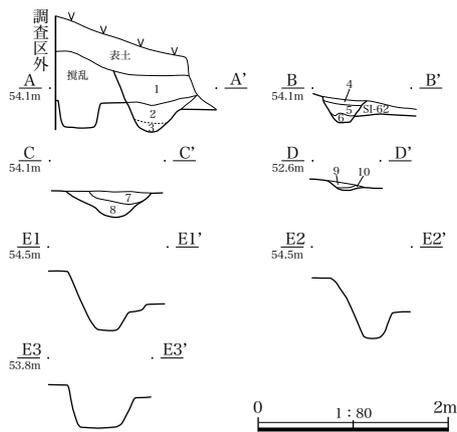
位置 A区 L-9～12 に位置する。重複関係 第12号・第62号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。

平面形状・規模 L-10 杭付近で屈曲する鉤の手状で、東側は谷部、西側は調査区外に延びる。SP-D は谷部にかかる斜面下方であるが、これ以東の谷部では掘り込みが確認されなかった。SP-D の観察からは本遺構の覆土と谷部の堆積土は異なる特徴であり、掘り込みを持たず谷部へ流れ込む可能性、或いは、削平のため失われた可能性が考えられる。長さは、西壁から屈曲部（西半部）まで約 11.0m、屈曲部から谷部（東半部）まで直線で約 19.6m である。東半部は北に膨らむ形状で、屈曲部での角度は 145 度前後である。底面からの立ち上がりは EP-1 付近でテラス状、SP-C 付近で屈曲する。調査時期が厳冬期であったため、霜等に溝壁の端部が失われた箇所もある。幅は概ね 0.2～0.3m であるが、調査区西壁・東端部で 0.2m、EP-1 付近のテラス状の部分で 0.4m、SP-C 付近で 0.46m である。本遺構付近の遺構確認面は、削平のため、南側に比べ北側が高い。北側の遺構確認面からの深さは、調査区西壁付近で 0.15m、SP-A 付近で 0.545m、EP-



第57図 第59号溝状遺構実測図(1)

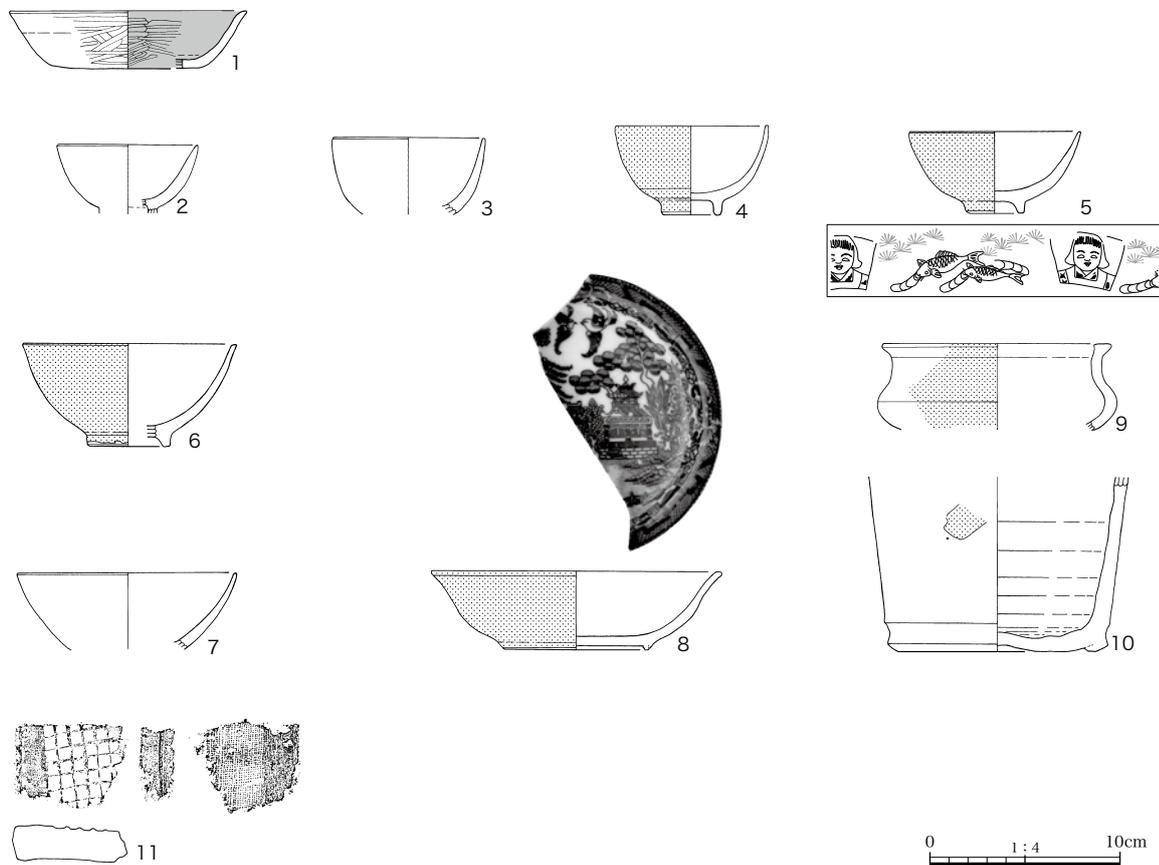
第3章 確認された遺構と遺物



SD-59

- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)微量。KP ブロック(-0.5 cm)・白色粒子少量。炭化物ブロック(-0.4 cm)微量。しまりやや強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)多量。KP ブロック(-3.0 cm)・白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)微量。KP 粒子~ブロック(-1.5 cm)多量。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.1 cm)・白色粒子少量。しまりやや強。粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.2 cm)多量。KP ブロック(-0.3 cm)・白色粒子含む。しまりあり。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)微量。KP ブロック(-0.8 cm)やや多量。しまりやや強。粘性あり。
- 7 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP 粒子(-0.2 cm)・KP ブロック(-0.8 cm)少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。
- 8 暗黄褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)少量。KP 粒子(-0.2 cm)多量。KP ブロック(-1.0 cm)少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 9 暗茶褐色土 ローム粒子含む。ロームブロック(-0.3 cm)・KP ブロック(-0.3 cm)・黒褐色土ブロック(-0.5 cm)少量。白色粒子微量。しまりあり。粘性あり。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-1.0 cm)・KP 粒子・白色粒子微量。しまりやや強。粘性あり。

第58図 第59号溝状遺構実測図(2)



第59図 第59号溝状遺構出土遺物実測図

第15表 第59号溝状遺構出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口:[12.4] 底:— 高:(3.0)	内面黒色処理 内:口端までミガキ 右→左 外:口ヨコナデ→ミガキ 右→左	内外:7.5YR6/4 にぶ い橙	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子微量 良	A区 SD-59 口縁部 1/8 残存
2 磁器 小碗	口:7.3 底:[3.0] 高:(3.6)	丸形 内:呉須 口縁部 形文様 体部の文様は型紙で蓮弁状に配する 外:無文	内:10BG8/0 外:10Y9/1 柄:5PB3/10		A区 SD-59、確認 調査8トレ溝 口~体部一部、底 部 1/2 欠損

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
3 磁器 小碗	口:[8.0] 底:— 高:(4.0)	丸形 内:呉須 市松文様状の区画内に松葉文様・梅文様を型紙で配する 外:無文	内外:5B8/1 柄:5PB2/8		A区SD-59 口縁部1/4残存
4 磁器 小碗	口:8.0 底:3.2 高:4.7	丸形 内:呉須 短冊 短冊内「薬師寺 因富壽屋」5と同時代か	内外:5BG9/0		A区SD-59 口~体部2/3残存,底部完存
5 磁器 小碗	口:9.0 底:3.2 高:4.3	丸形 染料使用 大正末葉~昭和初期の量産品か 内:無文 外:人物・鯉・松? スタンプ 色調不明 高台底部は無釉	内外:5PB9/0		A区SD-59 口~体部2/3残存,底部完存
6 磁器 小碗	口:[11.2] 底:[4.2] 高:5.4	丸形 無文 高台底部は無釉 高台底無釉である点から5と同時代か	内外:5BG3/6		A区SD-59 1/6残存
7 磁器 小碗	口:[11.6] 底:— 高:(4.0)	丸形 内外:雷文を地文とし、梅枝を型紙で配する	内外:5PB3/8,5B9/1		A区SD-59 口縁部1/5残存
8 陶器 皿類	口:15.2 底:7.6 高:4.2	内:呉須 楼閣と底池の周囲にオシドリ 口縁連珠文と格子文・幾何学文様・七宝文を型紙で配する 外:無文 高台底部は無釉	外:5B9/0 絵柄:5PB2/8		A区SD-59 1/2残存
9 磁器 鉢類	口:[12.0] 底:— 高:(4.5)	口縁上端~外面体部にかけて藍色釉を施釉 底部はベタ高台	内:10Y9/1 外:5PB2/8		A区SD-59 口縁部1/10残存
10 陶器 瓶類	口:— 底:[10.4] 高:(9.2)	ロクロ成形 益子産 大正末葉~昭和初期くらいか 内外:灰色釉施釉 外面全面に施釉されるが底面近く(稜下)にかからな所あり 外:鉄釉で文様を施す 底部回転ヘラ切り 施釉が均一 新しくない量産品	内:5Y8/2 外:10Y8/1		A区SD-59 底部1/2残存
11 鬘斗瓦	長:(4.9) 幅:(6.0) 厚:1.8	凸面:格子文 側縁は無加工 側面はヘラケズリ、面取 凹面:布目痕 側縁はヘラケズリ	7.5Y4/1 灰	石英・長石粒微量	A区SD-59 一部残存

1-2間が最も深く0.62m前後、SP-B付近で0.5m、これ以东SP-C付近までに0.23mと浅くなる傾向にある。SP-C付近で谷部に向けて遺構確認面とも深くなるためEP-3付近で0.58m、これ以东は徐々に浅くなり、東半部端では0.015mである。主軸方位には沿っておらず、東半部N-98°-E、西半部N-120°-Wである。底面底面は多少の凹凸が確認されるが、霜等の影響で詳細は確認し得なかった。底面のレベルは、調査区西側端部53.82m、SP-A付近53.68m、EP-1-2間が最も深く53.5m、SP-B付近53.705m、SP-C付近53.53m、東半部端52.3mである。最も深いEP-1-2間から東西への傾斜がみられる。覆土SP-A~Dは似た特徴を持つが、各層の異同を判じえず、各セクションごとに層番を付した。SP-A~Cは下層に多量の鹿沼軽石を含むが、SP-Dへの鹿沼軽石の混入は少ない。SP-Dが谷部にあたるためと判断できる。

遺物出土状況 覆土中から1072.07g出土する。

出土遺物 土師器環1は9世紀前半とみられる。陶磁器類は大正~昭和初期の量産品であろう。6は同種の破片が不掲載1片・A区表採4片・確認調査T8-1片(あわせて89.0g)ある。図示し得なかった遺物は何れも小片で、土師器環1片9.77g、土師器甕2片9.43g、土師器甕(常陸型)1片10.12g、須恵器甕2片35.6g、須恵器大型鉢1片20.18g、陶器23.02g、磁器60.64g、ガラス片3片5.85gである。

土師器環の胎土は白色でウルシ処理は施されない。須恵器甕は外面にタテ方向の平行叩きを施す。9世紀代の新治産であろう。陶器は急須片4片、内外面に灰白色釉を施す中丸碗片1片である。磁器は、中丸碗高台(二重圏線・呉須・型紙)、中丸碗体部片(外面唐草文状・呉須・型紙)1片、小筒碗(無文)、碗類(内外面青緑釉(Hue 5GB3-6)2片)である。図示した陶磁器類と同時期であろう。ガラス片の時期は不明である。本遺構は陶磁器類の時期に埋没状態にあった溝状遺構である可能性が高い。

第67号溝状遺構(SD-67)(第60図)

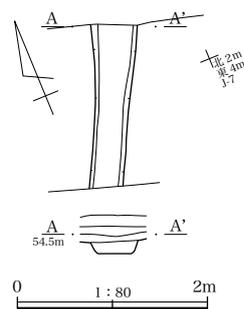
位置 C区J-7に位置する。トレンチ2内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模

第3章 確認された遺構と遺物

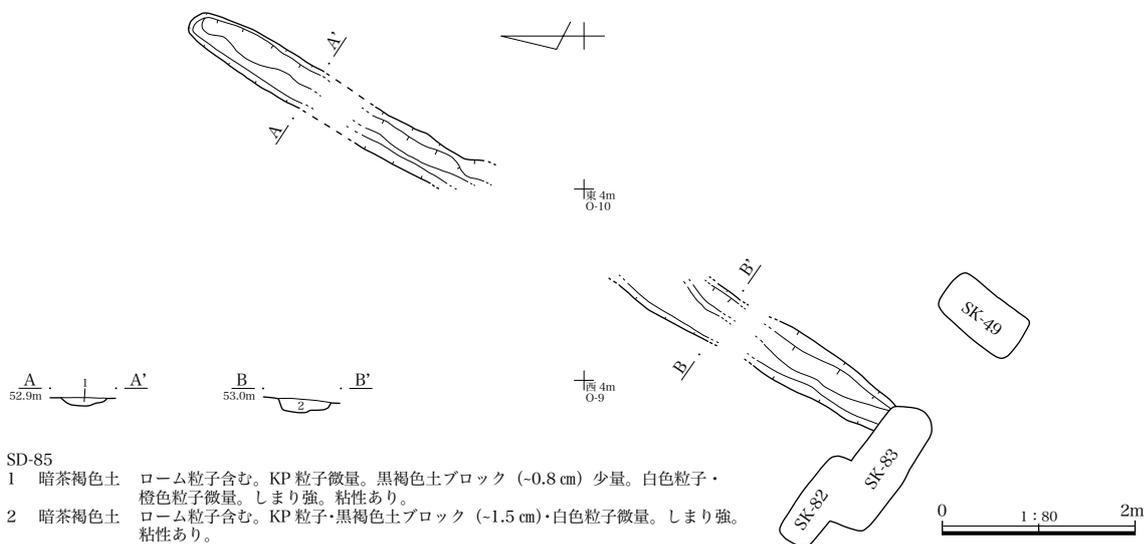
トレンチ2内南北方向に延びる。トレンチの短軸に沿うため、溝状遺構であるかどうかは判断としない。現状の長さは1.91m、幅は確認面で約0.37m、底面で約0.27m、確認面からの深さは約0.1mである。底面レベルは南端部54.294m・中央部54.278m・北端部54.9mで一方方向への傾斜はみられない。主軸はN-26°-Eである。覆土層番は2層を付したが、単層であろう。遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。

第85号溝状遺構 (SD-85) (第61図 写真図版一五)

位置 A区N・O-9に位置する。重複関係 第82・83号土坑と重複する。重複部は僅かとみられ、新旧関係は不明である。平面形状・規模 北東-南西に直線的に延びる。第82・83号土坑以南は確認されない。重複部の幅と北端部の幅が同程度であることから、重複部付近が南端部にあたる可能性が考えられる。遺構確認面の高さはSP-A付近は平坦であるが、SP-B付近は斜面に沿って、やや西側が高い。長さは約8.28mである。幅は0.35～0.57mである。最も狭いのは南・北端部で約0.35m、最も広いのはSP-B南付近で約0.57mである。深さは、標高の低い谷側の遺構確認面から0.5～1.0mである。主軸 N-30°-Eである。底面 底面のレベルは、南端部52.75m、SP-B付近52.78m、SP-A付近52.73m、北端部52.75mである。多少の高低差はあるが、僅かではあるが南から北への傾斜は認められる。覆土層番は2層を付したが、単層であろう。遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。



第60図 第67号溝状遺構実測図



SD-85

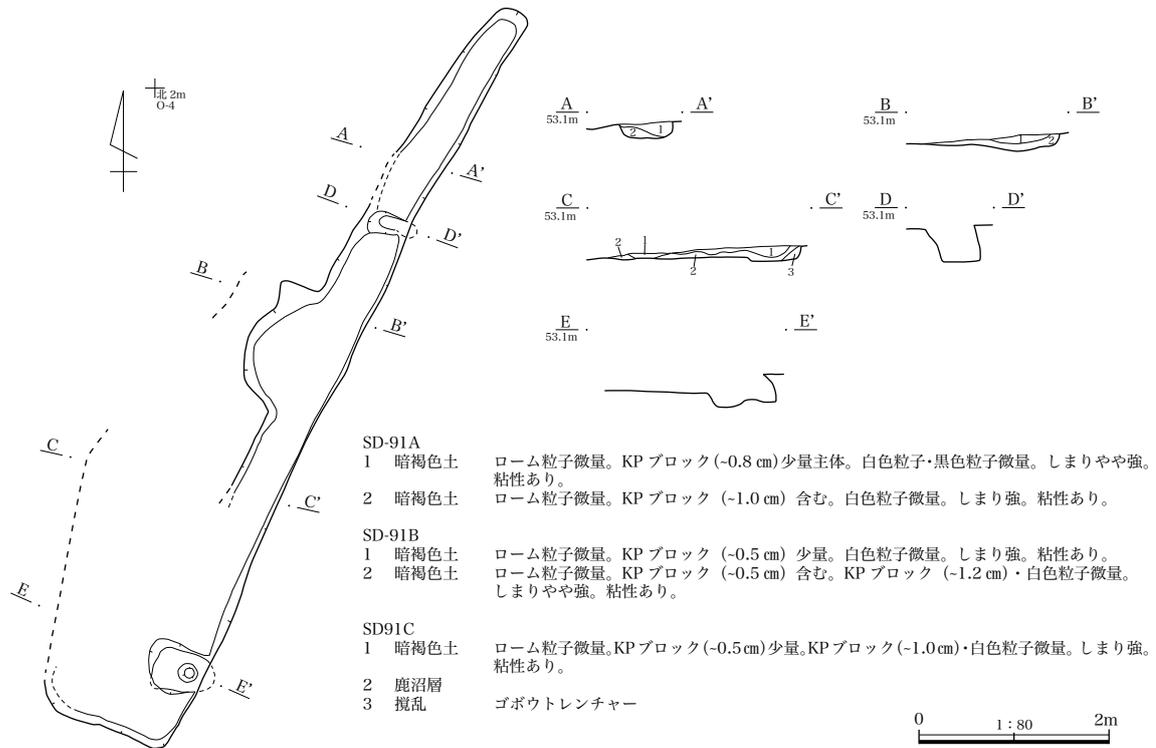
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子含む。KP粒子微量。黒褐色土ブロック (-0.8 cm) 少量。白色粒子・橙色粒子微量。しまり強。粘性あり。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子含む。KP粒子・黒褐色土ブロック (-1.5 cm)・白色粒子微量。しまり強。粘性あり。

第61図 第85号溝状遺構実測図

第91号溝状遺構 (SD-91) (第62図)

位置 B区O-3～4に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模 南西-北東方向に直線的に延びる。東壁は直線的であるが、西壁は不整である。北半部の幅は狭いが南半部は幅広であり、南半部西壁から続く部分が北半部で失われたと考えられる。溝状遺構としたが、本調査以前の地形改変の痕跡である可能性もあろう。確認面での長さ約8.7m、底面での長さ約8.5m、幅は南半部での最大幅が約2.05m、

北半部は約0.43m、深さは東壁寄りで約0.16mである。主軸 N-25° -Eである。底面 多少の凹凸は確認される。地形に沿って北から南へ傾斜する。底面のレベルは、北端部 52.99m、SP-A 付近 52.78m、SP-B 付近 52.67m、SP-C 付近 52.51m、南端 52.39m である。覆土 2層を確認した。遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。



第62図 第91号溝状遺構実測図

第4章 遺構外の出土遺物

第1節 調査の概要

遺構確認時およびグリッド調査、トレンチ調査、調査区内で出土した遺物を記載する。多くは図示し得ない小片である。図示した遺物については掲載番号を付して記載する。

グリッド調査はA区において実施した。

A区については、表土除去後の遺構確認面に縄文土器・石器、土師器、須恵器、陶磁器などが露出して確認される状況にある。第3章基本土層のとおり、調査区（A～D区）及び遺跡周辺の地形は大きく改変されており、遺物を包含する遺構や集落地は既に失われた箇所がある可能性が考えられる。改変以前は、小支谷が入り組み、比較的起伏に富んだ地形であったと推定され、集落域は谷に面した台地上にも立地したとの想定もできよう。

グリッドから出土する遺物の主体は縄文時代の土器・石器であるが、古墳時代～古代の竪穴建物跡が確認されたM-11、N-9・10・11グリッドを中心に土師器、須恵器が出土する。グリッド調査が遺跡全般に亘るものではなく、且つ、遺物包含層底面までの調査を行ったグリッドがM-11-cのみであることを考え合わせるならば、縄文時代の包含層であるのか、削平によって失われた台地上などからの転落、流入であるのか、明らかにし得ない。

当該調査においては、改変により失われた集落域の復元を期して、グリッドを設定し、遺構・遺物の確認作業を行った。調査は、A区内に打設した10m間隔の杭を基準に4分割し、第63図のとおり4m×4mのグリッドを設定した。グリッド番号のアルファベットは南北、数字は東西を表す。数字の大きいグリッドほど谷部に近い。確認された遺物については、出土位置が明らかなものはグリッドごとに報告を行う。また、グリッド内で番号を付して取り上げた遺物はNo.を明記する。記載はアルファベット順に従って行う。なお、調査期間等の制約から、調査区全面に亘るグリッド設定、および、遺物包含層底面までの確認はなし得ていない。また、各グリッドの堆積土除去は一律ではなく、各グリッドの土層除去深さは区別である。

B・C・D区については、遺構確認時、トレンチ調査時に確認した遺物について記載する。改変による土壌の移動、耕作等による人為的な流入の可能性が考えられる。

第2節 縄文時代の出土遺物（第67・68図 第16表）

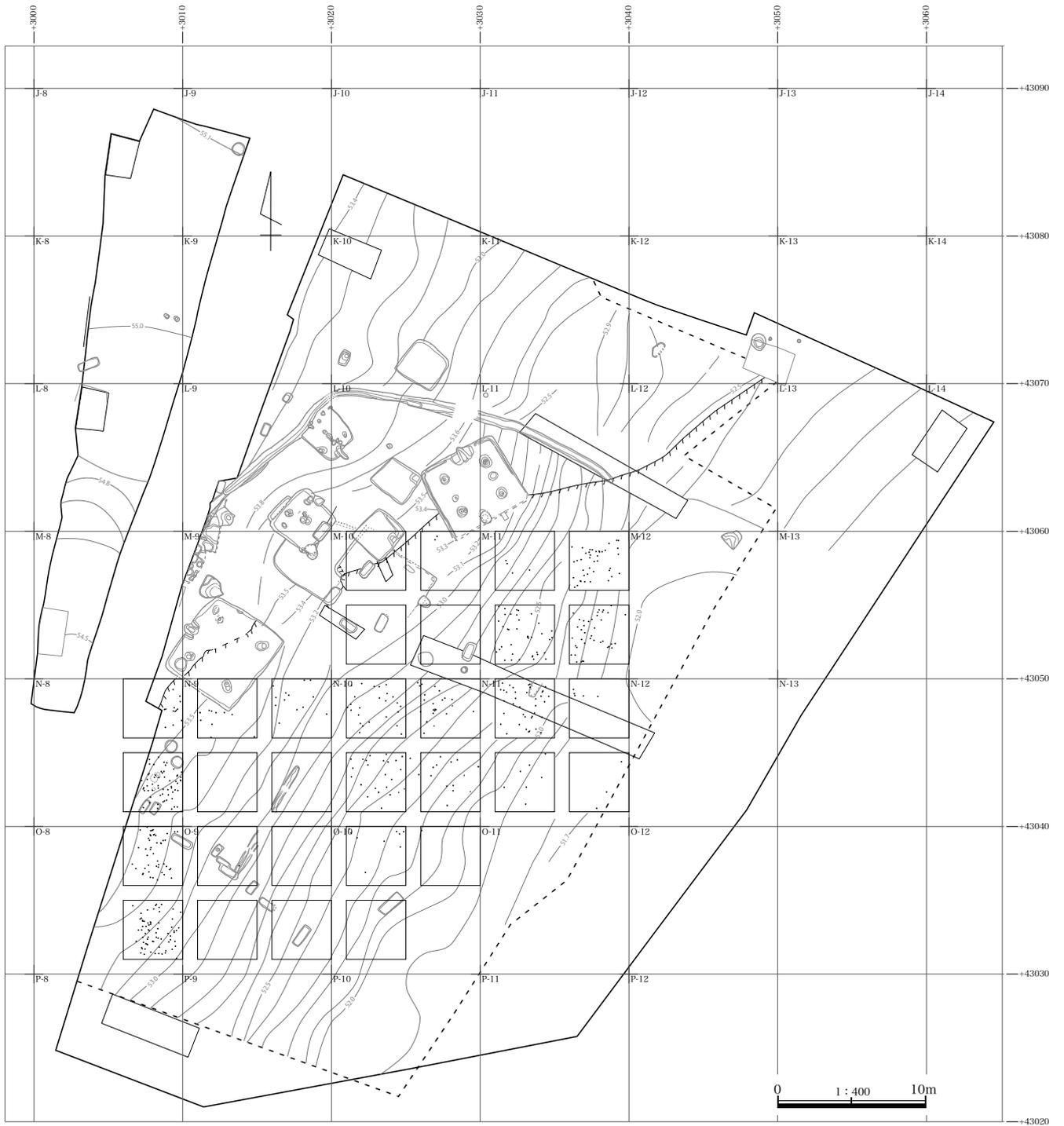
(1) 調査の概要

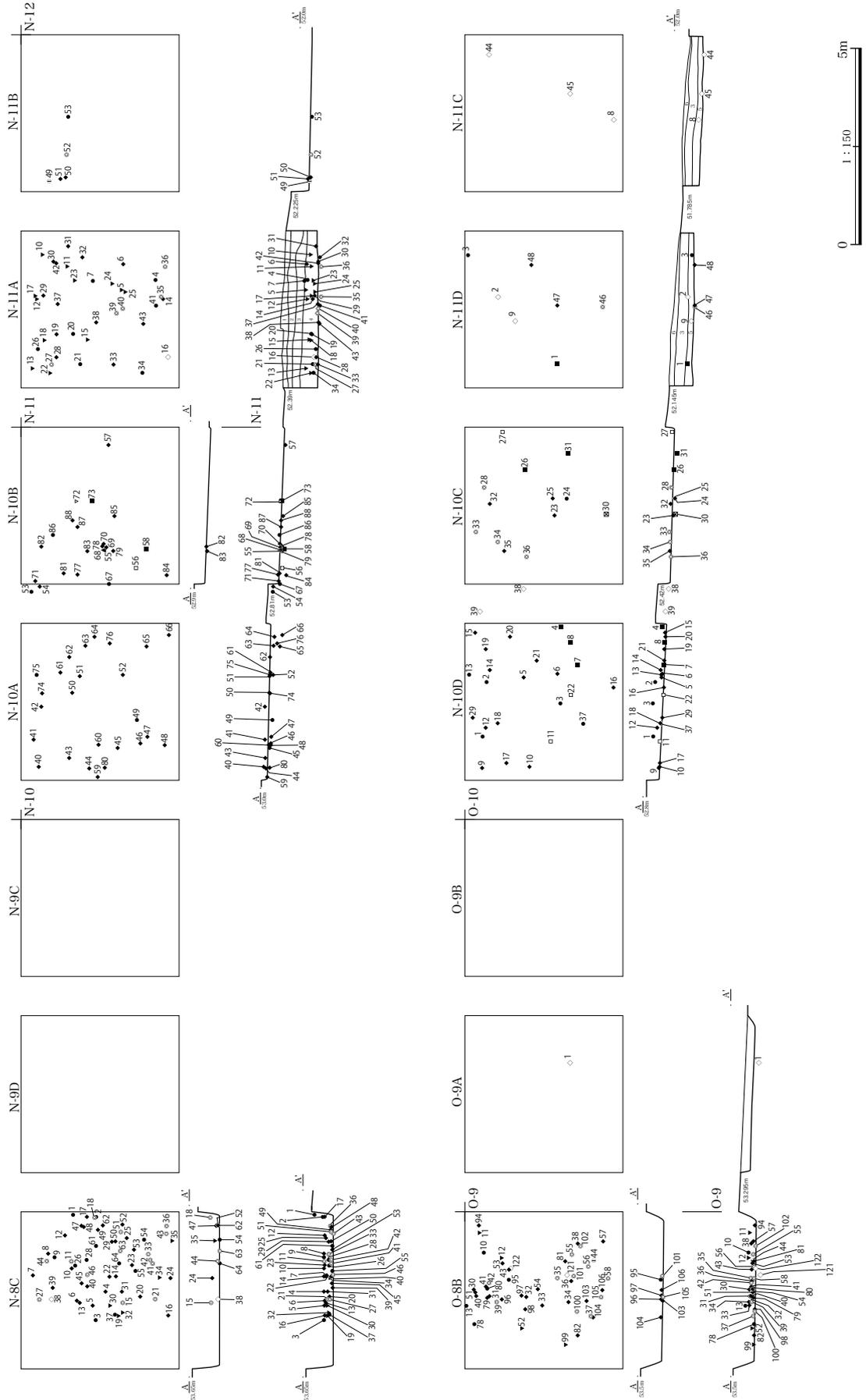
縄文時代の遺物は主にA区の遺構確認面およびグリッド調査、古墳時代以降の遺構覆土から出土する。縄文土器は早期を主体に小片で散在した状況で出土する。石器は縄文土器に並行する時期とみられ、土器同様に散在した状況で出土する。土器型式の細別については中村信博氏にご教示をいただいた。早期の遺跡については、概して、台地上に遺物が確認される傾向にあるとの指摘があり、本遺跡についても、改変により失われた台地上に集落域があったとの想定もできよう。

(2) 縄文土器

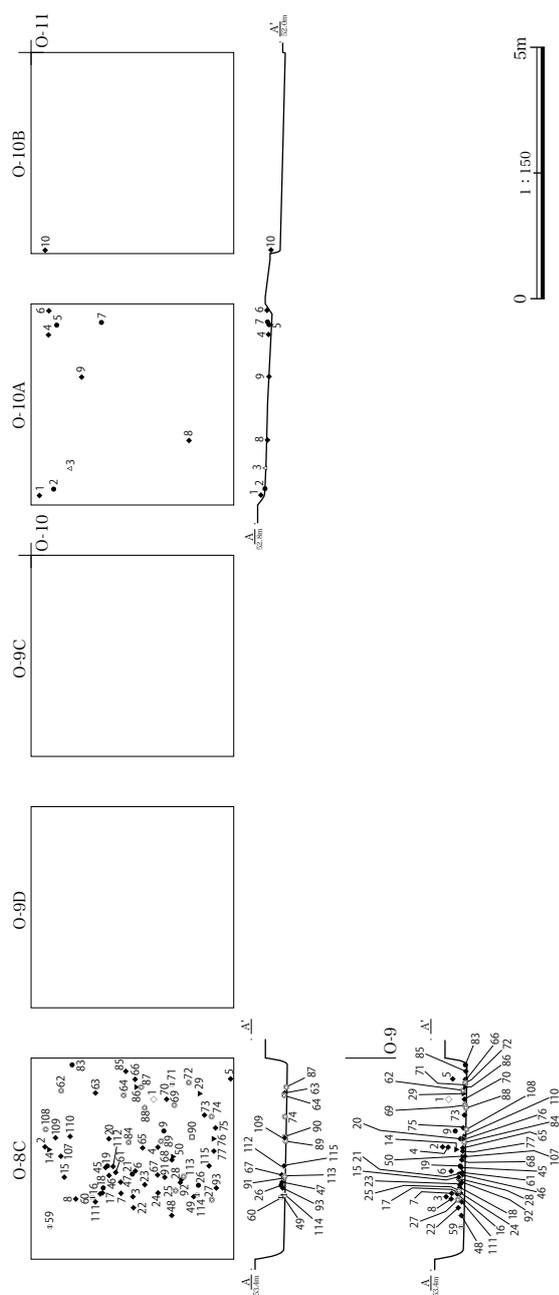
第1群 井草式（第67図-1 写真図版二二）

1は肥厚した口縁片である。口縁部は2帯の単節縄文をヨコ方向に施す。頸部の施文はない。体部は縄文を施す。胎土に透明ガラス質粒子の混入が目立つ。52.91g。井草I式であろう。





第 65 図 グリッド遺物出土層位図 (2)



第66図 グリッド遺物出土層位図(3)

11・12・13は貝殻腹縁文を充填した平行沈線で幾何学的な文様を描く。頸部に屈曲のある器形とみられる。11・13の内面はヨコ方向の丁寧なミガキが施される。11は44.49g、12・13は接合関係はないが同一個体とみられる小片を併せて、24.75g・42.83gである。8は沈線で幾何学的な文様を施す。13.37g。7は細沈線で鋸歯文を描く。平行する沈線間には刺突が斜めに施される。10.79g。13は剣先状の刺突を施す。裏面は微かに貝殻条痕がみえる。15.52g。14は剣先状の連続刺突を施す。器壁は薄く焼成は良好である。表面の貝殻条痕は消された可能性があろう。6.11g。10は細沈線で文様を施し、文様内の擦痕を擦り消す。6.01g。11・12・13・8は古段階、7・14・10は新段階とみられる。

この他、古段階とみられる破片は、内傾する口縁部で口縁上端部に沈線を施す小片1.74g、白色の器面に

第2群 天矢場式(第67図-2 写真図版二二)

2は外面にヨコ方向の擦痕が観察される。胎土には白色小礫が混入する。9.71g。小片のため明確ではないが、天矢場式の可能性があろう。

第3群 撚糸文系の無文土器(第67図-3 写真図版二二)

3は無文の口縁部で、緻密な胎土と良好な焼成が観察される。4.79g。後期の可能性も否めないが、乾燥した器面と判断し、花輪台Ⅱ式の可能性を考えておきたい。

第4群 三戸式(第67図-4 写真図版二二)

4は平行な沈線を施す。7.57g。小片のため不明確ではないが、胎土の状況などから三戸式の可能性を指摘したい。

この他、帯状格子目文を施す口縁部片5.02g、帯状沈線文を施す体部片5.15g、帯状沈線文間に刺突が整列する体部片3.05gが出土する。

第5群 田戸下層式(第67図-5・6 写真図版二二)

5は平行沈線と沈線で描かれた三角形の文様を配する。三角形の文様の内部には貝殻腹縁文を充填すると推定した。17.39g。田戸下層Ⅰ層の破片であろう。6は体部の第一次区画文の破片とみられる。沈線間に刺突文を施す。刺突の断面は「V」字状である。74.58g。田戸下層Ⅱ層の破片であろう。

この他、図示していないが、平行沈線を施す体部2片(3.10g・7.93g)が出土する。小片のため判然としないが田戸下層Ⅰ層とみられる。

第6群 田戸上層式(第67図-7~14 写真図版二二)

11・12・13は貝殻腹縁文を充填した平行沈線で幾

沈線を施す体部片 1.32g、帯状の沈線で文様を描き内部に貝殻腹縁文を施す体部片 6片 27.93g、沈線のみが残る破片 3片 20.82g、貝殻腹縁文のみが残る破片 3片 20.82g が出土する。新段階とみられる破片は、表面は条痕に沈線を施し裏面擦痕の体部片 4.38g、平行な細沈線を施す体部片 2片 8.38g、鋸歯文を描く体部片 5.3g、短沈線をヨコ方向に施す体部片 4.36g、斜方向の刺突を施す体部片 0.92g が出土する。

第7群 出流原式 (第67図-15～26 写真図版二二・二三)

18・19・20は口縁上端部に絡条体、口縁部下に明確な隆帯を施し、キザミを施文する。19・20の内面は貝殻条痕を施す。外面の条痕は極めて浅い。18は絡条体であろう。20は37.38g。19は胎土に透明ガラス質粒子の混入が目立つ。35.11g。18は9.14gである。16は口縁上端部に小四角状の刺突を施す。口縁部の文様、内面は不明瞭である。8.47g。15は絡条体圧痕を鋸歯状に配する。内面は貝殻条痕である。9.61g。型式が異なる可能性が残る。17は口縁上端部に絡条体圧痕、口縁部は刺突と沈線で文様を描く。11.64g。21は隆帯と沈線を配する。内面は櫛歯状条痕であろう。22は刺突と沈線で文様を描く。内面は磨滅する。17.23g。23・25は絡条体圧痕で文様を描く。25は7.96g、23は7.61g。24の内面は櫛歯状条痕、26の文様は絡条体圧痕とみられる。型式が異なる可能性が残る。24は19.91g、26は5.71gである。

第8群 細別型式不明の沈線文系 (第67図-27 写真図版二三)

27は細沈線を施す。同一個体とみられる2片を併せ30.98gである。

この他、小四角状の刺突を施す体部片 4.42g、へら状工具の先端で施文する体部片 3.44g、爪形の刺突を施す体部片 2片 11.43g、弛れた刺突を施す体部片 2片 6.90g、沈線で文様を施す体部片 8片 45.42g、隆帯の残る体部片 5.74g、有節沈線状の沈線を施す体部片 3.77g が出土する。他形式を含む可能性が残る。

また、胎土に繊維を含まず、沈線で文様を描く体部片 6片 30.69g が出土する。このうち1片 (7.35g) は胎土に金雲母を含み、1片 (2.68g) は内面に擦痕状の痕跡が観察される。

第9群 子母口式 (第67図-28 写真図版二三)

28は内外面に条痕を施すが工具は判然としない。口縁上端部には絡条体を施す。7.16gである。

第10群 野島式 (第67図-30～36 写真図版二三)

31は微隆起線の区画内に斜方向の微隆起線を配する。微隆起線上には絡条体圧痕を施す。20.27g。30は口縁上端部に絡条体圧痕を施し、微隆起線と沈線で文様を描く。16.35g。33は沈線で文様を描く。口縁部は波状となる可能性がある。外面は貝殻条痕を施す。9.28g。35は微隆起線で文様を描く。内・外面の貝殻条痕は浅い。14.07g。34は微隆起線で文様を描く。内外面は幅広の貝殻条痕で調整される。25.69g。36は沈線で文様を描く。外面は条痕が微かに観察される。器壁は薄い。4.95g。32は野島式の可能性を考え図示する。38.05g。いずれも内外面を条痕で調整する。量の多少はあるが、何れも胎土にガラス質粒子を含む。

この他、微隆起線で文様を描く口縁部 1片・体部 2片 12.28g、沈線で文様を描く口縁部 1片・体部 3片 17.68g、内外面を条痕で調整する口縁部 4片 26.93g、野島式とみられる微細片 2片 3.43g が出土する。

第11群 鶺ガ島台式 (第67図-29 写真図版二三)

29は突起片で外面は条痕で調整される。茅山下層式の可能性もあろう。8.01gである。胎土に白色粒子を含む。

第12群 茅山下層式 (第67図-37～52 写真図版二三・二四)

50の波頂部から垂下する隆帯はやや「ノ」字状で、両側に刺突を伴う。刺突は工具先端は浅い三つ山状である。70.39g。37は口縁上端部にキザミを施す。内面は条痕文、外面は擦痕状の調整が施される。28.13g。41・42は内削の口縁部片で口縁上端部にキザミを施す。42は5.50g、41は円形の刺突を施す。7.19g。40

第4章 遺構外の出土遺物

は口縁上端部・外面に貝殻腹縁文を配する。4.55g。38は半載竹管で刺突を施す。11.43g。39は口縁部にキザミを施す。13.18g。49は隆帯に沿って刺突を施す。76.81g。44は複数列の刺突を施す。27.4g。43は隆帯を配し沈線区画内に先端の鋭いへら状工具で刺突を充填する。16.98g。45は押し引き状の刺突で文様を描く。隆帯上にはキザミを施す。27.90g。47は隆帯を配する。34.27g。48は櫛歯状の工具で円形状のモチーフを描く。47.04g。52はコブ状の貼付文からキザミの沿う隆帯を配する。隆帯はやや弧状に見える。50.79g。51は平底の底部である。68.59g。器形や文様構成に判別できる破片はない。量の多少はあるが何れも胎土にガラス質粒子を含む。

この他、隆帯を配する体部片1片7.56g、隆帯に刺突を配する体部片3片55.68g、隆帯にキザミを配する体部片1片21.25g、隆帯に弛れたキザミを配する体部片1片9.25gが出土する。

第13群 茅山上層式(第67図-53～58 写真図版二四)

53は波頂部の周囲及び内外面にキザミを施す。垂下する隆帯はやや弧状である。13.23g。54・56は口縁部に貝殻腹縁文を施す。56は10.08g、55は胎土に少量のガラス質粒子を含む。23.04g。54は内外面に条痕文のみが見える。口縁上端部に粗くキザミを配する。胎土に少量のガラス質粒子を含む。33.99g。58は貝殻腹縁を施す。18.95g。57は底部付近の破片で貝殻腹縁文を施す。13.51g。

この他、口縁上端部にキザミを施す体部片4.95g、弛れた沈線を配する口縁部片9.79g、内外面に条痕文のみが見える口縁部片2片11.06g・体部片6.34g、貝殻腹縁文を配する体部片3片18.92gが出土する。貝殻腹縁文を配する体部片のうち2片は茅山上層式に並行する土器片の可能性はある。

第14群 下沼部式(第68図-59～61 写真図版二四)

59は口縁端部が蛇行する形状であろう。13.62g。60は0段の絡条体圧痕を口縁上端部に間隔をあけて配する。胎土は脆弱である。5.80g。61はやや上げ底気味の尖底部である。18.66g。

第15群 常世2式(第68図-63～72 写真図版二五)

67は口縁下に刺突を施す。63・64・65・66は口縁上端部、口縁部に絡条体圧痕を施す。64は口縁部の絡条体圧痕下に方向を違えた絡条体圧痕を配する。胎土に黒色透明ガラス質粒子を含む。25.16g。65・63の口縁部の絡条体圧痕は方向を違えて配される。65は11.58g、63は70.33g。66は胎土に黒色透明ガラス質粒子を含む。5.14g。68・69・70は体部に絡条体圧痕を施す。68は19.06g、69は8.65g、70は27.57g。71・72も体部に絡条体圧痕を施すが胎土や焼成は良好ではない。72は9.805g、71は胎土に白色透明ガラス質粒子を少量含む。13.26g。この他、口縁上端部と口縁部に絡条体圧痕を施す小片3.66g、体部に絡条体圧痕を施す14片133.63gが出土する。

第16群 遠下式と呼称されている土器(第68図-73～76 写真図版二五)

75は波頂部から隆帯で区画した幅の狭い口縁部文様帯を作出し、内部に竹管状の工具で刺突を施す。12.72g。74は口縁部下の隆帯に刺突を伴う。隆帯には絡条体圧痕を施すが欠損により不明瞭である。21.43g。73は外面に縄文RLを施文する。27.33g。76は外面に櫛歯状工具による沈線、内面の条痕は磨滅するが櫛歯状工具の可能性があろう。12.74g。何れも胎土に白色小礫や透明ガラス質粒子を含むが73・74には目立つ。

第17群 条痕のみられる土器片(第68図-77～81・83・87・88・118・119 写真図版二五～二六)

条痕を施す破片は2,142片ある。主体は貝殻条痕である。多くは茅山式の範疇と判断される。

口縁部6片、体部2片を図示する。何れも胎土に少量のガラス質粒子を含む。80は口縁部下の隆帯にキザミを伴う。内面の条痕は浅い。76.4g。77は波状口縁であろう。口縁上端部に貝殻腹縁文を施す。内外面

の条痕は浅い。10.44g。78は口縁上端部に粗くキザミを施す。貝殻条痕は外面にのみ見える。内面は磨滅により判然としない。17.43g。83は口縁部に縦長の刺突を施す。同一破片とみられる1片を併せ5.73g。79は小突起あるいは波状口縁とみられる。15.51g。81は口縁上端部にキザミを施す。内面の条痕は浅い。外面は赤彩あるいは鉄分の付着がみられる。5.69g。87は内外面に条痕、外面に刺突を施す。24.01g。88は底部付近の破片で、凹線状の沈線が斜方向に施される。16.50g。この他、口縁上端部にキザミ、内外面に条痕を施す口縁部片4片20.28g、内外面に条痕を施す口縁部片11.18g、外面に条痕を施す口縁部片10.78g、無文の口縁部2.49g、剥落や大きな繊維脱落痕のある口縁部3片9.00g、刺突を施す口縁部1片・体部2片14.73g、凹線を施す口縁部1片、体部2片28.53g、沈線を施す体部片1.73g、貝殻腹縁を施す体部片4.55gが出土する。118・119は尖底部片である。何れも内外面に条痕を施す。119は20.19g。118は尖底付近まで条痕を施す。59.29gである。第9群以下、条痕は貝殻を主体に櫛歯状工具、擦痕状の痕跡が観察できる。

第18群 早期末葉から前期初頭（第68図-82・84・85・89・90・93・94 写真図版二六）

93は外面に条痕あるいは櫛歯状工具による沈線か判然としない。白色粒子や透明ガラス質粒子を少量含む。15.01g。この他、早期末葉とみられる破片は、内外面に条痕を施す口縁部5片、76.67g・体部片4片68.11g、内外面に条痕を施すが常世2式の可能性の残る体部片35.32g、内面に条痕を施し外面に絡条体あるいは縄文を施す体部片5.92g、外面に絡条体あるいは縄文を施す体部片6片30.03g、外面に条痕と沈線を施す口縁部10.35gが出土する。

82・84・85・90・94は外面に縄文、内面に条痕を施す。82・84の口縁部は小突起状である。82・84・90の内面の条痕は極めて浅い。胎土に透明なガラス質の細粒を含む。82は14.89g、84は11.31g、85は27.56g、90は28.88g、94は胎土に白色小礫を含む。55.00g。この他、内面に条痕、外面に縄文を施すとみられる体部片5片47.09g、縄文を施す体部片12片135.78g、内面は擦痕状で外面に縄文を施す体部片4.65gが出土する。何れも器面は脆弱である。

第19群 花積下層式

小片のため図示し得なかったが体部片2片が出土する。1片は0段多条縄文を施文する。胎土に繊維を含む。4.09g。1片はキザミを施す隆帯と0段多条縄文を施す。2.70g。

第20群 黒浜式（第68図-86・91・92 写真図版二六）

86は内削の口縁端部で直線的に開く器形である。外面に単節縄文を施す。内面はケズられる。20.30g。92は複節縄文の地文に浅い押し引き状の沈線を施す体部片である。13.70g。91は単節縄文を施す体部片で、結節縄文が見える。繊維痕が顕著である。42.16g。何れも胎土に繊維を含む。この他、単節縄文を施す口縁部1片・体部5片22.06g、外面に単節縄文を施し外面をケズる体部片6片16.63g、半載竹管状工具で施文する体部片1.62gが出土する。何れも胎土に繊維を含む。

第21群 浮島式（第68図-95～106 写真図版二六・二七）

95は半載竹管状工具による沈線で文様を描く口縁部片である。地文は貝殻腹縁とみられる。20.73g。浮島I式とみられる。この他、浮島I式とみられる撚糸文を地文とする体部片2片11.98gがある。104は変形爪型文下に時計回りの押し引き状に描かれる弧状の文様が僅かに残る。17.11g。浮島I b式の可能性を考えておきたい。105は貝殻腹縁を地文とする体部破片。下半の破片であろう。同一個体とみられる1片と併せ23.50g。浮島II式の可能性が高いとみられる。この他、105と同種の体部片3片30.86gがある。97は口縁上端部の条線帯下に変形爪形文を横位に施す。98は口縁上端部の条線帯下に三角形の文様を施す。

第4章 遺構外の出土遺物

49.04g。99は口縁部直下に三角文を施す。同一個体とみられる1片と併せ91.39g。101・102は変形爪形文を施す体部片である。101は37.61g、102は24.63g。100は変形爪形文による横位に施される矢羽状文であろう。半載竹管状工具によるとみられる。23.15g。97～100は浮島Ⅲ式であろう。96は口縁上端部のキザミ、口縁部の鋸歯状の文様の施文具は貝殻とみられる。7.73g。106は貝殻腹縁を「ハ」字状に施す。8.97g。103は半載竹管状工具による沈線下に貝殻腹縁がタテ方向に連続する。ロッキングの可能性も残るが判然としない。25.18g。この他、胎土や焼成の特徴から浮島式とみられる破片は半載竹管状工具による沈線を施す体部片5.91gがある。

第22群 諸磯式(第68図-107～110 写真図版二七)

110は地文に疎らな撚糸文1段Lを施し、半載竹管状工具で「米字文」的な文様を描く。半載竹管状工具の連結部上下には先端の細い棒状工具で縦長の刺突を施す。文様下には数条の半載竹管状工具による押し引きを施す。7.57g。撚糸文だが諸磯a式の可能性がある。この他、諸磯a式とみられる体部片2片がある。110と同種の体部片6.77g、縄文を地文とする小片21.42gである。109は波状の口縁部片である。断面は図右側の欠損部を図示した。欠損部には、イノシシなどの意匠があった可能性が考えられる。口縁部が屈曲する器形とみられる。ボタン状の貼り付けから浮線文が4条が口縁部に沿い、下部に対弧状に浮線文を配する。浮線文はキザミを伴う。判然としないが、地文は縄文であろう。27.91g。諸磯b式とみられる。107は「く」字に屈曲する口縁部片である。地文は撚糸文に見えるが判然としない。半載竹管状工具による沈線を粗く施す。15.77g。諸磯b式であろうか。この他、諸磯b式とみられる口縁部1片・体部3片13.65gがある。何れもキザミを伴う浮線文を施す。108は接合部で剥がれたとみられる体部片であろう。単節縄文RLを施す。3.53g。諸磯式の範疇と考えられる。この他、諸磯式の範疇と考えられる体部片6.04gが出土する。磨滅のため判然としないが、地文に半載竹管状工具による数条の沈線を施す。

第23群 前期とみられる縄文土器片(第68図-111～113 写真図版二七)

時期不明であるが、前期の可能性のある土器片を図示する。

113は沈線と棒状工具による文様を施す体部片である。文様は低平な円形の貼り付けを起点に施される。先端は細いが、さほど鋭利ではない棒状工具によるものとみられる。胎土に含まれる繊維は少ない。13.85g。111は半載竹管状工具による沈線と隆帯を施す。撚糸文1段Lの地文を施す。胎土に繊維を含まない。内面の調整が第22群109と似るため、諸磯式の可能性もあろう。同一個体とみられる体部3片と併せ54.02g。112は単節縄文を地文とし結節文を施す。胎土に繊維を含まない。9.77g。

この他、前期とみられる破片は5片ある。

半載竹管状工具による沈線で米字文的な文様を施す体部片17.88gは黒浜式～諸磯式であろう。半載竹管状工具による沈線で円形が想起される弧状を描く体部片4.05gは浮島式あるいは諸磯式の可能性があろう。口縁部に縦位の条線帯を施す小片6.90g、無文部で菱形状の文様を施す体部片2.97g、爪形文を施す体部片4.38gは浮島式あるいは興津式であろう。

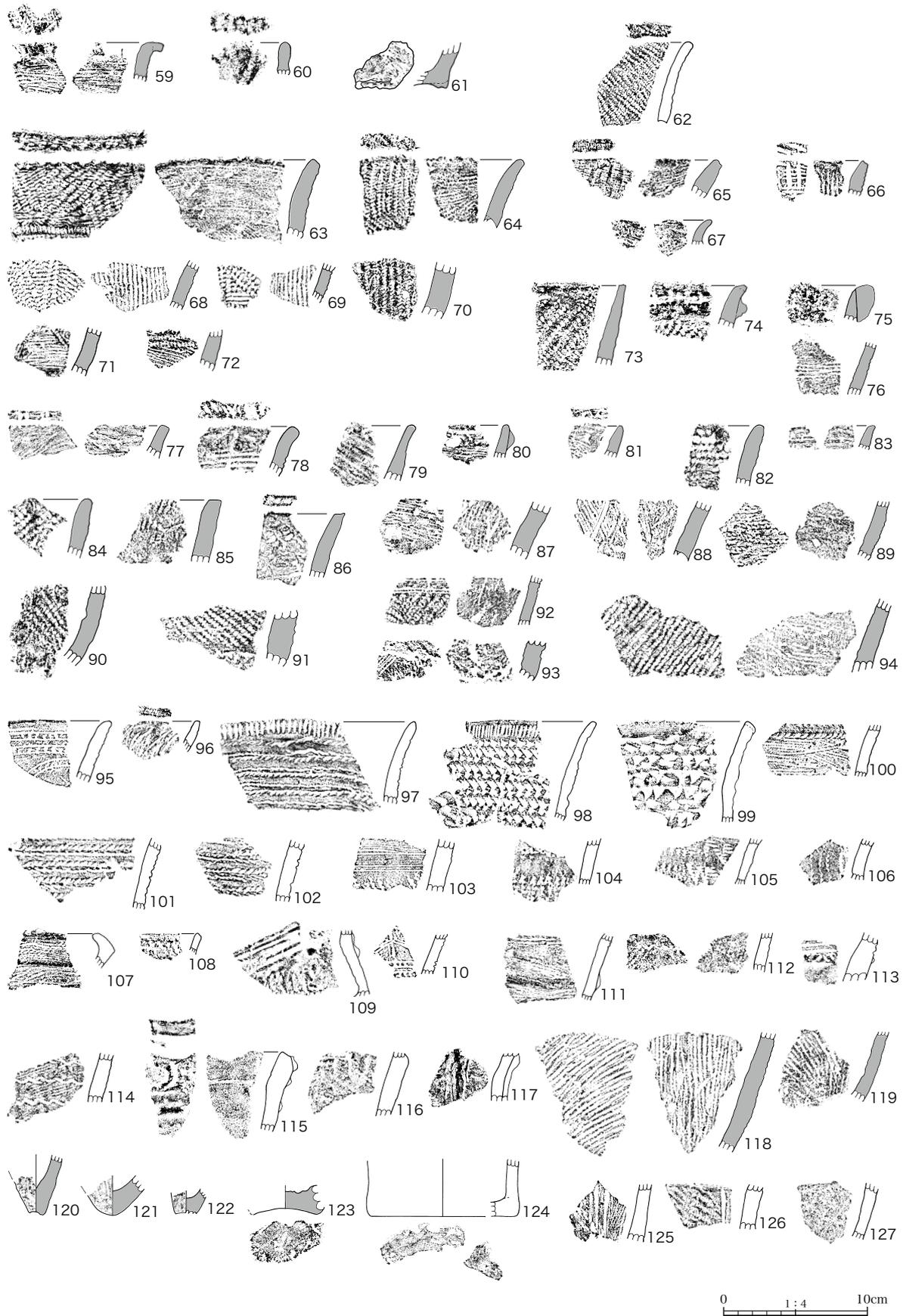
型式名は判断できないが、前期あるいは前期以降とみられる土器片は9片ある。無節縄文を施す体部2片は5.46gは前期以降であろう。地文は不明であるが結節文を施す体部2片14.38gは112と同種の可能性があろう。体部に撚糸文を施す体部片3片16.35gが出土する。このうち2片14.36gは113と似る。

第24群 前期末葉～中期初頭とみられる縄文土器片(第68図-62・114 写真図版二七)

62は外反する口縁部片で単節縄文RLを施文する。胎土にガラス質粒子を含む。41.44g。所謂、粟島台式であろう。



第67図 縄文土器実測図(1)



第68図 縄文土器実測図(2)

114 は縄文を地文とし、ヨコ方向に結節文を施す。胎土に白色砂粒、白色小礫、透明ガラス質粒子を含む。32.83g。この他、同様の胎土の4片31.05gが出土する。口縁部片、剥落するが隆帯を施す体部片、無文の体部片である。

第25群 阿玉台式（第68図-115～117 写真図版二七）

115 は断面三角形状の隆帯を施す。沈線は沿わない。30.49g。117 は断面三角形状の隆帯が垂下する口縁部片で、沈線脇をなぞった痕跡がみられる。17.48g。116 は襞状圧痕がみえる体部片である。25.45g。阿玉台I b式とみられる。この他、胎土に金雲母や白色小礫などを含む体部片2片10.47g、胎土に金雲母などは含まないが阿玉台式の可能性が残る体部片4片74.61gがある。

第26群 中期とみられる縄文土器片（第68図-125・126 写真図版二七）

126 は口縁部文様帯下の沈線が僅かに残る。体部には磨り消しを伴う数条一組の懸垂文が垂下する。加曽利EⅡ～Ⅲ式とみられる。21.58g。125 は数条の垂下する沈線が施される。底部付近の破片であろう。加曽利EⅡ～Ⅲ式の可能性が考えられる。13.67g。

第27群 後期とみられる縄文土器片（第68図-127 写真図版二七）

127 は平行する沈線が斜方向に延びる。半載竹管状工具とみられる。粗製土器の可能性を考えておきたい。18.45g。

第28群 底部片（第68図-120～124 写真図版二七）

型式の明らかでない底部片は54片ある。

120・121・122 は尖底である。121 は外面に貝殻条痕を施す。透明ガラス質粒子を少量含む。21.01g。120 は内面に貝殻条痕を施す。20.48g。122 は外面に条痕を施す。櫛歯状工具あるいは絡条体であろう。9.31g。123 は上げ底気味の平底である。外面の整形は丁寧であるが内面は大きな繊維脱落痕が残る。27.44g。120・121・122・123 は早期後半であろう。124 は平底で体部外面はタテ方向にヘラミガキされる。底部の円板上に体部が立ち上がる。胎土は諸磯式などに似る。器形は後期中葉に似るが底部成形などから前期の可能性があろう。57.86g。

(3) 石器（第69～81図 第17・18表 写真図版二八・二九）

石器は、石鏃（1～74）、石鏃未製品（75～89・不掲載3点）、石錐（90～101）、石槍（102）、尖頭器（103～105）、くさび形石器（106～112）、石匙（113・114）、搔削器類（115～150）、二次加工のある剥片（151～185）、二次加工のある剥片で一部に使用痕のあるもの（186～193）、使用痕のある剥片（194～223）、二次加工や使用痕が観察されない剥片（可能性のあるものを含め336片）、石核（224～231・不掲載1点）、礫器（232～236）、敲石（237）、三角錐状石器（238～240）、磨石・石皿類（241～269）が出土する。石器の観察については芹沢清八氏にご教示いただいた。

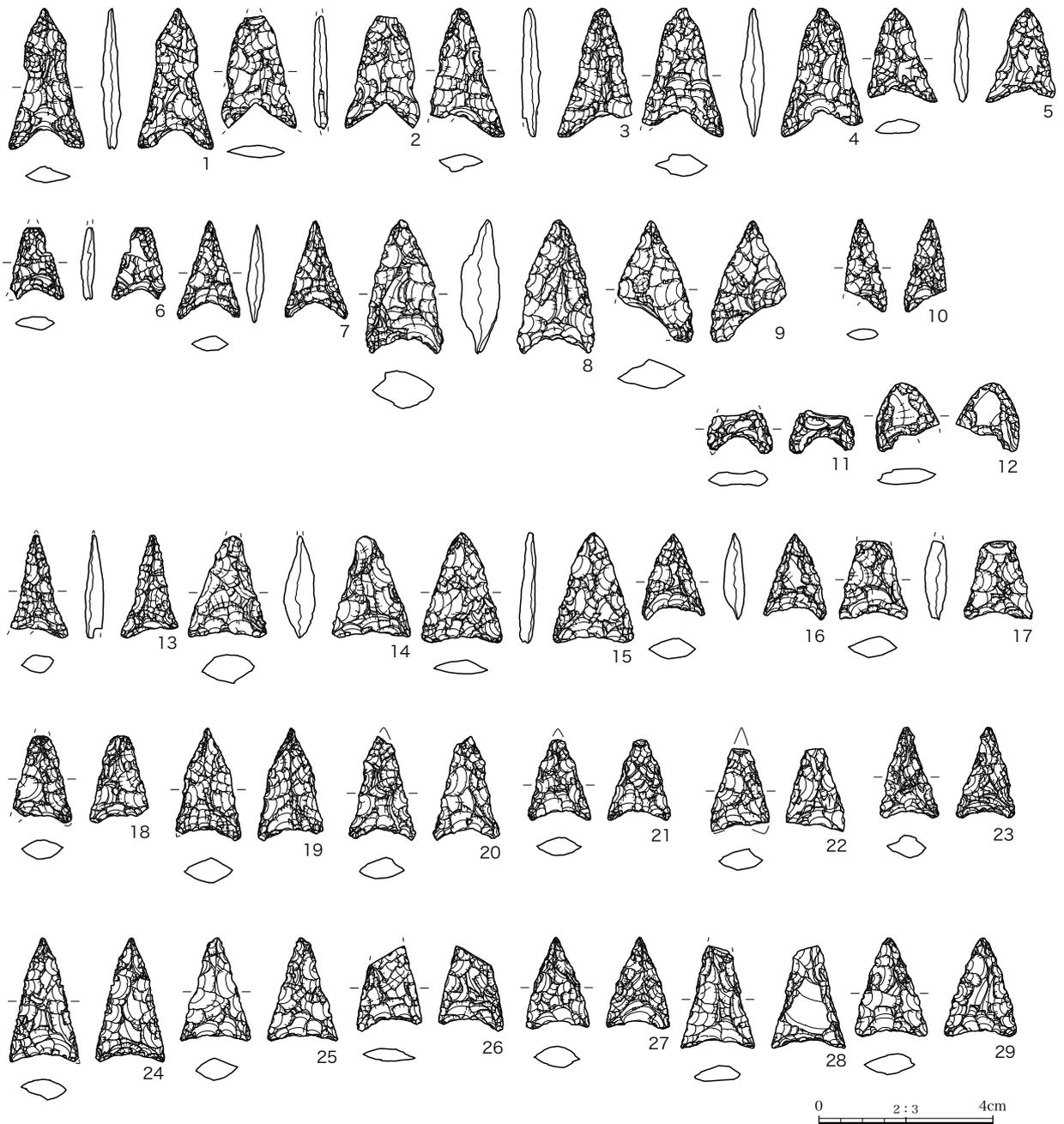
石鏃は、二等辺三角形状を呈し基部が凹基で深く側縁が直線的であるもの（1～11）、二等辺三角形状で基部が凹基で深く側縁が湾曲するもの（12）、二等辺三角形状で基部が凹基で浅く側縁が直線的であるもの（13～36）、正三角形状で基部が凹基のもの（37～54）、基部が平基のもの（56～67）、円基のもの（68～70）、凸基のもの（71）、基部形状が不明のもの（72～74）に細別できる。8・9の側縁は若干丸みを持つ。32の平面形は先端部に屈曲がみられる。正三角形状の石鏃のうち、37～49の側縁は直線的、50～55は側縁が湾曲的で丸みを持つ。37の平面形は撥形状である。石鏃未製品の多くは製作過程で破損し放棄された可能性が考えられる。石錐の90～93はつまみを形づくるものである。94・95は欠損しているがつまみがあっ

第4章 遺構外の出土遺物

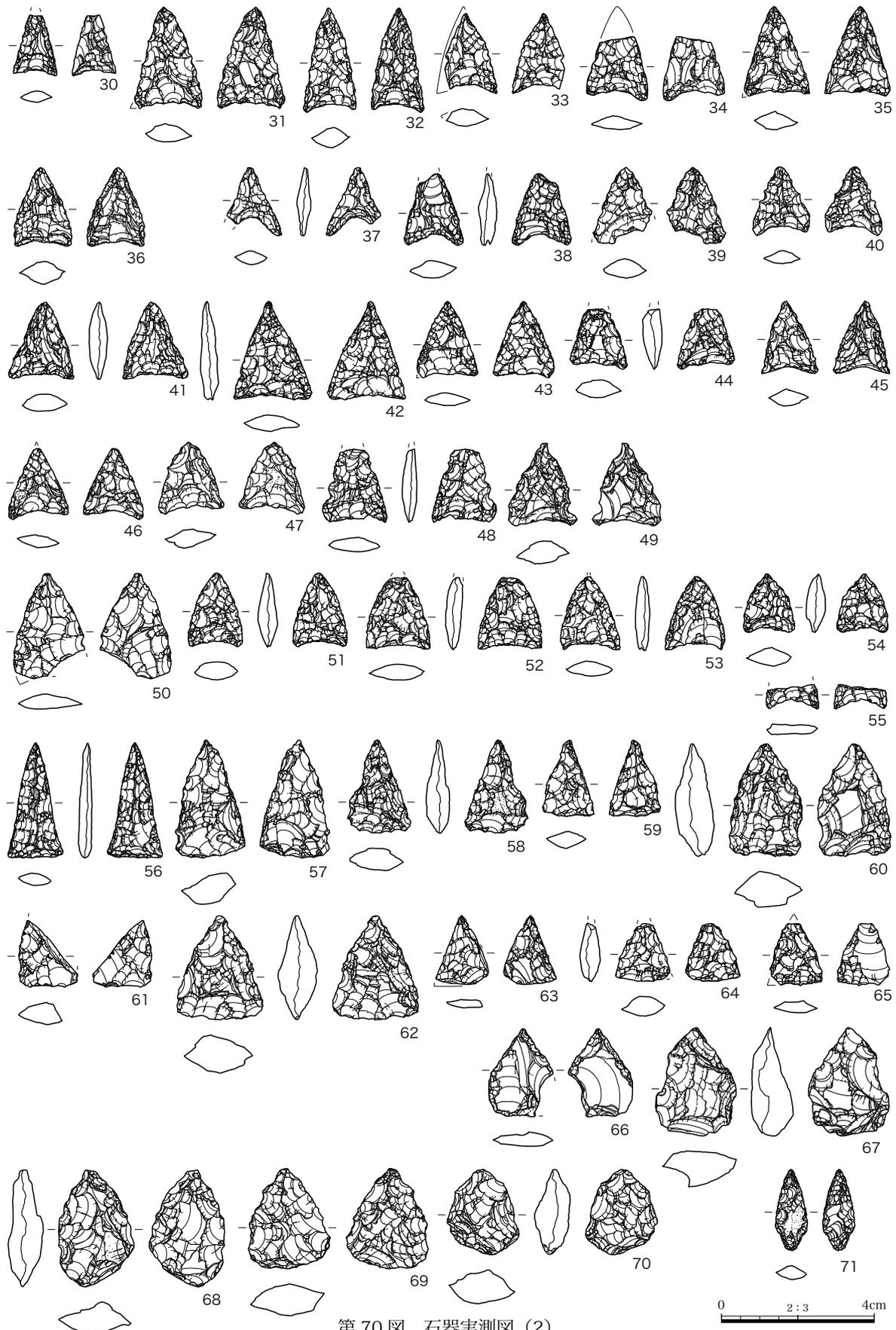
第16表 縄文土器 形式別出土個数一覧

	井草式	天奈壘式	花輪式	三戸式	甲土下層式	甲土上層式	出流渠式	流線式	子母口式	野島式	縄が島台式	茅山下層式	茅山上層式	下流部式	常盤式	遷下式	条痕文系	早期奈系 (前期奈系 初頭)	花種下層式	黒浜式	浮島式	諸磯式	(粟島式)	前期	阿玉台式	中期	後期	底部	計
K 10																	5												5
11												1		1	1		44					1						2	50
12																													
13																	2												2
L 8																	4												4
9																	30						1					1	32
10						1	1			1		1					41	1				1						47	
11																	2											2	
12																	31											31	
M 8			1		2	7	1		1	4		1		1	3	1	210				1		3	2			4	242	
9							1				2				3		39	2		1							1	49	
10	1				1	10	5	3		6	6	1	1		4	1	328	1			2	1	1				13	384	
11		1		1		1	3	2			1	11	10		4		392	5			9		2	2			9	453	
12																	6											6	
N 8				2	1					2		1	1		2	1	112	3		1	6		2	2	3		2	146	
9						1	1	2				1	1				87	3		3	1	1		1				102	
10						4	1	1									112				1	5		1	1		1	127	
11						9	6			5		1			6		359	5			16	3	3	3	2		11	429	
12																						2						2	
O 8				1				1		2		1		1	1	1	190	2		4	6		1				2	219	
9															1		40				1		1				2	46	
10																	7				1					1	2	11	
11																						1						1	
P 8										1		1		1			3		1									7	
A区													1			1	98	4		7	1	1			1	4	4	119	
計	1	1	1	4	4	33	31	9	1	21	1	26	14	5	25	5	2142	26	2	16	45	15	4	13	9	7	1	54	
																												合計	2516

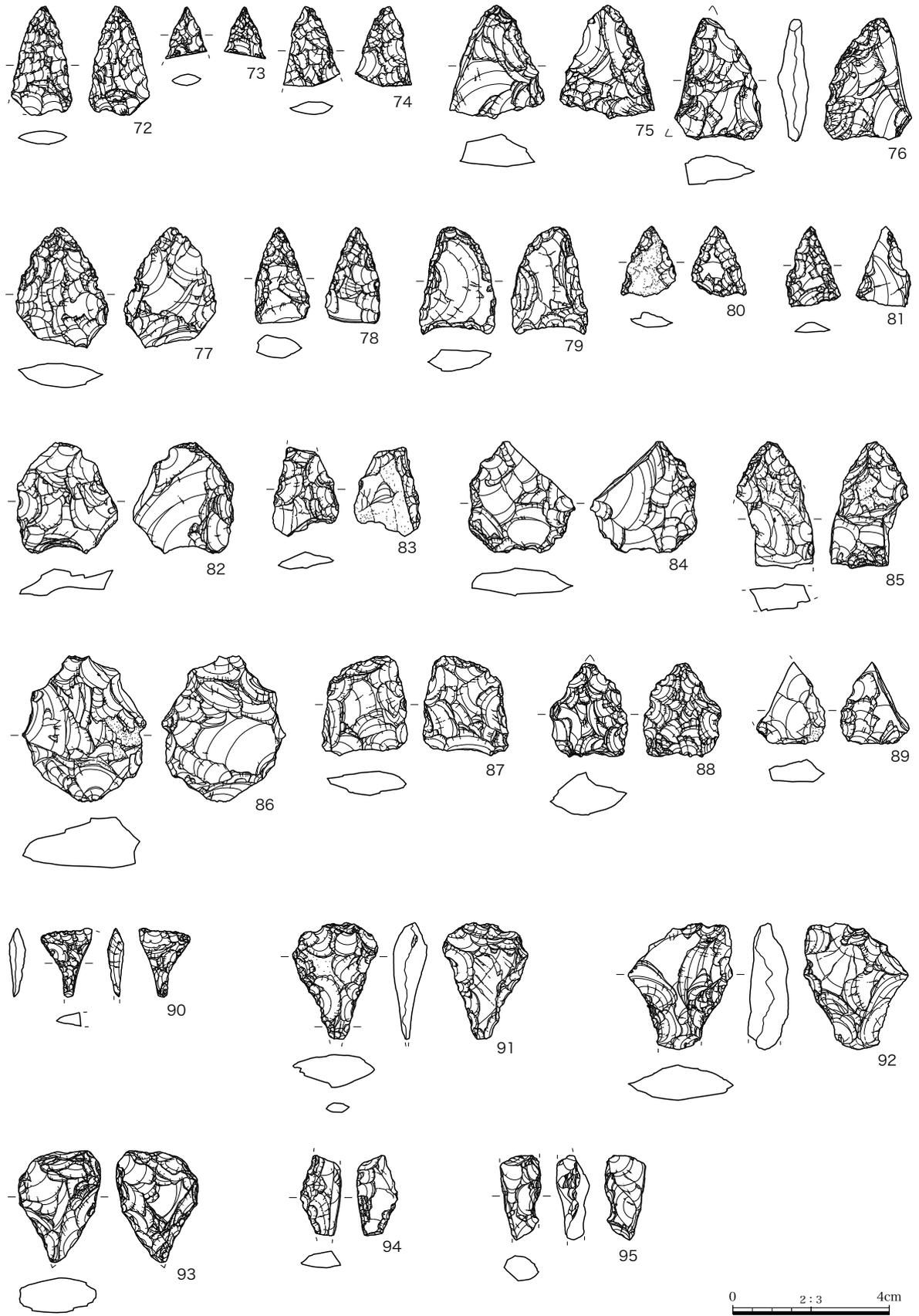
たと推定される。96～101は剥片の鋭利な部分を加工し錐部を作出する。石槍102は完成間近の未製品の可能性が残る。103～105は小型であることから尖頭器と判断した。製作中の破損品の可能性もあろう。くさび形石器(106～112)は両端部が細かく潰れており、槿状の剥離が観察される。使用痕のある剥片のうち208は剥片の鋭利な縁辺を使用したとみられる。石核のうち224～227は層状チャートを使用する。平坦な礫面を上面(打面)とする。一部に使用痕が観察される。231は石器のようにも見えるが円礫の周縁から剥片を取る石材と判断される。礫器のうち234・236は片刃石器である。剥片石器の石材はチャートを主体とするが、黒曜石や珪質頁岩もみられる。個別の特徴や計測値は観察表に示した。



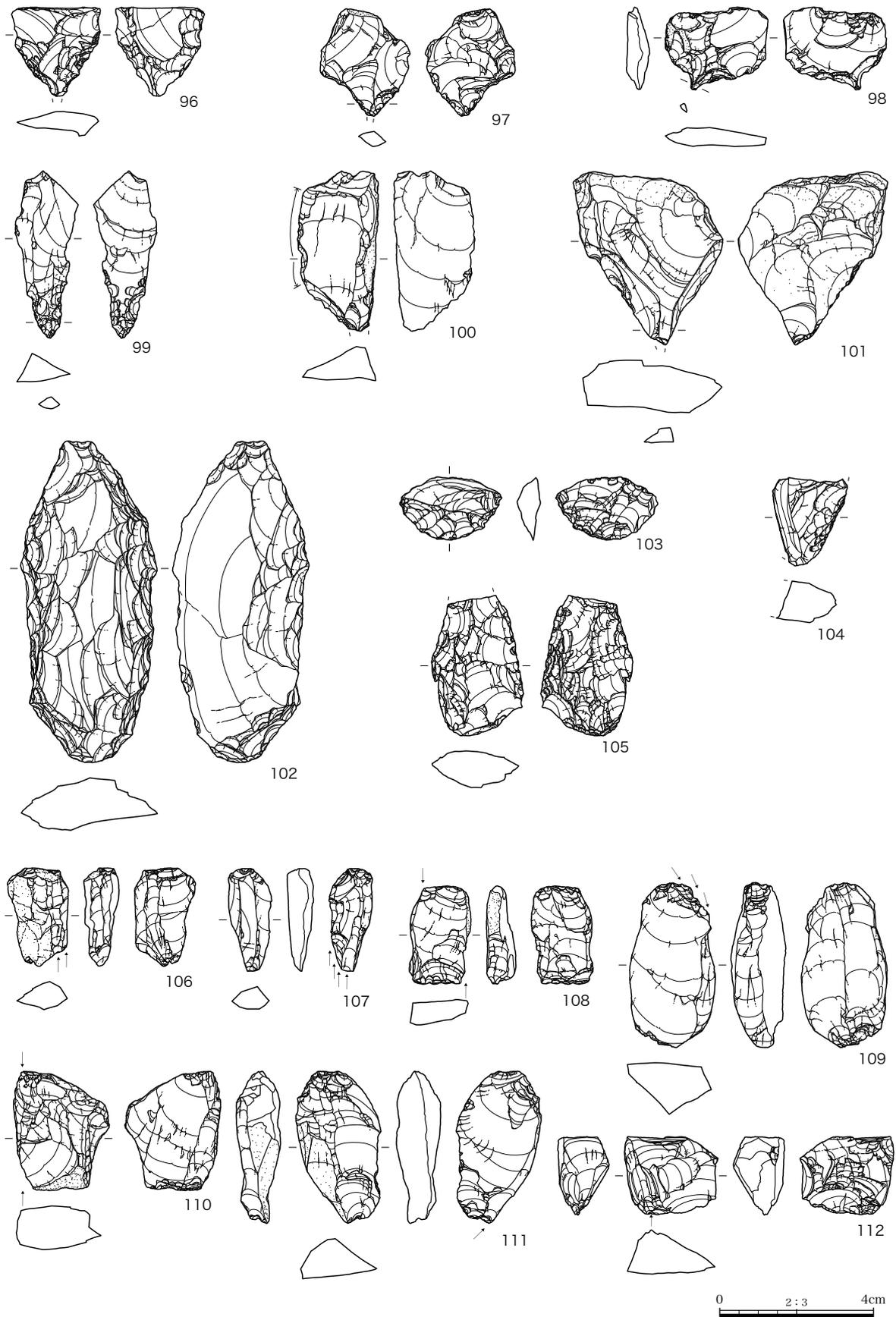
第69図 石器実測図(1)



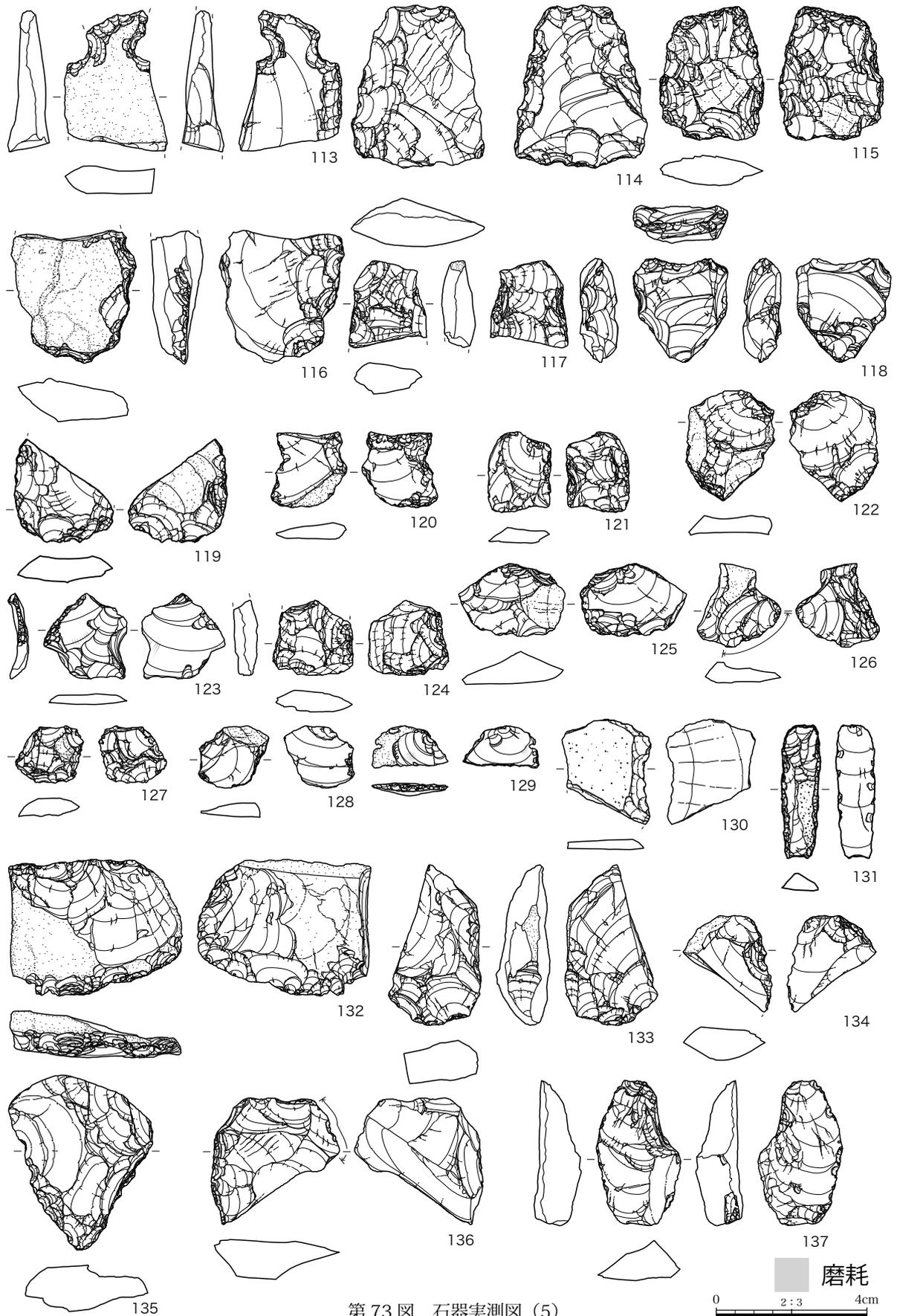
第70図 石器実測図(2)



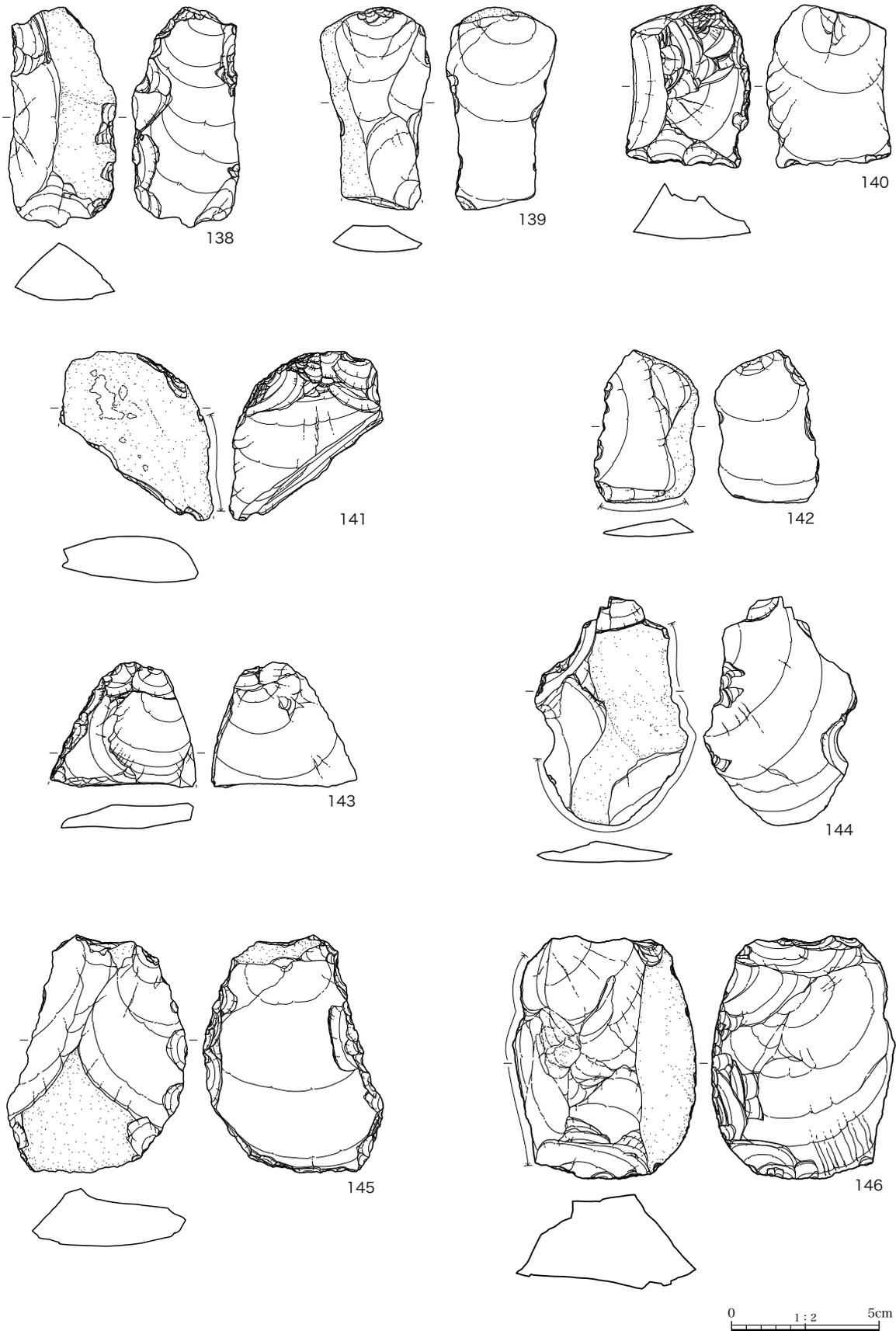
第71図 石器実測図(3)



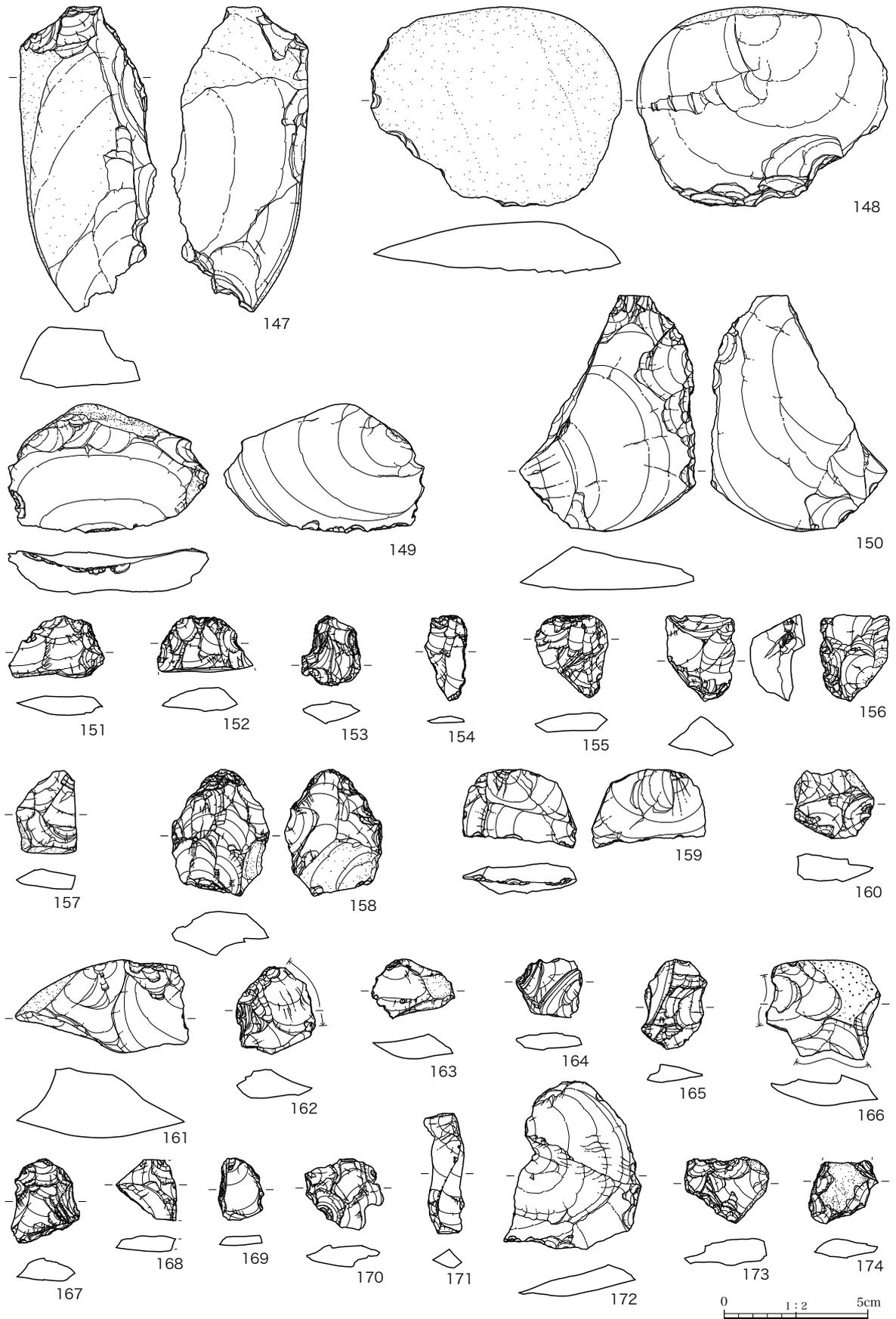
第72図 石器実測図(4)



第73図 石器実測図(5)



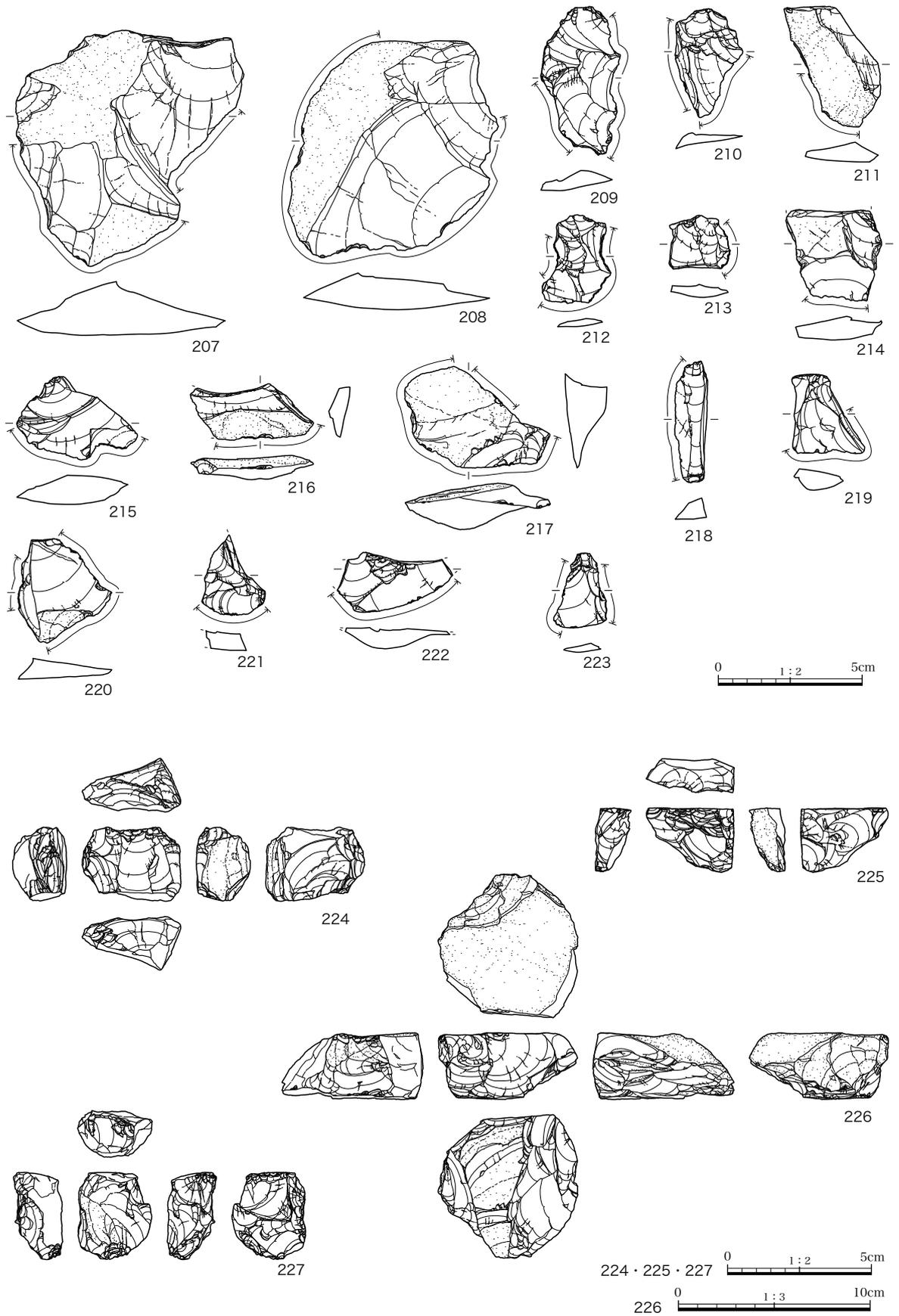
第74図 石器実測図(6)



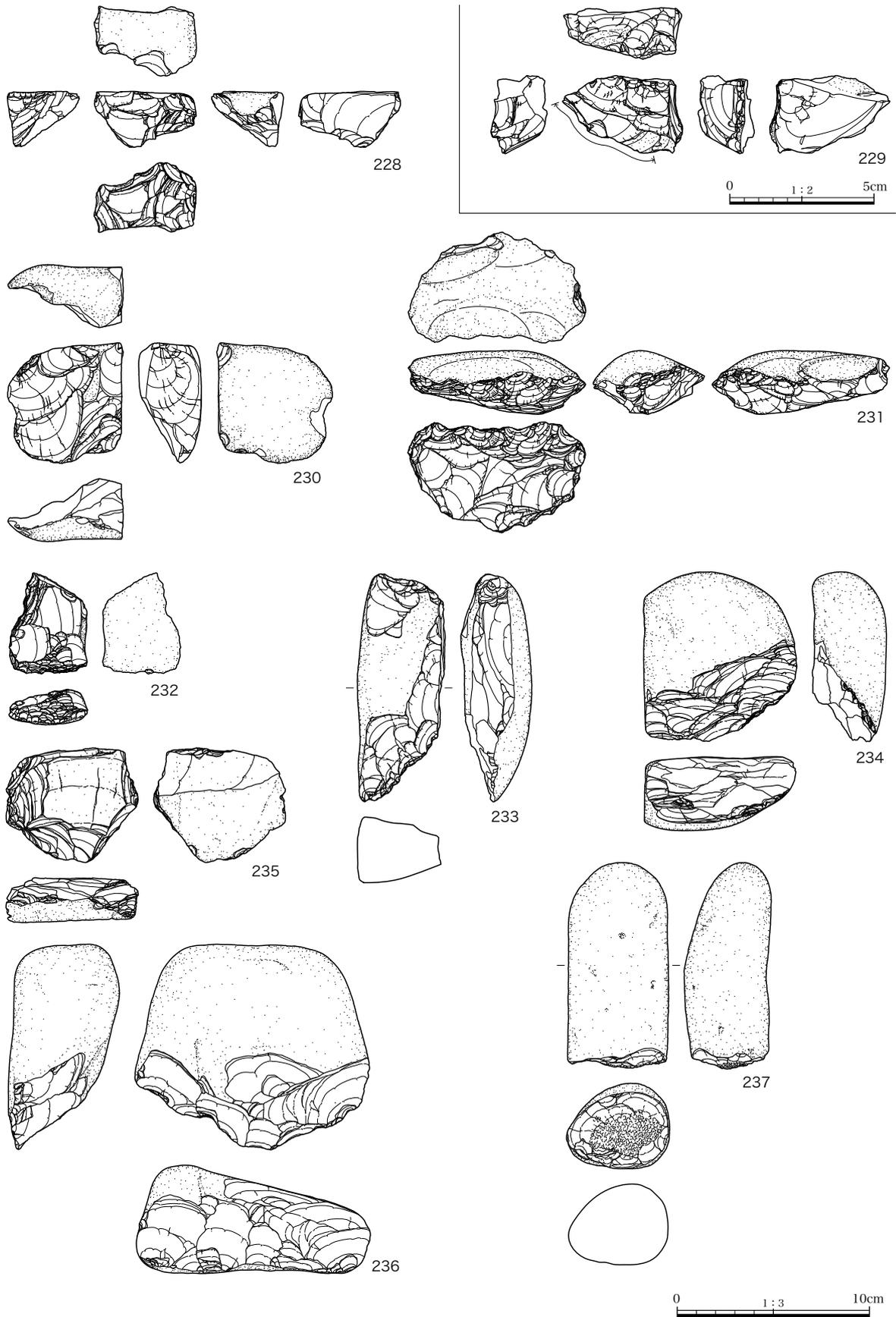
第75図 石器実測図(7)



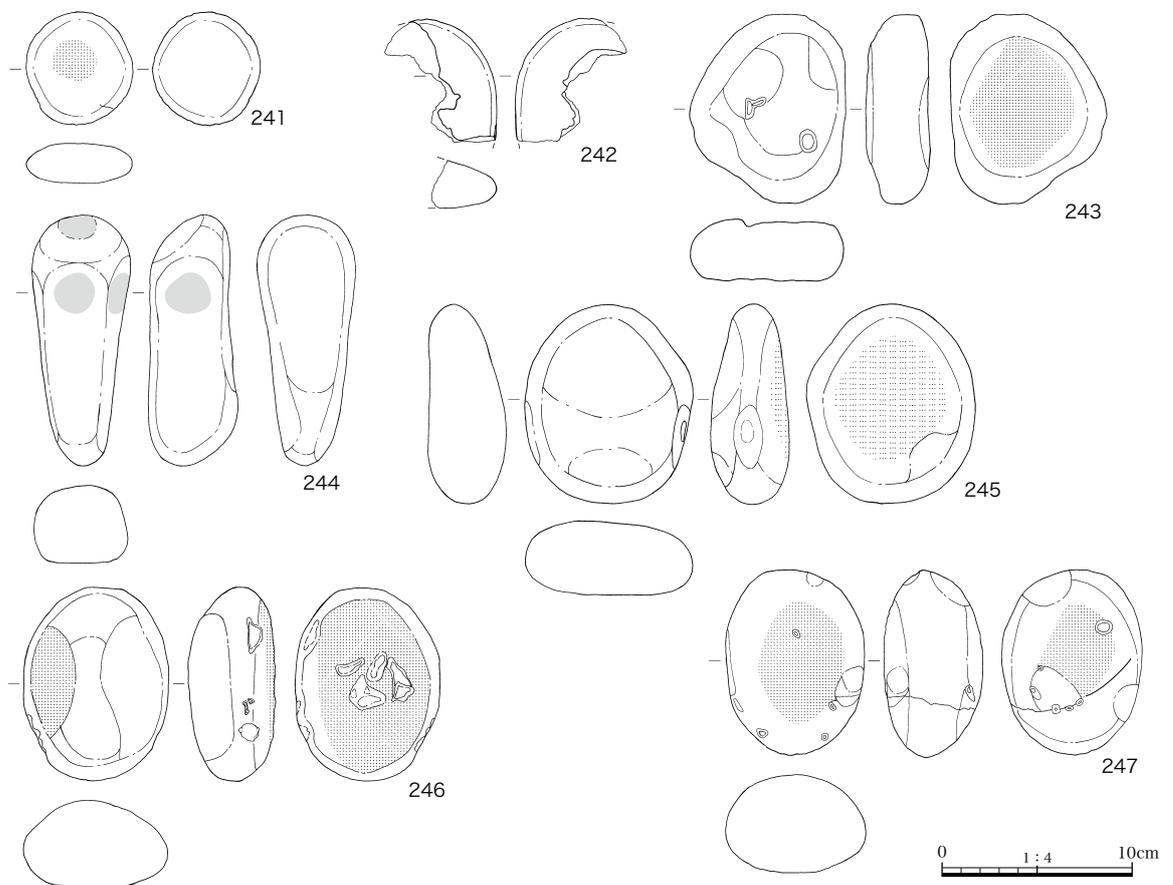
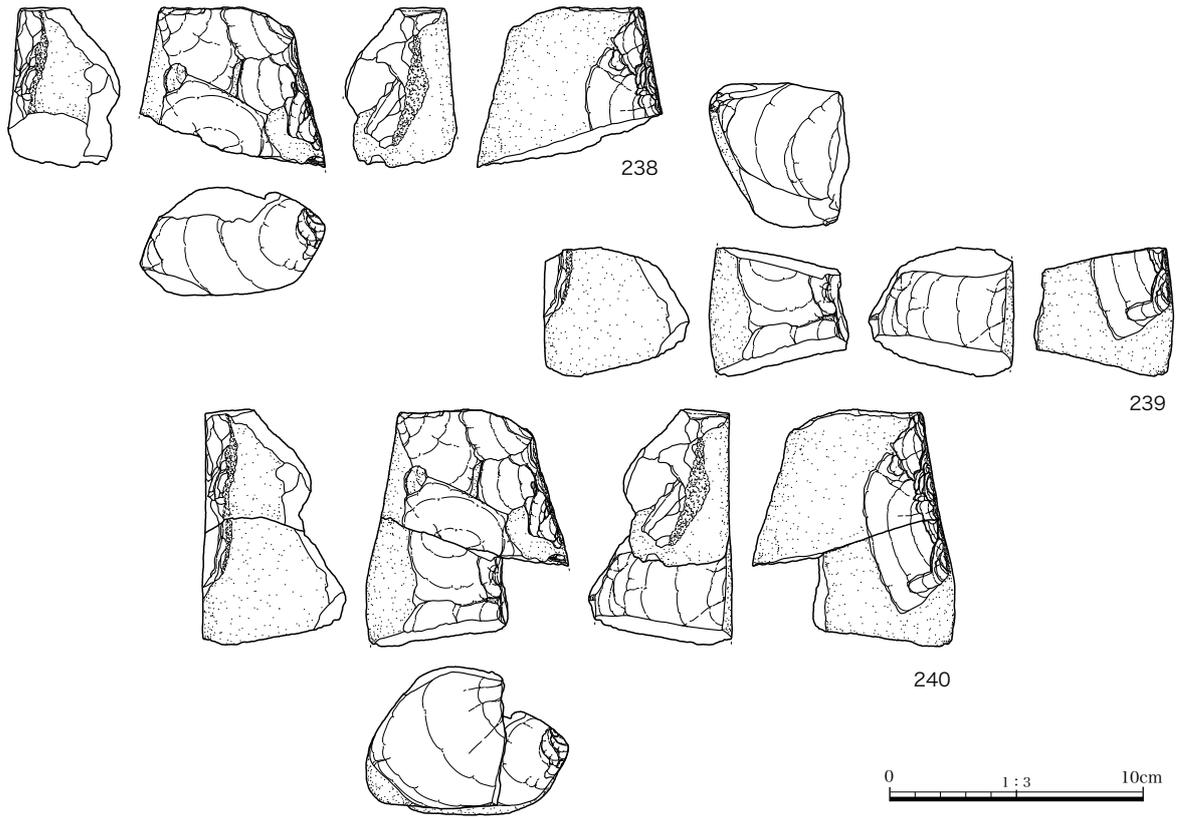
第76図 石器実測図(8)



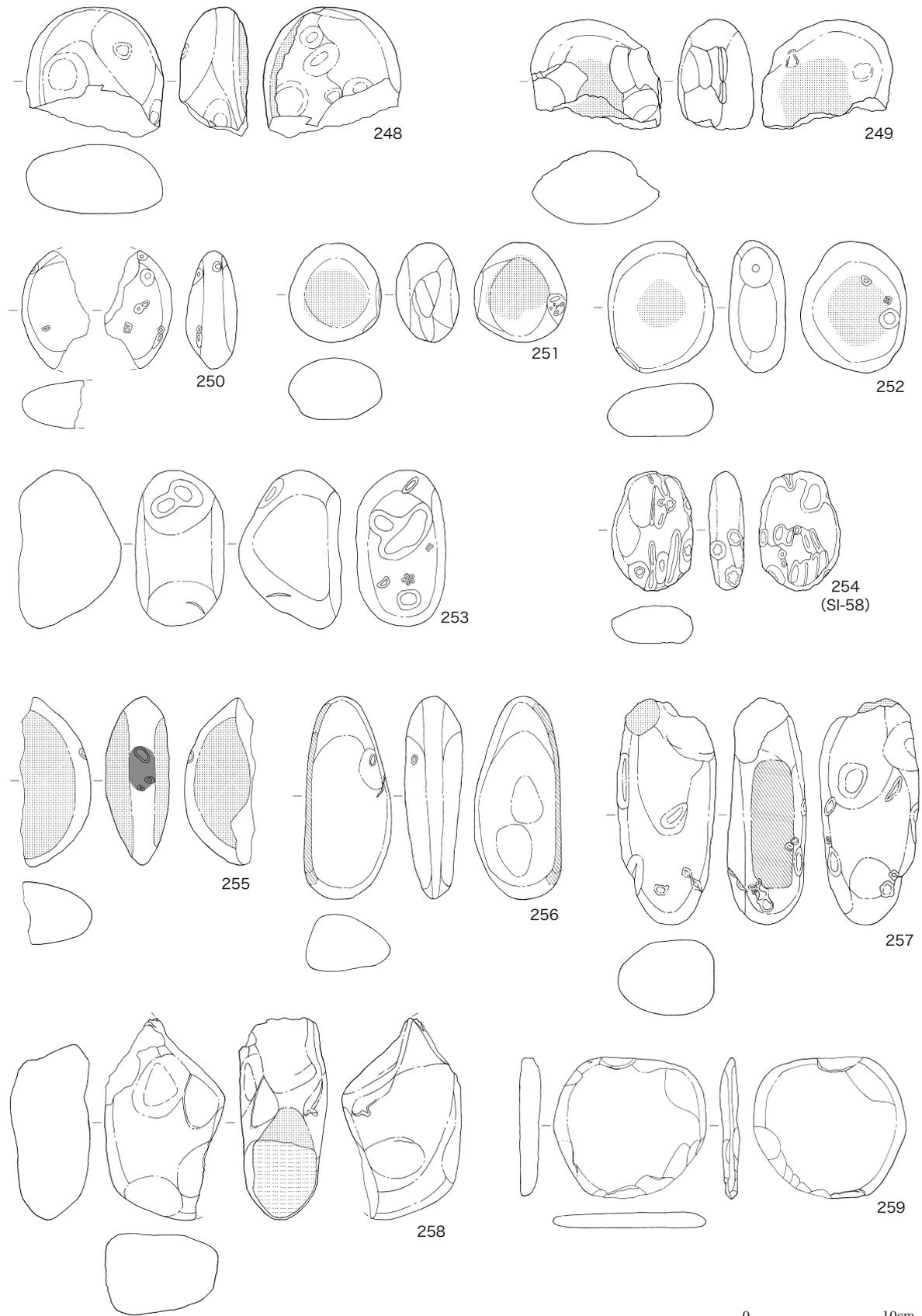
第77図 石器実測図(9)



第78図 石器実測図(10)



第79図 石器実測図(11)



第80図 石器実測図(12)



第81図 石器実測図(13)

第17表 石器観察表(1)

No	区	グリッド (G)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
1	A区			表採	1	石鏃	左側縁の一部欠損(ガジリ?)	チャート	3.3	1.7	0.4	1.6	長身で先端部に段を有し、側縁は幾分湾曲如味に脚部にいたる。基部は円形に整形されて凹基となる。器体は薄く、剥離は連続的で中央部にまでおよぶ。丁寧かつ優美な石鏃。
2	A区	N-9			2	石鏃	先端部・脚部両側縁欠損	チャート	(2.6)	(1.7)	0.3	1.3	器体が薄く、基部は直線的な三角形に大きく凹む。脚部の側縁には末端から意図的な剥離が入る。
3	A区	N-11	b		4	石鏃	左側部欠損	チャート	(3.0)	(1.7)	0.4	1.5	二等辺三角形を呈す長身の凹基鏃。連続的な剥離は器体中央にまでおよび、断面レンズ状で優美。
4	A区			SI-15	5	石鏃	先端部・左側部末端欠損	チャート	3.0	(1.9)	0.5	1.9	器体形状が3と相似する。先端部は段を以て尖頭状となり、側縁は直線的に延びる凹基鏃。
5	A区	N-11	9		7	石鏃	完存	チャート	2.2	1.6	0.3	0.9	先端が砲弾形を呈す凹基鏃。脚部は左右非対称となる。器体が薄く、側縁は鋭利。
6	A区			SI-79	8	石鏃	先端・左側部末端欠損	黒曜石	(1.7)	(1.2)	0.3	0.5	透明度の高い黒曜石を使用。小型で二等辺三角形の凹基鏃。断面レンズ状で、作りが丁寧。
7	A区	M-11	c-1		10	石鏃	完存	チャート	2.3	1.4	0.4	0.7	均整の取れた極めて優美な形状。直線的な二等辺三角形を呈す凹基鏃。
8	A区			SI-64	25	石鏃	完存	珪質泥岩あるいは珪質凝灰岩	3.1	1.8	0.9	3.7	交互剥離により、側縁がややや鋭歯的となる大型な凹基鏃。断面は楕円状で厚味がある。
9	A区			SI-79		石鏃	基部欠損	チャート	2.8	(1.7)	0.7	2.14	先端が尖り、両側縁が基部に向かって内傾如味となる形状で、基部は平基式と思われる。両側縁から器体中央に大きな剥離が連続し、そのため断面は肥厚な菱形状となる。
10	A区			SI-58		石鏃	左側部欠損	チャート	2.1	(1.0)	0.2	0.44	細身な二等辺三角形を呈し、基部形状は逆「V」字状となる凹基式。丁寧かつ連続する剥離が器体中央部におよび、薄く優美な石鏃。石材も非常に良質。
11	A区	M-10	d			石鏃	上部欠損	黒曜石	(1.0)	1.5	0.4	0.4	基部形状は大きく内傾する凹基式で、両側縁も脚部に向かって幾分内湾如味となる。欠損部は腹面からの加撃によるものか。比較的透明度の高い黒曜石を使用。
12	A区			SI-58		石鏃	右側部欠損	チャート	1.6	(1.4)	0.4	0.72	全体が丸味をおびる小型な石鏃で、基部は深く折り込む凹基式。背・腹面には素材取得時の主要剥離面がみられ、周縁への剥離にて製作される。
13	A区	O-9	a-1		6	石鏃	左側部欠損	チャート	(2.4)	(1.3)	0.4	0.8	細身で下半部が広がり、基部が湾曲的な凹基鏃。断面は比較的厚みのあるレンズ状。
14	A区			トレンチ	14	石鏃	先端欠損か?	チャート	(2.3)	1.8	0.7	2.2	先端が丸味を帯び、側縁が直線的な二等辺三角形の平基鏃。
15	A区			SI-79	19	石鏃	完存	チャート	2.6	1.8	0.4	1.3	側縁が直線的で、均整の取れた二等辺三角形を呈す。基部が緩く窪む凹基鏃で、断面も薄く非常に丁寧な作り。
16	A区			SI-79	22	石鏃	完存	チャート	2.0	1.4	0.5	1.1	腹面に礫面を残す小型な凹基鏃。背面がやや甲高で、先端は鋭利に尖る。
17	A区			SI-79	24	石鏃	先端部欠損	チャート	(1.8)	1.6	0.5	1.2	側縁が直線的な凹基鏃。比較的大きな剥離により器体を整形。
18	A区	N-11	a			石鏃	先端部・両側部欠損	チャート	(2.0)	(1.3)	0.4	1	二等辺三角形を呈し、基部は緩く内湾凹基式。断面は若干歪んだ肥厚なレンズ状で、先端部に再加工ありか。
19	A区			SI-58		石鏃	完存	チャート	2.6	(1.5)	0.6	1.7	両側縁上方に明確な角を有し、全体形状は五角形に近い。基部は緩い凹基式で、断面は肥厚な菱形である。
20	A区			SI-58		石鏃	先端部欠損	チャート	(2.4)	1.5	0.5	1.17	両側縁がほぼ直線的な二等辺三角形で、脚部末端はやや外側に広がる。基部は緩い凹基式で、断面はやや肥厚で甲高となる。
21	A区	M-11			23	石鏃	先端部欠損	珪質頁岩	(1.9)	1.4	0.4	0.86	二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。全体的に剥離が粗く、やや雑な作りである。
22	A区	N-9			13	石鏃	先端部・両側部末端欠損	チャート	(1.9)	1.3	0.5	1.05	両側縁が直線的な二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。断面は均整の取れたやや肥厚なレンズ状。

No	区	グリッド (C)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
23	A区	N-10			2	石鏃	完存	チャート	2.1	1.3	0.5	1.03	側縁が直線的な二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。背面には削除しきれなかつた高まりが断面に残る。
24	A区	N-8			38	石鏃	脚部末端欠損	チャート	(2.9)	(1.6)	0.5	1.82	両側縁が直線的で長身な二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。均整の取れた優美な形状で、側縁の加工は細かく緻密で顕微鏡状となる。本道跡出土石鏃において範型に成り得る。
25	A区	N-10			3	石鏃	完存	チャート	2.4	1.6	0.5	1.41	先端部欠損とも思えるが、腹面側に細かな加工が連続するため完存とした。形状は直線的な両側縁と緩い凹基式の基部からなる二等辺三角形。
26	A区	N-8	c			石鏃	先端部欠損	チャート	(2.0)	1.5	0.3	0.86	二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。器体中央部にまでおよぶ細やかな剥離により薄く仕上げられる。
27	A区	M-11			90	石鏃	完存	チャート	2.1	1.4	0.5	1.13	二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。両側縁は直線的で、剥離は細かく、器体中央部にまで達する。均整のとれた石鏃で、断面は肥厚なレンズ状。
28	A区	M-11			89	石鏃	先端欠損	流紋岩	(2.4)	1.7	0.4	1.45	両側縁が直線的で長身な二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。脚部は末端が突り、器体全体が中心線にて対照的な優美な石鏃。
29	A区	M-10	d			石鏃	完存	チャート	2.3	1.7	0.5	1.4	両側縁が直線的な二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。剥離が細かく、器体全体の均整のとれた優美な石鏃。
30	A区	M-10	d			石鏃	先端部欠損	チャート	(1.6)	1.1	0.3	0.48	細身な二等辺三角形を呈す小型な石鏃で、基部は緩い凹基式。素材が薄いため、連続する周縁加工により優美に仕上げられる。
31	A区	N-9			1	石鏃	左側部末端欠損	チャート	2.7	(1.8)	0.5	2.04	二等辺三角形を呈す凹基式。先端が器体中心線より若干傾く。両側縁は顕微鏡的、剥離が器体中央部にまでおよぶ優美な石鏃。
32	A区			SI-58		石鏃	完存	チャート	2.8	1.4	0.5	1.7	長身な二等辺三角形で、基部は緩い凹基式。両側縁の先端直下では、「く」字状の角度を以て直線的に脚部にいたる。剥離は細かく緻密で、断面は肥厚なレンズ状。
33	A区	M-11			63	石鏃	左側縁欠損	チャート	(2.1)	(1.4)	0.5	1.17	先端からの衝撃剥離により左側縁を欠損する。二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。先端直下に「く」字状の角があり、直線的に脚部にいたる。剥離が連続的で器体中央にまでおよぶことから、断面はやや肥厚なものであるものの綺麗なレンズ状となる。優美な石鏃である。
34	A区	M-11	c			石鏃	先端部欠損	チャート	(1.7)	1.6	0.4	1.14	二等辺三角形を呈し、基部は緩い凹基式。両側縁は直線的で、背面への剥離は緻密。断面は薄いレンズ状。
35	A区	O-8			122	石鏃	脚部末端欠損	チャート	(2.4)	(1.7)	0.5	1.43	二等辺三角形を呈し、基部は若干内傾する凹基式。両側縁は直線的で、器体全体への剥離は緻密で極めて丁寧。断面レンズ状の均整のとれた優美な石鏃。
36	A区			SK-16		石鏃	完存	チャート	2.1	1.5	0.6	1.57	小型な二等辺三角形を呈し、基部形状は緩い凹基式。腹面側に主要剥離面があるため、器体が若干湾曲する。素材が肥厚なため、主に周縁加工により整形される。
37	A区	N-8	c-1		9	石鏃	左側脚部欠損	黒色安山岩	1.8	(1.4)	0.4	0.5	器体形状は正三角形に近く、基部が大きく内湾する凹基式。中央部の稜線が明確で、断面は菱形に近い。
38	A区			SI-79	3	石鏃	先端部欠損	黒曜石	(1.9)	1.5	0.5	0.9	先端部は衝撃剥離による欠損。器体が直線的な二等辺三角形の凹基式。透明度の高い黒曜石を用いる。
39	A区	M-11			20	石鏃	下半欠損	チャート	(2.0)	(1.5)	0.5	1.29	二等辺三角形を呈すと考えられる。器体下半は節理面より欠損し、脚部及び基部形状は不明である。断面は肥厚なレンズ状。
40	A区	O-10			5	石鏃	完存	チャート	1.8	1.5	0.3	0.81	正三角形に近い凹基式。両側縁が顕微鏡的で、断面はやや肥厚なレンズ状。
41	A区	M-11	北		16	石鏃	完存	チャート	2.0	1.7	0.5	1.3	形状がやや正三角形に近い凹基式。比較的器体が厚い。
42	A区			SI-79	21	石鏃	右側脚部末端欠損	チャート	2.6	2.0	0.5	1.9	側縁が直線的な二等辺三角形を呈す平基式。器体が薄く均一で、非常に丁寧な作り。

第4章 遺構外の出土遺物

№	区	グリッド (G)	G 枝番	遺構名	注記 No.	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
43	A区			SI-58		石鏡	完存	チャート	2.0	(1.6)	0.3	0.91	形状は正三角形に近く、基部もほぼ平基式の咽喉である。断面は薄いレンズ状で、剥離も丁寧かつ緻密な優美な石鏡である。
44	A区			SI-79		石鏡	先端部・左側脚部未端欠損	チャート	(1.6)	1.5	0.5	1.1	小型でやや甲高な平基鏡。作りはやや粗い。
45	A区	M1			59	石鏡	完存	チャート	1.9	1.5	0.4	1.05	形状は二等辺三角形に近く、基部は直線的に内傾する凹基式。側縁の剥離は細かいもののそれ以外はやや雑な作り。
46	A区	M-10	b			石鏡	先端欠損	チャート	(1.9)	1.6	0.3	0.79	正三角形に近く、基部は緩い凹基式。側縁からの剥離は連続的で器体中央にまでおよぶため、断面は薄いレンズ状。
47	A区	O-8			95	石鏡	完存	黒色安山岩	1.9	1.7	0.5	1.31	正三角形を呈し、基部は緩い凹基式。両側縁は幾分湾曲的で、整形も粗く雑。
48	A区	N-11	a		18	石鏡	先端部・左側脚部未端欠損	チャート	(1.9)	1.7	0.4	1.2	先端に衝撃剥離あり。二等辺三角形の平基鏡で、断面は均整の取れたレンズ状。連続的な剥離が中央にまでおよぶ丁寧な作り。
49	A区	N-10			39	石鏡	完存	チャート	2.2	1.8	0.6	1.74	やや歪な正三角形で、基部は緩い凹基式。素材が肥厚なため、これを減じる剥離により形状が歪む。
50	A区	M-11			88	石鏡	左右側脚部欠損	チャート	(2.8)	(1.9)	0.4	1.92	両側縁が先端から基部に向かって湾曲的となり、基部形状は緩い凹基式であろうか。器体中央にまで長く丁寧な剥離が入るため、断面は薄いレンズ状となる。
51	A区	M-10			11	石鏡	完存	流紋岩質	1.9	1.4	0.5	1.2	砲弾形を呈し、基部が緩く湾曲する凹基鏡。中央部にまで剥離がおよび、側縁も丁寧に整形されて優美。
52	A区	N-11	7		13	石鏡	先端欠損	チャート	(1.9)	1.7	0.5	1.4	やはり51、53と形状、大きさ、製作方法が近似する凹基鏡。これら3点は同一製作者によるものであろう。
53	A区	N-11	8		12	石鏡	完存	チャート	(1.9)	1.6	0.4	1.1	51と相似形となる凹基鏡で、大ききや剥離の入り方も近似する。
54	A区	M-11	4		17	石鏡	完存	チャート	1.5	1.3	0.5	0.9	器体が正三角形に近い小型の凹基鏡。側縁は湾曲的で、断面は厚みのあるレンズ状。節理面より欠損。基部は緩い凹基式。側縁から脚部にかけてやや湾曲的で、整形のための剥離はやや緻密。
55	A区	M-11	c			石鏡	大半欠損	チャート	(0.6)	1.4	0.3	0.26	細身で長身、直線的な側縁が基部付近でやや広がる特徴は、早期天矢場式に伴う掘込型石鏡の特徴である。本来は背腹面の頂部が研磨される。器体は薄く均一で、極めて丁寧かつ優美な作り。
56	A区	M-10	d		26	石鏡	完存	チャート	3.0	1.4	0.4	1.2	二等辺三角形を呈し、基部は凹基式。両側縁は直線的で、幾分鈍頭状。背面中央部右側には、加工にて減じえなかった高まりが残る。
57	A区	N-10			86	石鏡	完存	チャート	3.1	1.8	0.8	3.53	左側縁が直線的、右側縁が湾曲的な平基鏡。器体下半が肥厚する。
58	A区			SI-58	15	石鏡	完存	チャート	2.5	1.7	0.6	1.9	左側縁がやや歪む二等辺三角形を呈し、基部は平基式。基部面が欠損もしくは意図的に折り取られた可能性があり、再生品と思われる。
59	A区	M-11			87	石鏡	完存	チャート	2.0	1.3	0.4	1.17	側縁が湾曲状となる平基鏡。裏面中央部には素材の剥離面が甲高に残ることから、製作途中で放棄か。
60	A区			SI-58	20	石鏡	完存 未製品か	チャート	3.0	1.9	1.0	5.1	節理面より欠損する。一部が残る左側縁はやや湾曲的で、基部形状は平基式。断面はやや肥厚なレンズ状で、比較的大きな剥離が器体中央部にまでおよぶ。
61	A区	N-8	c			石鏡	上半欠損	チャート	(1.8)	1.5	0.6	1.24	製作途中で放棄か。
62	A区			SI-8	28	石鏡	完存	チャート	2.7	2.2	1.0	4.7	断面が厚く、器体が正三角に近い平基鏡。
63	A区	M-10	d			石鏡	基部欠損	珉質頁岩	(1.8)	(1.4)	0.2	0.6	右側縁は節理より、基部は製作時に欠損したと思われる。断面形状は板状に近く、特に腹面右側縁の剥離が細かく丁寧である。
64	A区	N-11	d-2		27	石鏡	先端・右側脚部未端欠損	チャート	(1.5)	1.4	0.5	1.0	器体は正三角形に近い平基鏡で、断面は厚味のあるレンズ状。

No	区	グリップ (C)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
65	A区	M-11	c			石鏃	先端・脚部の一部欠損	チャート	(1.6)	(1.4)	0.4	0.85	正三角形を呈し、基部形状は平基式。復面に素材の主要剥離面が大きく残り、また素材に厚みが無いため断面が不対象。
66	A区	N-8	c			石鏃	右側縁欠損	玉髓	2.3	(1.7)	0.4	1.57	薄い楕円状剥片の周縁に剥離を加え、形状を先端が尖るテイアトロップ形に加工する。基部形状は平基式。石鏃の可能性もある。
67	A区			SI-79		石鏃 未製品	完存 製作途中放棄	チャート	2.9	2.1	1.1	5.6	背・腹面に礫面を残す。基部周辺の厚味が減じきれず、製作途中放棄。
68	A区			SK-81	30	石鏃 未製品	完存	チャート	3.1	2.0	0.9	4.8	先端に礫面が残る。基部の整形も途中でことから未製品であろう
69	A区	N-9				石鏃	完存	赤色チャート	2.6	2.1	0.8	4.83	楕円状となる両側縁は湾曲的で、基部形状はどちらかと言えば円基鏃の範疇。断面は肥厚なレンズ状。先端部が鋭利でないこと、また断面がまだ肥厚であることを加味すると、未製品とも思われる。
70	A区	N-11	a		29	石鏃 未製品	完存	チャート	2.3	1.9	0.9	3.6	器体の厚味を減じきれなかったため、石鏃の未製品と考えられる。
71	A区	N-10			38	石鏃	完存	黒曜石	2.1	0.8	0.4	0.6	小型な凸基有基鏃。背・復面に素材の礫面及び旧剥離面が残る。比較的透明度の高い黒曜石を用いる。時期的に後出する石鏃か。
72	A区	N-11	d			石鏃	左側部欠損	チャート	2.8	(1.5)	0.3	1.46	鋭い砲弾形を呈す。脚部の一部欠損。また基部周辺の欠損に伴い再加工された可能性があるため、基部形状については不明とする。器体は丁寧かつ緻密な剥離により、断面が薄れ、レンズ状となる。
73	A区	O-8	c		1	石鏃	下部欠損	チャート	(1.3)	(1.1)	0.3	0.38	器体の大半を欠損し、先端部付近が残る。先端は細く鋭利で、その直下の側縁が緩く膨らむ。腹面には欠損時の剥離が下方から入る。
74	A区	N-8			3	石鏃	下半欠損	チャート	(2.1)	(1.4)	0.3	1.1	両側縁が直線的となるやや大型な二等辺三角形であったと思われる。器体中央にまで剥離が入り、断面は薄い流線状となる。
75	A区	N-11	d			石鏃 未製品	完存	チャート	2.9	2.4	0.8	4.82	背面右側縁に素材剥片の折面あり。全周縁に整形のための剥離が施されるが、折面の厚さを減じることができずに廃棄した未製品であろう。
76	A区	M-10	d			石鏃 未製品	完存 製作途中放棄	チャート	(3.1)	(2.2)	0.8	4.7	左側縁の厚味を減じきれず、製作途中にて放棄。
77	A区			SI-8		石鏃 未製品	完存	チャート	3.1	2.4	0.6	4.44	左側縁下方に素材の打面が残る。素材剥片を比較的大きな剥離によって整形し、形状を整えるものの左右非対称であり、また基部形状の様相から未製品であろう。
78	A区	M-10	g			石鏃 未製品	完存	珪質頁岩	2.5	1.4	0.6	2.09	砲弾型の形状で、基部は素材となる剥片の末端形状のままである。断面からも分かるように背面には突出した高まりがあり、基部への未加工と共に未製品と考えられる。
79	A区	N-11	a			石鏃 未製品	完存	チャート	2.8	1.9	0.5	3.42	左側縁先端部付近が大きく湾曲するが、これは先端部欠損後の再調整によるものと思われる。基部形状は鋭い凹基式。素材は背・腹面の双方に主要剥離面がある板状で、剥離は周縁部に限られる。
80	A区	N-10			49	石鏃 未製品	完存	瑪瑙(玉髓)	1.8	1.4	0.4	0.7	器体中央部にて節理面より欠損し、その後再加工が行われたものの、完成に至っていないため未製品とした。薄い素材の背面に礫面があり、ほぼ周縁加工にて整形される。
81	A区	N-10	c			石鏃 未製品	完存	チャート	2.1	1.4	0.3	0.87	素材に薄い楕円状剥片を用い、基部を平基にして二等辺三角形に加工するものの、左側縁の整形途中で放棄か。
82	A区	M-11			112	石鏃 未製品	完存	チャート	2.9	2.6	0.7	4.95	素材は腹面右下に打面のある不定形な剥片。背面の先端から左側縁及び基部に剥離を施すものの途中放棄。素材の歪んだ断面に問題ありか。
83	A区	O-10			7	石鏃 未製品	先端部欠損	チャート	(2.3)	1.7	0.4	1.68	腹面に節理を伴う主要剥離面のある楕円状剥片を素材とする。周縁部を整形する段階で先端部を欠損し、廃棄したと思われる。

第4章 遺構外の出土遺物

No.	区	グリップ (G)	G 枝番	遺構名	注記 No.	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
84	A区	N-9			20	石鏃 未製品	上部欠損	チャート	2.9	2.7	0.7	5.55	比較的大型な機軸状の剥片を素材とし、背面では中央部にまでおよぶ剥離が施される。その後、周縁加工を行う準備が整った段階にて欠損が生じ、廃棄されたものである。
85	A区			SK-16 付近		石鏃 未製品	左側縁欠損	チャート	(3.3)	(2.0)	0.7	4.76	側縁には比較的細やかで連続する剥離が施され、完成段階に到達するものの節理面より欠損し廃棄されたと思われる。器体には旧剥離面や礫面、また節理がみられるなど、素材は非常に粗悪である。
86	A区			SI-58	2	石鏃 未製品	完存	チャート	3.8	3.2	1.3	14.72	下端に打面のある肥厚な剥片を用いる。背・腹面の周縁から中心に向かって大きな剥離を施して、石鏃の原型を製作するが、剥片の厚みを減じきれず放棄か。
87	A区	M-11			67	石鏃 未製品	上端欠損	珪質頁岩	2.6	2.2	0.6	3.76	おそらく基部形状が平基となるやや大型の石鏃を製作中、器体上半を欠損したため放棄したと考えられる。欠損部には微細な加工がみられるため、未製品とすべきではないかもしれない。
88	A区	N-10			75	石鏃 未製品	完存	チャート	(2.4)	2.0	1.1	4.73	素材に分厚い剥片を用い、基部及び側縁から中心部に向かって連続的に剥離を加えるものの、背面の厚みが減じ切れないために放棄か。
89	A区			SI-79		石鏃 未製品	左側縁欠損	チャート	(2.1)	(1.7)	0.6	1.75	基部側に打面のあるやや肥厚な剥片を用いる。周縁に剥離を施して器体整形を行うものの、左側縁部を欠損したため放棄か。
90	A区	M-10	d			石鏃	右側縁・ 刃部欠損	チャート	(1.8)	(1.3)	0.4	0.5	右側縁及び刃部を節理面から欠損する。薄く小型な石鏃。
91	A区	M-10	d		31	石鏃	先端欠損	珪質頁岩?	(3.0)	2.2	0.9	4.4	背面に礫面、腹面に主要剥離面を大きく残す。また基部周辺の整形が丁寧でないことから、石鏃の可能性が高い。(石材鑑定ではチャートである)
92	A区	M-10	d			石鏃?	刃部欠損	チャート	(3.3)	2.7	1.0	7.8	握み部では背・腹面に礫面を残す。
93	A区	N-11	b			石鏃	先端部欠損	チャート	(2.9)	2.1	0.9	5.37	当初は石鏃の未製品と考えたが、器体が肥厚で左右非対称であり、石鏃にみられる細かな周縁加工が無いことから石鏃とした。
94	A区	M-10	d			石鏃	両端部欠損	チャート	(2.1)	1.0	0.4	1.12	小型な縦長剥片の両側縁に連続する剥離を施す。下方の刃部を欠損するものの石鏃の可能性が高い。
95	A区			SI-79		石鏃	上下欠損	黒曜石	(2.2)	1.0	0.8	1.7	石鏃の刃部と思われ、先端と上部を欠損する。
96	A区			SI-58		石鏃	刃部欠損	チャート	(2.3)	2.3	0.6	3.27	縦長状の剥片を用い、周縁加工によって漏斗状に整形する。剥片の末端部に刃部を作出する。
97	A区	M-10	d			石鏃	刃部欠損	チャート	(2.8)	2.3	0.4	4.92	腹面下端に打面のある不定形な剥片を用い、両側縁から打面部にかけて剥離を加えて鋭利な鏃状の刃部を作出する。
98	A区	M-10	d			石鏃	完存	チャート	2.2	2.7	0.6	3.2	薄い縦長剥片の末端に、尖頭状の刃部を作出する。
99	A区	N-10			24	石鏃	完存	チャート	4.4	1.6	0.7	3.88	上端に打面のある断面三角形の縦長剥片を用い、その先端に背・腹面から剥離を施して刃部とする。
100	A区	N-11	a			石鏃	先端欠損	頁岩	(4.2)	2.1	0.9	8.56	右側縁が礫面となる断面三角形の縦長剥片を用い、その先端を鏃状に尖らして刃部とする。また鋭利な左側縁には微細な使用痕が残る。
101	A区			SI-52		石鏃	刃部欠損	チャート	(4.5)	3.9	1.4	27.32	礫面が残る上面を打面とする肥厚な剥片を用い、両側縁から大きな剥離を加えて尖頭状とし、さらに微細な剥離を連続させて刃部を作出する。素材は層状チャートを用いる。
102	A区	O-8	c		37	石槍 未製品	完存	安山岩	8.4	3.6	1.4	47.53	横剥ぎの大型剥片を用い、背面では器体中央部におよぶ剥離の後に周縁加工が、腹面では打面除去のための右側縁への剥離が主体となる。基部整形は問題ないが、先端部が鈍角となることから未製品とした。
103	A区	N-8			28	尖頭器	上部欠損	チャート	2.7	1.7	0.6	2.48	丁寧に半円状に加工された尖頭器の基部と考えられる。製作途中にて破損し、その後に鋭利な破損箇所二次的的加工を施す。

No	区	グリップ (C)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
104	A区			SI-58		尖頭器 未製品	上方・ 左側縁欠損	チャート	(2.3)	(1.9)	1.1	5.25	肥厚な剥片の右側縁に背・腹面から連続する微細な剥離あり。上方及び左側縁の欠損面は、尖頭器製作の際のものであろう。
105	A区			SI-58		尖頭器 未製品	完存	チャート	(3.7)	2.4	1.0	10.41	基部側に打面がある肥厚な縦長剥片を用いる。両側縁から剥離を加えて尖頭器を作成するものの、整形に伴う先端の欠損により放棄したと思われる。
106	A区			SK-92		楔形石器	完存	チャート	2.6	1.6	0.9	3.37	上端に打面のある小型剥片を両極技法により敲打する。上下両端には潰れがみられ、右側縁には両極時の縞状剥離が入る。
107	A区			SI-80		楔形石器	完存	チャート	2.7	1.1	0.7	2.02	上端に打面のあるやや肥厚で、小型な縦長剥片を用いる。両極技法により下方から数本の縞状剥離が入る。
108	A区					楔形石器	完存	チャート	2.6	1.6	0.8	3.93	両側縁が並行する短冊状の縦長剥片を両極技法により敲打し、その側面に縞状の剥離を作出する。上下両端には両極時の潰れに近い剥離がみられる。
109	A区		d	SI-80		楔形石器	完存	頁岩	4.3	2.2	1.4	1371	上端に打面のある肥厚な断面三角形の縦長剥片を用い、上下両端を両極技法によって、下端から縞状の剥離が数条作出される。上端及び下端の潰れや剥離もその際に生じたものである。
110	A区				17	楔形石器	完存	チャート	3.1	2.5	1.1	11.04	やや肥厚な台形状の剥片を用い、上下両端を両極技法により敲打する。そのため上下方から縞状の剥離が入る。また上下両端には潰れに似た細かな剥離がみられるが、これも両極によるものである。
111	A区		b			楔形石器	完存	頁岩	4.0	2.2	1.2	8.96	上端に打面のある断面三角形の縦長剥片を用い、上下両端を両極技法によって、下端に縞状の剥離が作出される。上端や下端にみられる潰れや剥離も両極によるものである。
112	A区					楔形石器	完存	チャート	2.0	2.4	1.3	6.9	上面に礫面のある層状チャートから剥離された断面三角形の剥片を用い、上下を両極技法により下縁から縞状の剥離が上方に延びる。
113	A区			SI-58		石匙	下半部・右側縁 欠損	頁岩	(3.8)	2.7	(1.1)	9.7	背面に礫面を残す縦長剥片を用い、頭部の幅みと左側縁に刃部を作出する。右側縁は使用に伴う欠損が、もしくは製作時の欠損が不明。
114	A区					へら状 石器	完存	チャート	4.4	3.5	1.3	19.53	縦長の台形状に整形され、断面はやや甲高なレンズ状。腹面の下縁には大きな剥離を急角度で加え、さらに細やかな剥離により刃部とする。
115	A区				114	削器	完存	チャート	4.8	3.7	1.1	20.52	腹面に礫面のある大型剥片を用いる。両側縁から中央部に平坦で大きな剥離を施し、断面レンズ状に加工する。製作当初は尖頭器を意図したと思われるが、背面左上部の剥離により上半部が欠損した段階にて、削器に変更したと考えられる。下辺を除く全周縁に細かな剥離を連続させる。
116	A区					削器	完存	チャート	(3.6)	3.3	1.4	16.8	背面を礫面とする肥厚な縦長剥片。打面となる上端部を折り取った後に、両側縁に刃部を作出。
117	A区		d			削器	下半部欠損	チャート	(2.3)	2.1	0.9	4.5	素材は上端の礫面を打面とするやや肥厚な縦長剥片。両側縁に刃部を作出。
118	A区				53	搔器	完存	チャート	3.7	3.4	1.3	18.36	背・腹面には石核として機能した剥片取得の痕跡が残る。その後には周縁の一部に急角度な剥離や、微細な剥離を施して刃部とする。
119	A区				37	削器	上部欠損	珪質泥岩	(3.7)	3.5	1.0	11.52	やや厚味のある剥片の両側縁全体に連続する剥離を施して刃部を作出する。欠損箇所は節理面による。

第4章 遺構外の出土遺物

№	区	グリップ (G)	G 枝番	遺構名	注記 №	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
120	A区	M-10	d			削器	完存	チャート	2.7	2.7	0.6	4.94	上方に打面のある縦長状の剥片を用い、全周縁に剥離を施して刃部とする。
121	A区	O-9	a			削器	完存	チャート	2.9	2.2	0.6	4.46	素材は右側縁側に打点がある縦長状の剥片であらう。腹面では肥厚な打面及びビュルブを除去し、両側縁に細かな剥離を加えて刃部とする。
122	A区	M-11			9	削器	完存	チャート	3.9	3.1	0.7	12.13	上端に打面のあるやや幅広い縦長状の剥片を用い、下縁を中心に剥離を加えて刃部とする。上下両端にみられる潰れは両端打法によるものかもしれない。
123	A区	N-11	b			削器	完存	黒曜石	2.3	2.2	0.5	1.6	上端に打面のある不定形な剥片を用い、左側縁に刃部を作出する。
124	A区	M-10	d			削器	上部欠損	チャート	(2.0)	2.1	0.6	3.0	縦長剥片の周縁部に刃部を作出する。
125	A区	M-11			118	削器	完存	頁岩	2.6	3.8	1.2	9.77	上端に打面があり、背面に礫面が伴う縦長状剥片を用いる。鋭利な下縁及び上方の打面部付近に刃部を作出する。
126	A区	M-11			102	削器	完存	チャート	3.0	3.0	0.7	6.32	上端の礫面を打面とし、やはり背面に礫面が伴う不定形剥片を用いる。腹面の右側縁を中心に丁寧な剥離を連続させて刃部を作出する。また下縁に微細な使用痕あり。
127	A区	N-8	c			挿器	上端欠損	チャート	2.0	2.4	0.7	3.77	上方に打面のある縦長状の剥片を用いる。打面とは反対の剥片末端に急角度の剥離を加えて刃部とする。
128	A区			SI-19		削器	完存	チャート	2.2	2.5	0.5	3.8	上方に打面のある不定形剥片を用いる。右側縁には急角度の、またそれ以外には細かな剥離を加えて刃部とする。
129	A区	M-10	d			挿器	完存	黒曜石	1.5	2.7	0.5	1.64	上端に打面が、また背面に礫面のある小型の縦長剥片を用いる。素材下方を折り取り、その面に剥離を連続的に施して急角度の刃部を作出する。透明度の高い黒曜石を使用する。
130	A区			SI-58		削器	完存	砂岩	(3.7)	(3.2)	0.4	5.2	薄い板状の不定形な剥片を用い、右側縁以外を折り取り取った後に上縁から右側縁にかけて剥離を施して刃部とする。
131	A区			SI-58		削器	完存	チャート	4.8	1.4	0.6	4.21	上端に打面があり、断面三角形の細身の縦長剥片を用いる。下縁を除くすべてに微細な剥離を連続させて刃部を作出する。
132	A区	M-11			12	削器	左側欠損	チャート	4.9	6.1	1.7	52.26	上面に扇状チャート特有の平坦な礫面、腹面に節理による剥離面を大きく残す。大型で縦長状の剥片を用い、打面部を除く周縁に縦長状の剥離を施して刃部とする。良質なチャートである。
133	A区					挿器	完存	チャート	4.3	2.5	1.4	14.2	肥厚な打面部を下端において刃部とする。左側面は旧剥離面か。
134	A区			SI-58		削器	下半部欠損	チャート	(3.4)	(3.1)	1.2	10.55	上端に打面のある肥厚な縦長剥片を用い、両側縁に加工を施して刃部を作出するものの、器体下半を大きく欠損する。
135	A区			SI-64付 近		削器	完存	安山岩	6.2	5.1	1.7	48.96	不定形で肥厚な大型剥片を用い、両側縁の背・腹面より剥離を加えて尖頭状に仕上げられる。
136	A区	O-8	c			削器	下部欠損	安山岩	4.5	4.5	1.4	25.61	上端に打面のある肥厚な大型剥片を用い、左側縁を中心に微細な剥離を施して刃部とする。打面部は除去され、右側縁に使用痕あり。
137	A区			表採		削器	完存	チャート	3.9	2.2	1.3	8.3	角礫の罫部にあたる剥片を素材とするため、背面及び下面に礫面が伴う。鋭利な左側縁に刃部を作出する。
138	A区	M-11	a			削器	完存	安山岩	7.5	3.6	1.9	61.33	上端に打面があり、背面に礫面のある断面三角形の分厚い縦長剥片を用い、鋭利な両側縁に剥離を施して刃部を作出する。
139	A区	N-11			34	削器	完存	安山岩	(6.9)	3.7	0.9	34.07	上端に打面があり、上面から左側縁に礫面のある縦長剥片を用いる。両側縁に僅かに剥離を施して刃部とする。風化が著しく、剥離やリングが不鮮明である。

No	区	グリッド (C)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
140	A区	O-8	b			削器	完存	砂岩	5.6	4.2	1.9	51.73	上端に打面があり、肥厚な断面三角形で稜付の縦長剥片を用いる。右側縁全体に細かな剥離を連続的に、また下縁には急角度の刃部を作出する。さらに上面の縁辺には僅かに敲打痕がみられる。
141	A区	M-12	a			削器	完存	ホルンフェルス	(5.8)	(5.2)	1.6	42.54	上端部に打面のある礫片を用いる。下方を折り取り後に、打面の除去を伴う細かな剥離を上端から右側縁に施す。また鋭利な右側縁に使用痕が残る。
142	A区	M-10	d			削器	完存	ホルンフェルス	5.2	3.5	0.6	16.37	上端に打面のある礫片を用いる。鋭利な左側縁に刃部を作出し、また下縁には使用痕あり。
143	A区			SI-58		削器	下半欠損	ホルンフェルス	(4.3)	(4.9)	0.9	23.9	上端に打面のある大型の縦長剥片を用い、左側縁に比較的急角度の剥離を連続させて刃部とする。
144	A区	N-8	b			削器	完存	安山岩	11.7	7.8	1.1	79.3	左側縁上方に打面のある大型で薄い不定形な剥片を用い、鋭利な周縁の一部に剥離を施す。またそれ以外には明瞭な使用痕がある。
145	A区	N-8			54	削器	完存	砂岩	8.1	6.1	2.0	109.63	礫面の残る上面を打面とし、分厚く横幅のある縦長剥片を用いる。周縁全体に剥離を施して刃部とする。打面部には打面調整がみられる。
146	A区	O-8			78	削器	完存	ホルンフェルス	8.3	6.2	3.2	174.72	上端の打面部分が除去され、背面に礫面のある分厚い縦長剥片を用いる。鋭利な右側縁から下縁に刃部を作出し、またやや鋭利な左側縁全体に使用痕あり。
147	A区	O-8			80	削器	完存	瑛れい岩	10.7	4.8	2.1	117.85	左側縁に大きく礫面を残す肥厚な横長の大型礫片を用い、右側縁に存在する打面を除去するとともに、剥離を連続させて鋭利で鋸歯状の刃部を作出する。
148	A区	O-8			26	削器	完存	ホルンフェルス	7.0	8.7	1.8	133.8	背面に礫面のある礫片を用い、鋭利な縁辺部に剥離を施して刃部とする。
149	A区			SI-58		削器	完存	珪質頁岩	4.5	7.0	1.6	40.96	上端の礫面を打面とする横長状の礫片を用い、鋭利な下縁に刃部を作出する。
150	A区	M-11			121	削器	左側縁欠損	ホルンフェルス	8.3	6.1	1.5	80.13	左側縁の上方に打面があり、下縁の一部が自然面となる肥厚な剥片を用いる。鋭利な右側縁及び残存する左側縁下方に腹面から連続的に剥離を施して刃部とする。
151	A区	N-10			13	RF	下半欠損	チャート	2.2	3.3	0.7	5.75	上方に打面のある縦長剥片を用い、周縁に二次加工を施す。器体下半は節理面より欠損する。
152	A区	N-10	c			RF	下半欠損	チャート	(2.0)	(3.3)	0.8	6.47	上方に打面のある肥厚な縦長剥片を用い、打面部を含む周縁全体に剥離を施す。器体下半は節理面より欠損する。
153	A区	S-95				RF	完存	チャート	2.5	2.0	0.8	3.73	肥厚な不定形剥片の周縁部全体に腹面から剥離を施す。
154	A区	N-10			53	RF	完存	チャート	3.0	1.5	0.3	1.51	薄く小型な縦長剥片を用い、その周縁全体に極めて細かな剥離を加える。
155	A区	N-9			8	RF	完存	チャート	2.9	2.5	0.7	5.68	上端に打面のある板状の剥片を用い、背面では上方から薄い平坦な剥離を連続的に施す。上下両端には両極による加撃に伴う潰れがみられ、下端にはその際の剥離も確認できる。
156	A区	N-9			12	RF	上部欠損	チャート	3.0	2.4	1.9	11.51	断面三角形の肥厚な不定形剥片を用い、下方先端に急角度の剥離を施す。素材が石核の一部の可能性もありえる。
157	A区	N-8	c			RF	完存	チャート	2.9	2.1	0.7	5.82	上端に打面のある不定形剥片を用い、鋭利な左側縁の腹面に二次加工を施す。
158	A区	L-10	c			RF	完存	チャート	4.4	3.4	1.5	20.92	肥厚な縦長剥片の上下両端を両極打法によって敲打し、これによって背面には2枚の楕状の剥離が生じたと考えられる。両端には両極による潰れが生じ、鋭利な両側縁に二次加工が施される。
159	A区	M-11			122	RF	完存	砂岩	2.8	4.0	1.1	9.43	上端に打面のある横長剥片を用い、鋭利な下縁に微細な二次加工を施す。上面には打面をそのまま残す。
160	A区	M-11			119	RF	完存	チャート	2.4	2.8	1.0	6.28	背・腹面に礫面のある不定形な剥片を用い、左側縁部を折り取った後に、周縁部に二次加工を施す。素材は非常に粗悪なチャート。

第4章 遺構外の出土遺物

No.	区	グリップ (G)	G 枝番	遺構名 No.	注記 No.	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
161	A区	M-11			99	RF	完存	砂岩	3.3	6.0	2.4	48.37	大型な円礫より割り取った分厚な不定形な剥片を用い、鋭利な右側縁に二次加工あり。残核の可能性あり。
162	A区	M-11			38	RF	完存	頁岩	3.1	2.8	1.0	8.38	上方に打面のある不定形な剥片を用い、右側縁上方以外の周縁に剥離を施す。また鋭利な右側縁に微細な使用痕あり。
163	A区	M-10	d			RF	下部欠損	チャート	2.1	2.9	0.9	4.38	上方に打面のある縦長剥片を用い、下方を節理面より欠損する。左側縁を中心に微細な二次加工を施す。
164	A区	M-11			54	RF	完存	珪質頁岩	2.1	2.3	0.6	3.98	上端に打面のある不定形な剥片を用い、復縁を中心に下縁以外の周縁に微細な二次加工を施す。
165	A区	M-10	d			RF	完存	チャート	3.2	2.3	0.6	5.44	上端に打面のある縦長剥片を用い、背・腹面の両側縁から二次加工を施す。一部には潰れに近いものもある。
166	A区	M-11	d			RF	完存	ホルンフェルス	3.5	4.0	1.1	17.76	腹面を伴う不定形な剥片を用い、鋭利な縁辺部に二次加工を施す。
167	A区	M-11	c			RF	完存	チャート	2.9	2.4	0.8	5.57	上方に打面のある縦長剥片を用い、末端部に急角度の剥離を、また上方では打点の除去を目的とする凹形状の整形を行う。
168	A区	O-8			19	RF	完存	チャート	2.1	(2.1)	0.6	2.43	上端に打面のある不定形な剥片を用い、左側縁の下縁に微細な剥離を施す。同側縁の尖頭部の作出を考えると、右踵の可能性もあり得る。
169	A区	M-10	d			RF	完存	チャート	2.2	1.6	0.3	1.87	上端に打面のある小型な剥片を用い、両側縁に細かな二次加工を連続させる。
170	A区	M-11	d			RF	完存	チャート	2.5	2.7	0.8	4.39	上端に打面のある不定形な剥片を用い、周縁の一部に背・腹面から大割な二次加工を施す。
171	A区	M-11	c			RF	完存	チャート	4.2	1.4	0.7	3.1	上端に打面のあるやや捻じれた縦長剥片を用い、腹面の先端部に僅かな二次加工を施す。
172	A区	M-9	a			RF	完存	ホルンフェルス	5.9	4.8	1.1	29.97	上方に打面のあるやや大型な縦長剥片を用い、周縁の一部に二次加工を施す。
173	A区	M-10	d			RF	完存	チャート	2.3	2.9	0.9	6.17	上端に打面のある不定形な剥片を用い、ほぼ全周縁に二次加工を加える。右材は極めて粗悪。
174	A区	M-11			62	RF	上部欠損	チャート	(2.2)	2.4	0.7	3.93	腹面のある不定形な剥片を用い、ほぼ全周縁に二次加工を施す。
175	A区			SI-9		RF	完存	チャート	2.9	2.7	1.0	8.07	不定形な分厚い剥片の周縁に二次加工を施す。特に下縁では急角度となる。
176	A区			SI-19		RF	下端一部欠損	赤色チャート	3.1	(1.9)	0.8	4.54	上端に打面があり、背面に礫面を残す縦長剥片の剥片を用いる。腹面の両側縁を中心に二次加工あり。
177	A区	N-9	d			RF	完存	チャート	2.0	2.6	1.0	5.66	残核の鋭利な左側縁から下縁に二次加工あり。特に下縁では急角度となる。
178	A区	N-11	d			RF	完存	チャート	1.9	2.8	0.9	5.02	上端に打面のあるやや肥厚な縦長剥片の剥片を折取り、その周縁全体に二次加工を施す。
179	A区			SI-79		RF	下部欠損	チャート	3.6	4.4	1.3	19.38	上端に打面のある肥厚な縦長剥片の剥片を用い、その両側縁に二次加工を施す。非常に粗悪な石材で、欠損箇所は節理による。
180	A区			SI-79		RF	上半欠損	チャート	(3.3)	(3.2)	1.1	13.7	肥厚な縦長剥片を用い、鋭利な両側縁に二次加工を施す。下端部には潰れた細かな剥離があり、両側打法が行われた可能性が高い。上半の欠損もこれによるものと思われる。
181	A区			SI-58		RF	完存	チャート	1.9	2.3	0.6	2.97	上端に打面のある小型な剥片を用い、打面部を中心に二次加工を施す。鋭利な右側縁に使用痕あり。
182	A区			SI-58		RF	左右側縁欠損	チャート	(2.5)	(3.3)	0.7	5.21	上端に打面のある縦長剥片の剥片を用い、右側縁上部及び下縁に二次加工を施す。欠損箇所はその後と判断される。

No.	区	グリッド (C)	G 枝番	遺跡名	注記 No.	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
183	A区	M-10	d			RF	上部欠損	チャート	(2.9)	(2.5)	1.1	8.09	上方に打面のある肥厚で台形状の縦長剥片を用い、下縁には腹面から、また左側縁には背面から急角の二次加工を施す。
184						RF	完存	チャート	2.3	3.6	0.8	7.4	横長状の不定形な剥片を用い、ほぼ全周縁に背・腹面の双方から二次加工を施す。上端に存在した打面もその際に除去される。
185	A区	O-9	b			RF	完存	チャート	2.7	2.0	0.9	6.68	上端に打面のある肥厚で小型な縦長状の剥片を用い、右側縁を中心に二次加工を施す。
186	A区	M-11			92	RF・UF	完存	チャート	2.9	3.4	0.5	6	上方に打面のある不定形剥片を用い、打面部から左側縁に二次加工が、また鋭利な下縁に使用痕がみられる。石材は非常に良質チャート。
187	A区	M-117	c			RF・UF	完存	チャート	3.2	3.0	1.0	8.07	上端に打面のあるやや幅広い剥片を用い、左側縁を折り取った後に急角の二次加工を施す。また鋭利な右側縁には微細な使用痕あり。
188	A区	M-10			2	RF・UF	完存	チャート	4.2	3.8	1.0	18.09	上端に打面のある幅広い剥片を用いる。上下両端に連続する二次加工、また鋭利な両側縁に微細な使用痕あり。素材の上下面に礫面があり、磨状チャートの使用であることが分かる。
189	A区				SI-8	RF・UF	上部欠損	珪質頁岩	(2.9)	3.6	1.1	8.53	打面付近を含む上部を節理面より欠損する。左側縁の一部に急角の刃部を、鋭利な右側縁に使用痕あり。
190	A区				SI-80	RF・UF	完存	チャート	3.8	3.8	1.1	15.92	上端に打面のある縦長状の剥片を用い、下方に剥離を連続させ急角の二次加工を施す。また鋭利な両側縁に使用痕あり。
191	A区				SI-80	RF・UF	完存	チャート	3.0	2.5	0.6	5.3	右側縁に打面のある不定形剥片の打面部に二次加工、反対側の鋭利な左側縁に使用痕あり。
192	A区	O-9	b			RF・UF	完存	チャート	3.8	(2.2)	0.5	3.97	上方に打面のある縦長剥片を用いるが、打面はその後に削除され、腹面末端には二次加工が施される。また鋭利な右側縁に使用痕あり。
193	A区				SI-58	RF・UF	下縁一部欠損	チャート	2.8	3.9	0.7	9.82	礫面を伴う上端の平坦面を打面とした不定形な剥片を用い、右側縁にノッチ状の二次加工、また鋭利の下縁に使用痕あり。
194	A区	N-11	a			UF	完存	チャート	(3.0)	(2.3)	0.9	6.76	断面台形状の縦長剥片の鋭利な右側縁に使用痕あり。上端の打面は除去される。
195	A区	N-8			55	UF	完存	チャート	5.7	3.8	1.4	23.77	上端に打面があり、背面に礫面が大きく残る分厚い縦長剥片を用いる。縁辺が鋭利な左側縁から右側縁下方にかけて使用痕あり。
196	A区	N-10			67	UF	下半部欠損	安山岩	(4.4)	3.2	1.1	19.02	上端に打面のある分厚い断面三角形の縦長剥片を用い、鋭利な両側縁に微細な使用痕あり。欠損箇所は後世のもの。旧石器の可能性あり。
197	A区	M-10	d			UF	上部欠損	チャート	(3.2)	(2.5)	1.0	7.86	右側縁及び下面に礫面のある断面楔状の縦長剥片を用い、鋭利な左側縁に微細な使用痕あり。
198	A区	M-11			37	UF	完存	チャート	3.9	2.4	0.6	6.04	上下両端に礫面のある縦長剥片を用い、鋭利な両側縁に微細な使用痕あり。
199	A区					UF	完存	チャート	4.1	1.5	1.0	5.21	礫面を伴う断面三角形の縦長剥片の鋭利な右側縁に使用痕あり。また上下両端に両極打法と思われる濃れあり。
200	A区	M-10	d			UF	完存	チャート	2.8	2.8	0.8	6.79	上方に打面のある縦長剥片を折り取り、その一部を使用か。鋭利な左側縁に微細な使用痕あり。
201	A区	M-10	d			UF	完存	ホルンフェルス	3.1	7.2	1.4	23.28	上面に礫面を残す横長の不定形な剥片。鋭利な下縁に使用痕あり。
202	A区				トレンチ 5	UF	完存	チャート	3.9	2.6	1.2	12.3	上下両端に旧剥離面や礫面のある断面三角形の剥片。その鋭利な右側縁に微細な使用痕あり。
203	A区	O-8			21	UF	完存	チャート	2.2	2.3	0.3	1.83	上端に打面のある薄い不定形な剥片。鋭利な左側縁の下方から下縁にかけて微細な使用痕あり。

第4章 遺構外の出土遺物

No	区	グリップ (G)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
204	A区	M-10	d			UF	完存	チャート	2.0	3.5	0.8	5.6	上端に打面のある縦長剥片。鋭利な周縁部に微細な使用痕あり。
205	A区			SI-58		UF	完存	チャート	1.6	2.7	0.5	1.61	上端に打点のある貝殻状の剥片。鋭利な下縁に微細な使用痕あり。
206	A区	M-10			1	UF	完存	チャート	4.8	2.4	1.0	10.45	上端に打面のある層状チャートより剥離された縦長状の剥片。鋭利な左側縁に使用痕あり。
207	A区	M-10	d			UF	完存	ホルンフェルス	8.3	7.9	1.9	110.78	大型で礫面のある不定形な礫片。縁辺の鋭利な箇所を微細な使用痕あり。
208	A区	O-8			10	UF	完存	ホルンフェルス	7.6	7.3	1.3	79.22	上端に打面のある不定形な大型礫片。鋭利な縁辺に連続する微細な使用痕あり。
209	A区			SI-79		UF	完存	チャート	5.2	2.8	0.7	9.09	上端に打面のある縦長剥片。鋭利な両側縁に微細な使用痕あり。
210	A区			SI-64		UF	完存	安山岩	3.8	2.4	0.6	3.65	上端に打面のある縦長状の剥片。鋭利な両側縁に微細な使用痕あり。
211	A区	M-10	d			UF	完存	ホルンフェルス	4.2	3.4	0.7	10.92	上端に打面のある縦長状の剥片。鋭利な左側縁下方に微細な使用痕あり。
212	A区			SI-8		UF	完存	チャート	3.1	2.4	0.3	2.35	上端に打面のある薄い不定形な剥片。鋭利な周縁部に微細な使用痕あり。
213	A区 北東部					UF	下部欠損	チャート	1.9	2.1	0.5	2.2	上端に打面のある縦長剥片。鋭利な右側縁に微細な使用痕あり。
214	A区	N-11	c			UF	上部欠損	チャート	(3.2)	3.3	0.8	9.72	欠損する上方部は折取りによるものか。鋭利な末端部に使用痕あり。
215	A区	M-10	d			UF	完存	玉髓	2.9	4.2	1.0	8.51	上端に打面のある不定形な剥片。鋭利な末端部分全体に使用痕あり。
216	A区			SI-19		UF	左側縁欠損	チャート	2.0	(4.3)	0.9	5.54	右側上方に打面部は節理面より欠損。鋭利な剥片末端に使用痕あり。
217	A区			SI-19		UF	完存	チャート	3.6	5.0	1.6	18.92	上端に打面のある肥厚な不定形な剥片。鋭利な全周縁に使用痕あり。
218	A区	N-11	a			UF	完存	チャート	4.3	1.1	0.7	3.47	上端に打面のある短冊状の小型な縦長剥片。鋭利な左側縁に使用痕あり。
219	A区	M-10	d			UF	完存	チャート	2.8	2.5	0.7	4.8	上端の礫面を打面とする小型な不定形な剥片。鋭利な箇所を使用痕が、また器面全体にタールに似た付着物あり。
220	A区			SI-58		UF	完存	頁岩	3.7	3.3	0.7	7.54	上端に打面のある不定形な剥片。腹面では下方からの剥離により鋭利な下縁が生じ、この下縁から右側縁全体及び左側縁の一部に使用痕あり。
221	A区	M-10	d			UF	左側縁欠損	珪質頁岩	(2.8)	(2.2)	0.7	2.93	縦長状の剥片を用いるもの左側を大きく欠損する。そのため本来の形状は不明。鋭利な剥片末端に使用痕あり。
222	A区					UF	両側縁欠損	チャート	(2.1)	(4.0)	0.7	5.15	上端に打面のある縦長状の不定形な剥片。鋭利な下縁に微細な使用痕あり。
223	A区			トレンチ 5		UF	完存	チャート	2.6	1.8	0.3	1.44	上端に打面のある小型な縦長剥片。鋭利な両側縁に使用痕あり。
224	A区	M-11			68	石核	完存	チャート	2.6	3.4	1.9	19.49	素材に角礫状の層状チャートを用いる。同素材は各面に平坦面があるため、これらの各面を打面として剥片剥離を行う。最終作業面を正面としたが、各面に剥片剥離が行われている。
225	A区	M-11	b			石核	完存	チャート	2.3	3.0	1.2	9.5	平坦な上面を打面とし、剥片取得に關する最後の作業が正面であり、それ以前には右側縁を打面とする剥片剥離が行われる。層状チャートを使用した良質な石材。
226	A区 西側			SK-72		石核	完存	チャート	3.5	7.3	7.4	229.86	上下面に礫面のある層状チャートを角礫状に分割し、平坦な上下面を打面として、剥片剥離を行う。石核としての厚みがなく、また節理が多いことから、良好な素材剥片は得られなかったようである。

No	区	グリッド (C)	G 枝番	遺構名	注記 No	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
227	A区			SI-80		石核	完存	チャート	3.0	2.6	1.7	14.91	正面に残る礫面の状況から磨状チャートの使用が理解できる。上面には平坦な打面が設定され、最終剥離面が右側面にある。裏面では上下方向からの剥片剥離も認められる。
228	A区	N-8	b			石核	完存	砂岩	2.9	5.3	3.7	54.91	角礫状の礫を分割し、平坦な礫面を打面とする。最終剥離面は正面図の上方から、またそれ以前には下面右方向からの剥離がある。
229	A区			SI-58		石核	完存	チャート	2.7	4.2	2.0	20.64	楕状の大型剥片を用い、平坦な上面に打面調整を繰り返して、素材剥片の取得が行われる。剥片の取得が終了した段階で、鋭利な下縁を使用する。
230	A区			SK-14		石核・RF	完存	ホルンフェルス	6.3	6.0	3.3	130.12	方形の垂角礫を分割し、平坦に近い上面及び右側縁下縁を打面として、素材剥片を取得する。利用後は鋭利な下縁を中心に二次加工あり。
231	A区	M-11	b-2			石核	残核	ホルンフェルス	3.3	9.2	5.8	179.3	分割礫上面の周縁部を打面とし、移動を繰り返しながら剥片剥離を行う。
232	A区	N-8			61	片刃石器	上部欠損	ホルンフェルス	5.3	4.1	1.9	44.47	小型な円礫を用い、腹面と左側縁に礫面を残す。腹面からの片面加工により、下縁に連続的な剥離を施して急角度の刃部を作出する。早期後半の片刃石斧の特徴を備える。
233	A区			SI-52		礫器	完存	ホルンフェルス	11.9	4.6	3.7	262.01	棒状の角礫を用い、右側縁では左側縁と平行になるように、また下方では腹面側から先端部に細かな剥離を施して刃部とする。
234	A区	M-10	d			礫器	完存	ホルンフェルス	8.9	8.0	3.9	403.36	拳大の円礫を用い、下縁にのみ階段状の剥離を施して刃部を作出する。末端部には使用に伴う微細な剥離がみられる。
235	A区	M-11			78	片刃石器	完存	ホルンフェルス	6.0	6.9	2.4	127.64	背・腹面に礫面及び旧剥離面のある板状の礫を用い、腹面からの片面加工により、左右及び下縁に刃部を作出する。
236	A区	M-10	d		2	片刃石器	完存	ホルンフェルス	10.8	12.2	5.8	859.71	大型で垂角礫に近い河原石を用い、その一边に腹面側から階段状の大きな剥離を加えて片刃とする。通常、この場合は早期に伴う片刃石斧とされるが、平坦な腹面を打面として剥片を取得する石核とする考え方もある(城山技法)。
237	A区	N-10			1	蔽石	完存	安山岩	10.8	5.3	4.5	408.13	断面円形の棒状の河原石を用い、割り取った後の下面を蔽打面として使用する。蔽打痕が中央部に集中するが、その外側の剥離はその際に生じたものである。本来、スタンブ形石器であった可能性もあり得る。
238	A区	N-11			26	三角錐状 石器	上下欠損	閃緑岩	(6.4)	(7.3)	(4.4)	229.65	239と接合関係にある。断面三角形の棒状礫を用い、側縁に剥離や蔽打を加えることにより、さらに断面三角形に近づける。下面の欠損面にはその後の加工がみられる。
239	A区	N-11			41	三角錐状 石器	上下欠損	閃緑岩	(5.1)	5.5	5.7	209.57	238と接合するため、当該石器と判断できた。上下面共に右方向からの剥離により欠損する。右側縁の剥離は剥片の取得と考えられることから、石核に転用した可能性もある。
240	A区	N-11			26	三角錐状 石器	上端・刃部欠損	閃緑岩	(9.5)	(8.0)	(5.7)	439.22	238と239の接合以前では、上端の下面の刃部を欠損する。素材に断面三角形の棒状礫を用い、側面の各面に礫面を残しつつ稜線部分に剥離及び蔽打を加えて整形する。下面及び接合面は縦方向からの加撃によるもので、欠損ではなく意図的な剥離であろう。

第4章 遺構外の出土遺物

第18表 石器観察表(2)

(単位:cm・g)

番号 種類	分類・形状	残存率	磨滅	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴	注記
241 磨石		完存	両面	6.00	5.65	2.10	97.34	表裏面磨滅。特に表面中部上部付近に目立つ。安山岩製。	D区表採
242 磨石		1/4	両面	(6.20)	(5.10)	(2.50)	72.04	表裏面磨滅。輝石安山岩製。	SI-58
243 磨石か		完存	両面	10.00	8.20	3.30	397.70	表裏面とも磨滅するが、磨滅の為、石に含まれる粒子が露出し、表面はザラつきがある。玄武岩製。	SI-15
244 磨石か		完存	全面	13.25	5.15	4.70	450.54	全面磨滅。自然礫の可能性が残る。輝石安山岩製。	S-8北東
245 磨石	I 1 ③ ii B エケ	完存	全面	10.55	8.85	4.30	536.85	全面磨滅。図上表面中央下部寄りを頂点としてなだらかに傾斜する。裏面中央はやや凹む。磨面の使用状況を示すものか。図上右側面に浅い凹み。安山岩製。	O-8-13
246 磨石	I 2 ③ ii B オコ	完存	両面	10.20	7.60	4.60	460.15	表面山形の厚み、裏面扁平。裏面中央部は研磨が薄く、浅い凹孔が観察される。側面付近の凹は凹孔か敲打痕とであるか不明。輝石安山岩製。	SI-58-3
247 磨石		完存	両面	9.80	7.30	5.20	507.96	表裏面磨滅。図上左側面中央部は平坦。輝石デイスait製。	SI-58
248 磨石か	I 2 ③ ii B オコ	1/2	全面	(8.35)	(9.30)	(4.80)	494.17	全面磨滅。図は現状で安定する面を裏面とした。側面は平坦でなく鋭角に整形。表面はやや膨らみ、裏面は平坦。浅い凹みが各所にみられる。接地した際、裏面右側にできる隙間(断面図上の裏面右側)を右手で掴むと表面中央部左よりの浅い凹みがかかりとなる。欠損部磨滅。デイスait質溶結凝灰岩製。	M-11-57
249 磨石か	I 2 ① i B エケ	1/2	両面	(7.50)	(8.60)	(5.10)	373.50	表面両側が破碎するが、中央部付近に欠損に伴うかは不詳。表裏面とも中央部付近に研磨面。裏面左上部に石材の亀裂、右上部に僅かな凹み。中央の欠損部の破面は磨滅する部分がある。輝石安山岩製。	M-11-61
250 磨石か		1/2	両面	(8.00)	(4.50)	(3.40)	101.06	表裏面磨滅。輝石角閃石デイスait製。	O-8B
251 磨石か		完存	全面	6.80	6.30	4.30	249.74	全面磨滅するが、特に表面右側面に目立つ。上部を右掌にあて、裏面の凹孔に人差指をあてて握った際の下面にあたる。玄武岩製。	SD-59
252 磨石か		完存	両面	8.90	7.20	3.80	354.65	表裏面中央部磨滅。表面左下側の凹みは敲打痕か。輝石安山岩製。	A区表採
253 磨石か		完存	全面	10.30	6.90	6.00	657.50	裏面平坦で接地すると安定する。この為裏面とした。表面長軸は山状。全面磨滅するが、表裏面の磨滅顕著。表面下部に右掌をあて、凹孔に人差指をあてて握ると安定して持つことができる。輝石安山岩製。	O-9A
254 礫		完存		8.10	5.50	2.60	124.75	磨滅。図上左側をカマド外側に向けて直立。図上左側中央部色調変化、被熱か。輝石デイスait製。	SI-58 カマド
255 礫石器	IV 1 ③ ii B- エク	一部残	両面	(11.40)	(4.70)	(4.40)	221.04	表裏面とも磨滅。側面中央の小孔は敲打痕か。周辺は黒ずむ。安山岩製。	O-8-9
256 礫石器	III 4 ① iii B エケ	完存	全面	13.80	5.80	4.00	474.59	全面磨滅。タテに長い長円形状。図上左側面は平坦で直立する。左側面を底部とし、上方となる右側面を右手で掴むと、裏面の浅い凹みに指がかかる。緑色岩製。	S-8北東
257 礫石器	III 4 ① i B エケ	一部欠	全面	15.20	6.70	5.40	792.18	全面磨滅。図上、右側面は平坦で直立する。上部の破碎部(トーン)は破面の切合の稜は磨滅し鈍い。破碎部を掴むと磨滅した稜に指球があたる。表裏面の僅かな高低差の低面に親指・四指がかかる点は16に似る。斑状黒雲母花崗岩製。	M-10-1
258 礫石器		一部欠	-	(13.40)	(8.10)	(5.80)	851.79	図上、上下を破碎しや長円形状。上部の破面は自然面から段差なく続き磨滅する。下面の破面は段差を有し破碎状況を残す。表裏側面の各面は下部の破面を除き滑らか。流紋岩質溶結凝灰岩製。	O-8-18
259 礫石器	III 1 ① iv Ba エケ	完存	両面	9.40	10.30	1.30	219.71	表裏側面とも磨滅。図上の上・下の周縁を打ち欠くが磨滅。輝石安山岩製。	M-10
260 礫石器		完存	-	10.20	9.40	2.30	315.93	金色ガラス質粒子・白色ガラス質小粒(～0.2cm)を含む礫。縄文土器あるいは土師器の混和材か。表面下部中央付近の凹孔は棒状工具の痕跡とみられる。ホルンフェルス製。	A区表採
261 礫石器	III 2 ① i B- オク	1/2	-	(10.00)	(12.40)	(5.30)	687.34	表面扁平、裏面に膨らみ。表面の小孔が凹孔か不詳。明瞭な研磨面なし。側面中央部の欠損は敲打痕か外形加工であるのか不明。欠損部は磨滅。輝石安山岩製。	N-8-26
262 礫石器		完存	全面	22.80	13.20	10.50	4089.24	図上裏面の破碎する部分を接地面とすると安定する。表面山形。表面から見て左側面は平坦。あるいはこの側面が接地面の可能性もあろう。全面磨滅するが、左側面→表面→裏面の順に磨滅する。輝石安山岩製。	SI-79 カマド2
263 石皿か	IV ④ ii Aa エケ	一部残	全面	(5.20)	(5.00)	(4.20)	77.65	残存部は磨滅。側面は平坦でなく鋭角に整形。多孔質輝石安山岩製。	N-11-谷3

番号 種類	分類・形状	残存率	磨滅	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴	注記
264 石皿か	IV 5 ④ ii C エケ	一部残	全面	(11.30)	(4.60)	(4.50)	172.87	表裏面不明。安定する方を裏面として作図。残存部は磨滅。側面は平坦ではなく三角形。所々に凹があるが、欠損部であるのか凹孔であるのか不明。痕跡が磨滅した部分は敲打痕の可能性を考慮し図示した。多孔質安山岩製。	N-11-d 谷部
265 石皿か	IV 1 ② iii C エケ	一部残	全面	(6.90)	(8.40)	(3.50)	142.21	表裏面不明。安定する方を裏面として作図。残存部は磨滅。表裏面とも凹はあるが、凹孔か不詳。側縁は平坦でなく鋭角。形状加工は不明。多孔質安山岩製。	N-11-44
266 石皿	II 1or2 ①凹 ii Aab エケ	1/4	裏・側	(12.40)	(12.00)	(4.30)	569.59	上が小さい台形状。表・側面は平滑な研磨で整形。表面は平坦で中央部に磨面。裏面の磨面は側縁より低い凹状で磨滅するが小さな凹凸が顕著。右側面の破面は磨滅して平滑。破碎後の二次利用も考えられる。多孔質安山岩製。	N-11-45
267 石皿		一部残	両面	(9.30)	(8.50)	(5.20)	318.34	裏面平坦。表面端部は傾斜する。表・裏やや磨滅。多孔質輝石安山岩製。	N-11 谷4
268 石皿か		一部残	両面	(12.3)	(6.3)	(3.9)	214.28	裏面平坦。表裏面磨滅。多孔質安山岩製。	D区表採
269 石皿	II 2 ①凹 i Aab エケ	1/2	全面	(12.20)	19.20	5.20	1100.74	全面を研磨により整形。本来の形状を活かしていると判断される。両側面中央部は敲打後研磨して直線的な形状を作出か。裏面中央部は平坦で接地面か。表面は凹状に整形し磨面とする。磨面周辺に研磨の痕跡が残る。裏面の凹は不詳。欠損部磨滅。多孔質輝石安山岩製。	O-8-121

第3節 弥生時代の出土遺物

(1) 調査の概要

小片のため図示し得ないが、弥生土器の可能性のある破片が5片 35.04gが出土する。沈線で文様を描く小片は中期の可能性が考えられる。N-9 グリッド、A 西区から出土する。この他、N-9・10・11 グリッドから1片づつが出土する。

第4節 古墳時代～古代の出土遺物

(1) 調査の概要

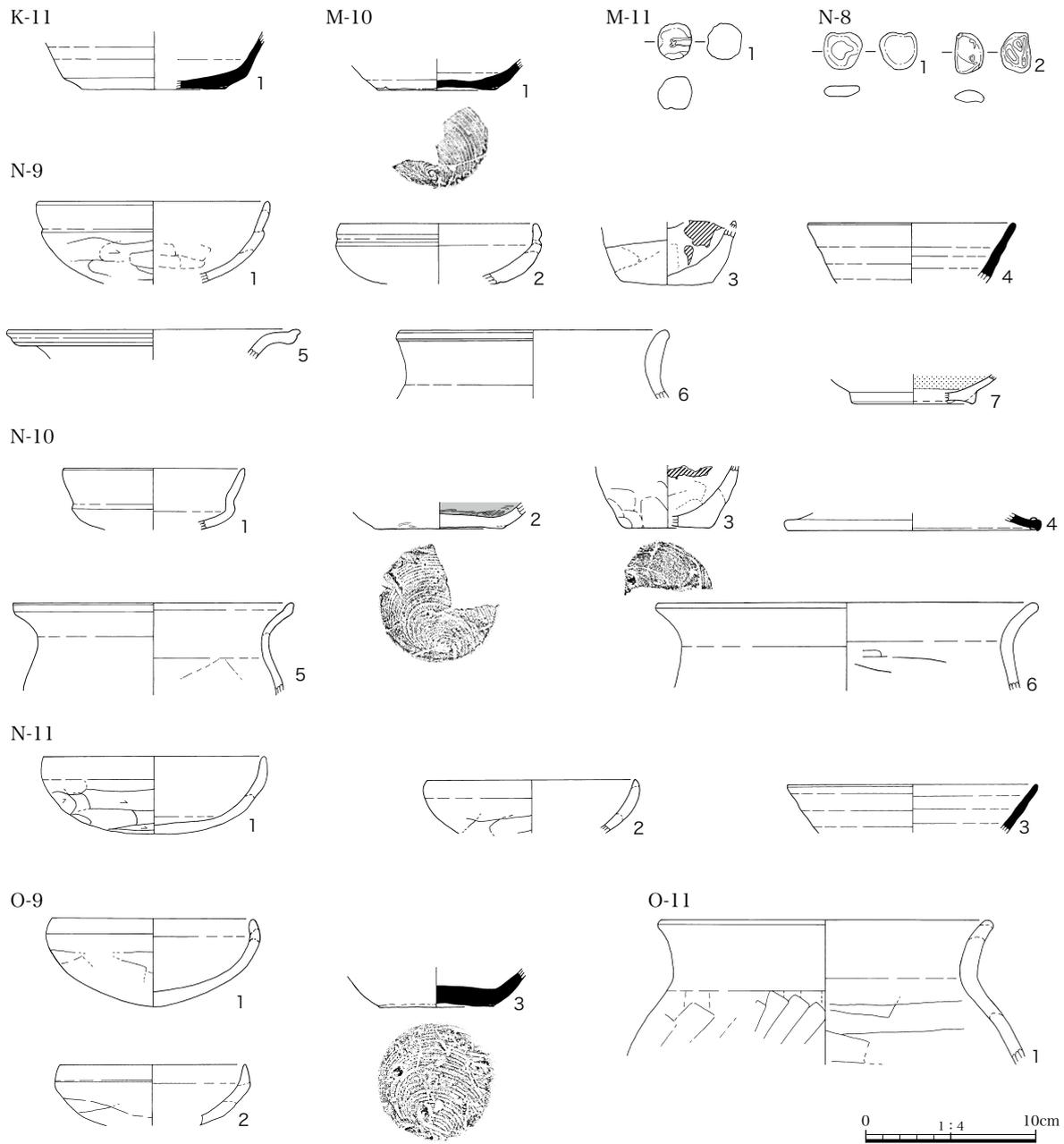
遺構外における古墳時代以降の遺物は、縄文時代の遺物同様にグリッド調査において、小片が散在する状況にある。出土状況を見ると、竪穴建物跡付近の谷部に設定したグリッド(M-11、N-9・10・11)に多くみられる。今回の調査によって確認された遺構が現状よりも深かった可能性や、失われた遺構があったと考えられる。また、当該期の集落範囲が、今回、確認された建物跡が確認された範囲に限られていたと考えることもできよう。

土坑や溝状遺構など中・近世以降とみられる遺構から出土した古墳時代以降の遺物については、流れ込みの可能性が高いと判断される。

報文の記載にあたり、土師器環については、遺構出土と同様に胎土はa～d、口縁部形状は①～④に分別する。土師器鉢は口縁部の形状で判別したが、体部については、甕体部とした破片に紛れている可能性はあろう。灰釉陶器については、小片のため時期の判別が困難である。中世以降に分別すべきものを含む可能性は否めない。なお、報文中のNO付きの番号は第64～66図の番号に対応する。

各器種の出土状況を見ると、土師器環は(a)が主体であるが、O-9グリッドでは、土師器(d)が目立つ。しかし、グリッドを一律に調査し得ていない状況であり、大まかな傾向である点を明記する。

第4章 遺構外の出土遺物



第 82 図 遺構外の出土遺物実測図 (1)

第 19 表 遺構外出土遺物観察表 (1)

K-11		(単位:cm)			
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 須恵器 坏	口:一 底:[8.3] 高:(3.4)	円柱作りか 三和産か ロクロ使用 外:体下が屈曲して立ち上がる	内外:2.5Y5/2 暗 灰黄	白色粒子少量、雲 母粒子微量 良	A区 K-11 南西 底部 1/8 残存
M-10					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 須恵器 坏	口:一 底:[6.8] 高:(1.8)	ロクロ成形 益子産か 底部回転糸切り	内外:10YR6/4 に ふい黄橙	白色粒子・透明ガ ラス質粒子微量 不良	A区 M-10,SK-60 付 近 底部 1/3 残存

第4節 古墳時代～古代の出土遺物

M-11

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土玉	長:2.0 幅:1.9 厚:1.9	最大長:2.1 8.44g 不整な円形 図上:表面に半載竹管状の工具痕が見える	10YR5/2 灰黄褐	白色粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区 M-11C No.5

N-8

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 小礫	長:2.1 幅:2.1 厚:0.6	最大幅:2.3 4.92g 黒色礫 不整な円形で図上表面は凹状 裏面は平坦 丁寧に研磨	N3/0 暗灰		A区 N-8C
2 小礫	長:2.3 幅:1.7 厚:0.7	最大長:2.4 2.89g 白色礫 半円状で図上表面は凸状 裏面は平坦 磨滅するが小さな凹凸が残る	2.5Y7/2 灰黄		A区 N-8C

N-9

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口:[13.4] 底:— 高:(4.8)	立ち上がり丸味 内:ヘラケズリ→ヨコナデ(ヨコナデ下にヘラケズリ痕残る) 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ	内外:7.5YR6/6 橙	白色粒子・雲母粒子少量 良	A区 N-9D 口縁部 1/4 残存
2 土師器 杯	口:[11.6] 底:— 高:(3.5)	立ち上がり丸味 内:ヨコナデ 剥落顕著 外:口ヨコナデ 体器面劣化(磨滅や小さい凹) 内~外(口)ウルシ仕上げ	内外:10YR7/3 に ぶい黄橙	雲母粒子少量 良	A区 N-9B 口縁部 1/6 残存
3 粗製土器	口:— 底:[5.4] 高:(3.7)	灯明皿転用 口破面にもスス付着→破損後転用 内:ヘラケズリ→ナデ(ヨコ) スス付着 外:ナデ(ヨコ)→口ヨコナデ 底:(粗い)ヘラケズリ一方向	内外:10YR8/3 浅 黄橙	黒色粒子多量、黒色ガラス質粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区 N-9 No.21、N-10B 口縁部一部、体~底部 1/2 残存
4 須恵器 杯	口:[12.1] 底:— 高:(3.5)	益子産 ロクロ使用	内外:7.5Y5/1 灰	白色粒子・雲母粒子少量 良	A区 N-9A 口縁部 1/12 残存
5 土師器 常総甕	口:[17.2] 底:— 高:(1.7)	口つまみの形状は8世紀中葉だが小片すぎてわからない 内外:ヨコナデ	内外:7.5YR5/4 にぶい褐	白色粒子多量、黒色ガラス質粒子少量 良	A区 N-9C 口縁部 1/8 残存
6 土師器 甕	口:[16.0] 底:— 高:(4.0)	口縁部の形状は「く」でもなく「コ」でもない 内外:ヨコナデ	内:10YR6/3 にぶ い黄橙 外:7.5YR7/4 に ぶい橙	砂粒多量 良	A区 N-9B 口縁部 1/8 残存
7 灰釉陶器 碗類か	口:— 底:[7.2] 高:(1.7)	内面に釉がかかる 高台を貼り付け後ロクロ成形	内外:10YR6/2 灰黄褐		A区 N-9A、N-10 No.72、N-10C、表採 底部 1/2 残存

N-10

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口:[10.6] 底:— 高:(3.6)	立ち上がり上半丸味 内:ヨコナデ 外:体上ナデ→口ヨコナデ 内~外(口)ウルシ仕上げ 不掲載と同一か	内外:10YR7/3 に ぶい黄橙	黒色ガラス質粒子微量 良	A区 N-10D 口縁部 1/6 残存
2 土師器 碗	口:— 底:7.0 高:(1.5)	ロクロ使用 内面黒色処理 内:体~底ミガキ(体ヨコ→底一方向) 黒色処理 底部回転糸切り	内:N2/0 黒 外:10YR6/4 にぶ い黄橙	白色粒子多量、雲母粒子・砂粒少量 良	A区 N-10 No.55、68 底部 3/4 残存
3 粗製土器	口:[5.0] 底:— 高:(3.6)	最大径:[8.3] 灯明皿転用 内:ヘラケズリ→ナデ 外:ナデ(ヘラケズリの痕跡はないがヘラケズリ後か) 底部回転ヘラ切り	内外:2.5Y8/2 灰 白	雲母粒子少量、透明ガラス質粒子微量 良	A区 N-10A 底部 1/2 残存
4 須恵器 蓋	口:[14.6] 底:— 高:(1.0)	益子産 ロクロ成形	内外:7.5Y5/1 灰	白色粒子多量、砂粒微量	A区 N-10D O-9? 口縁部 1/6 残存
5 土師器 甕	口:[16.4] 底:— 高:(5.4)	常総型 内:ヘラケズリ→ナデ→口ヨコナデ 外:体ナデ→口ヨコナデ	内外:5YR5/6 明 赤褐	雲母粒子・砂粒多量 良	A区 N-10D 口縁部 1/6 残存
6 土師器 甕	口:[22.4] 底:— 高:(5.2)	口内面墨書? 内:ヘラケズリ→ナデ→口ヨコナデ(痕跡深く、ナデで消えない) 外:体上ナデ→口ヨコナデ	内:7.5YR6/6 橙 外:10YR6/6 明黄 褐	白色粒子少量、雲母粒子多量 良	A区 N-10 No.56 口縁部一部残存

第4章 遺構外の出土遺物

N-11

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口: [13.1] 底:— 高:4.5	立ち上がり丸味 内:ヘラケズリ→ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内～外(口)ウルシ仕上げ	内:10YR5/3 にぶ い黄褐 外:10YR8/3 浅黄 橙	緻密 白色粒子・ 透明ガラス質粒子 少量 良	A区 N-11D 谷 No.1 1/2 残存
2 土師器 坏	口: [12.3] 底:— 高:(3.1)	立ち上がり丸味 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内～外(口)ウルシ仕上げ	内:10YR5/3 にぶ い黄褐 外:10YR6/3 にぶ い黄橙	雲母粒子少量 良	A区 N-11A 口縁部 1/8 残存
3 須恵器 坏	口: [14.6] 底:— 高:(2.8)	益子産 ロクロ成形 谷津入窯跡か	内外:7.5Y5/1 灰	白色粒子少量、砂 粒微量 良	A区 N-11B 口縁部 1/8 残存

O-9

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口: [11.9] 底:— 高:5.2	ウルシ仕上げ 内:ナデ→口～体ヨコナデ 口端部分的に剥落 外:底磨減 体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 体上位部分的にヒビ、 成形時の乾燥によるものか 一部器面剥落	割れ口:10YR7/4 にぶい黄橙 内:5YR6/6 橙 外:7.5YR6/4 に ぶい橙	緻密 白色粒子微 量、黒色ガラス質 粒子少量 良	A区 O-9C 口縁部 1/2、体～底 部 1/6 残存
2 土師器 坏	口: [11.0] 底:— 高:(3.5)	内:口～体上ヨコナデ 口端剥落 外:体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ ヘラケズリ粗く器面に稜が残る 口の稜は僅かであるが稜直上は沈線状に残る 内～外(口)ウルシ仕上げ	内:10YR4/1 褐灰 外:10YR8/3 浅黄 橙	やや緻密 透明ガ ラス質粒子・黒色 ガラス質粒子微量 良	A区 O-9C 口縁部 1/4 残存
3 須恵器 坏	口:— 底:6.7 高:(2.2)	最大径:[10.4] 円柱作り 益子産か ロクロ使用	内外:7.5YR5/6 明褐	雲母粒子・砂粒多 量、礫(φ1～2mm) 微量 不良	A区 O-9D 底部完存

O-11

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 甕	口: [19.2] 底:— 高:(8.5)	若干「コ」の字状 肩体上張る 内:ヘラケズリ(ヨコ)→口ヨコナデ 口端黒色劣化(焼成によるものか) 体部分的に汚れ付着 外:ヘラケズリ(タテかナナム)→口ヨコナデ 口端剥離	内:10YR7/3 にぶ い黄橙 外:7.5YR8/4 浅 黄橙	金雲母・黒色ガラ ス質粒子・白色粒 子 良	A区 O-11A 表 採 口縁部 1/6 残存

(2) 古墳時代以降の出土遺物

i) A区

【A区グリッド】

A区 J-9・10 (第16図)

出土遺物は確認されない。

A区 K-9・10・13 グリッド (第16図)

出土遺物は確認されない。

A区 K-11 グリッド (第16・82図 第19表)

〈南西(cグリッド主体)〉 須恵器坏1が出土する。

〈グリッド内〉 土師器坏類体部1片 3.27g、土師器甕体部片1片 22.76gが出土する。

A区 K-12 グリッド (第16図)

〈グリッド内〉 土師器微細片 0.71gが出土する。

A区 L-9 (第16図)

〈南東部(cグリッド主体)〉 土師器坏(a)は①稜あり3片・不明1片、体部1片の4片 35.6g、(b)は体部片2片 7.79gが出土する。7世紀前葉と判断されるものが1片あるが、概ね7世紀代と判断される。土

師器塚（ロクロ使用・黒色処理）は体部1片6.69gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕（薄手・常総型か）は体部片2片6.75gが出土する。土師器甕は体部片4片76.77gが出土する。

〈北東部（aグリッド主体）〉 土師器甕（薄手・常総型か）体部1片61.11gが出土する。土師器甕は体部片1片5.50gが出土する。

須恵器は甕片1片7.28gが出土する。外面に平行叩きを施す。9世紀代の新治産とみられる。

磁器は2片が出土する。1片（8.85g）は内外面に薄緑色釉を施し、内面に雁が連なるような帯状の文様が一巡する。1片（2.12g）は白磁で外面に蓮弁状の印刻を施す。

〈グリッド内〉 土師器坏（a）口縁部形状①2片・体部4片5.88gが出土する。

L-9グリッド周辺では、L-9・M-9付近から土師器甕6片61.85g、土師器甕（常総型）5片55.56g、土師器微細片1.99gが出土する。

A区L-10（第16図）

〈グリッド内〉 土師器高坏裾部1片2.15g、土師器甕体部1片13.13gが出土する。

A区L-11～13（第16図）

出土遺物は確認されない。

A区M-9（第16図 写真図版二・三）

L-9・M-9付近からの出土遺物についてはL-9に記載する。

A区M-10（第16・82図 第19表）

〈a区〉 土師器坏は（a）②稜あり1片7.80g、（b）①稜あり1片3.40gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高坏は裾部（No.123）13.98gが出土する。

〈b区〉 土師器坏は（a）①稜なし①2片・体部2片16.46gが出土する。（b）体部2片4.04g、（d）体部1片2.83gが出土する。7世紀代と判断される。

〈c区〉 土師器台付甕1片12.83gが出土する。8世紀後葉～9世紀中葉であろう。

〈d区〉 土師器坏（a）①1片5.53g、（c）③1片14.76gが出土する。7世紀代と判断される。土師器甕体部18片179.08gが出土する。土師器甕（常総型）頸部2片13.99gが出土する。この他、土師器微細片20.85gが出土する。

〈北東部（aグリッド主体）〉 土師器鉢類あるいは甕類頸部1片4.27g、須恵器坏底部（新治産か）1片9.48g、（三毳産か）1片7.75gが出土する。

〈グリッド内〉 土師器坏（a）①稜あり1片・稜なし1片、③稜あり2片24.41g、体部2片27.80gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高坏は裾部1片3.97gが出土する。この他、土師器微細片6.56gが出土する。この他、土師器微細片9.86gが出土する。

須恵器坏は1が出土する。益子産9世紀第2四半期と考えられる。この他、須恵器坏体部（三毳産か）1片3.91g、甕体部（新治産）1片16.05gが出土する。甕片は外面に平行叩きを施す。9世紀代とみられる。

A区M-11（第16・82図 第19表 写真図版二九）

〈a区〉 土師器坏は（a）①稜あり1片・体部微細片4.64gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高坏は裾部1.98g出土する。土師器甕は体部1片5.07gが出土する。この他、土師器微細片12.82gが出土する。

〈b区〉 土師器器種不明1片3.24gが出土する。

〈c区〉 土師器坏は（a）①稜なし1片・②1片、体部7片39.15gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高坏は坏・脚接合部1片11.82gが出土する。土師器甕は口縁部1片・体部2片50.59gが出土する。

第4章 遺構外の出土遺物

この他、土師器体部2片7.24gが出土する。

A区M-12(第16図)

出土遺物は確認されない。

A区N-8(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈c区〉土師器微細片13.23gが出土する。

A区N-9(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉土師器坏は(a)①稜あり1片・稜なし1片・③1片、体部2片18.38gが出土する。7世紀代と判断される。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は口縁部3片・体部1片13.46gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕は口縁部2片・体部12片(No.7・No.10を含む)55.40gが出土する。土師器鉢類あるいは甕類口縁部1片1.82g、土師器微細片25.37gが出土する。

須恵器坏は4の他に、口縁部1片2.02gが出土する。益子産とみられる。4は7世紀前葉とみられる。

〈b区〉土師器坏は2の他に、(a)①稜あり2片・不明1片、体部9片54.92g、③1片6.45gが出土する。2は7世紀前葉、これ以外は7世紀代と判断される。この他、坏とみられる破片4片13.21gが出土する。土師器甕は6の他に、体部7片74.71gが出土する。6は9世紀前葉～中葉とみられる。土師器甕(常総型)は体部6片20.71gが出土する。9世紀代と判断される。この他、土師器微細片30.69gが出土する。

粗製土器は3が出土する。6世紀末葉～7世紀初頭とみられる。

〈c区〉土師器坏は(a)①1片・③3片・不明2片、体部4片、微細片を併せ54.78g、(d)①稜あり1片、体部2片24.13gが出土する。7世紀代と判断される。土師器坏で赤彩を施す体部片2片1.37g、赤彩の可能性のある破片1片1.37gが出土する。土師器高坏は裾部1片1.78gが出土する。土師器甕は体部12片75.96gが出土する。土師器甕(常総型)は口縁部2片14.06gが出土する。9世紀代と判断される。この他、土師器微細片59.11gが出土する。

須恵器坏は口縁部1片12.67gが出土する。産地は不明である。三毳産の可能性はあろう。

〈d区〉土師器坏は1の他に、(a)①稜あり1片・稜なし2片・③稜あり3片・不明2片、体部5片、微細片を併せ84.07g、(b)口縁部1片、体部8片59.80g、(d)①稜あり1片・稜なし1片6.86g、③口縁部2片・体部2片38.29gが出土する。不掲載の(a)①稜なしの1片、③の2片は6世紀末葉・7世紀初頭～7世紀中葉、1は7世紀前葉、これ以外は7世紀代と判断される。この他、坏とみられる破片6.02gが出土する。土師器甕は体部3片20.72gが出土する。9世紀代と判断される。この他、土師器微細片24.59gが出土する。

〈グリッド内〉土師器甕(常総型)は体部1片7.35gが出土する。この他、土師器微細片8.17gが出土する。

A区N-10(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉土師器微細片1片1.51gが出土する。

粗製土器は3が出土する。6世紀末葉～7世紀初頭とみられる。

〈b区〉土師器坏は(a)①稜なし2片・不明1片、体部(No.58を含む)6片、微細片を併せ42.39g、(b)①稜あり1片・体部2片(No.73を含む)12.29g、(d)①稜なし1片・体部1片7.73gが出土する。7世紀代と判断される。この他、坏とみられる体部3片18.43gが出土する。土師器碗(ロクロ仕上げ・内面黒色処理)は2が出土する。No.55・No.68が接合する。9世紀前半とみられる。土師器甕(薄手)は体部5片16.37g出土する。土師器甕は6の他に、体部3片27.69g出土する。土師器甕(常総型)は微細片1.80gが出土する。6は8世紀後葉～9世紀前葉と見られる。この他、土師器微細片3.69gが出土する。

須恵器坏は底部2片が出土する。何れも底部は回転糸切りで切り離す。産地は不明であるが、三毘産(3.29g)・新治産(7.69g)の可能性が考えられる。

〈c区〉 (a) ①稜あり3片・稜なし2片・不明1片(No.30)、体部8片(No.31を含む)、微細片を併せ75.49g、(b) ①稜あり2片・③1片、体部14片74.81g、(d) ①稜なし1片・不明2片、②稜なし1片(No.26)体部4片39.02g、赤彩を施す模倣坏口縁部1片1.16gが出土する。7世紀代と判断される。この他、坏とみられる4片54.73gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は体部1片・底部1片8.83gが出土する。底部は回転糸切りで切り離す。土師器甕(薄手)3片13.43gが出土する。土師器甕は口縁部2片・体部8片(No.27を含む)102.29gが出土する。No.27は胎土は緻密である。この他、土師器微細片4.41gが出土する。

須恵器坏は体部1片1.31gが出土する。産地は不明である。

〈d区〉 土師器坏は1の他に、(a) ①稜あり9片・稜なし1片・不明1片、②稜なし3片、③稜あり5片(No.4を含む)、体部9片(No.8を含む)、微細片を併せ103.49g、(b) ③稜あり4片・不明1片、体部14片90.48g、(d) ①稜なし1片・不明1片7.18gが出土する。不掲載の(a) ①1片は6世紀末葉～7世紀初頭、1は7世紀中葉、この他は7世紀代と判断される。bの体部片のうち1片はヘラ記号とみられる沈線が観察される。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は口縁部2片・体部2片・底部2片30.67gが出土する。底部は回転糸切りで切り離す。土師器高坏は坏・脚接合部1片3.58gが出土する。土師器鉢は口縁部1片14.71gが出土する。土師器甕は口縁部5片・体部16片(No.7・11・22を含む)222.47gが出土する。甕口縁部のうち1片は油煙状の付着物が残る。No.7・11・22の胎土は緻密で、No.7・22の器面は赤色変化する土師器甕(常総型)は5の他に、口縁部2片・体部10片42.91gが出土する。5は9世紀後半の小形甕あるいは台付き甕の可能性が考えられる。この他、土師器微細片48.87gが出土する。

須恵器坏は口縁部(益子産)1片1.75g・底部1片4.43gが出土する。底部は二次底面である。須恵器蓋は4(益子産)が出土する。

〈北東(a区主体か)〉 土師器坏は(a) ①稜なし1片2.78gが出土する。

〈グリッド内〉 土師器微細片84.05gが出土する。

灰釉陶器は高台付坏7(図はN-9)(26.19g)が出土する。A区表採の小片と接合する。

A区N-11(第16・82図 第19表)

〈a区〉 土師器坏は(a) ①稜あり4片・稜なし3片、③稜あり4片・不明1片、体部14片、微細片と併せ190.26g、(b) ③稜あり2片・不明1片、体部2片22.20g、(d) ②稜なし2片、③稜あり2片35.04gが出土する。(a) ①稜ありの1片は6世紀末葉～7世紀初頭、これ以外は7世紀代と判断される。土師器甕は体部2片15.37gが出土する。この他、土師器微細片83.98gが出土する。

須恵器蓋1片3.15gが出土する。新治産の可能性が考えられる。須恵器甕は2片が出土する。外面にタテ方向の平行叩きを施す。9世紀代の新治産であろう。b・d区出土の破片と同一個体とみられる。併せて74.92gである。

〈b区〉 土師器坏は(a) 体部1片、微細片と併せ14.23g、(b) 体部5片29.52gが出土する。7世紀代と判断される。この他、土師器微細片37.83gが出土する。

須恵器坏は口縁部1片10.08gが出土する。8世紀第4四半期の益子産であろう。須恵器甕は2片が出土する。a・b・d区から出土する破片と同一個体とみられる。〈a区〉に記載する。

〈c区〉 土師器坏は(a) ①稜あり1片、微細片と併せ25.32gが出土する。7世紀代と判断される。土師器碗(ロ

第4章 遺構外の出土遺物

クロ使用)は1片2.13gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕は体部2片32.64gが出土する。うち1片はd区出土の1片と同一個体とみられる。この他、土師器微細片27.86gが出土する。

〈d区〉土師器坏は1(a)①の他、(a)①稜あり1片・稜なし1片、体部5片、微細片と併せ72.17g、(b)①稜あり1片、体部4片25.14gが出土する。7世紀代と判断される。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は1片1.55gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕は体部2片18.50gが出土する。うち1片はc区出土の1片と同一個体とみられる。この他、土師器微細片9.21gが出土する。

須恵器甕は2片が出土する。a・b・d区から出土する破片と同一個体とみられる。〈a区〉に記載する。

〈北東(c区主体か)〉(d)体部2片11.49gが出土する。7世紀代と判断される。

〈北西(a区主体か)〉土師器甕体部1片6.67gが出土する。

A区N-12(第16図)

出土遺物は確認されない。

A区O-8(第16図)

〈c区〉土師器甕体部6片53.79gが出土する。同一個体とみられる。この他、土師器微細片2.34gが出土する。

A区O-9(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉土師器坏は(a)微細片6.22g、(b)①稜あり1片、体部4片、微細片と併せ19.86g、(d)体部3片8.24gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は同一個体の口縁部2片・体部1片、異個体の体部1片・底部1片、微細片と併せ28.01gが出土する。土師器甕は口縁部1片、体部15片117.44gが出土する。体部片は器厚の狭広、胎土の粗密のあるものを一括する。土師器甕(常総型)は口縁部2片、体部19片、微細片を併せ9.69gが出土する。体部は胎土に金雲母の混入が少ない。この他、土師器微細片33.46gが出土する。

粗製土器1片9.05gが出土する。口・底径の差が小さく高さのない形状とみられる。6世紀末葉～7世紀初頭と判断される。

〈b区〉土師器坏は(a)①稜あり4片、稜なし2片、②稜なし2片、③稜あり4片、不明2片、体部2片、微細片と併せ99.72g、(b)①稜あり1片・不明1片、体部6片51.88gが出土する。(d)①稜なし1片、体部2片15.47gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は体部3片10.11gが出土する。土師器甕(常総型)は口縁部1片、体部4片20.08gが出土する。体部は胎土に金雲母の混入が少ない。この他、土師器微細片46.80gが出土する。

須恵器坏は口縁部片1片2.4gが出土する。益子産であろう。

〈c区〉土師器坏1(d)①の他、(a)①稜あり2片、③稜あり1片、体部2片、微細片と併せ56.51g、(d)③稜あり2片11.38gが出土する。1は7世紀前葉、これ以外は7世紀代と判断される。この他、赤彩を施す体部2片3.59gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は口縁部1片2.89g、体部2片5.50gが出土する。体部のうちの1片は墨書とみられる(写真図版二九)。土師器甕は口縁部1片、体部7片、微細片と併せ57.82gが出土する。

須恵器坏は体部片1片1.37gが出土する。産地は不詳であるが、三義産の可能性もあろう。須恵器甕は体部1片23.18gが出土する。益子産であろう。

〈d区〉土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は口縁部2片、底部2片、微細片と併せ57.21gが出土する。底部は回転糸切りで切り離す。土師器甕は口縁部1片、体部1片15.70gが出土する。この他、土師器微細

片 4.41g が出土する。

須恵器環は 3 の他、体部 2 片が出土する。3 は 9 世紀第 2 四半期～中葉とみられる。体部片のうち、1 片は益子産で 3.65g、1 片は 7.29g で三毳産の可能性があろう。

〈グリッド内〉 土師器環は (d) 口縁部 1 片 2.76g が出土する。土師器甕（常総型）は体部 1 片 35.51g が出土する。

A 区 O-10（第 16 図）

〈a 区〉 土師器環は (a) 稜あり 1 片・不明 1 片、体部 2 片、微細片を併せ 17.08g、(b) ②稜あり 2 片、③ 2 片、不明 1 片、体部 7 片 41.39g、(d) ②稜あり 1 片・稜なし 1 片、体部 1 片 14.95g が出土する。

須恵器環は体部 1 片 3.40g が出土する。産地は不明であるが、胎土は白味が強く、小礫を含む。

〈グリッド内〉 土師器甕は口縁部 2 片、頸部 2 片、体部 11 片 79.90g が出土する。口縁部片のうちの 1 片は油煙状のススが付着する。土師器甕（常総型）は体部 8 片 33.88g が出土する。この他、土師器微細片 38.34g が出土する。

A 区 O-11（第 16・82 図 第 19 表）

〈a 区〉 土師器甕 1 が出土する。7 世紀中葉あるいは 9 世紀中葉の何れかと考えられる。

A 区 P-8（第 16 図）

〈d 区〉 土師器微細片 3.36g が出土する。

A 区 P-9（第 16 図）

〈グリッド内〉 須恵器鉢類口縁部 1 片 99.59g が出土する。手捏ねで器厚がある。益子産とみられる。

A 区 P-10（第 16 図）

出土遺物は確認されない。

【トレンチ】

A 区トレンチ 5 (T5)（第 8・83 図 第 20 表 写真図版一七）

土師器環 (a) ① 1 の他に、土師器環 (a) ①稜あり 2 片・稜なし 1 片・不明 1 片、体部 2 片 67.54g、(b) ①稜なし 1 片 3.76g、(d) 体部 3 片 18.13g が出土する。1 は 7 世紀中葉頃まで、この他は 7 世紀代と判断される。

【A 区内】

A 区南東部（第 16 図 写真図版二）

土師器甕体部 1 片 3.18g が出土する。

A 区南西部（第 16 図）

土師器甕口縁部 1 片 0.71g が出土する。

A 区谷部（東側）（第 16 図）

土師器甕体部 1 片 12.96g、須恵器甕体部 1 片 11.70g が出土する。

A 区内（第 16 図）

土師器環は 2・3 の他に、①稜なし 2 片、③稜あり 4 片、体部 5 片、微細片を併せ 82.32g、(b) 微細片 1.58g、(d) ①稜あり 1 片、体部 3 片 42.70g、赤彩を施す体部片 1 片 2.07g が出土する。2 は 6 世紀末葉～7 世紀初頭、3 は 7 世紀前葉あるいは中葉と判断される。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）口縁部 1 片、微細片を併せ 3.05g が出土する。土師器碗（ロクロ使用）体部 1 片・微細片 4.98g が出土する。土師器高環は裾部 1 片 14.91g が出土する。7 世紀中葉とみられる。土師器甕は口縁部 7 片、体部 20 片 145.00g が出土

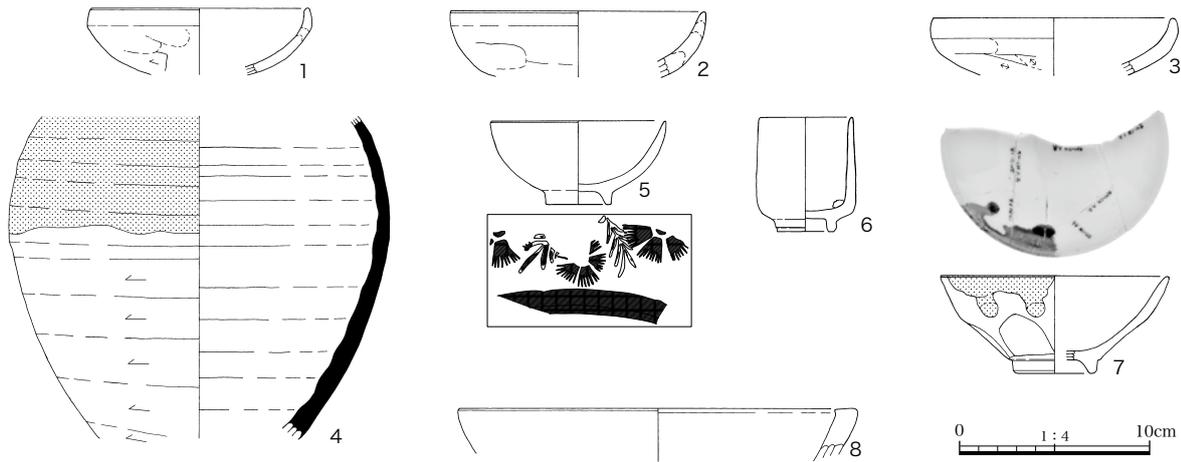
第4章 遺構外の出土遺物

する。土師器甕（薄手）は口縁部2片、体部9片64.76gが出土する。土師器甕（常総型）は口縁部3片、体部17片、底部1片244.95gが出土する。

須恵器甕は体部1片、底部1片が出土する。体部はタテ方向の平行叩きを施す。9世紀代の新治産と考えられる。底部片80.83gは益子産とみられる。底部の器壁は厚い。

自然釉の付着する須恵器は3片が出土する。坏体部1片3.83g・底部1片1.93g、高台付坏1片6.77gである。体部は新治産とみられる。底部は回転糸切りで切り離す。産地は不明であるが三義産の可能性が考慮される。

瓦は2片が出土する。男瓦1片32.70gは内面に布目痕が観察される。1片17.26gは片面が剥離してお



第83図 遺構外の出土遺物実測図(2)

第20表 遺構外出土遺物観察表(2)

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口:[11.6] 底:— 高:(3.5)	立ち上がり丸味 ウルシ仕上げ 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ	内外:10YR7/3 に ぶい黄橙	黒色粒子少量 良	A区T-5 口縁部1/10 残存
2 土師器 坏	口:[13.7] 底:— 高:(3.4)	内:ヨコナデ 外:体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 痕跡薄い 内~外(口) ウルシ仕上げ	内外:10YR8/3 浅 黄橙	白色粒子・雲母粒 子微量 良	A区表採 口縁部1/6 残存
3 土師器 坏	口:[12.6] 底:— 高:(2.95)	立ち上がり丸味 内:ヨコナデ 口端漆剥げている 外:体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内~外(口) ウルシ仕上げ	内外:10YR6/4 に ぶい黄橙	赤色粒子・黒色粒 子微量 良	A区表採 口縁部1/6 残存
4 須恵器 瓶類	口:— 底:— 高:(17.1)	ロクロ成形後、体下半ヘラナデ 体上位自然釉 最大径:[20.0]	内外:10YR6/2 灰 黄褐	砂粒多量、白色粒 子少量 良	A区表採 体部一部残存
5 磁器 小碗	口:[9.2] 底:3.4 高:4.3	丸形 見込み無し 外:なでしこ(青・黄) 葉(緑) 体下金褐色・薄黄色を帯状に配する 高台:底 釉が薄いか剥げているか 文様は染料 大正末葉~昭和初期の量産品か	内外:5PB9/0		A区SK-60付近、SD- 59 口~体部1/3、底部 1/2 残存
6 磁器 小碗	口:[5.2] 底:3.0 高:6.0	筒形 内:無文 胎土の小塊か この上から施釉 外:枝・葉 手描き 高台:底 釉薄いか剥げている 大正末葉~昭和初期の量産品か	内外:10B9/1 文様:2.5YR2/0		A区SK-60付近 口縁部1/6 残存、底 部完存
7 磁器 大碗	口:12.0 底:[4.4] 高:5.1	SD-59の10と同時期 大正末葉~昭和初期か 内外:鉄釉垂下 外:蓮弁(六弁)を印刷 高台底無釉	内外:5YR8/0		A区表採 1/2 残存
8 内耳土器	口:[20.8] 底:— 高:(2.8)	小片であるが挟れなく立ち上がる	内:5YR4/4 にぶ い赤褐 外:5YR2/1 黒褐	金雲母粒子多量、 砂粒少量 良	D区東 口縁部一部残存

り詳細は不明である。

A 西区 (第16図 写真図版一六)

土師器坏(a)口縁部1片1.57g、(b)体部1片5.42g、土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)体部1片9.58g、土師器甕口縁部1片・体部7片60.48g、土師器甕(常総型)体部5片27.62g、土師器碗(ロクロ使用)或いは須恵器坏体部1片3.28gが出土する。土師器碗(ロクロ使用)は9世紀代とみられる。

須恵器甕は体部3片、底部2片が出土する。体部のうち2片は益子産で24.21g、1片は外面に平行叩きを施す新治産とみられ6.99gである。底部2片の産地は不詳であるが、1片(3.43g)は三毳産、1片(12.56g)は南那須産の可能性が考慮される。

ii) B区

出土遺物は確認されない。

iii) C区

【トレンチ】

トレンチ15-C(T-15-C)から土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)微細片0.44gが出土する。プラスチック片の確認もあるため、地形の改変時の混入と判断される。C区に所在するものか、他所からの搬入であるかも不明である。

iv) D区

【D区内】

土師器坏(a)①稜あり1片1.91g、土師器甕体部3片30.77g、土師器甕(常総型)1片0.58g、土師器微細片2.97gが出土する。

須恵器坏は口縁部1片・体部1片6.13gが出土する。益子産とみられる。

第5節 中・近世以降の出土遺物

(1) 調査の概要

調査区内、グリッド内に散見される。小片が多く、時期の判別が難しい。多くは大正時代末葉から昭和初期の量産品の陶磁器とみられる。土師質土器・瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器・磁器に区分して記載する。土師質土器は、土師器坏と混同する可能性は否めない。また、現代の瓦片、ガラス片なども確認されるため、地形の改変に伴い他所から流入した可能性も考えられる。

磁器は、遺構(A区第16・37・62・90号土坑)、グリッド(L-9)出土の磁器についても、本節において記載する。

(2) 中・近世以降の出土遺物

i) A区

【土師質土器】

手握ねの土師質土器小皿は、N-9-aグリッドから体部2片7.12g、N-11グリッド北西部から体部1片4.69g、SK-10との間から体部2片5.29g、A区表採で体部5片24.91gが出土する。

第4章 遺構外の出土遺物

ロクロ成形の土師質土器小皿は M-10-d グリッドから底部 1 片 6.42g、A 区内から底部 1 片 4.56g が出土する。

【内耳土器】

M-10 グリッドから底部 1 片 3.85g、M-11-a グリッドから体部 1 片、5.42g、M-11-c グリッドから体部 1 片 7.42g、A 区内から口縁部 1 片・体部 1 片 46.93g が出土する。何れも胎土に金雲母を含む。

【瓦質土器】

K-11 グリッドから片口口縁部 1 片 133.34g が出土する。

【無釉陶器】

O-9 グリッドから、香炉あるいは手焙状の体部 1 片 4.33g が出土する。推定される形状は茶道具の灰器に似る。

A 区から香炉あるいは手焙とみられる口縁部 1 片 8.44g が出土する。口縁部下に花文を陰刻する。この他、器種不明の体部 1 片 26.15g が出土する。

【施釉陶器】

A 区 N-9 (第 16 図)

筒状製品の体部下端片 1 片 2.98g が出土する。内外面に暗茶褐色の鉄釉を施す。外面下端は無釉である。茶入の可能性もあろう。

A 区 N-10 (第 16 図)

〈c 区〉 皿類体部 1 片 1.63g が出土する。外面は無釉であるが、内面に白濁釉を施す。器壁は薄い。

A 区 M-10 (第 16・83 図 第 20 表 写真図版二九)

〈d 区〉 筒状製品の体部片 1 片 13.27g が出土する。内外面に茶褐色の鉄釉を施す。外面は明瞭に残るロクロ目に釉が溜まり濃いめの色調となる。茶入の可能性もあろう。

〈グリッド内〉 磁器小碗 5・6 は大正時代末葉から昭和初期の量産品であろう。

A 区内 (第 16 図)

〈南西〉 皿類底部 1 片 5.54g が出土する。高台の付く可能性もある。内外面に白褐色釉を施す。

〈西〉 急須状の体部 1 片 1.52g は A 区内から出土する破片の同一個体あるいは同形の量産品であろう。

〈谷部 (東側)〉 小形壺とみられる口縁部 1 片 6.53g は内面上端部から外面に茶色釉を施す。

〈A 区内〉 小筒碗体～底部 1 片 23.77g は内外面に白濁色釉を施す。内面は無文であるが、外面は梅木文を描く。

皿類とみられる底部 1 片 5.78g は内面に白濁色釉を薄く施す。外面は無釉であるが、釉下の素地の部分の可能性もあろう。底部に 2 mm ほどの高台状の高まりがあり、目跡が残る。中世の可能性が考慮される。

瓶あるいは壺類とみられる体部 1 片 13.96g は内面に褐色釉、外面に黒褐色釉を施す。鉄釉であろう。

急須とみられる体部片 1 片 1.56g は 〈西〉 から出土する破片の同一個体あるいは同形の量産品であろう。

器種不明の体部 1 片 20.37g は内面に茶褐色の鉄釉を施す。外面は無釉である。

【磁器】

A 区内 (第 16・83 図 第 20 表 写真図版二九)

磁器大丸碗 7 は大正時代末葉から昭和初期の量産品であろう。この他、中丸碗或いは中丸碗と推定される破片 11 片、飯盛碗 3 片、碗類 1 片、皿類 1 片、皿或いは鉢類 1 片が出土する。

中丸碗は、第 59 号溝状遺構 3 と同じ文様を持つ 1 片 (7.39g)、外面に呉須で文様を描く 1 片 (1.97g)、

内面に呉須で「呉服」と記し外面体～底部に鉄釉を施す1片(6.08g)、内外面無文の1片(6.13g)、同じく無文の口縁部1片・体部1片(27.38g)、やや濁った白色釉を施す1片(1.64g)、内面無文・外面体下部に圏線と図柄不明の文様を描く破片4片(23.72g)である。図柄不明の4片は肥前系に似る在地の製品と考えられる。大正時代～昭和初期の製品の可能性がある。

飯盛碗は、内外面に第59号溝状遺構と同様の緑色釉を施す3片(65.37g)、外面に橙色・オリーブ色で意匠不明の文様をプリントする口縁部1片(14.09g)である。

碗類は、A区第16・62号土坑と同種で外面に意匠不明の文様を描く1片(2.45g)である。

皿或いは鉢類は、内外面に呉須で文様を描く体部片1片(4.46g)で、内面は重線状、外面は牡丹とみられる文様を型紙で施す。第59号溝状遺構7と同種の手法とみられる。

A 西区内(第16図 写真図版一六)

器種不明の体部2片(3.37g)が出土する。

ii) D区

D区内(第7・83図 第20表)

内耳土器8が出土する。

第6節 土玉・小礫・粘土塊等

(1) 調査の概要

時期の判別が困難な遺物を記載する。土玉は1点、小礫は3点を報告する。

(1) 土玉

A区M-11(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈c区〉土玉は1(No.5)が出土する。

(2) 小礫

A区N-8(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈c区〉小礫は1・2が出土する。基石の可能性が考えられる。1は黒色で丁寧な研磨が観察される。2は白色で磨滅するが研磨であるか判別できない。

A区N-9

軽石1片9.15gが出土する。

(3) 粘土塊等

粘土塊は、N-10グリッドから1点5.94g、N-10-dグリッドから3点6.79g、A西区から1点3.69gが出土する。遺構内からの出土した443.92gをあわせ、総量460.34gが出土する。多くは破砕片で不整形であるが、手で丸めたような形状のものもある。また、草本類の茎などを混和剤とした痕跡が確認されるものがある。焼成の具合や色調は土師器に似るが、時期などの詳細は不明である。

第5章 総括

第1節 調査の概要

今回の調査では、竪穴建物跡 11 軒・土坑 43 基・ピット 12 基・溝状遺構 4 基が確認された。各区の内訳は、A 区：竪穴建物跡 11 軒・土坑 28 基・ピット 5 基・溝状遺構 2 基、A 西区：土坑 2 基・ピット 2 基、B 区：土坑 5 基・溝状遺構 1 基、C 区：土坑 3 基・ピット 5 基・溝状遺構 1 基、D 区：土坑 1 基、D 南区：土坑 4 基であり、A 区に集中する傾向にある。遺物は遺物収納箱（小）約 48 箱分が出土する。グリッドや調査区内から出土する縄文時代の土器片、石器・剥片類が主体である。遺構からの遺物出土量は総じて少ない。破片数・重量は報文中に記載した。

基本土層（第3章第1節）の確認から、現況の地形は削平および客土により改変されたものであることが明らかであり、本来は、A 西区北東部-C 区東端部-D 東区付近を頂部として、東・西・南側の谷部へ傾斜する地形であったと想定される（第84図）。A 区は調査区の鹿沼軽石層の平面的な範囲やトレンチ 6 などの堆積状況から、遺構重複部を囲むように比較的険しい傾斜があったと考えられる。遺構は、狭量な平坦面あるいは緩斜面が選地されたのであろう。A 西区は北東端部から南方向へ緩やかに傾斜し、B 区に至る。東・西側の谷部は B 区南側で合流し南方向へ延びる。B 区は谷部に沿って比較的急勾配で西・南側へ傾斜する。C・D 区は西側の谷部に向けた傾斜地である。今回の調査では、東側の谷部に面する A 区に遺構が集中する傾向が認められた。A 区の北側については、確認調査のトレンチの設定もなく不明であるが、谷を挟んだ大坂遺跡（第6図）や調査区南方に位置する三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡（第6図・第21表）の遺構配置から、A 区のような遺構がある可能性が残る。

A 区では遺構確認面での遺物の確認が顕著であったため、グリッド杭を基準にした面的な掘削による調査を行った。A 区に堆積する黒色土（第84図）より、一定量の縄文時代早期～前期の土器片や石器が出土したことから、調査時にはこの時期の遺物包含層と捉えたが、その後の整理作業時の検討から、この層が基本土層（第9～11図）3層下の4・5層にあり、層中に土師器等後世の遺物も少量含むほか、早期前半～前期後半までの幅広い型式が大きなレベル差・層位差なく出土していることが確認された。また、ある程度の平面的なまとまりもみられるものの、調査区内の広い範囲に亘っての包含層の調査を行っておらず、遺物集中の平面的な広がりについても不明なことなどからも、第一次的な遺物廃棄によるプライマリーな縄文時代早期～前期の包含層と捉えることは難しいと判断するに至った。また、土師器、須恵器、粗製土器、土玉の多くが竪穴建物跡周囲の M-11-d グリッド、N-8-b グリッド、N-9-a・b グリッドに出土する傾向にあることから、竪穴建物構築時に整地作業が施された可能性も推定でき、このような人的要因、縄文時代以降の斜面崩壊・地すべり、浸食等の自然的要因、削平・客土などの人為的な地形改変に伴う台地上部に堆積していた遺物群の斜面下方への移動など、調査区内における包含層の成因・性格については、更なる検討が求められよう。

第2節 縄文時代

調査区内の採集遺物、グリッドから土器、石器が出土する。遺構の確認はない。

縄文土器の分別は報文中に記載した。何れも小片で、図示し得た破片は少ない。また、小片のため型式に分別できない破片も多い。このような状況下ではあるが、草創期・早期の各型式の出土がある点、比較的出土量が多い点は今回の調査の特徴といえよう。型式ごとの出土量をみると、多くは条痕文系の破片であるが主

たる時期は茅山上層式期と推定される。

条痕については、条痕の幅に広・狭が観察されたため、当初は、特広:2.5 mm前後・広:2.05 mm前後・中:1.55 mm前後・狭:1.0 mmを基本に観察したが、特定の結果を得られず、報文には記載しなかった。

石器は、石鏃 74 点、石鏃未製品 18 点（不掲載 3 点を含む）、石錐 12 点、石槍 1 点、尖頭器 3 点、くさび形石器 7 点、石匙 2 点、搔削器 36 点、二次加工のある剥片 35 点、二次加工のある剥片で一部に使用痕のあるもの、使用痕のある剥片 8 点、使用痕のある剥片 36 点、二次加工や使用痕が観察されない剥片 336 点（可能性のあるものを含む）、石核 8 点、礫器 5 点、敲石 1 点、三角錐状石器 3 点、磨石・石皿類 29 点が出土する。石鏃は茎を持つ形状の出土は第 70 図-71 のみである。71 は唯一の凸基有茎鏃であり、後期中葉の可能性があろう。石鏃の多くは早期の土器に伴う可能性が考えられる。また、堀込型石鏃 1 点が出土する（第 70 図-56 可能性のある石鏃 34・57・64）。共伴が指摘されている天矢場式は図示した 1 片のみが出土する。本来は相当数の土器量があったと判断できる。石鏃などの剥片石器の出土量とともに、剥片の出土量が多い点は特徴的である。剥片は二次加工や使用痕を伴うものが多い。本調査区南に位置する二ノ谷遺跡・三ノ谷遺跡・三ノ谷東遺跡・諏訪山遺跡・諏訪山北遺跡などでは草創期後半～早期初頭の多数の陥し穴状土坑が確認（第 2 章参照）され、広義の狩り場的な特徴がみられる。本調査区については弓矢による狩り場とすることも可能であるが、使用痕のない二次加工の剥片や石核の出土から、推定される台地上の生活面は、狩り場ではなく、石器製作を伴う居住施設を有する可能性が指摘できる。また、当該時期には台地の突端部から遺物が出土する事例が多いとの指摘があることから、東・西側の谷の合流点に位置する本遺跡が集落跡である可能性を指摘しておきたい。

礫石器については、大きさに遍在性がみられたことから、従来の観察法に加え、手で持てる大きさか否かを加味して分別を行った。

I 手で持つことが可能（掴む） II 手で持つことが困難（置く） III 掴むことも置くことも可能

IV 不明（破片）

形状 1 円形 2 長円形 3 隅丸方形 4 棒状 5 形状不明（破片）

①両面平坦 ②両面膨らみ ③片面膨らみ・片面平坦

i 厚さ 5.1 cm 以上 ii 厚さ 4.1 cm 以上 iii 厚さ 3.1 cm 以上 iv 厚さ 3.0 cm 以下

整形 A 形状加工 B ほぼ自然礫 C 不明

a 外面 b 磨面

使用痕 凹孔 ア両面 イ片面 ウ側面 エなし オ不明

敲打痕 カ両面 キ片面 ク側面 ケなし コ不明

個別の観察で注意された点は以下のとおりである。

256・257・258 は何れも図上の側面に自立可能な平坦面を持つ。自立した場合の長さ（最大長）・幅（最大幅）は近似する。特に、256・257 の側面は平坦であり、観察表のとおりを持つと安定して持つことができる。現状の長さ・幅（平坦面を下にした場合の高さ）が近似しており、257 の破碎面の磨滅を考慮するならば、大きさを調整するための破碎である可能性がある。また、厚みに差異があり、道具としての使用方法の違いも示唆される。

264・263・248・244 の形状・厚さは異なるが、何れも側面は鋭角である。同種の礫石器の可能性もあろう。

249 は中央の欠損部に磨滅部分が観察される。使用に伴う磨滅あるいは磨面である場合、欠損は外形加工、

欠損後の二次利用の可能性があろう。

ほぼ同大・同形状の礫石器が認められる。完存の磨石 246・245、推定 1/2 欠損の 248・249 である。

第3節 古墳時代～古代

(1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は A 区に 11 軒が確認された。基本土層から想定される地形からは、竪穴建物跡が選地される平坦面あるいは緩斜面が現農道下にあたる M・N・O-8 グリッド付近に続いており、竪穴建物跡の選地範囲が広がる可能性が指摘できる。弥生時代後期以降の集落内の建物跡の配置をみると、台地の頂部よりも低地面を見下ろす落ち際にある傾向が指摘されている。調査区内 N-8 グリッドに遺構の確認がないことから、現道下の O-9 グリッド付近に遺構がある可能性が考えられる。しかし、現実的には、現農道沿いの第 12・93 号竪穴建物跡が削平により掘り方面が露出する状況であり、その残存状況の可否は判断し得ない。

本調査によって確認された 11 軒の竪穴建物跡は 7 世紀代と 8 世紀第 4 四半期～9 世紀代に大別される(第 21 表)。

7 世紀代の竪穴建物跡は第 8・19・58 号竪穴建物跡の 3 軒が確認された。何れも谷の落ち際にあり、同程度の距離をおいて分布する。各々の主軸に斉一性はないが、谷の方向を意識したものとも考えられる。カマドは谷とは反対側の壁に設置される。第 58 号竪穴建物跡については西壁への設置ともみえるが、何れも谷とは反対側の北壁が意図されたと判断される。

8 世紀第 4 四半期～9 世紀代の竪穴建物跡は第 4・15・64 号竪穴建物跡の 3 軒が確認された。時期を判別し得なかった竪穴建物跡のうち、詳細が判然としない第 79 号竪穴建物跡を除く第 9・12・62・93 号竪穴建物跡については、規模や主軸に共通性がみられ、同時期の遺構と捉えておきたい。これら 7 軒の竪穴建物跡の配置をみると、第 64 号竪穴建物跡付近に集中する傾向にある。遺構の配置からは詳細不明の第 79 号竪穴建物跡を 9 世紀代と捉えることもできよう。この時期の竪穴建物跡は、カマドの有無によって二大別が可能である。カマドを設置する竪穴建物跡は第 12・62・64 号竪穴建物跡で、第 93 号竪穴建物跡は第 21 号土坑をカマドとする可能性がある。カマドは、7 世紀代とは異なり、谷側の壁に設置される。東壁が意図されたと判断される。カマドの設置のない竪穴建物跡は、北東壁にテラス状の段差を持つ第 9・15 号竪穴建物跡、第 4 号竪穴建物跡である。遺構分布図からはグリッドの南北軸 10 を境に谷側にカマドの設置のない竪穴建物跡、山側にカマドを設置する竪穴建物跡の配置が読み取れる。

竪穴建物跡の埋没状況を見ると、7 世紀代、8 世紀後半～9 世紀代に何れも、大きく幾度かにわたり埋め戻し、廃絶したと考えられる。建物跡に伴う遺物の出土が少ないが、廃絶にあたって建物外に持ち出す行為があったのであろう。カマドのある竪穴建物跡は、カマドを被覆した後、床面を埋め戻したと判断される。カマドは火床を浚い、焼土やロームで埋め戻し、カマド上部を壊した後カマド全体を埋め戻したであろうことが覆土の堆積状況から読み取れる。調査時の最上層は自然埋没の堆積層とみられることから、建物の全てを被覆するものではなかったか、被覆層の時間の経過による落ち込み等があるものと考えられる。第 58 号竪穴建物跡のカマド右ソデからは、構築の際の呪具や鎮魂具として用いられたと想定できる白色礫の出土があり、建物跡の構築・廃絶にあたっては儀礼的なプロセスが伴ったと考えられる。7 世紀代・8 世紀後半～9 世紀代の 2 時期ともカマドの火床をさらい、焼土や炭を交互に重ねるなど儀礼的なプロセスがみられること、(3) に後述するように、8 世紀後半以降の集落運営は有力富豪層机下の運営の一貫と考えられることから、伝統的な習俗に基づくものと考えられる。



第84図 A区全体図

(2) 出土遺物

土師器・須恵器の坏・甕、粗製土器などの土器片、銚帯、図示し得ない小片ではあったが、石製祭具双孔円板の小片、緑釉陶器片などが出土する。総じて、小片で、遺構内外ともに出土量は少ない。遺構の時期判別は当然のことながら遺物の時期によるものであるが、遺構については図示し得なかった小片も念頭において行った。調査区内やグリッド調査で出土した遺物の中には、図示し得なかったが、6世紀末葉～7世紀初頭と判断される土師器坏片がある。また、粗製土器も同様に6世紀末葉～7世紀初頭と判断される。石製祭具双孔円板は、6世紀末葉～7世紀前半とみられる。本調査区の主体となる時期は、竪穴建物跡が示す、7世紀代、8世紀第4四半期～9世紀代であるが、時間的な上限を求めるならば、6世紀末葉の可能性を考えておきたい。

土師器は7世紀代の坏に特徴がみられる。形状は模倣坏であり、細部にヴァリエーションがみられる。視覚的な色調や胎土については、白色・橙色・赤色に大別できる。赤色については赤彩や赤彩に類するものを表す。器面はウルシ処理の有無に大別される。磨滅等でウルシの痕跡がなくなったものや判別が難しい程度に薄くなったものもあるが、ウルシ処理を施すものが多い。ウルシは内面から外面口縁部付近に塗布されるものが多い。遺物観察表の記号は以下を示す。

・色調・器面処理

a 色調白色ウルシ仕上げ b 色調白色 c 色調橙色ウルシ仕上げ d 色調橙色 e 赤色

・形状

特徴は以下に分別でき、記号で示した。

①身模倣

稜をもって立ち上がる

稜明瞭	ヨコナデの沈線が伴うものあり	口縁部	直立 丸みをもって立ち上がる
-----	----------------	-----	-------------------

稜不明瞭 ヨコナデの沈線のみものあり

稜なし

「J」状に立ち上がる	口縁部	丸みをもって立ち上がる 直立
------------	-----	-------------------

②身模倣

稜をもって立ち上がる

稜明瞭	ヨコナデの沈線が伴うものあり	口縁部	直立 丸みをもって立ち上がる
-----	----------------	-----	-------------------

稜不明瞭 ヨコナデの沈線のみものあり

稜なし

③蓋模倣

稜をもって立ち上がる

稜明瞭	ヨコナデの沈線のみものあり	口縁部	外反して立ち上がる 外傾して立ち上がり、口縁部中位で直立 丸みをもって立ち上がる
-----	---------------	-----	--

土師器の坏以外の器種については、小片のため判別ができないものが多く、鉢類は胎土が緻密で、内外面の仕上げが丁寧、被熱の痕跡や付着物のないもの、甕類は胎土が粗く、内外面の仕上げが簡素（粗いヘラケズリなど）、被熱の痕跡や付着物が観察されるものとした。

須恵器は坏を主体に甕類が出土する。判別し得た産地は栃木県益子窯、茨城県新治産、茨城県三和窯跡群産、脇屋産であるが、三轟山窯跡群産・南那須窯跡群産の可能性のあるものがある。何れも9世紀代とみられる。時期ごとの消長を追える数量ではないが、9世紀中葉には三和窯跡群産の比率が高い。本調査区の位置する下野市の南隣である小山市にあり、本調査区から約18.0km南方に位置する金山遺跡（小山市東野田）の調査において、9世紀中葉に三和窯跡群産のものが主体となることが報告されている。本調査区においても同様の傾向が見て取れる。

粗製土器は、第58・64・79号竪穴建物跡N-9・10グリッド、O-9グリッドからあわせて6点が出土する。第64号竪穴建物跡4、第79号竪穴建物跡5はスス状の付着物がみられ、灯明皿へ転用されたことがわかる。出土状況を見ると、第64号竪穴建物跡では、覆土上層にあり、8世紀後葉以前の銚帯や9世紀中葉の土師器甕（常陸型）がほぼ同レベルで出土する。現状での建物跡被覆最上層あるいは後世の自然堆積層の境目付近にあたる。スス状の付着物について、理化学分析等を行っていないが、目視した様子は油煙状である。あくまで、感覚的ではあるが、粗製土器の時期にそぐわないように感じられる。第64号竪穴建物跡埋没後に遺棄されたものであるとも考えられるが、銚帯7点に近接して出土することに留意するならば、第64号竪穴建物跡廃絶の儀礼に関わる祭具として用いられた可能性を指摘しておきたい。

スス状の付着物があり、灯明皿に転用されたと判断されるのは、粗製土器の他に、須恵器坏（第62号竪穴建物跡（不掲載）・第64号竪穴建物跡13）、須恵器高台付坏（第64号竪穴建物跡14）、土師器碗（ロクロ使用・内面ウルシ仕上げ 第64号竪穴建物跡6）、不掲載須恵器坏・N-10-d土師器甕口縁部1がある。灯火を用いる祭祀などの行為が少なくとも9世紀代までは行われた可能性を考えておきたい。

緑釉陶器片は第64号竪穴建物跡・P-11から2片が出土する。器種や時期の判別は難しいが、緑釉陶器自体の出現時期は本調査区の遺構の時期からは9世紀代の可能性が考えられる。狭量な地形を選地し、数軒程度で展開する集落跡からの出土は、銚帯7点とともに、留意すべき点であろう。

石製祭具双孔円板はA西区から1片が出土する。片面が剥落し破片自体も小さい。石材は薄い緑色の粘板岩製であり、6世紀末葉～7世紀前半とみられる。竪穴建物跡の時期に先行するが、7世紀代の第8・58号竪穴建物跡の床面やカマドからは複数時期が想定でき、廃絶時期を7世紀前葉とすれば、時期的に符号する。粘板岩製の石製祭具については、近年、6世紀～7世紀代の集落跡である埼玉県行田市北大竹遺跡からの出土例がある。北大竹遺跡は石製祭具や子持勾玉が纏まって出土したことから、古代国家の形成を地方から考える上で学術的価値が高いとの評価がある。本調査区出土の1片についても留意したい。

銚帯は、第64号竪穴建物跡から鉸具半欠1点・巡方5点（大3点・小2点）・鉈尾1点の計7点が出土する。報文の記載どおり、銅製で黒漆が塗布され、『養老令衣服令』に定められた六位以下の帯金具「烏油装」に相当する。金属製の帯金具については、延暦15（797）年に禁止令が発布されているため、8世紀末葉以前の時期を推定できる。出土状況からは銚帯として使用できる状態は想定し得ない。しかし、表裏面を留める鉸の残存状況が良好であり、金具自体の破損はないと判断できる。また、「烏油装」帯の金具装着個数は、これまでに10～12個が知られているが、本調査からの出土数はこれには満たない。このような状況などから、革帯を挟んだまま切断された可能性が一考される。出土層位をみると、1・2は1或いは2層中から同レベルで、3～7は5層中から3・4と5～7が上下に確認される。第64号竪穴建物跡の層位は1～4層（E

群)は自然埋没、5層以下(A～D群)は廃絶の関わる埋土と判断しており、廃絶に関わる埋土最上層に「烏油装」銚帯が切断された状況で出土すると考えられる。第3章第3節(2) 竪穴建物跡に記載のとおり、竪穴建物跡の廃絶に際して、習俗的な儀礼のプロセスを経たことを想定したが、銚帯が祭具とされ、第64号竪穴建物跡廃絶時に撤下された可能性を提示しておきたい。また、先述の粗製土器4は6世紀末葉から8世紀初頭とみられ、20・21層から出土する。習俗的な儀礼のプロセスに関わる灯明具として、一回性の祭具に使用したものを埋め戻した可能性を考慮しておきたい。

(3) 集落の変遷

先述のとおり、今回の調査においてはA区への遺構の集中がみられる。第2章第2節歴史的環境の記載のとおり、本調査区東側の谷を挟んだ台地にあり、A区を目視できる位置関係にある大坂遺跡は谷(A区東側の谷)を西側に見る位置にあり、本調査区と同時期とみられる遺構が確認されている。本調査区の西側については、先述来の地形の改変により、遺構の痕跡が一扫された可能性もあるが、遺物の出土も疎らであることから積極的には遺構の存在は肯定し得ない。このため、A区を集落域として、その変遷を考えたい。

A区については、東側の谷に面した狭量地に展開する。竪穴建物跡の時期は6世紀末葉～7世紀前葉、8世紀第4四半期～9世紀代であり、遺構の空白期(7世紀後半～8世紀前半)を挟んだ2時期の変遷が考えられる。遺物の出土が少なく、同時存在の竪穴建物跡を明確に把握できないが、遺構間の位置関係をみても、2軒以下の集落跡であったと思われる。調査区周辺で同時期の遺跡には、本調査区南側の同じ谷筋に面して、三ノ谷遺跡、二ノ谷遺跡、三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡、谷館野東遺跡、上芝遺跡がある(第6図・第21表)。上芝遺跡は9世紀中葉以前・以後の2時期に大別される掘立柱建物跡を有する遺構配置にあり、本調査区などとは同列に考えることはできないが、これ以外の遺跡は、本調査区をはじめ、竪穴建物跡2～3軒を単位とし、出土遺物が少ない点は、各遺跡に共通した特徴である。集落が2～3軒程度の小規模な集団で展開するのか、散在する小規模な集団を基本とする共同体的な纏まりがあったかは明らかにし得ないが、同じ谷筋に特徴の似た集落が展開することからは、自然条件に合わせた小規模な小支谷の開発行為が関連するものと考えられる。谷の肥沃地や生産性などの理由で集落が選地されたのであろう。

周辺の遺跡を含めた集落の時期をみると、8世紀第1四半期までの遺構を有する本調査区前半期、三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡と、8世紀後半～9世紀代の遺構を有する本調査区後半期、三ノ谷遺跡、二ノ谷遺跡、谷館野東遺跡に2大別できよう。周辺の遺跡とは異なる本調査区の特徴は7世紀後半～8世紀前半に遺構の空白時期があることである。この空白期については、調査区周辺への移動や気候変動などによる移住、社会情勢の変化などの理由が考えられよう。

気候変動については第22・23表のとおり、7世紀後半～8世紀前半に降水量に変化はないが、寒冷化が認められる。8世紀前後に寒冷化の緩みが読み取れるが、8世紀第1四半期の竪穴建物跡が大多数を占める三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡については、この寒冷化の緩みに関連した集落展開とも考えられる。本調査区を含め寒冷化による集落様相の変化があった可能性は否定できない。

また、調査区周辺へ移動した可能性も考えられるが、確認調査などが実施されておらず不明である。

社会情勢の変化については、北方約2.2kmに位置する下野薬師寺跡との関連は考慮すべきであろう。下野薬師寺の創建は7世紀代の天武天皇の時代とされ、8世紀中頃には官寺化に伴い「造薬師寺司」が設置される。下野薬師寺周辺には、造営・改修・維持を担ったと考えられる薬師寺南遺跡や落内遺跡、多功南原遺跡が位置する(第6図)。何れも、100軒を超える竪穴建物跡や掘立柱建物跡を有し、軒数の増減はあるものの、7

世紀代から連綿と続く大規模集落である。大規模集落の周辺には衛星的に小規模集落の分布がみられることが指摘されている。本調査区の遺構の空白期を直接的に理由付けるものではないが、多功南原遺跡の集落の推移は参考になるべき事項と考えられる。

多功南原遺跡は本調査区北方約4.0kmに位置し、調査担当者は「薬師寺の初期荘園的な背景の中で拡大を計った集落の様相から推察すると、行政的な手続きを経て集落を形成した後、統括権を掌握した大形建物跡居住者はこの地を代々基盤として成長した郡司層か官人を輩出でき得る郡領氏族と考えられる」とする（山口2014）。8世紀前半～中葉頃に集落拡大し、8世紀中葉～9世紀前半が最盛期を迎えるが、下野薬師寺の活況と連動するような集落の拡大とみられている。集落は複数のブロックに区画されるが、西地区南東大形建物群中にある第452円形有段遺構から、ほぼ完形の土師器坏約80点の出土が知られている。中には「酒杯」の墨書を持つものがあり、8世紀後半に土師器を用いての大饗宴があったことが推定されている。これとは別に、南東地区大形建物群からの須恵器を用いた大饗宴が考えられており、土師器・須恵器の違いを饗宴参加者の身分差としている。土師器の大饗宴は、「大土木工事などの負担体系に関する饗宴や農業共同体における農耕に伴う労働への対価として催された饗宴・祭礼」と指摘されており、大土木工事を下野薬師寺のみ

第21表 本調査区及び周辺諸遺跡 竪穴建物跡一覧

	時期	主軸	大きさ 最大値 (東西×南北×深さ)	柱	カマド	特徴
第8号竪穴建物跡	7世紀前葉	N-32° -W	5.7 × (5.2) × 0.5	主柱穴4本か	カマド 北壁中央部	2時期以上 6世紀末葉の可能性あり
第58号竪穴建物跡	7世紀前葉	N-33° -W	6.29 × 5.6 × 0.7	主柱穴4本か	カマド 北壁中央部	3時期以上
第19号竪穴建物跡	(7世紀代)	N-36° -E	[5.0] × 4.7 ×	不明	不明	カマドは重複により欠 北カマドか
第4号竪穴建物跡	8世紀第4四半期?	N-37° -E	2.96 × 2.74 × 0.2	不明	-	掘方露出
第15号竪穴建物跡	8世紀第4四半期?	N-46° -E	2.65 × 2.8 × 0.85	-	-	ステップ状施設あり
第64号竪穴建物跡	9世紀中葉	N-50° -E	一辺3.66 × 0.5	2穴か	カマド 南東隅部	2時期以上か
第62号竪穴建物跡	9世紀中葉前後か	N-45° -E	[2.8] × 2.78 × 0.1	不明	カマド 東壁	
第9号竪穴建物跡	(9世紀代)	N-37° -E	2.82 × 2.44 × 0.72	-	-	ステップ状施設あり
第12号竪穴建物跡	不明	N-13° -E	1.36 × (2.4) × -	不明	カマド 東壁	掘方露出 カマド位置・主軸などから9世紀代の可能性あり
第79号竪穴建物跡	不明	(N-36° -E)	-	不明	カマド (東壁)	主軸等からは9世紀代か
第93号竪穴建物跡	不明	N-25° -E	一辺5mほどか	不明	SK-21? (東側)	掘方露出 大きさからは7世紀代か

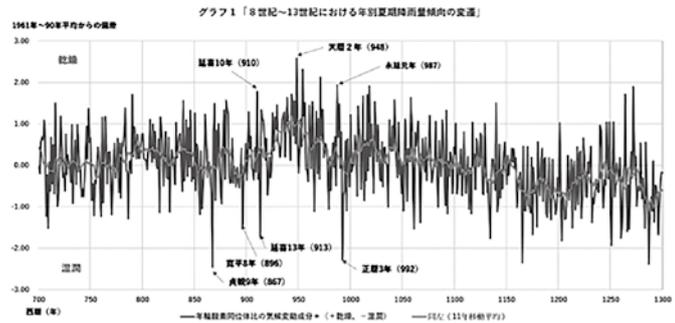
遺跡名	軒数	遺構名	時期	大きさ (南北×東西×深さ)	柱	火処	
三ノ谷	2	D4 SI-004	8世紀後半	6.28 × 6.24 × 0.3	4	カマド	
		C3 SI-003	9世紀末葉	3.12 × 2.8 × 0.25	0	カマド	
二ノ谷	2	D5 SI-006	8世紀中頃に近い後半	4.4875.18 × 0.22	2	カマド	時期不明の竪穴1軒
		D5 SI-001	8世紀後半	4.58 × 5.18 × 0.2	4壁	カマド	
三ノ谷東・谷館野北	10	D3 SI-002	7世紀末～8世紀第1四半期	2.90 × 3.7 × 0.65	1入口	カマド	2～3軒単位で散在
		D3 SI-009	8世紀初頭～8世紀第1四半期	5.94 × 5.86 × 0.59	5 主4入り口1	カマド	
		D3 SI-008	8世紀第1四半期	2.95 × 3.73 × 45	2入口など	カマド	
		D3 SI-0010	8世紀第1四半期	4.70 × 4.85 × 45	4	カマド	
		D3 SI-005	8世紀第1四半期	3.43 × 4.26 × 0.69	1入口	カマド	
		D3 SI-001	8世紀第1四半期	2.25 × 3.65 × 0.3	2入り口・カマド前	カマド	
		D3 SI-007	8世紀第1四半期	3.6 × 4.97 × 0.35	2入口	カマド	
		D4 SI-008	7世紀後半～8世紀前半	5.45 × 5.41 × 0.38	5 主4入り口1	カマド	
		D4 SI-004	8世紀第1四半期	5.95 × 5.75 × 0.61	5 主4入り口1	カマド	
谷館野東	6	C2 SI-004	9世紀中葉以前	3.26 × 不明 × 0.0.36	西1/3区外 東壁3・入り口1	カマド	掘立柱建物跡群を配置する上芝遺跡の北側に隣接
		SI-001	9世紀中葉以前	4.60 × 4.16 × 0.70	小穴複数	カマド	
		SI-004	9世紀中葉以前	2.36 × 2.44 × 0.5	小穴複数	カマド	
		SI-005	9世紀中葉以前	3.38 × 2.82 × 0.3	入口1?	カマド	
		SI-007	9世紀中葉以前	4.76 × 4.20 × 0.88	4	カマド	
		SI-002	9世紀中葉以降	4.540 × 3.96 × 1.0	0	カマド	

ならず、本遺跡付近の下野国分寺・尼寺、官道整備などの事業と捉えられている（山口 2014）。多功南原遺跡の集落拡大時期・最盛期、大饗宴の時期が、本調査区を含む小規模集落の空白期に近い点は留意すべきで、本調査区や周辺の小規模集落がこのような大土木工事のために移住するような社会動向があったことが指摘されている。また、天平 17（745）年には墾田永年私財法の施行によって、貴族・豪族や寺院などによる水田開発が活発化する点も留意されよう。本調査区を含め、周辺諸遺跡の集落展開については、気候変動と社会情勢の変化が相まう様相を反映した可能性を考慮にいれておきたい。

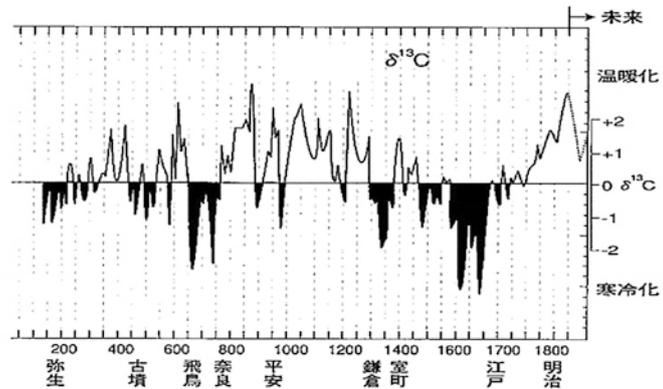
第 64 号竪穴建物跡から出土する銚帯については、前述のとおり、革帯を挟んだまま切断された可能性を指摘した。集落内から出土する同様の腰帯具についての「腰帯の着用者と上下（主従）関係を結んだ者へ帯の一部を切断し、分配した」との指摘（田中 2002）は興味深い。銚帯、調査区内から出土する石製祭具片、緑釉陶器片なども一介の小規模集落では保有し得ない遺物と考えられ、多功南原遺跡のような大規模集落との関連が想起される。一案ではあるが、本調査区前半期や三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡などの小規模集落・共同体が、一時期、多功南原遺跡などの大規模集落に集約され、8 世紀第 4 四半期に水田開発のため、本調査区後半期や、三ノ谷遺跡、二ノ谷遺跡、谷館野東遺跡などの各所へ集落の形成をするような社会事情があった可能性を提示しておきたい。付け加えるならば、調査内から 9 世紀代とみられる鉄鉢形土器片が出土することからは仏教施設と関連のある集落である可能性も考えておきたい。

本調査区後半期の竪穴建物跡をみると、周辺の遺跡には見られない、カマドの敷設のない竪穴建物跡が確認され、且つ、第 9・15 号竪穴建物跡のようにステップ状の施設の敷設もある。（第 9・15 号竪穴建物跡の床面には被熱の痕跡はないが、炭化物が確認されることを付記する。）多功南原遺跡では住居 - 長期貯蔵施設 - 簡易貯蔵施設 - 井戸の組み合わせによる遺構配置が確認されているが、本調査区のカマドのない竪穴建物跡についても住居以外の貯蔵施設的な竪穴建物跡である可能性は否定できない。また、竪穴建物跡の配置をみると、谷を意識したとみられる 7 世紀代とは異なり、建物の主軸には規則性がうかがえる。また、カマドの位置も 7 世紀代とは反対側となる谷側の壁面へ付設される。この 7 世紀代とは異なる規制性についても社会事情に即した可能性、官道等の整備による土地の利用状況の変化などの可能性を考えておきたい。

第 22 表 気候変動表 (1)



第 23 表 気候変動表 (2)



第4節 中世以降

(1) 土坑・溝状遺構

土坑 39 基を確認した。A 区 30 基、B 区 5 基、C 区 3 基、D 区 1 基である。

A 区の土坑の配置をみると、概ね東側の谷に平行あるいは直交する。N-8・O-9・O-10 グリッドに位置し谷に直交する第 46～49・57・82～84 号土坑、O-9・10・11 グリッドに位置し谷に平行する第 50・51・53 号土坑の配置からは第 59 号溝状遺構を結ぶ区画が想定できよう。これらの土坑は溝の形態ではないため、区画溝に沿った施設の可能性も考えられる。第 85 号溝状遺構や第 14・16～18・52・81・96・97 号土坑も区画に類する遺構と考えられる。各土坑の規模や深さは不統一であるが、地形によるものか、用途によるものかは判然としない。第 14・72 号土坑から出土する陶磁器片が近代の製品である可能性があることや、第 45 号土坑からビー玉が出土することなどから、近代以降の掘り込みである可能性が高いと考えられる。第 95 号土坑の堆積が耕作土直下であることから、客土以前の地割を示す可能性があるだろう。B 区で確認された 5 基についても谷に向かう傾斜に直交する。A 区同様の用途が想定される。第 91 号土坑から出土する磁器の年代から大正時代～昭和時代初期の遺構の可能性を考慮しておきたい。

A 区第 22 号土坑や D 区第 75 号土坑のような円形の掘り込みについては判然としない。また、第 94・95 号土坑のような焼土の堆積がみられる掘り込みについても、掘り込み面など不明な点が多い。

(2) 出土遺物

第 59 号溝状遺構や各グリッド、調査区内から出土する磁器は、藍色釉を施す鉢類 (SD-59-9・確認調査 T 8 が接合)、接合はしないが、緑色釉を施す小碗 (SD-59-6・確認調査 T 8)・市松に梅文を描く小碗 (SD-59-3・A 区表採・確認調査 T 8) など同種の破片が出土する。大正時代末葉～昭和時代初期の量産品とみられる。同じ文様を描く数茶碗の可能性があろう。土坑や溝状遺構に伴う可能性が考えられる。また、茶道具とみられる破片の出土がある。灰器に似る無釉陶器が O-9 グリッドから、茶入とみられる破片が M-10-d から出土する。小片のため時期の推定は難しい。確認調査では重なった状態の寛永通宝が確認されている。これらは、低地を主体とした土地利用が連綿となされた傍証となろう。

時期は判然としないが、扁平な小礫が出土する。N-8-1・2、不掲載の 5 点である。不掲載の 5 点の出土位置・寸法・石材は、第 19 号竪穴建物跡：長軸 2.9cm・短軸 2.3cm・重さ 10.75 g・砂岩、第 58 号竪穴建物跡：長軸 2.2cm・短軸 1.8cm・重さ 4.22 g・玉髓、第 64 号竪穴建物跡：長軸 1.5cm・短軸 1.3cm・重さ 1.74 g・玉髓、N-10-b：長軸 1.7cm・短軸 1.4cm・重さ 2.11 g・砂岩、N-11-a：長軸 1.8cm・短軸 1.4cm・重さ 2.04 g・頁岩である。砂岩を石材とする第 19 号竪穴建物跡・N-10-b には研磨の痕跡はないが、これ以外の 3 点は研磨されたような光沢を持つ。色調は第 58 号竪穴建物跡出土・N-11-a 出土のものが黒色、第 64 号竪穴建物跡出土のものが白色である。これらの 3 点と図示した 2 点 (第 82 図 N-8-1・2) については、平面形が正円形ではないことや形状に斉一性がないことなど不詳な点も多いが、基石の可能性を考えておきたい。

〈第 22・23 表出典〉

北川浩二ほか 1998 「屋久杉年輪の炭素同位体比変動から推定される過去 2000 年間の気候変動」『気象研究ノート』

笹生 衛 2021 「平安時代の災害と新たな神まつり 文献史料と気候変動データからみた祭礼の成立」『古代の祭りと

第5章 総括

災害 疾病・災害・祟り』國學院大學學術資料センター編

〈参考文献〉

- 木村泰彦 2002 「銅銚から石銚へ」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 篠原浩恵 2003 「霞内西遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第275集』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 篠原浩恵 2010 「ローム・焼土・炭化物 - 竪穴建物跡にみる特徴的な覆土堆積事例 -」『池上悟先生還暦記念論文集』
- 田中広明 2002 「腰金具の変遷と諸問題」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 津野 仁ほか 1996 「金山遺跡Ⅳ」『栃木県埋蔵文化財調査報告第179集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 中川あや 2002 「中国出土の腰帯金具 - 日本出土資料との比較を中心に -」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 中村信博 2017 「堀込型石鏃の研究」『石鏃を中心とする押圧剥離系石器群の石材別広域編年の整備』科学研究費補助金 基盤研究 (c)
- 藤田典夫 1999 「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 山口耕一ほか 1999 「多功南原遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第222集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 山口耕一 2014 「下野国 河内・都賀郡の地域開発 - 多功南原遺跡を中心に -」『古代東国の考古学3 古代の開発と地域の力』高志書院

附章 自然科学分析

第1部 篠崎遺跡発掘調査に係る自然科学分析

(株) 火山灰考古学研究所

1. はじめに

北関東地方中央部に位置する栃木県域には、日光火山群や那須火山はもちろんのこと、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山、さらには中部地方、中国地方、九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代、さらに岩石記載の特徴などがテフラ・カタログ（町田・新井, 2011）などに収録されており、考古遺跡でテフラに関する調査分析を行い、年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、考古遺物包含層や遺構の層位や年代に関する情報が得られるようになっている。

下野市篠崎遺跡における発掘調査では、多くの地点で層位や具体的な年代が不明な遺構や土層が認められたところから、現地地質調査を実施して土層層序の記載を行うとともに、高純度で採取した試料を対象とした実験室内でのテフラ分析（テフラ検出分析）により、指標テフラの検出同定を行うことになった。土層調査分析の対象地点は、A区トレンチ3、A区第79・80号竪穴建物跡、A区トレンチ5、A区SI-15壁面、A区トレンチ6とその下部、A区トレンチ9、B区トレンチ12、B区トレンチ13、C区トレンチ15-C西壁、C区トレンチ15-A（P-65脇）、C区トレンチ15-B南壁、C区トレンチ15-D東壁、D区トレンチ21南壁（SK-75脇）、D区トレンチ22A東壁の14地点である。

2. 調査地点の土層層序

(1) A区トレンチ3

下位より灰色粘質土（層厚2cm以上）、砂混じり黄灰色土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚11cm）、灰色砂質土ブロック混じりでやや暗い灰褐色土（層厚8cm）、黒灰色泥質土（層厚9cm）、黒褐色土（層厚30cm）、暗灰褐色土（層厚19cm）、やや暗い灰褐色土（層厚20cm）、灰色粗粒火山灰に富む白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚9cm）、灰色粗粒火山灰混じり黒色土（層厚5cm）、盛土（層厚10cm）が認められた（図1）。

(2) A区第79・80号竪穴建物跡

下位の旧第80号竪穴建物跡の覆土（22層）は白色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚24cm）で、上位の第79号竪穴建物跡の覆土は炭化物を多く含む白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚19cm）である（図2）。

(3) A区トレンチ5

下位より黒色土（層厚22cm以上）、ローム粒子混じり黒灰褐色土（層厚30cm）、ローム粒子を多く含む黒灰褐色土（層厚29cm）、最上部に土器片を含む灰褐色土（層厚17cm）、やや灰色がかった褐色土（層厚15cm）、白色粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色土（層厚28cm）、やや灰色がかった褐色土（層厚9cm）が認められた（図3）。

(4) A区SI-15 壁面

SI-15 壁面では、遺構基盤のいわゆるローム層を観察できた(図4)。ここでは、下位より黄褐色土(層厚22cm以上)、褐色土(層厚17cm)、黄色細粒軽石に富む灰色土(層厚29cm、軽石の最大径5mm)が認められた。これらのうち、最上位の灰色土中に多く含まれる黄色細粒軽石は、岩相から赤城鹿沼テフラ(Ag-KP, 約4.5万年前以前, 新井,1962, 守屋,1968, 町田・新井,2011 など)に由来するものと考えられる。

(5) A区トレンチ6・6 下部

ここでは、断片的ではあるがローム層の断面を観察できた(図5・6)。ローム層は、下位より黄色土(層厚9cm以上)、白色粗粒火山灰に富む灰色がかった黄色土(層厚10cm)、褐色土(層厚28cm)、やや灰色がかった褐色土(層厚12cm)、基底が不明瞭な厚い黄色軽石層(層厚29cm以上、軽石の最大径6mm)、暗灰褐色土(層厚26cm)からなる(図5・6)。これらのうち、厚い黄色軽石は、層相からAg-KPに同定される。

(6) A区トレンチ9

ここでも断片的にローム層の断面を観察できた(図7)。ローム層は、下位より褐色土(層厚5cm)、白色粗粒火山灰混じり褐色土(ブロック状, 最大層厚7cm)、灰色がかった褐色土(層厚20cm以上)、やや暗く灰色がかった褐色土(層厚13cm)、マンガ層(層厚0.2cm)、リモナイト層(層厚0.3cm)、黄色がかった灰色土(層厚2cm)、リモナイト層(層厚0.2cm)、成層した厚いテフラ層(層厚45cm)からなる。このうち、成層したテフラ層は、主体部が粒径の良くそろった黄色細粒軽石層(層厚44cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径3mm)で基底部に逆級化構造をもつ黄色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)が認められる。この成層したテフラ層は、層相からAg-KPに同定される。

(7) B区トレンチ12

下位より黄～灰色細粒軽石を多く含む褐色土(層厚3cm以上、軽石の最大径2mm)、黄褐色土(層厚17cm)、灰色がかった黄色土(層厚26cm)、白色粗粒火山灰を多く含む灰色がかった黄色土(層厚14cm)、灰白色粗粒火山灰混じり灰褐色土(層厚24cm)、黄色軽石層ブロック混じり暗灰褐色土(層厚11cm)が認められた(図8)。

(8) B区トレンチ13

下位より橙褐色スコリアを少し含む黄色土(層厚10cm以上、スコリアの最大径6mm)、黄色土ブロック混じり灰褐色土(層厚7cm)、ローム粒子混じり暗灰褐色土(層厚15cm)、やや暗い灰褐色土(層厚10cm)、灰褐色土(層厚16cm)、灰色がかった褐色土(層厚12cm)、攪乱土(層厚7cm)が認められた(図9)。

(9) C区トレンチ15-C 西壁

下位より橙褐色細粒スコリアをわずかに含む暗灰褐色土(層厚17cm, スコリアの最大径2mm)、灰褐色土(層厚12cm)、灰色がかった褐色土(層厚13cm)、白色粗粒火山灰混じり灰褐色土(層厚19cm)、やや締った褐色土(層厚9cm)が認められた(図10)。

(10) C区トレンチ 15-A (P-65 脇)

下位より暗灰褐色土(層厚 3cm)、成層した厚いテフラ層(層厚 129cm)、灰褐色作土が認められた(図 11)。このうち、成層したテフラ層は主体部が粒径の良くそろった黄色細粒軽石層(層厚 128cm)で、基底部に黄色細粒火山灰の薄層(層厚 1cm)が伴われる。これらのうち、成層したテフラ層は、層相から Ag-KP に同定される。

(11) C区トレンチ 15-B 南壁

下位より灰色がかった黄色土(層厚 10cm 以上)、暗灰褐色土(層厚 30cm)、黄色がかった灰色土(層厚 13cm)、灰色がかった黄色土(層厚 19cm)、炭化物混じり黄色土(層厚 16cm)、やわらかい灰褐色土(層厚 32cm)が認められた(図 12)。

(12) C区トレンチ 15-D 東壁

下位より黒みをおびた褐灰色土(層厚 12cm)、暗灰褐色土(層厚 10cm)、灰色がかった褐色土ブロック混じり灰褐色土(層厚 10cm)、灰色がかった褐色土(層厚 11cm)、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土(層厚 23cm)、灰褐色砂質土(層厚 12cm、旧作土)、褐色土ブロック層(層厚 13cm、盛土)が認められた(図 13)。

(13) D区トレンチ 21 南壁 (SK-75 脇)

下位より黄灰色シルト層(層厚 4cm 以上)、灰色シルト層(層厚 17cm)、黄色シルト層(層厚 12cm)、炭化物混じり灰色泥質土(層厚 9cm)、黄灰色泥質土(層厚 8cm)、灰色土(層厚 6cm)、成層したテフラ層(層厚 12cm)、黒色土(層厚 26cm)、暗灰褐色土(層厚 14cm)が認められた(図 14)。そして、その上位に黒色土(層厚 6cm)と褐色土ブロック層(層厚 43cm)が人為的に盛られている。

(14) D区トレンチ 22-A 東壁

下位より黄色土(層厚 3cm 以上)、ローム粒子混じり暗灰褐色土(層厚 9cm)、黒色土(層厚 15cm)、黒灰褐色土(層厚 10cm)、灰色がかった褐色土ブロック混じり暗灰褐色土(層厚 13cm)、基底部に土器片を含む灰色がかった褐色土(層厚 8cm)、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土(層厚 15cm)、炭化物混じり灰褐色土(層厚 8cm)、褐色土ブロック層(層厚 10cm 以上、盛土)が認められた(図 15)。

3. テフラ分析(テフラ検出分析)

(1) 分析試料と分析方法

上述の観察地点で採取された試料のうちの 79 点を対象に、含まれるテフラ粒子の特徴や量などを定性的に明らかにするテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 電子天秤を用いて試料 8g ずつを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

1) 検出されたテフラ粒子の特徴

テフラ検出分析の結果を表 1～4 に示す。この分析では、Ag-KP より上位の多くの試料で、次の少なくとも 7 種類の火山ガラスを認めることができた。これらの火山ガラスのほか、タイプ a の産出層準より下位には、層相や重鉱物組成に特徴のあるテフラが複数の層準から検出された。

タイプ a：無色透明のバブル型ガラス。黒土中のこのタイプには、やや薄手のものも認められる。

タイプ b：淡褐色のスポンジ状軽石型ガラス。産出層準には、斜方輝石や単斜輝石が多く含まれている。

タイプ c：Ag-KP より上位の多くの試料に含まれる破片状や塊状の分厚い中間型や繊維束状軽石型の火山ガラスで、色調は淡灰色、灰色、淡褐色、無色透明などである。

タイプ d：タイプ c と共存することもある白色のスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラス。このタイプが検出されるテフラ層には、重鉱物（磁鉄鉱など不透明鉱物以外のもの）に斜方輝石および単斜輝石が認められる。

タイプ e：良く発泡した灰白色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプ f：さほど発砲が良くない白色のスポンジ状軽石型ガラスで、斑晶に角閃石や斜方輝石をもつ。このタイプの産出層準では、火山ガラスが付着したやや粗粒の角閃石が認められる。

タイプ g：比較的良く発砲した淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラス。多産層準では斜方輝石や単斜輝石が目立つ。

2) 各地点でのテフラ粒子の産状

・A 区トレンチ 3

ここでは、試料 23 や試料 21 に比較的多くのタイプ c やタイプ d の火山ガラスが認められた。タイプ c がほとんどに、またタイプ a が比較的下位の試料に少量ずつ含まれているが、試料 11 や試料 9 にはやや薄手のものも含まれている。試料 7 以上ではタイプ e が認められ、試料 5 以上にはタイプ f が含まれている。

・A 区第 79・80 号竪穴建物跡

何れの竪穴建物跡覆土のほとんどの試料に、タイプ a やタイプ c のほか、タイプ e やタイプ f が少量ずつ含まれており、特徴的なテフラの濃集は認められなかった。

・A 区トレンチ 5

試料 30～8 にタイプ c が、また試料 10 以上にタイプ e が少量ずつ含まれている。試料 14 には、薄手のタイプ a がわずかに含まれている。試料 6 より上位ではタイプ f が認められる。試料 4 と試料 2 にはタイプ g が含まれているが、試料 2 に多い。

・A 区 SI-15 壁面

Ag-KP の軽石が多く含まれる灰色土の下位より採取された 2 試料では、火山ガラスは認められなかった。

・A 区トレンチ 6 下部

Ag-KP がブロック状に含まれる土層より下位の白色粗粒火山灰に富む土層から採取された試料 1 には、重鉱物に斜方輝石や角閃石、それに少量の単斜輝石が含まれている。

・B 区トレンチ 12

同じく、Ag-KP の下位から採取された 5 試料では、火山ガラスは認められなかった。軽石が認められた最下位の試料 17 には、粗粒の斜方輝石や単斜輝石のほか、角閃石が少量認められた。細粒の斜方輝石の

中に扁平な形態をもつものが含まれている。白色粗粒火山灰が多く含まれる土層から採取された試料7には、斜方輝石や角閃石が多く含まれている。

・B区トレンチ 13

黒土の断面が良好な本地点では、多くの試料でタイプ a やタイプ c が検出されたものの、タイプ e ～ g は検出されなかった。

・C区トレンチ 15-C 西壁

ここでは、タイプ a やタイプ c のほかに、試料 3 と試料 2 でタイプ e、試料 2 と試料 1 でタイプ f とタイプ g が認められた。後者は試料 1 に多い。

・C区トレンチ 15-B 南壁

何れの試料からもタイプ a が検出されたものの、試料 2 にやや多い。この試料 2 や試料 1 には斜方輝石や単斜輝石が多く mafic な産状を呈する。試料 1 には、ほかにタイプ b も認められる。

・C区トレンチ 15-D 東壁

試料 2 でタイプ e ～ g が認められるが、タイプ g は上位の試料 1 に多い。

・D区トレンチ 21 南壁 (SK-75 脇)

成層したテフラ層の下部から採取された試料 4 には、タイプ d が比較的多く含まれる。それより下位にはタイプ c が認められるが、そのうち最下位の試料 7 の火山ガラスは上位と比較して粗粒である。

・D区トレンチ 22-A 東壁

試料 3 および試料 2 でタイプ e、試料 2 にタイプ f、そして試料 2 と試料 1 にタイプ g が認められた。タイプ g は試料 1 に多い。

4. 考察

(1) テフラ粒子の由来について

一般的に後期旧石器時代以降の堆積物と考えられている Ag-KP より上位の火山灰土から検出された火山ガラスのうち、タイプ a は、その岩相から約 3 万年前に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 2011 など) に由来すると推定される。黒土の中位でわずかに認められた薄手のものについては、約 7,300 年前に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 町田・新井, 1978, 2011 など) に由来するのかもしれない。

多くの斜方輝石や単斜輝石と共存するタイプ b は、約 2.4 ～ 2.9 万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 2011, 早田, 2019 など) に由来すると考えられる。

タイプ c は、約 2 万年前の浅間大窪沢テフラ群 (As-Ok Group, 中沢ほか, 1984, 早田, 2019 など) や、約 1.5 ～ 1.65 万年前の浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011 など) で代表される浅間火山軽石流期 (荒牧, 1968) のテフラに由来する可能性が高い。タイプ d は、産出層準の層相や岩相から、As-YP 主体部を特徴づけるものであろう。タイプ e は、岩相から、3 世紀後半に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010) と考えられる。

タイプ e については、6 世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) や、6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) の可能性が考えられる。テフラの分布と本遺跡の位置関係からは、前者の可能性がより高いことから、ここでは Hr-FA と考えておきたい。さらに、タイプ f は、岩相

から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧,1968, 新井,1979, 町田・新井,2011)と考えられる。

これらのほか、タイプfの産出層準では、やや灰色がかった白色のスポンジ状軽石型ガラスがわずかに認められる。この火山ガラスの一部が繊維束状に発泡し、光沢をもつものが多いことから、浅間A軽石(As-A, 荒牧,1968, 新井,1979, 町田・新井,2011)に由来するのかもしれない。

一方、今回の発掘調査では、Ag-KPより下位でもテフラを認めることができた。そのうち、濃集する白色粗粒火山灰は、層位や重鉱物の組み合わせから、約5万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石(Hr-HP, 新井,1962, 町田・新井,2011など)と考えられる。B区において、それ(試料7)より下位の軽石を多く含む試料17から検出された粗粒の鉱物は、赤城行川テフラ群(Ag-Nm Group, 鈴木,1990, 町田・新井,2011)と考えられる。また、同層準付近で認められる細粒で扁平な斜方輝石や角閃石は、その岩相から約5.5万年前以前に中国地方の大山火山から噴出した大山倉吉軽石(DKP, 町田・新井,1979,2011など)に由来すると推定される。

なお、B区トレンチ13の最下部で認められた橙褐色スコリアに関しては、いわゆるローム層の最上部付近に層位があることから、約1.4～1.5万年前に男体火山から噴出した男体今市スコリア(Nt-I, 原田,1943, 町田・新井,2011など)と考えられる。今後、火山ガラスや鉱物の屈折率特性を明らかにして、指標テフラとの同定精度をさらに向上させると良い。

(2) 指標テフラからみた土層および遺構の層位と年代

・A区トレンチ3

試料23が採取された成層したテフラ層は、As-YPに同定される。試料11付近には、薄手のバブル型ガラスが含まれていることから、K-Ahの降灰層準のある可能性がある。そして、試料3付近には、As-CおよびHr-FAの降灰層準があったと考えられる。

・A区第79・80号竪穴建物跡

第79・80号竪穴建物跡ともに、その層位はHr-FAより上位で、As-Bより下位と推定される。

・A区トレンチ5

ここでは、試料14付近にK-Ah、試料10付近にAs-C、試料6付近にHr-FA、そして試料2付近にAs-Bの降灰層準があったと考えられる。

・A区SI-15壁面

試料2および試料1ともに、AT、As-BP Group、浅間火山軽石流期の火山ガラスが認められないことから、Ag-KPより下位と考えて矛盾はない。

・A区トレンチ6とその下部

試料1採取層準はHr-HP降灰層準と考えられることから、土層はAg-KP以下と考えられる。

・A区トレンチ9

本地点でも、Ag-KPの下位にHr-HPの降灰層準が認められた。

・B区トレンチ12

ここでは、Ag-KPブロック混じりの下位に、DKPやAg-Nm Groupを含む土層、さらにHr-HPの濃集層準が認められた。

・B区トレンチ 13

Nt-Iを含むローム層最上部の上位の黒土の断面が認められたものの、As-C以上の指標テフラは検出されなかった。

・C区トレンチ 15-C 西壁

試料3付近にAs-C、試料2付近にHr-FA、そして試料1付近にAs-Bの降灰層準があったと推定される。

・C区トレンチ 15-B 南壁

いわゆる暗色帯の上位の試料2付近にATとAs-BP Group、そして試料1付近にもAs-BP Groupがあったと考えられる。試料1採取層準には炭化物も存在していて、旧石器時代の遺物包含層の可能性もあるのかもしれない。最終氷期の山火事の痕跡であっても興味深い。

・C区トレンチ 15-D 東壁

試料2付近にAs-CとHr-FA、また試料1付近にAs-Bの降灰層準があったと考えられる。試料1には、As-Aが混在している可能性もある。

・D区トレンチ 21 南壁 (SK-75 脇)

試料8付近にAs-Ok Group、とくにAs-Ok1の降灰層準があったと考えられる。それより上位の成層したテフラ層は、As-YPに同定される。

・D区トレンチ 22-A 東壁

試料3付近にAs-C、試料2付近にHr-FA、そして試料1付近にAs-Bの降灰層準があったと考えられる。

赤城火山南麓など群馬県域では、縄文時代中期を中心に明色の淡色黒ボク土(層)が、暗色の腐植質土壌中に形成されている(早田,1990)。その成因については不明な点が多いものの、本遺跡でもK-Ah降灰前後以降に形成された可能性がある明色の土層の存在を確認できた。ただ、本遺跡では地点によって、As-Cの降灰後にも明色土の形成が続いたように見える。土層が薄いために上位からの攪乱の影響も考えられるが、今後その形成過程の解明を実施できると良い。

5. まとめ

下野市篠崎遺跡の発掘調査に際して、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、下位より大山倉吉軽石(DKP,約5.5万年前以前)、赤城行川テフラ群(Ag-Nm Group)、赤城鹿沼軽石(Ag-KP,約4.5万年前以前)、始良Tn火山灰(AT,約3万年前)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group,約2.4~2.9万年前)、浅間大窪沢テフラ群(As-Ok Group,約2万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP,約1.5~1.65万年前)、男体今市スコリア(Nt-I,約1.4~1.5万年前)、浅間C軽石(As-C,3世紀後半)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA,6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B,1108年)など数多くの指標テフラを検出することができた。

文献

新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編,10,p.1-79.

新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定 - テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究,11,p.254-269.

新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53,p.41-52.

- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法 2」,p.136-149.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報 ,no.14,p.1-45.
- 原田正夫（1943）関東ロームの生成に就いて．東大土肥教室報告 ,3,p.1-140.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰 - 始良 Tn 火山灰の発見とその意義．科学 ,46,p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - アカホヤ火山灰．第四紀研究 ,17,p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫（1979）大山倉吉軽石層 - 分布の広域性と第四紀編年上の意義．地学雑 ,88,p.313-330.
- 町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス - 日本列島とその周辺（第 2 刷）」．東京大学出版会 , 336p.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山 , 黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集 ,no.14,p.69-70.
- 坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」,p.103-119.
- 坂口 一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向 - 中居町一丁目遺跡 H22 の水田耕作地と周辺集落との関係 - . 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡 3」,p.17-22.
- 早田 勉（1989）6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害．第四紀研究 ,27,p.297-312.
- 早田 勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編 1 原始古代 1」,p.37-129.
- 早田 勉（2019）北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化．令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集 ,p.19-25.
- 鈴木毅彦（1990）テフロクロロジーからみた赤城火山最近 20 万年間の活動史．地学雑 ,99,p.60-75.

表 1 A 区試料のテフラ検出分析結果 (1)

地点	試料	軽石			量	形態	火山ガラス	重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径			色調	
A 区トレンチ 3	1				*	pm(sp), md	灰白, 白, 淡灰	opx, cpx, (am)
	3				**	pm(sp)	灰白, 白	opx, cpx, am
	5				*	pm(sp), md	灰白, 白, 淡灰	opx, cpx, am
	7				(*)	pm(sp), md	灰白, 淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	9				*	md, bw, pm(fb)	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	11				(*)	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	13				(*)	md, pm(fb), bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	15				(*)	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	17				*	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	19				*	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	21				**	md, bw, pm(fb)	淡灰, 無色透明	opx, cpx
	23				**	pm(sp, fb), md	白, 無色透明	opx, cpx
	25				*	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白	opx, cpx
	A 区 79・80 号竪穴建物跡	1				*	pm(sp), md	灰白, 白, 無色透明
3					(*)	pm(sp), md, bw	白, 灰白, 無色透明	opx, cpx, am
5					(*)	pm(sp), md	白, 無色透明	opx, cpx, am
7					(*)	pm(sp), md, bw	灰白, 淡灰, 淡褐	opx, cpx, am
9					(*)	md, bw, sc	無色透明, 黒	opx, cpx, am

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母. 重鉱物の () は量が少ないことを示す.

表 2 A 区試料のテフラ検出分析結果 (2)

地点	試料	軽石			量	形態	火山ガラス	重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径			色調	
A 区トレンチ 5	2				***	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, (am)
	4				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, am
	6				**	pm(sp)	白, 灰白	opx, cpx, am
	8				**	pm(sp), md	灰白, 淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	10				**	pm(sp), md	灰白, 淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	12				*	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	14				*	md, bw, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白	opx, cpx, am
	16				*	md	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, am, (ol)
	18				*	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白	opx, cpx, am
	20				(*)	md	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, am
	22				(*)	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	24				*	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	26				(*)	md	淡灰	opx, cpx, am
	28				(*)	md	淡灰	opx, cpx, (am)
	30				*	md, pm(sp)	淡灰, 白	opx, cpx, (am)
	A 区 SI-15 壁面	1						
2								opx, cpx, am
A 区トレンチ 6 下部	1							opx, am, (cpx)

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母. 重鉱物の () は量が少ないことを示す.

表 3 B・C 区試料のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)	
		量	色調	最大径	量	形態 色調		
B 区トレンチ 12	3						am, opx, (cpx)	
	7						opx, am	
	11						opx, am, cpx	
	15						opx, am, cpx	
	17						opx, cpx, am	
B 区トレンチ 13	1				(*)	md	淡灰	opx, cpx, am
	3				(*)	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	5				*	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白	opx, cpx, am
	7				(*)	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	9				(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	11				(*)	md	無色透明	opx, cpx, am
	13				(*)	md, bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
C 区トレンチ 15-C 西壁	1				***	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)
	2	(*)	白	2.1mm	**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, (am)
	3				*	pm(sp), md	灰白, 無色透明	opx, cpx, am
	4				*	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	5				*	md, pm(fb)	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, am
C 区トレンチ 15-B 南壁	1				(*)	bw, md, pm(sp)	無色透明, 淡褐	opx, cpx
	2				*	bw, pm(fb)	無色透明	opx, cpx, (am)
	3				(*)	bw, pm(fb)	無色透明	opx, am, cpx
	4				(*)	bw, pm(fb)	無色透明	opx, am, cpx
	5							opx, am, (cpx)
C 区トレンチ 15-D 東壁	1				**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, (灰) 白	opx, cpx, (am)
	2	(*)	白	2.9mm	*	md	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, am
	3				(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	4				(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	5				(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
	6				(*)	md	無色透明, 淡灰	opx, cpx, am

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ol: カンラン石, opx: 斜方輝石,

cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母. 重鉱物の () は量が少ないことを示す.

表 4 D 区試料のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)	
		量	色調	最大径	量	形態 色調		
D 区トレンチ 21 南壁	1				*	md, pm(sp)	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, (am)
	2				(*)	md	淡灰, 灰	opx, cpx, (am)
	4				**	pm(sp, fb)	黄白, 白, 無色透明	opx, cpx
	5				*	md, pm(sp)	無色透明, 灰, 淡褐	opx, cpx, (am)
	6				*	md, pm(sp), bw	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx
	7				*	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白	opx, cpx
	8				(*)	bw, pm(fb, sp)	無色透明, 淡褐	opx, cpx
	9				(*)	bw, md	無色透明, 淡灰	opx, am, cpx
	D 区トレンチ 22-A	1				***	pm(sp), sc	淡灰, 淡褐, 褐, 黒, 暗灰
2					*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, (am)
3					(*)	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 灰白	opx, cpx, am
4					(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
5					(*)	md, pm(sp)	淡灰, 淡褐	opx, cpx, am
6					(*)	md	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, am
7					(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ol: カンラン石, opx: 斜方輝石,

cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母. 重鉱物の () は量が少ないことを示す.

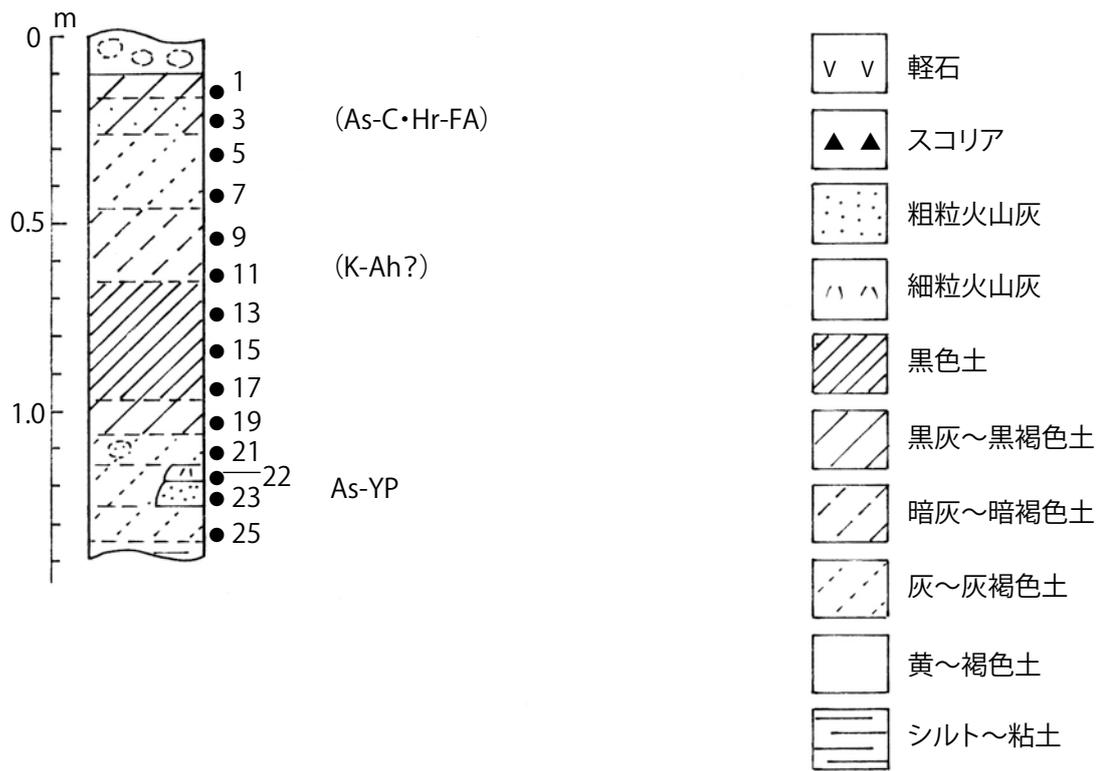


図1 A区トレンチ3の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析の試料番号.

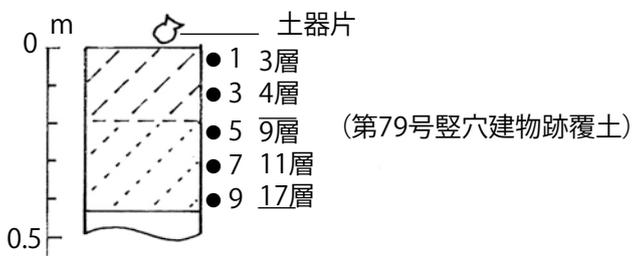


図2 A区第79・80号竪穴建物跡の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析の試料番号.

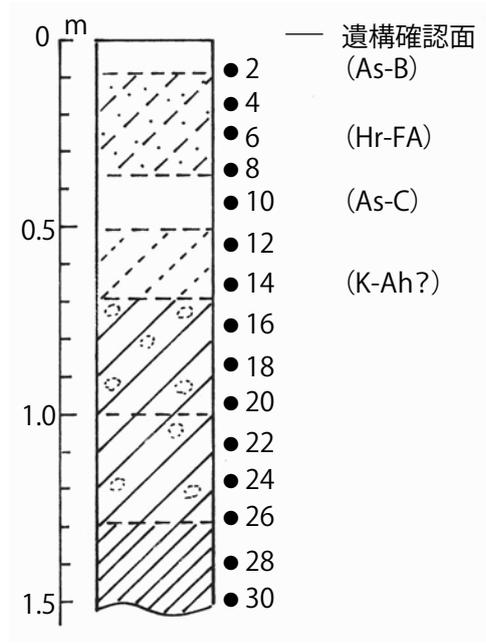


図3 A区トレンチ5の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位.
数字: テフラ分析の試料番号.

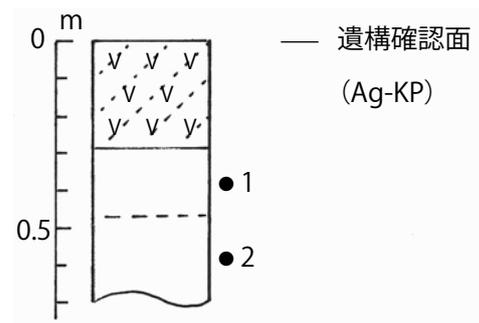


図4 A区SI-15の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位.
数字: テフラ分析の試料番号.

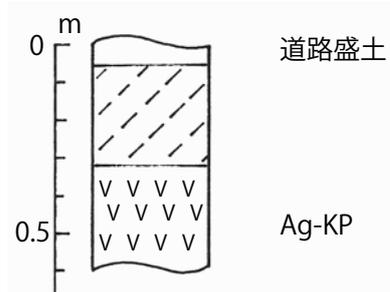


図5 A区トレンチ6の土層柱状図

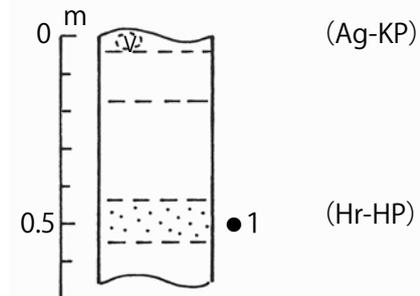


図6 A区トレンチ6下部の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位.
数字: テフラ分析の試料番号.

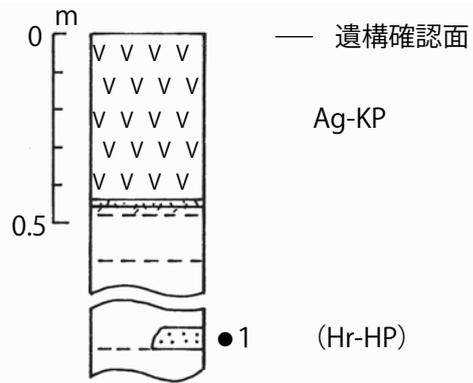


図7 A区トレンチ9の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位.
数字: テフラ分析の試料番号.

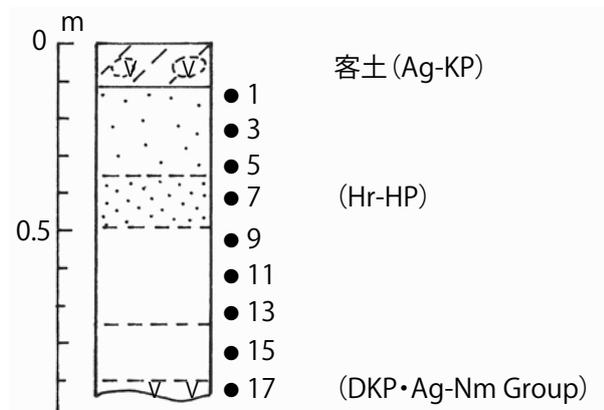


図8 B区トレンチ12の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位.
数字: テフラ分析の試料番号.

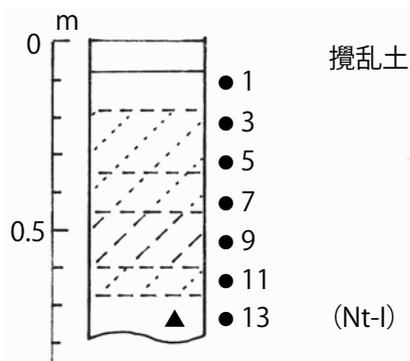


図9 B区トレンチ13の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位.
数字: テフラ分析の試料番号.

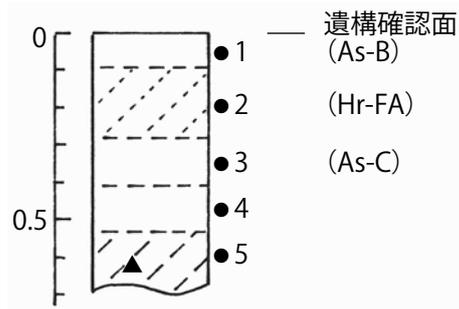


図10 C区トレンチ 15-C 西壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位。
数字：テフラ分析の試料番号。

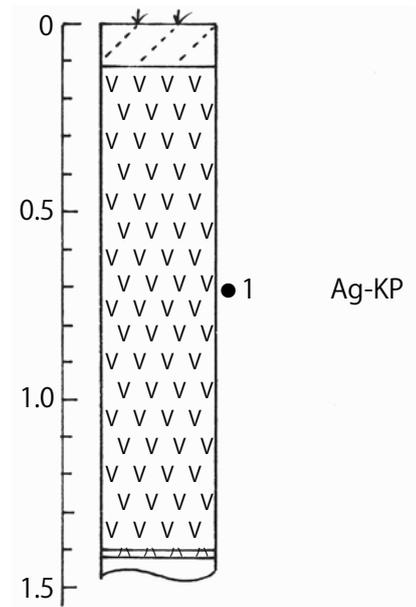


図11 C区トレンチ 15-A (P-65 脇) の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位。
数字：テフラ分析の試料番号。

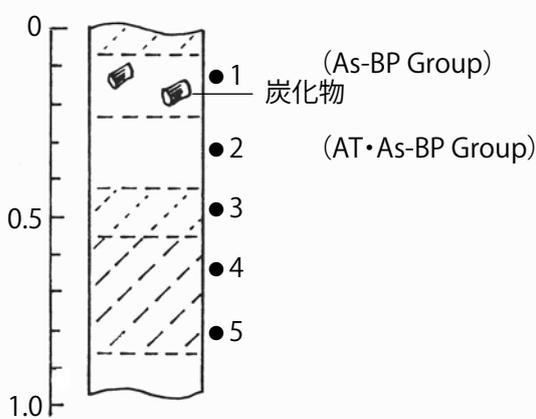


図12 C区トレンチ 15-B 南壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位。
数字：テフラ分析の試料番号。

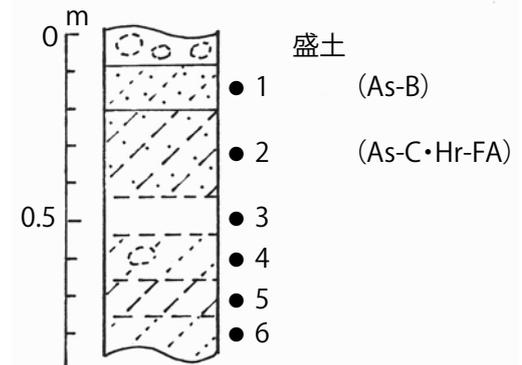


図13 C区トレンチ 15-D 東壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位。
数字：テフラ分析の試料番号。

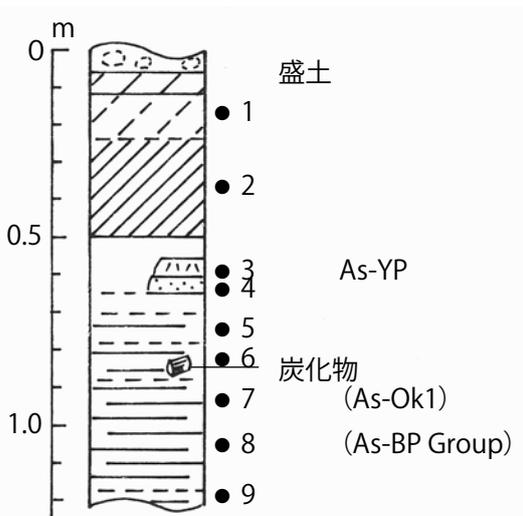


図14 D区トレンチ 21 南壁 (SK75 脇) の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位。
数字：テフラ分析の試料番号。

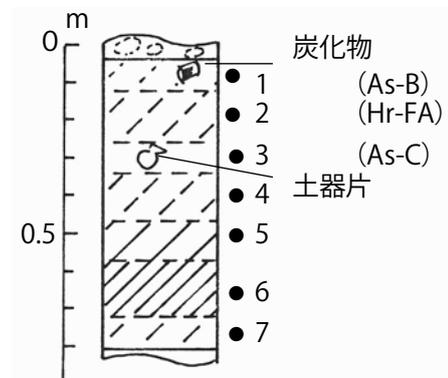


図15 D区トレンチ 22-A 東壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位。
数字：テフラ分析の試料番号。

第2部 篠崎遺跡発掘調査に係る出土石器等岩石肉眼鑑定

栃木県下野市篠崎遺跡の岩石肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

栃木県下野市篠崎遺跡から出土した縄文時代の剥片石器類 1370 点、礫石器 32 点、礫群の礫 104 点の計 1506 点を対象として、岩石肉眼鑑定を行った。本報告では石質に関する資料を作成すると共に、周辺地質との比較から産地について検討を行った。以下にその結果を報告する。

1. 試料

試料の詳細は結果とともに表 1 に記す。剥片石器の試料が大半である。

2. 分析方法

当社技師一名が栃木県埋蔵文化財センターに赴き、岩石肉眼鑑定を行った。岩石肉眼鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、岩石表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐 (2006) の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片作成観察、蛍光 X 線分析および X 線回折分析などを併用するが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名である点に留意されたい。

3. 結果

鑑定結果は、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターより提供された台帳をもとに作成した岩石肉眼鑑定結果の表 1 に示す。また、剥片石器の出土地点別の石質組成を表 2、礫石器の石質組成を表 3、礫群構成礫の石質組成を表 4 に示す。なお、岩石肉眼鑑定で土器片？、須恵器片？および炭化物とした遺物は考察から記述を除外している。

表 1 (1) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
S-4		1	安山岩	破碎礫 (小)
S-4		1	ホルンフェルス	破碎礫 (小)
S-4		1	無斑晶質安山岩	破碎礫 (小)
S-8		1	溶結凝灰岩	自然礫
SI-8	6	1	デイサイト	自然礫片
SI-8	P6	1	流紋岩	自然礫片
SI-8	2 層目	1	流紋岩	自然礫片
SI-8	南東	1	チャート	石鏝 62
SI-8	2 層目	1	ホルンフェルス	(剥片)
SI-8	北西	1	チャート	剥片
SI-8	北西	2	ホルンフェルス	剥片
SI-8	北西	1	黒曜石	剥片
SI-8	北東	1	チャート	剥片
SI-8	南西	3	チャート	剥片
SI-8	南西	2	ホルンフェルス	剥片
SI-8	セツンバ 跡	1	ホルンフェルス	剥片
SI-8	2 層	2	ホルンフェルス	剥片
SI-8	床下	2	チャート	剥片
SI-8	P6	1	シルト岩	破碎礫 (小)
SI-8	北西	1	砂岩	破碎礫 (小)
SI-9		2	流紋岩	破碎礫 (小)
SI-12	付近	1	黒曜石	剥片
SI-12	付近	1	砂岩	剥片
SI-15		1	チャート	石鏝 4
SI-15		2	チャート	剥片
SI-19		1	砂岩	碁石?
SI-19		1	ホルンフェルス	(剥片)
SI-19		6	チャート	剥片
SI-19		1	無斑晶質安山岩	剥片
SI-19	B-B' へ 土	1	チャート	剥片
SI-58		1	無斑晶質安山岩	-
SI-58		1	玉髄	碁石?
SI-58		1	チャート	石鏝 58
SI-58		1	チャート	石鏝 60
SI-58	掘方	1	玉髄	剥片
SI-58	掘方	1	黒曜石	剥片
SI-58	掘方	6	チャート	剥片
SI-58	掘方	1	ホルンフェルス	剥片
SI-58	掘方	1	無斑晶質安山岩	剥片
SI-58 ②		1	頁岩	剥片
SI-58 ②		1	黒曜石	剥片
SI-58 ②		6	チャート	剥片
SI-58		34	チャート	剥片
SI-58		4	頁岩	剥片
SI-58		1	黒曜石	剥片
SI-58		2	砂岩	剥片
SI-58		1	石英	剥片
SI-58		1	デイサイト	剥片
SI-58		2	ホルンフェルス	剥片
SI-58		1	無斑晶質安山岩	剥片

表1(2) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
SI-58 ②		1	多孔質安山岩	破碎礫(小)
SI-58		1	安山岩	破碎礫(小)
SI-58		5	砂岩	破碎礫(小)
SI-58		9	ホルンフェルス	破碎礫(小)
SI-58		1	溶結凝灰岩	破碎礫(小)
SI-58		1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
SI-58		8	安山岩	礫
SI-58		6	輝石安山岩	礫
SI-58		6	砂岩	礫
SI-58		1	チャート	礫
SI-58		1	デイサイト	礫
SI-58		7	ホルンフェルス	礫
SI-58		3	流紋岩	礫
SI-58		8	流紋岩質凝灰岩	礫
SI-62		2	チャート	剥片
SI-64		1	玉髓	基石?
SI-64		1	チャート	石鏝8
SI-64		1	流紋岩	(剥片)
SI-64		1	頁岩	剥片
SI-64		1	流紋岩質凝灰岩	剥片
SI-64		2	チャート	剥片
SI-64	カマド	1	チャート	剥片
SI-64	SB	1	チャート	剥片
SI-64	覆土	1	砂岩	剥片
SI-64		1	ホルンフェルス	破碎礫
SI-79	6	1	輝石角閃石デイサイト	自然礫(人頭大・円礫)
SI-79		1	黒曜石	-
SI-79		1	チャート	自然礫
SI-79		5	流紋岩	自然礫
SI-79		1	黒曜石	石鏝38
SI-79		1	黒曜石	石鏝6
SI-79		1	チャート	石鏝15
SI-79		1	チャート	石鏝42
SI-79		1	チャート	石鏝16
SI-79		1	チャート	石鏝44
SI-79		1	チャート	石鏝17
SI-79		1	安山岩	(剥片)
SI-79		1	玉髓	剥片
SI-79		2	チャート	-
SI-79		24	チャート	剥片
SI-79		1	頁岩	剥片
SI-79		1	砂岩	剥片
SI-79		1	風化安山岩	剥片
SI-79		1	黒曜石	剥片
SI-79		1	ホルンフェルス	破碎礫
SI-79		1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫
SI-79		3	砂岩	破碎礫
SI-79		1	凝灰岩	破碎礫(小)
SI-79		2	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
SI-79		3	砂岩	破碎礫(小)
SI-79		1	安山岩	破碎礫(小)
SI-79		4	ホルンフェルス	破碎礫(小)
SI-79	カマド No.2	1	火山凝灰岩	礫
SI-80		2	安山岩	自然礫(小)
SI-80		1	流紋岩質凝灰岩	-
SI-80		1	ホルンフェルス	(剥片)
SI-80		1	安山岩	剥片
SI-80		1	流紋岩	剥片
SI-80		1	流紋岩	破碎礫
SI-80		1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫
SK-14		1	溶結凝灰岩	自然礫片
SK-14		1	流紋岩	破碎礫(小)
SK-16		3	黒曜石	剥片
SK-16		15	チャート	剥片
SK-16		2	ホルンフェルス	剥片
SK-16		1	ホルンフェルス	破碎礫
SK-17		1	砂岩	破碎礫
SK-17		1	砂岩	破碎礫(小)
SK-18		1	チャート	剥片
SK-18		1	砂岩	剥片

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
SK-45	一括	1	ホルンフェルス	破碎礫
SK-47		1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
SK-52		1	砂岩	(剥片)
SK-81		1	チャート	-
SK-87		1	軽石火山凝灰岩	破碎礫(小)
SK-95	付近	1	チャート	剥片
SD-59		1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
SD-59	220	1	流紋岩質凝灰岩	礫
SD-59	221	1	ホルンフェルス	礫
SD-59	220	1	輝石安山岩	礫
SD-59	220	1	砂岩	礫
K-11	南西	1	チャート	剥片
L-9	南東	3	チャート	剥片
L-12	表採	1	ホルンフェルス	破碎礫
L-12	D	1	デイサイト質凝灰岩	破碎礫(小)
L-12	D	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
M-9	C	1	ホルンフェルス	(剥片)
M-10	Dフク土	1	流紋岩質溶結凝灰岩	自然礫片
M-10	フク土	1	砂岩	自然礫片
M-10	グリッド表採	1	流紋岩	石鏝51
M-10	D	1	チャート	石鏝91
M-10	3	1	チャート	剥片
M-10	D	1	チャート	剥片76
M-10	D	1	チャート	剥片90
M-10	D	1	チャート	剥片117
M-10	D	1	チャート	剥片92
M-10	D	1	チャート	剥片98
M-10	D	1	チャート	剥片124
M-10	D	1	チャート	剥片56
M-10	Dフク土	19	チャート	剥片
M-10	Dフク土	2	黒曜石	剥片
M-10	Dフク土	3	ホルンフェルス	剥片
M-10	フク土	2	頁岩	剥片
M-10	フク土	31	チャート	剥片
M-10	フク土	6	安山岩	剥片
M-10	フク土	1	凝灰岩	剥片
M-10	フク土	6	黒曜石	剥片
M-10	フク土	3	ホルンフェルス	剥片
M-10	フク土	1	デイサイト	剥片
M-10		11	チャート	剥片
M-10		2	ホルンフェルス	剥片
M-10	D	12	チャート	剥片
M-10	D	1	安山岩	剥片
M-10	D	2	黒曜石	剥片
M-10	D	1	無珪晶質安山岩	剥片
M-10	D	2	ホルンフェルス	剥片
M-10	D	1	砂岩	破碎礫
M-10	D	1	流紋岩	破碎礫
M-10	Dフク土	8	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	8	ホルンフェルス	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	6	砂岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	2	流紋岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	2	デイサイト	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	2	溶結凝灰岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	1	輝石安山岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	1	変斑れい岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	1	多孔質安山岩	破碎礫(小)
M-10	Dフク土	1	デイサイト質凝灰岩	破碎礫(小)
M-10	フク土	7	砂岩	破碎礫(小)
M-10	フク土	4	ホルンフェルス	破碎礫(小)
M-10	フク土	1	石英	破碎礫(小)
M-10	フク土	2	安山岩	破碎礫(小)
M-10	フク土	2	凝灰岩	破碎礫(小)
M-10	フク土	2	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
M-10	フク土	1	多孔質輝石安山岩	破碎礫(小)
M-10		4	輝石安山岩	礫
M-10		2	チャート	礫
M-10		6	ホルンフェルス	礫
M-10	D	1	シルト岩	-
M-11	B	1	ホルンフェルス	(剥片)

表 1 (3) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種	遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
M-11	B	1	無斑晶質安山岩	(剥片)	M-11	6	1	ホルンフェルス	剥片
M-11	C	3	砂岩	(剥片)	M-11	7	1	チャート	剥片
M-11	C	2	ホルンフェルス	(剥片)	M-11	8	1	チャート	剥片
M-11	11	1	ホルンフェルス	(剥片)	M-11	10	1	チャート	剥片
M-11	13	1	ホルンフェルス	(剥片)	M-11	北西	1	砂岩	剥片
M-11	18	1	凝灰質シルト岩	自然礫	M-11	14	1	ホルンフェルス	破碎礫
M-11	84	1	輝石安山岩	自然礫	M-11	25	1	ホルンフェルス	破碎礫
M-11	B	1	流紋岩	自然礫	M-11	34	1	ホルンフェルス	破碎礫
M-11	79	1	チャート	石鏝未製品	M-11	50	1	ホルンフェルス	破碎礫 (小)
M-11	80	1	チャート	石鏝未製品	M-11	52	1	砂岩	破碎礫 (小)
M-11	A	1	ホルンフェルス	石鏝未製品	M-11	55	1	輝石安山岩	破碎礫 (小)
M-11	C No.1	1	チャート	石鏝 7	M-11	86	1	流紋岩	破碎礫 (小)
M-11	北東	1	チャート	石鏝 41	M-11	104	1	ホルンフェルス	破碎礫 (小)
M-11	A	1	玉髄	-	M-11	120	1	砂岩	破碎礫 (小)
M-11	A	2	砂岩	-	M-11	B	1	風化安山岩	破碎礫 (小)
M-11	3	1	チャート	剥片	M-11	B	2	ホルンフェルス	破碎礫 (小)
M-11	4	1	チャート	剥片 54	M-11	B	2	流紋岩	破碎礫 (小)
M-11	15	1	チャート	剥片	M-11	B	2	流紋岩質凝灰岩	破碎礫 (小)
M-11	16	1	チャート	剥片	M-11	C	2	安山岩	破碎礫 (小)
M-11	19	1	チャート	剥片	M-11	C	2	砂岩	破碎礫 (小)
M-11	21	1	ホルンフェルス	剥片	M-11	C	2	多孔質安山岩	破碎礫 (小)
M-11	22	1	砂岩	剥片	M-11	C	1	デイサイト質凝灰岩	破碎礫 (小)
M-11	24	1	黒曜石	剥片	M-11	C	2	ホルンフェルス	破碎礫 (小)
M-11	32	1	チャート	剥片	M-11	C	5	流紋岩	破碎礫 (小)
M-11	35	1	チャート	剥片	M-11	C	6	流紋岩質凝灰岩	破碎礫 (小)
M-11	36	1	ホルンフェルス	剥片	M-12	北西	1	チャート	剥片
M-11	B No.2	1	ホルンフェルス	剥片 231	N-8	4	1	ホルンフェルス	(剥片)
M-11	39	1	チャート	剥片	N-8	5	1	ホルンフェルス	(剥片)
M-11	40	1	ホルンフェルス	剥片	N-8	7	1	砂岩	(剥片)
M-11	42	1	ホルンフェルス	剥片	N-8	12	1	砂岩	(剥片)
M-11	43	1	チャート	剥片	N-8	17	1	砂岩	(剥片)
M-11	45	1	ホルンフェルス	剥片	N-8	23	1	チャート	(剥片)
M-11	46	1	チャート	剥片	N-8	31	1	ホルンフェルス	(剥片)
M-11	47	1	チャート	剥片	N-8	49	1	流紋岩	(剥片)
M-11	48	1	チャート	剥片	N-8	B	1	安山岩	(剥片)
M-11	49	1	チャート	剥片	N-8	B	1	頁岩	(剥片)
M-11	53	1	チャート	剥片	N-8	30	1	安山岩	自然礫 (小)
M-11	56	1	砂岩	剥片	N-8	32	1	安山岩	自然礫 (小)
M-11	58	1	頁岩	剥片	N-8	19	1	チャート	自然礫片
M-11	65	1	黒曜石	剥片	N-8	C No.1	1	無斑晶質安山岩	石鏝 37
M-11	69	1	砂岩	剥片	N-8	5	1	チャート	剥片
M-11	83	1	流紋岩	剥片	N-8	6	2	ホルンフェルス	剥片
M-11	96	1	チャート	剥片	N-8	8	1	砂岩	剥片
M-11	97	1	黒曜石	剥片	N-8	13	1	チャート	剥片
M-11	98	1	チャート	剥片	N-8	14	1	ホルンフェルス	剥片
M-11	103	1	チャート	剥片	N-8	16	1	チャート	剥片
M-11	105	1	チャート	剥片	N-8	22	1	砂岩	剥片
M-11	106	1	チャート	剥片	N-8	24	1	チャート	剥片
M-11	107	1	チャート	剥片	N-8	25	1	ホルンフェルス	剥片
M-11	108	1	チャート	剥片	N-8	29	1	砂岩	剥片
M-11	109	1	チャート	剥片	N-8	39	1	チャート	剥片
M-11	110	1	ホルンフェルス	剥片	N-8	40	1	チャート	剥片
M-11	111	1	チャート	剥片	N-8	45	1	ホルンフェルス	剥片
M-11	113	1	チャート	剥片	N-8	47	1	チャート	剥片
M-11	116	1	チャート	剥片	N-8	48	1	砂岩	剥片
M-11	117	1	チャート	剥片	N-8	50	1	チャート	剥片
M-11	A	1	玉髄	剥片	N-8	52	1	頁岩	剥片
M-11	A	1	頁岩	剥片	N-8	53	1	チャート	剥片
M-11	A	1	無斑晶質安山岩	剥片	N-8	56	1	チャート	剥片
M-11	B	1	砂岩	剥片	N-8	59	1	チャート	剥片
M-11	B	12	チャート	剥片	N-8	66	1	チャート	剥片
M-11	B	2	ホルンフェルス	剥片	N-8	68	1	チャート	剥片
M-11	B	1	無斑晶質安山岩	剥片	N-8	B	4	チャート	剥片
M-11	C	1	砂岩	剥片	N-8	B	5	ホルンフェルス	剥片
M-11	C	1	石英	剥片	N-8	B	1	流紋岩	剥片
M-11	C	38	チャート	剥片	N-8	C	3	頁岩	剥片
M-11	C	7	ホルンフェルス	剥片	N-8	C	1	頁岩	剥片
M-11	D	2	チャート	剥片	N-8	C	1	黒曜石	剥片
M-11	D	1	無斑晶質安山岩	剥片	N-8	C	5	砂岩	剥片
M-11		1	チャート	剥片	N-8	C	34	チャート	剥片

表1(4) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
N-8	C	8	ホルンフェルス	剥片
N-8	C	4	流紋岩	剥片
N-8	C	14	チャート	剥片
N-8	C	1	チャート	石鏝未製品
N-8	34	1	流紋岩質溶結凝灰岩	破碎礫
N-8	34	1	流紋岩質溶結凝灰岩	破碎礫
N-8	62	1	安山岩	破碎礫
N-8	67	1	安山岩	破碎礫
N-8	B	1	チャート	破碎礫
N-8	10	1	安山岩	破碎礫(小)
N-8	20	1	流紋岩	破碎礫(小)
N-8	35	1	溶結凝灰岩	破碎礫(小)
N-8	C	3	輝石安山岩	礫
N-8	C	1	デイサイト	礫
N-8	C	1	流紋岩	礫
N-8	C	4	流紋岩質凝灰岩	礫
N-8	C	1	デイサイト質凝灰岩	礫
N-8	C	6	砂岩	礫
N-8	C	4	チャート	礫
N-8	C	8	ホルンフェルス	礫
N-9	4	1	ホルンフェルス	(剥片)
N-9	A	1	流紋岩	(剥片)
N-9	D	1	シルト岩	自然礫
N-9	C	1	ホルンフェルス	自然礫(小)
N-9	D	3	安山岩	自然礫片
N-9	D	1	チャート	剥片
N-9	2	1	頁岩	剥片
N-9	D	1	ホルンフェルス	剥片
N-9	D	1	黒曜石	剥片
N-9	杭住居覆土	1	チャート	剥片
N-9	住居	1	チャート	-
N-9	3	1	チャート	剥片
N-9	5	1	ホルンフェルス	剥片
N-9	6	1	チャート	剥片
N-9	14	1	チャート	剥片
N-9	15	1	チャート	剥片
N-9	16	1	流紋岩	剥片
N-9	17	1	チャート	剥片
N-9	19	1	チャート	剥片
N-9	22	1	チャート	剥片
N-9	23	1	チャート	剥片
N-9	A	1	無斑晶質安山岩	剥片
N-9	A	8	チャート	剥片
N-9	C	14	チャート	剥片
N-9	C	1	頁岩	剥片
N-9	C	1	安山岩	剥片
N-9	D	2	チャート	剥片
N-9	D	2	砂岩	破碎礫
N-9	D	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
N-9	D	1	流紋岩	破碎礫(小)
N-9	9	1	砂岩	破碎礫(小)
N-10	B	1	砂岩	基石?
N-10	C	1	流紋岩	自然礫片
N-10	C	1	珪化流紋岩	自然礫片
N-10	D	5	砂岩	自然礫片
N-10	D	7	ホルンフェルス	自然礫片
N-10	D	2	流紋岩	自然礫片
N-10	D	2	安山岩	自然礫片
N-10	D	4	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
N-10	D	1	流紋岩	自然礫片
N-10	D	1	安山岩	自然礫片
N-10	D	3	流紋岩	自然礫片
N-10	D	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
N-10	54	1	砂岩	(剥片)
N-10	D	1	チャート	(剥片)
N-10	D	2	砂岩	(剥片)
N-10	5	1	チャート	剥片
N-10	6	1	チャート	剥片
N-10	9	1	砂岩	剥片
N-10	10	1	チャート	剥片
N-10	12	1	チャート	剥片
N-10	14	1	チャート	剥片
N-10	15	1	チャート	剥片
N-10	16	1	無斑晶質安山岩	剥片
N-10	17	1	チャート	剥片
N-10	18	1	チャート	剥片
N-10	20	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	21	1	チャート	剥片
N-10	23	1	チャート	剥片
N-10	25	1	チャート	剥片
N-10	29	1	砂岩	剥片
N-10	32	1	砂岩	剥片
N-10	35	1	砂岩	剥片
N-10	40	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	41	1	チャート	剥片
N-10	42	1	チャート	剥片
N-10	43	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	44	1	チャート	剥片
N-10	44	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	44	1	無斑晶質安山岩	剥片
N-10	45	1	チャート	剥片
N-10	46	1	チャート	剥片
N-10	47	1	チャート	剥片
N-10	48	1	チャート	剥片
N-10	50	1	チャート	剥片
N-10	51	1	砂岩	剥片
N-10	52	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	57	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	59	1	砂岩	剥片
N-10	60	1	チャート	剥片
N-10	61	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	62	1	チャート	剥片
N-10	63	1	チャート	剥片
N-10	64	1	輝石安山岩	剥片
N-10	65	1	チャート	剥片
N-10	66	1	流紋岩	剥片
N-10	69	1	砂岩	剥片
N-10	70	1	チャート	剥片
N-10	71	1	チャート	剥片
N-10	74	1	チャート	剥片
N-10	76	1	チャート	剥片
N-10	77	1	チャート	剥片
N-10	78	1	チャート	剥片
N-10	79	1	チャート	剥片
N-10	80	1	チャート	剥片
N-10	81	1	チャート	剥片
N-10	83	1	チャート	剥片
N-10	84	1	頁岩	剥片
N-10	85	1	チャート	剥片
N-10	87	1	チャート	剥片
N-10	88	1	チャート	剥片
N-10	B	12	チャート	剥片
N-10	C	6	チャート	剥片
N-10	C	1	砂岩	剥片
N-10	C	3	ホルンフェルス	剥片
N-10	C	1	黒曜石	剥片
N-10	C	6	チャート	剥片
N-10	C	12	チャート	剥片
N-10	C	2	頁岩	剥片
N-10	D	18	チャート	剥片
N-10	D	4	チャート	剥片
N-10	D	2	ホルンフェルス	剥片
N-10	D	4	チャート	剥片
N-10	D	1	ホルンフェルス	剥片
N-10	南西	1	チャート	剥片
N-10	19	1	チャート	破碎礫
N-10	82	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫
N-10	C	2	流紋岩	破碎礫
N-10	B	5	ホルンフェルス	破碎礫(小)
N-10	B	3	凝灰岩	破碎礫(小)

表 1 (5) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
N-10	C	1	砂岩	破砕礫 (小)
N-10	C	1	安山岩	破砕礫 (小)
N-10	C	1	スコリア	破砕礫 (小)
N-10	C	2	流紋岩質凝灰岩	破砕礫 (小)
N-10	C	5	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-10	C	4	砂岩	破砕礫 (小)
N-10	C	5	流紋岩	破砕礫 (小)
N-10	C	3	安山岩	破砕礫 (小)
N-10	D	3	流紋岩質凝灰岩	破砕礫 (小)
N-10	B	1	無斑晶質安山岩	-
N-11	A	1	安山岩	-
N-11	16	1	ホルンフェルス	石核か
N-11	A	1	頁岩	碁石?
N-11	12	1	多孔質安山岩	自然礫片
N-11	10	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	11	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	13	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	谷 No.5	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	24	1	安山岩	自然礫片
N-11	C	1	砂岩	自然礫片
N-11	C	1	チャート	自然礫片
N-11	17	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	22	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	28	1	ホルンフェルス	自然礫片
N-11	15	1	流紋岩	自然礫片
N-11	A	1	流紋岩	自然礫片
N-11	B	4	流紋岩	自然礫片
N-11	25	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
N-11	A	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
N-11	C	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
N-11	18	1	流紋岩質溶結凝灰岩	自然礫片
N-11	B	1	チャート	石鏝 3
N-11	9	1	チャート	石鏝 5
N-11	8	1	チャート	石鏝 53
N-11	7	1	チャート	石鏝 52
N-11	A	1	チャート	石鏝 48
N-11	谷 No.2	1	チャート	石鏝 64
N-11	A	1	チャート	剥片 70
N-11	A	1	チャート	(剥片)
N-11	A	2	チャート	剥片
N-11	A	1	ホルンフェルス	剥片
N-11	A	1	赤玉	剥片
N-11	A	1	安山岩	剥片
N-11	B	1	安山岩	剥片
N-11	D	1	輝石安山岩	剥片
N-11	A	5	頁岩	剥片
N-11	B	1	頁岩	剥片
N-11	D	1	頁岩	剥片
N-11	A	4	黒曜石	剥片
N-11	B	1	黒曜石	-
N-11	C	1	黒曜石	剥片
N-11	A	1	砂岩	剥片
N-11	B	1	砂岩	剥片
N-11	D	1	砂岩	剥片
N-11	C	1	石英	剥片
N-11	19	1	チャート	剥片
N-11	29	1	チャート	剥片
N-11	30	1	チャート	剥片
N-11	38	1	チャート	剥片
N-11	47	1	チャート	剥片
N-11	48	1	チャート	剥片
N-11	50	1	チャート	剥片
N-11	51	1	チャート	剥片
N-11	A	60	チャート	剥片
N-11	B	5	チャート	剥片
N-11	C	6	チャート	剥片
N-11	D	7	チャート	剥片
N-11	谷 No.6	1	チャート	剥片
N-11	19	1	ホルンフェルス	剥片
N-11	A	2	ホルンフェルス	剥片

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
N-11	B	4	ホルンフェルス	剥片
N-11	C	1	ホルンフェルス	剥片
N-11	D	1	ホルンフェルス	剥片
N-11	A	1	無斑晶質安山岩	剥片
N-11	A	2	流紋岩	剥片
N-11	33	1	安山岩	破砕礫
N-11	32	1	砂岩	破砕礫
N-11	14	1	ホルンフェルス	破砕礫
N-11	A	1	安山岩	破砕礫 (小)
N-11	A	1	砂岩	破砕礫 (小)
N-11	D	1	デイサイト質凝灰岩	破砕礫 (小)
N-11	A	3	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	A	1	流紋岩	破砕礫 (小)
N-11	23	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫 (小)
N-11	A	2	流紋岩質凝灰岩	破砕礫 (小)
N-11	A	6	安山岩	破砕礫 (小)
N-11	B	2	安山岩	破砕礫 (小)
N-11	A	5	砂岩	破砕礫 (小)
N-11	D	1	砂岩	破砕礫 (小)
N-11	D	2	砂質頁岩	破砕礫 (小)
N-11	D	1	多孔質安山岩	破砕礫 (小)
N-11	A	1	風化安山岩	破砕礫 (小)
N-11	B	1	風化安山岩	破砕礫 (小)
N-11	31	1	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	37	1	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	42	1	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	43	1	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	A	3	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	北西	1	ホルンフェルス	破砕礫 (小)
N-11	D	1	流紋岩	破砕礫 (小)
N-11	A	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫 (小)
N-11	C	1	流紋岩	破砕礫 (小)
N-11	D	1	流紋岩	-
O-8	76	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
O-8	B フク土	1	チャート	自然礫片
O-8	43	1	流紋岩質凝灰岩	(剥片)
O-8	2	1	ホルンフェルス	剥片
O-8	3	1	チャート	剥片
O-8	4	1	チャート	剥片
O-8	5	1	ホルンフェルス	剥片
O-8	6	1	ホルンフェルス	剥片
O-8	7	1	チャート	剥片
O-8	8	1	チャート	剥片
O-8	15	1	チャート	剥片
O-8	16	1	チャート	剥片
O-8	17	1	チャート	剥片
O-8	20	1	チャート	剥片
O-8	22	1	チャート	剥片
O-8	23	1	チャート	剥片
O-8	24	1	チャート	剥片
O-8	28	1	チャート	剥片
O-8	30	1	チャート	剥片
O-8	32	1	ホルンフェルス	剥片
O-8	36	1	無斑晶質安山岩	剥片
O-8	38	1	チャート	剥片
O-8	40	1	チャート	剥片
O-8	45	1	チャート	剥片
O-8	46	1	チャート	剥片
O-8	47	1	チャート	剥片
O-8	49	1	ホルンフェルス	剥片
O-8	51	1	チャート	剥片
O-8	53	1	チャート	剥片
O-8	54	1	チャート	剥片
O-8	57	1	チャート	剥片
O-8	61	1	チャート	剥片
O-8	63	1	ホルンフェルス	剥片
O-8	65	1	チャート	剥片
O-8	66	1	チャート	剥片
O-8	67	1	チャート	剥片
O-8	68	1	ホルンフェルス	剥片

表1(6) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
0-8	70	1	流紋岩	剥片
0-8	73	1	チャート	剥片
0-8	75	1	チャート	剥片
0-8	77	1	チャート	剥片
0-8	79	1	チャート	剥片
0-8	81	1	ホルンフェルス	剥片
0-8	85	1	ホルンフェルス	剥片
0-8	91	1	チャート	剥片
0-8	92	2	チャート	剥片
0-8	93	1	チャート	剥片
0-8	94	1	チャート	剥片
0-8	96	1	チャート	剥片
0-8	97	1	チャート	剥片
0-8	98	1	チャート	剥片
0-8	103	1	チャート	剥片
0-8	104	1	頁岩	剥片
0-8	106	1	チャート	剥片
0-8	107	1	ホルンフェルス	剥片
0-8	109	1	チャート	剥片
0-8	110	1	安山岩	剥片
0-8	111	1	チャート	剥片
0-8	112	1	チャート	剥片
0-8	115	1	チャート	剥片
0-8	B フク土	1	チャート	剥片
0-8	B フク土	1	チャート	剥片
0-8	C	1	チャート	剥片
0-8	C フク土	5	チャート	剥片
0-8	D	2	頁岩	剥片
0-8	29	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
0-8	31	1	砂岩	破碎礫(小)
0-8	33	1	砂岩	破碎礫(小)
0-8	34	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	41	1	砂岩	破碎礫(小)
0-8	48	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	50	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	52	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
0-8	11	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
0-8	12	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	12	1	安山岩	破碎礫(小)
0-8	14	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	82	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	86	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
0-8	99	1	砂岩	破碎礫(小)
0-8	B	1	砂岩	破碎礫(小)
0-8	B フク土	1	安山岩	破碎礫(小)
0-8	B フク土	3	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
0-8	B フク土	1	砂岩	破碎礫(小)
0-8	B フク土	2	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	C フク土	1	流紋岩	破碎礫(小)
0-8	C フク土	2	輝石安山岩	破碎礫(小)
0-8	C フク土	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
0-8	C フク土	2	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-8	B	1	輝石安山岩	礫
0-8	B	2	安山岩	礫
0-8	B	1	砂岩	礫
0-8	B	2	チャート	礫
0-8	B	2	ホルンフェルス	礫
0-9	C	1	流紋岩	自然礫
0-9	A No.1	1	チャート	石鏃 13
0-9	B	1	砂岩	剥片
0-9	B	3	ホルンフェルス	剥片
0-9	B	1	チャート	剥片
0-9	B	1	チャート	剥片
0-9	C	1	頁岩	剥片
0-9	D	1	黒曜石	剥片
0-9	C	2	安山岩	破碎礫(小)
0-9	C	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
0-10	A	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
0-10	1	1	黒曜石	剥片
0-10	4	1	チャート	剥片

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
0-10	6	1	頁岩	剥片
0-10	8	1	チャート	剥片
0-10	9	1	黒曜石	剥片
0-10	10	1	チャート	剥片
P-8		2	チャート	剥片
P-8	D	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
トレンチ	トゾ5	1	チャート	石鏃 14
トレンチ	トゾ5	1	砂岩	剥片
トレンチ	トゾ5	2	チャート	剥片
トレンチ	トゾ5	2	ホルンフェルス	剥片
トレンチ	トゾ5	1	無斑晶質安山岩	剥片
トレンチ	トゾ5 SK-52	1	チャート	剥片
トレンチ	トゾ5 27m 付近表探	1	砂岩	破碎礫
トレンチ	トゾ5	1	ホルンフェルス	破碎礫
A区	表探	1	多孔質安山岩	亜円礫・径13cm
A区	土山表探	1	輝石安山岩	円礫
A区		1	デイサイト質凝灰岩	自然礫
A区		1	溶結凝灰岩	自然礫
A区	谷部	1	流紋岩	自然礫
A区	表探	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
土山	表探	1	輝石安山岩	自然礫片
A区	表探 No.1	1	チャート	石鏃 1
A区	土山	2	玉髓	剥片
A区	表探	6	チャート	剥片
土山	表探	3	チャート	剥片
A区	表探	2	ホルンフェルス	剥片
A区	表探	1	輝石安山岩	剥片
A区	西側	2	チャート	剥片
A区		1	砂岩	剥片
A区		1	チャート	剥片
A区	西側	1	安山岩	破碎礫
A区	西側	1	流紋岩	破碎礫
A区		1	砂岩	破碎礫(小)
A区	表探	1	流紋岩質凝灰岩	破碎礫(小)
土山	表探	1	ホルンフェルス	破碎礫(小)
A区	表探	1	輝石安山岩	礫
A区	表探	2	砂岩	礫
A区	谷部	1	チャート	-
A区	表探	1	チャート	-
A区	表探	4	安山岩	-
A区	表探	1	頁岩	-
B区	SK-87	1	軽石火山礫凝灰岩	破碎礫(小)
B区	表探	1	チャート	剥片
D区	表探	1	ホルンフェルス	剥片
D区	表探	1	輝石安山岩	礫
D区	表探	1	黒雲母花崗閃緑岩	礫・人頭大

報告書編集時に改変

表2(2) 剥片石器石質組成

石材	遺構	S-8	S-95	SD-59	SI-12	SI-15	SI-19	SI-58	SI-58 ②	SI-62	SI-64	SI-79	SI-8	SI-80	SI-9	SK-14	SK-16	SK-17	SK-18	SK-45	SK-47	SK-52	SK-81	SK-87	トレン チ	トレン チ5	土山	合計
火山岩類																												
輝石安山岩																										1	10	
多孔質安山岩								1																			7	
多孔質輝石安山岩																											1	
無斑晶質安山岩							1	3																	1	17		
安山岩							1	1			2	2	3														59	
輝石角閃石デイサイト												1															1	
デイサイト								1																			5	
流紋岩								2	1		1	5	2	2	2	1											69	
黒曜石				1				2	1			4	1				3										36	
火山砕屑岩類																												
デイサイト質凝灰岩																											5	
流紋岩質凝灰岩			1					1			1	1	2														56	
流紋岩質溶結凝灰岩																											4	
軽石火山礫凝灰岩																								1			1	
溶結凝灰岩		1						1								1											7	
凝灰岩												1															7	
スコリア																											1	
堆積岩類																												
砂岩				1			1	7				5	1					2	1						2		110	
砂質頁岩																											2	
頁岩							4	1			1	1	1														36	
シルト岩													1														3	
凝灰質シルト岩																											1	
チャート		1			3	7	42	6	2	4	32	7	5			15			1			1		4		3	683	
変成岩類							1	12			1	5	8	6			3			1	1				2	1	211	
ホルンフェルス																												
変質岩類																												
風化安山岩											1																4	
変斑れい岩																											1	
鉱物																												
石英								1																			4	
玉髓							2				1	1															7	
赤玉																											1	
その他																												
土器片?						1						1	1														19	
須恵器片?								1																			1	
炭化物																											1	
合計		1	1	1	2	3	11	78	9	2	10	59	21	21	3	2	21	2	2	1	1	1	1	1	9	1	5	1370

表3 礫石器石質組成

器種名	石皿	石皿か	磨石	磨石か	小礫	器種不明	合計
石質							
深成岩類							
斑状黒雲母花崗岩						1	1
火山岩類							
玄武岩				1		1	2
多孔質安山岩	2	2					4
多孔質輝石安山岩	3						3
輝石安山岩			4			5	9
安山岩			2			1	3
輝石角閃石デイサイト						1	1
輝石デイサイト			1			1	2
黒雲母流紋岩						1	1
流紋岩					1		1
火山碎屑岩類							
デイサイト質溶結凝灰岩				1			1
流紋岩質溶結凝灰岩						1	1
変成岩類							
ホルンフェルス					1	1	2
緑色岩						1	1
合計	5	2	7	2	2	14	32

表4 礫群構成礫石質組成

石質	数量
深成岩類	
黒雲母花崗閃緑岩	1
火山岩類	
輝石安山岩	16
安山岩	10
デイサイト	2
流紋岩	4
火山碎屑岩類	
デイサイト質凝灰岩	1
流紋岩質凝灰岩	13
火山礫凝灰岩	1
堆積岩類	
砂岩	15
チャート	9
変成岩類	
ホルンフェルス	24
その他	
土器片?	8
合計	104

4. 考察

遺跡が所在する下野市薬師寺地内は姿川と田川に挟まれた台地と低地が入り組む地形をしており、発掘調査時に、台地は削平を受けているとの所見が得られている。本遺跡から出土した石器・石製品、礫群の礫の主要な岩石礫の供給源としては、鬼怒川流域の地質が想定される。鬼怒川水系の地質は、20万分の1地質図幅「宇都宮」(須藤ほか,1991)および20万分の1地質図幅「日光」(山元ほか,2000)で概要を把握できる。

鬼怒川は栃木県と福島県の県境にある帝釈山地を源流として広大な流域面積を有しており、各種の地質が分布する。鬼怒川上流域の基盤は足尾帯に属するジュラ紀堆積岩コンプレックスであり、硬質の砂岩、頁岩、チャートなどから構成される。ジュラ紀堆積岩コンプレックスを構成する砂岩、頁岩、チャートなどは後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に貫かれて、接触変成作用を被っている。鬼怒川本流域においては、足尾帯および花崗岩類はさらに前期中新世～鮮新世のデイサイト-流紋岩質火砕岩によって覆われている。花崗岩類および前期中新世～鮮新世のデイサイト-流紋岩質火砕岩には、中新世の流紋岩およびデイサイト-流紋岩脈が各所に貫入している。第四紀火山も流域に数多く存在し、男体火山、女峰赤薙火山などの日光火山群や、高原火山といった玄武岩-デイサイト溶岩・火砕岩などを構成岩石とする火山が点在している。

姿川は、宇都宮市鞍掛山を源流とし、宇都宮市西部、壬生町、下野市を経て小山市で思川に合流する。足尾帯の堆積岩コンプレックス、後期白亜紀-前期古第三紀の奥日光流紋岩類と呼ばれる流紋岩-デイサイト質火砕岩、新第三紀のデイサイト、流紋岩-デイサイト軽石凝灰岩、礫岩・砂岩、凝灰岩などが分布している。

鬼怒川支流の田川上流においては、ジュラ紀堆積岩コンプレックスを構成する砂岩、頁岩、チャートなどが分布する。新第三紀中新世の玄武岩-安山岩溶岩・同質火砕岩、流紋岩溶岩・同質火砕岩、奥日光流紋岩類、中期中新世の砂岩、泥岩などが分布している。

これらの地質背景に基づき、以下では出土石材の産地について検討し、岩石の大分類別に述べる。なお、地質に関する記述は、須藤ほか(1991)および山元ほか(2000)のほか、日本の地質「関東地方」編集委員会(1986)を参考としている。

深成岩類の中では、斑状黒雲母花崗岩、黒雲母花崗閃緑岩が確認された。鬼怒川源流域に分布する花崗岩類および花崗閃緑岩類、もしくは足尾山地に分布する後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に由来すると考えられる。

火山岩類の中では、流紋岩および安山岩が主体となっており、輝石安山岩、多孔質安山岩、多孔質輝石安山岩、無斑晶質安山岩、輝石角閃石デイサイト、デイサイト、黒曜石が確認された。流紋岩は、斜長石斑晶が表面に散在し、緻密な岩相を示し、鬼怒川流域に分布する中新統～鮮新統に由来すると考えられる。安山岩、輝石安山岩、多孔質安山岩および多孔質輝石安山岩は、鬼怒川流域に分布する新第三系や、未変質で新鮮な火山ガラスが認められ、北関東の第四紀火山に噴出したとみられる。輝石角閃石デイサイト、デイサイトは、流紋岩類と同様の産地が推定される。黒曜石は、栃木県高原山、東京都神津島、長野県和田峠などの産地が想定されるが、産地を正確に判定するには、成分分析を併用することが望まれる。無斑晶質安山岩は、同質と推定される石材が、栃木県内において姿川流域の河床礫や段丘礫層中から確認されている(森嶋ほか,2006)。河床礫として入手されたものとみられる。

火山碎屑岩類の中では、流紋岩質凝灰岩が主体となっており、デイサイト質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、軽石火山礫凝灰岩、溶結凝灰岩、凝灰岩、スコリアが確認された。デイサイト質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、軽石火山礫凝灰岩、火山礫凝灰岩、溶結凝灰岩は、鬼怒川流域に分布する奥日光流紋岩類、新第三紀の流紋岩・デイサイト質火砕岩に由来する。スコリアは、多孔質な岩相を示し、斑晶鉱物として輝石が観察されるものもある。第四紀に活動した火山噴出物に由来するとみられる。

堆積岩類の中では、チャートが主体となっており、砂岩、砂質頁岩、頁岩、シルト岩、凝灰質シルト岩が確認された。砂岩、砂質頁岩、頁岩、チャートは堅硬緻密質であり、足尾帯の主要岩相である。シルト岩および凝灰質シルト岩は、軟質の岩相を示す。シルト岩および凝灰質シルト岩は、肉眼では岩石表面の構成粒子の識別が困難であり、風化岩に判定される可能性もあるが、原岩は不明である。岩石薄片作製鑑定による岩石が望まれる。

変成岩類の中では、ホルンフェルス、緑色岩が確認された。ホルンフェルスは、一般には泥岩を源岩とし、地下深所で、花崗岩などの貫入による接触変成作用により生じた岩石である。足尾帯に分布する頁岩と花崗岩の接触変成部に存在する。緑色岩は、足尾山地に分布する古期堆積岩類に随伴する緑色岩類に由来する岩石であると考えられる。

変質岩類の中では、風化安山岩および変はんれい岩が確認された。変はんれい岩は、はんれい岩が変質を被って形成された岩石で、鬼怒川流域には分布が認められない岩石である。遺跡に移入された石材であるか判定を行うために、正確な岩石名の決定を、岩石薄片作製鑑定などにより実施することが望まれる。風化安山岩は、やや緻密質であるが、風化により表面に微粉が被覆している。火山岩類の安山岩類と同様の産地が推定される。

鉱物の中では、石英、玉髄および赤玉が確認された。石英および玉髄は、火山岩類や堆積岩類中の脈や晶洞部に生じる鉱物である。白色を示すものから無色透光性を示すものまでが確認された。火山岩類や堆積岩類中の脈や晶洞部に生じる鉱物で、鬼怒川水系の新第三系に産地が推定される。赤玉は、流怒川上流域の新第三紀の流紋岩 - デイサイトの変質部に由来すると考えられる。

引用文献

五十嵐俊雄,2006,考古資料の岩石学.パリノ・サーヴェイ株式会社,194p.

森嶋秀一・布川嘉英・竹下欣宏,2006,栃木県域における黒色安山岩の産地に関する諸問題.栃木県立博物館 研究紀要 一人文-23,29-53.

日本の地質「関東地方」編集委員会,1986,日本の地質3「関東地方」.共立出版,p.335.

須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒澤正夫・広島俊男,1991,20万分の1地質図幅「宇都宮」.地質調査所.

山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久,2000,20万分の1地質図幅「日光」,地質調査所.

写真図版



調査区全景



調査区全景（南西から）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査区全景（北東から）



A区北西端部から（北西から）



A区南東端部から（南東から）



A区西壁中央部付近から（西から）



A区 M-9 付近（南東から）



A区 M-9 付近 (北西から)



第4号竪穴建物跡全景 (南西から)



第8号竪穴建物跡全景 (南東から)



第8号竪穴建物跡全景 (北東から)



第8号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)



第8号竪穴建物跡土層堆積状況 (南西から)



第8号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)



第8号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)

図版四
遺構



第8号竖穴建物跡遺物出土状況（南から）



第8号竖穴建物跡遺物出土状況（南から）



第8号竖穴建物跡柱穴 p1（南東から）



第8号竖穴建物跡柱穴 p2（南東から）



第8号竖穴建物跡柱穴 p3（南東から）



第8号竖穴建物跡柱穴 p4（南東から）



第8号竖穴建物跡柱穴 p5（南東から）



第8号竖穴建物跡柱穴 p6（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド（東から）



第8号竪穴建物跡カマド遺物出土状況（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（東から）



第8号竪穴建物跡カマド掘り方（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド掘り方（東から）



第9号竪穴建物跡全景（南東から）



第9号竪穴建物跡全景（南西から）

図版六
遺構



第12・93号竪穴建物跡全景（南東から）



第12・93号竪穴建物跡全景（南西から）



第12号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（西から）



第12号竪穴建物跡カマド遺物出土状況（南から）



第15号竪穴建物跡全景（南東から）



第15号竪穴建物跡全景（南西から）



第15号竪穴建物跡土層堆積状況（南東から）



第15号竪穴建物跡土層堆積状況（北東から）



第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘（北東から）



第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘（南東から）



第 19 号竪穴建物跡全景（手前）（南西から）



第 19 号竪穴建物跡全景（南から）



第 64 号竪穴建物跡全景（南西から）



第 64 号竪穴建物跡全景（北西から）



第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況（北東から）

図版八
遺構



第 64 号竖穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第 64 号竖穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第 64 号竖穴建物跡 銚帯出土状況（北西から）



第 64 号竖穴建物跡 銚帯出土状況（北西から）



第 64 号竖穴建物跡 銚帯（23・24）出土状況（北西から）



第 64 号竖穴建物跡 銚帯（25・26）出土状況（北西から）



第 64 号竖穴建物跡 銚帯（27・28・29）出土状況（北西から）



第 64 号竖穴建物跡掘り方（南東から）



第 64 号竪穴建物跡掘り方（北東から）



第 64 号竪穴建物跡カマド（北から）



第 64 号竪穴建物跡カマド掘り方（北から）



第 79 号竪穴建物跡付近遺物出土状況（南東から）



第 79 号竪穴建物跡カマド確認状況（北西から）



第 79 号竪穴建物跡カマド（北西から）



第 79 号竪穴建物跡カマド



第 79 号竪穴建物跡土層堆積状況（南西から）



第 58 号 竪穴建物跡全景（南東から）



第 58 号 竪穴建物跡全景（北東から）



第 58 号 竪穴建物跡土層堆積状況（南東から）



第 58 号 竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第 58 号 竪穴建物跡掘り方（南から）



第 58 号 竪穴建物跡掘り方（西から）



第 58 号 竪穴建物跡作業風景（北西から）



第 58 号 竪穴建物跡作業風景（南東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド（南東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド（北東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド材散布状況（南から）



第 58 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（南東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド遺物（第 39 図 8）出土状況（南東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド（第 80 図 254）遺物出土状況（北東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド掘り方（南東から）



第 58 号竪穴建物跡カマド掘り方（東から）



第 62 号竖穴建物跡全景（北西から）



第 62 号竖穴建物跡カマド（北西から）



第 5 号土坑全景（南東から）



第 6 号土坑全景（南から）



第 14 号土坑全景（南西から）



第 21 号土坑全景（東から）



第 21 号土坑土層堆積状況（東から）



第 21 号土坑土層堆積状況（西から）



第 45 号土坑全景（西から）



第 46 号土坑全景（東から）



第 47 号土坑全景（南東から）



第 48 号土坑土層堆積状況（南東から）



第 50 号土坑全景（南東から）



第 54 号土坑全景（東から）



第 81 号土坑全景（南東から）



第 82・83 号土坑全景（南西から）



第 84 号土坑全景（南東から）



第 86 号（奥）・87 号（手前）土坑全景（南東から）



第 92 号土坑全景（北西から）



第 92 号土坑作業風景（北西から）



第 94 号土坑土層堆積状況（南東から）



第 95 号土坑土層堆積状況（南西から）



第 96 号土坑全景（南東から）



第 97 号土坑全景（東から）



第7号ピット全景（東から）



第11号ピット全景（南西から）



第59号溝状遺構（南西から）



第59号溝状遺構（北から）



第59号溝状遺構（南東から）



第85号溝状遺構（北東から）



第14号土坑作業風景（北から）



A区調査作業風景（南東から）



A 西区全景（南から）



B 区全景（北東から）



B 区全景（南から）



C 区全景（東から）



D 区全景（南東から）



D 区全景（西から）



D 東区全景（南から）



D 南区全景（東から）



A区トレンチ1 (南東から)



A区トレンチ2・第54号土坑土層堆積状況 (南西から)



A区トレンチ3 (南から)



A区トレンチ4北面 (南西から)



A区トレンチ5西面 (南東から)



A区トレンチ6南面 (北東から)



A区トレンチ7 (南東から)



A区トレンチ11 (南西から)



B区トレンチ 13 (南西から)



C区トレンチ 15-c・d (南東から)



D区トレンチ 19 (西から)



D区トレンチ 22 (東から)



D区トレンチ 23 (北から)



A区グリッド (南から)



A区グリッド調査作業風景 (北西から)



A区作業風景 (南西から)



SI-8 3



SI-8 4



SI-8 8



SI-8 9



SI-8 13



SI-8 14



SI-8 19



SI-8 18



SI-12 1



SI-15 1



SI-58 1



SI-58 6



SI-58 7



SI-58 10



SI-58 10



SI-58 11



SI-64 1

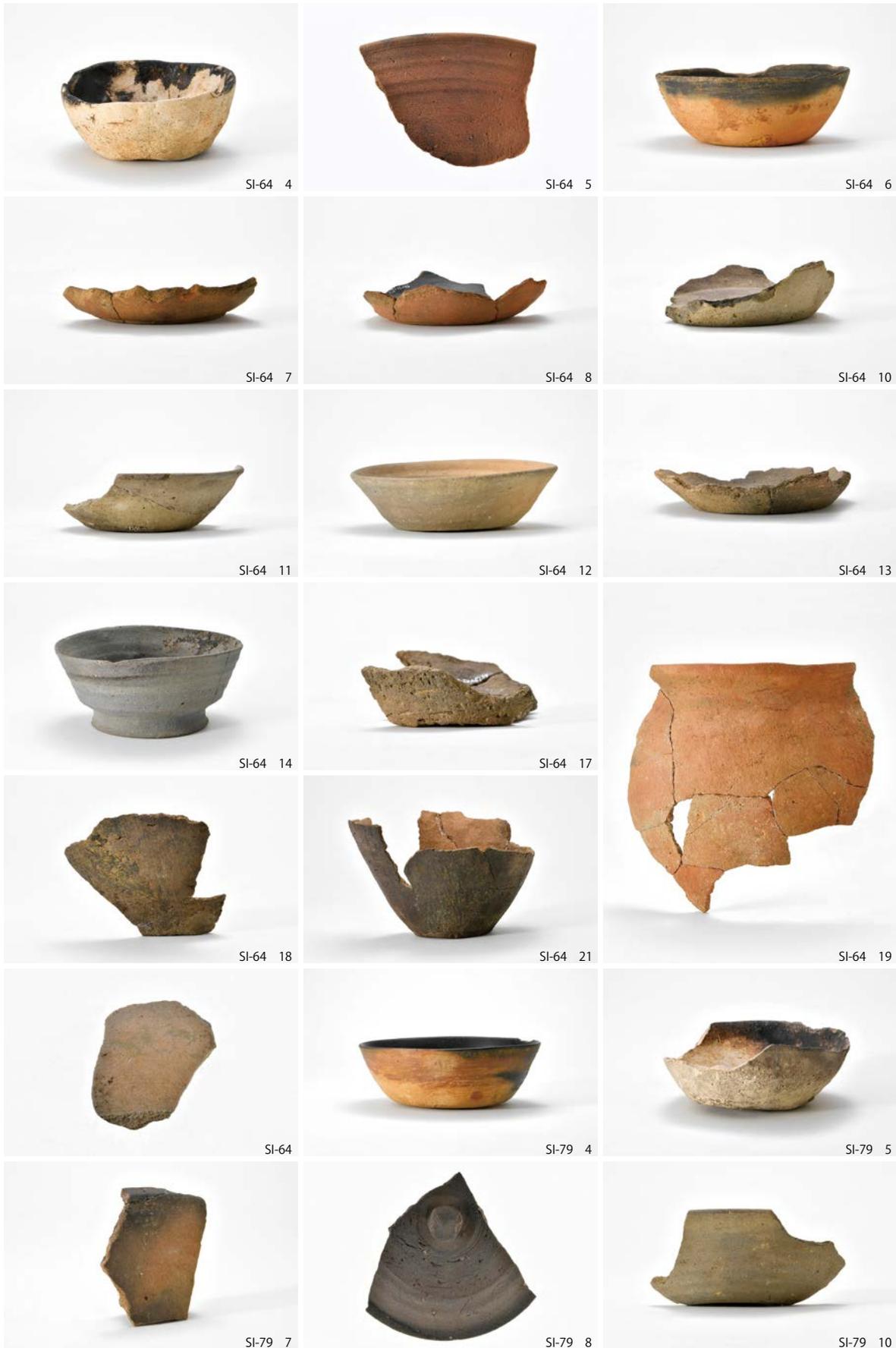


SI-64 2



SI-64 3

図版二〇 遺物





SI-79 12



SI-79 13



SI-79 15



SK-14 1



SK-88



P-11



SD-59 2



SD-59 3



SD-59 4



SD-59 5



SD-59 6



SD-59 7



SD-59 8



SD-59 9

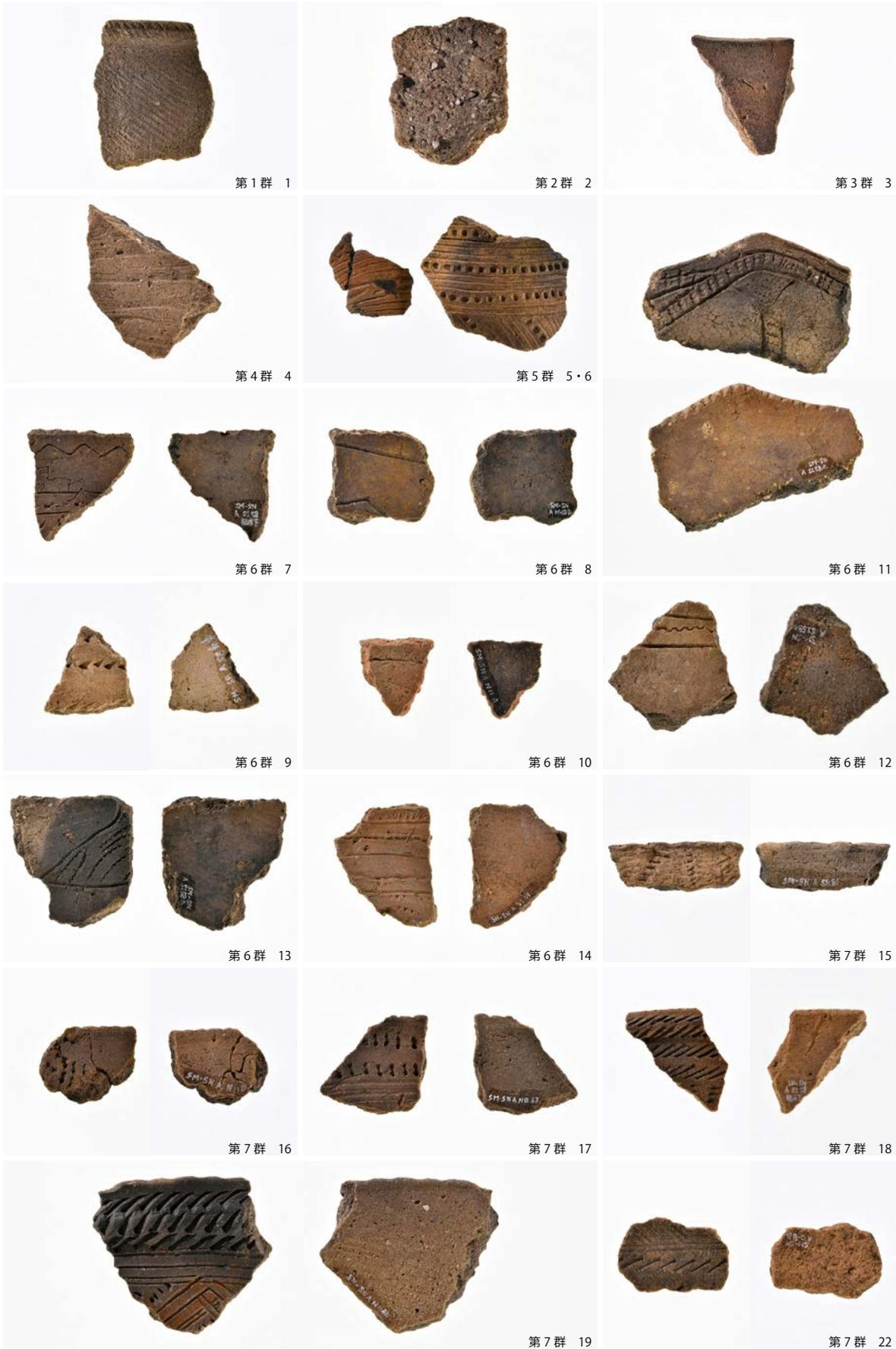


SD-59 10



SD-59 11

图版三
遺物





第7群 20



第7群 21



第7群 23



第7群 24



第7群 25



第7群 26



第8群 27



第9群 28



第10群 30



第10群 31



第10群 33



第10群 32



第10群 34



第10群 35



第10群 36



第11群 29



第12群 37



第12群 38



第12群 39



第12群 40

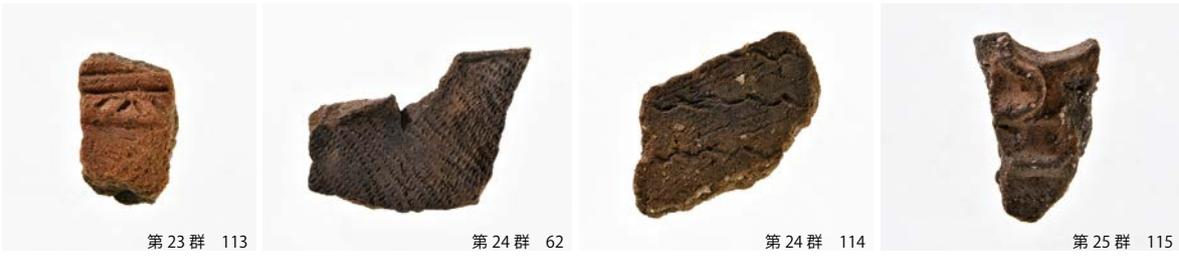
图版二四 遺物



圖版三五 遺物











262



264



265



266



267



268



269



N-9 3



N-10 3



O-9



O-9



N-10



遺構外 4



遺構外



M-11 1



N-8 1



N-8 2



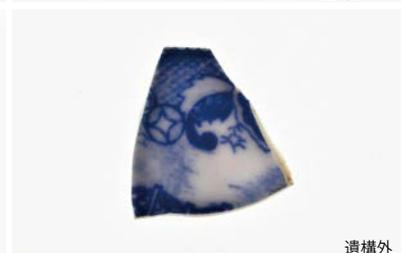
遺構外 5



遺構外 6



遺構外 7



遺構外

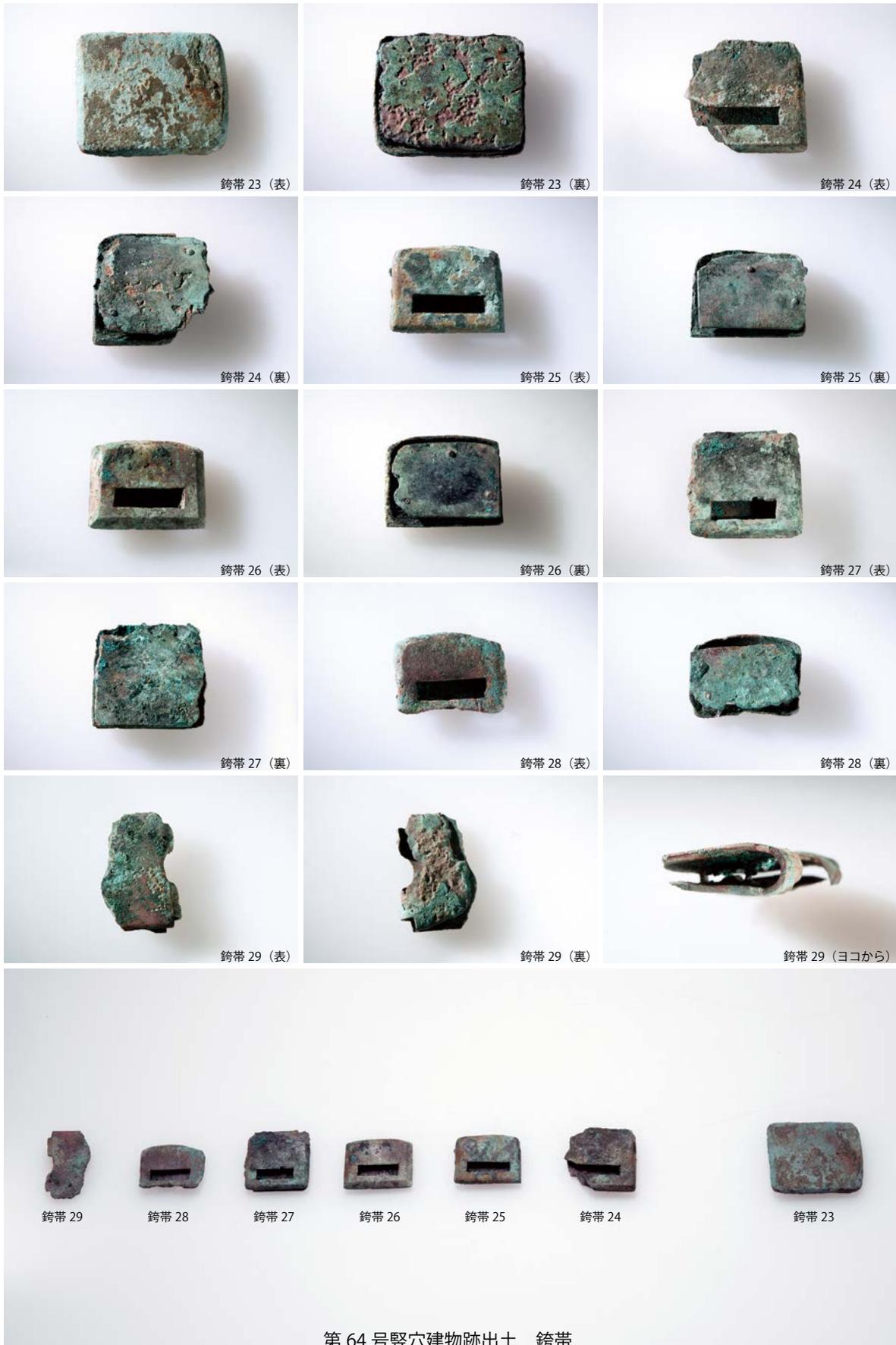




写真1 A区トレンチ3



写真2 A区第79・80号竪穴建物跡



写真3 A区トレンチ5



写真4 A区トレンチ6下部



写真5 B区トレンチ12



写真6 B区トレンチ13



写真7 C区トレンチ 15-C



写真8 C区トレンチ 15-A



写真9 C区トレンチ 15-B



写真10 C区トレンチ 15-D



写真11 D区トレンチ 21



写真12 D区トレンチ 22

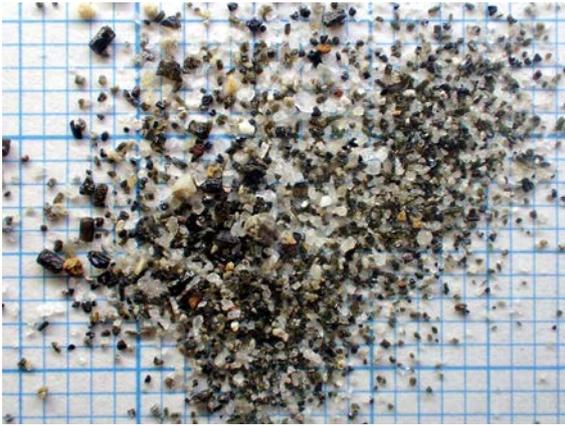


写真1 A区トレンチ5・試料2 (As-B 混在)

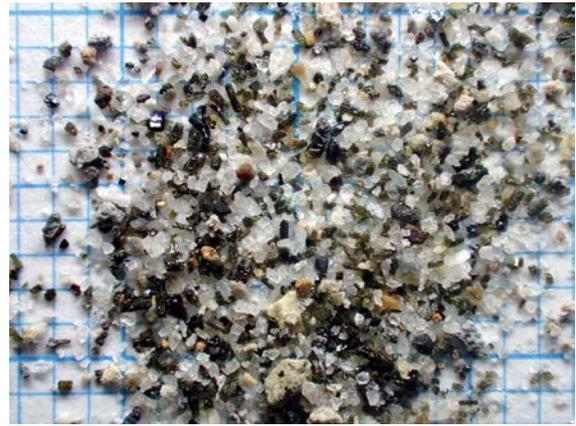


写真2 A区トレンチ5・試料6 (Hr-FA 混在)

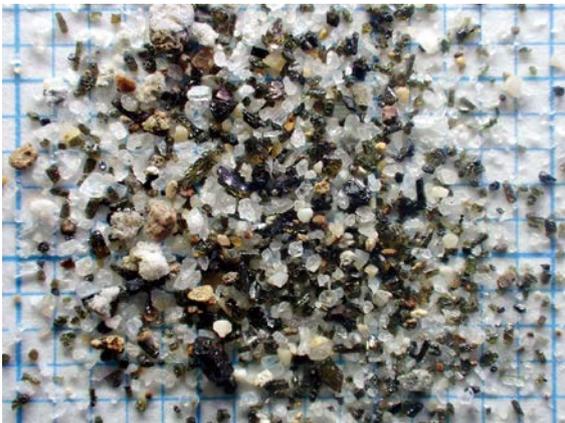


写真3 A区トレンチ5・試料10 (As-C 混在)

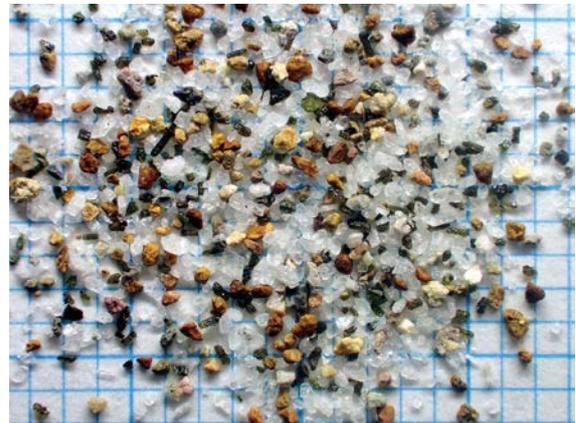


写真4 D区トレンチ21・試料4 (As-YP)

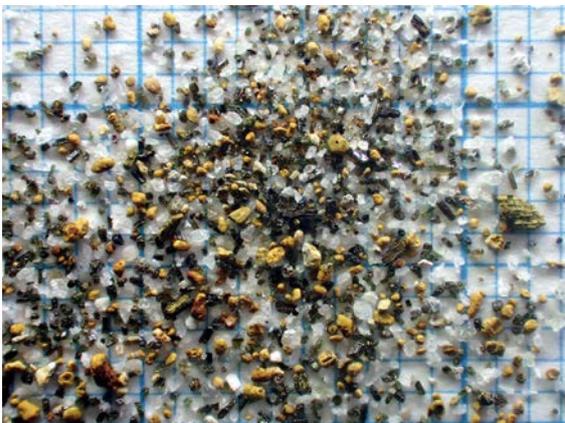


写真5 D区トレンチ21・試料8 (As-Ok1 混在)



写真6 C区トレンチ15-B・試料2 (As-BP G 混在)

何れも落射光下で撮影．背後は1mmメッシュ．



1. A区表採 多孔質安山岩



2. N-9a 無斑晶質安山岩



3. SI-12 付近 砂岩



4. SI-79 チャート



5. L-12 表採 ホルンフェルス



6. N-11a 赤玉

報告書抄録

ふりがな	しのぎいせき
書名	篠崎遺跡
副書名	県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第417集
編著者名	篠原浩恵
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL0285-44-8441
発行機関	栃木県 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2024年3月28日（令和6年3月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しのぎいせき 篠崎遺跡	しもつけし 下野市 やくしじちない 薬師寺地内	下野市 186	2180	36° 38' 78"	139° 86' 69"	20220901 ～20230330 20230403～ 20240328	7,226 ㎡	農地整備事業 （経営体育成 型）薬師寺・ 柴地区におけ る埋蔵文化財 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠崎遺跡	集落跡	縄文時代 古墳～奈良・平安時代 中近世	竪穴建物跡 11 土坑 43 ピット 12 溝状遺構 4	縄文土器・石器・土師器・ 須恵器・鈿帯・陶磁器・ 古銭等	縄文時代早期 ～前期を主体 とする包含層 古墳時代終末 期～奈良・平 安時代、中・ 近世の集落跡

要約	篠崎遺跡は下野市自治医大駅周辺の市街地から東へ約1.5km、北東から南西に伸びる台地上及び緩斜面に立地する。縄文時代（草創期～後期）～古代にかけての包含層を確認し、早期を主体とする縄文土器・石鏃等の石器・二次加工や使用痕のある剥片・剥片、土師器・須恵器などが出土した。古墳時代終末期～古代の集落跡は谷部に面して展開する。今回の調査による地形復元からは、谷部に面した狭量地が選地され、7世紀後半～8世紀前半にかけてに集落の空白期があることが明らかとなった。
----	---

栃木県埋蔵文化財調査報告第 417 集

篠崎遺跡

- 県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査 -

発 行 栃木県

宇都宮市塙田 1-1-20

TEL 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

TEL 028 (643) 1011

編 集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441

発行日 令和 6 年 3 月 28 日発行

印 刷 株式会社 松井ピ・テ・オ・印刷
